
仮面ライダーエンス

ロムスカ王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエンス

【Nコード】

N1040R

【作者名】

ロムスカ王

【あらすじ】

かつてクロスとの戦いに敗れ、このオーズの世界に転生させられたエンペラ星人。地球人となった彼の前に、500年の眠りから覚めた怪物の王、デザイアが現れる！！今、光への物語が始まった！！

第一話 皇帝と復活と謎の女（前書き）

ついにできました！ですが、仮面ライダークロスを読んだ方でないと、わからないかもしれませぬ。

先に言っておきます。主人公は、性格がアレです。それから、前作同様ネタが多いです。それでも良い方だけ読んでくださいかね？

第一話 皇帝と復活と謎の女

ピシシ…バリバリバリッ！！

とある街の、とある場所。

こここの空間に、異常が起きていた。ある一点に稲妻が発生し、そこから光が大きくなっていつている。

そして、光が極限まで強まった時、

光が消えて、石の棺が現れた。

これで異変が収まったかと思いきや、今度は棺の蓋に鍵をしていた物体がひとりで動き出し、物体が蓋から外れた。

次の瞬間、棺は大量のメダルに変化し、メダルは人の形になるよう、集合する。その数、四。

塊達は一度発光し、姿を怪物に変えた。

一体は、炎を模した姿の怪物。

もう一体は、氷を模した姿の怪物。

さらにもう一体は、剣を始めとする様々な武器が集合した、西洋騎士の風貌のような怪物。

最後の一体は、ただ白いだけの、しかし、人間が全身に包帯を巻いたような怪物。いずれの怪物も、額に赤いオーブが埋め込まれていた。

「…あれから…人間どもが我らを封印してから、どれだけの月日が流れたのか…」

西洋騎士の怪物は言った。と、氷を模した怪物と、炎を模した怪物が、西洋騎士の怪物に尋ねる。

「これからどうする、コレク？」

「俺達のリーダーはお前だ。方針は、お前が決める。」

コレクと呼ばれた怪物は答えた。

「知れたこと。我らの目的は、世界の破滅だ。だが、その前に…」

コレクは白い怪物を見る。

「メイカーを完成させねばならん。」

メイカーと呼ばれた怪物は、申し訳なさそうにうつむいた。炎を模した怪物は言う。

「お前だけ未完成なまま封印されたからな。気にする必要はないさ」

すると、炎を模した怪物は、氷を模した怪物が周囲を見渡していることに気付いた。

「どうしたアプリシイ？」

「…レスティーがいない…」

「レスティーが？」

アプリシイと呼ばれた怪物の言葉を聞き、炎を模した怪物も、周囲を見る。

「…いねえな…」

「気にするなウオント、アプリシイ。」

コレクは炎を模した怪物と、アプリシイを呼ぶ。

「コレク…」

「我々だけで充分だ。行くぞウオント、アプリシイ、メイカー。我らデザイアの崇高なる使命のために」

コレクは三人を連れて、どこかへ行った。

だが、四人は気付いていなかった。

すぐ近くの木の陰に、一人の女性がいたことに。

女性は、普通ではなかった。姿形は黒いドレスを着ているだけの普通の女性だが、威圧感が、明らかに人間ではない。そして、コレク達と同様、額に赤いオーブが埋め込まれていた。

「うふふ……」

女性は微笑む。この上なく楽しそうに。

彼女の手の中には、数枚のメダルが握られていた。

ロストグラウンド学園二年A組。
天碎皇魔あまくだきおしさまは、ため息をついていた。

彼は、この世界の人間ではない。

彼の正体はエンペラ星人という宇宙人。ウルトラマンメビウスの世界の住人だ。しかし、原作の住人ではなく、ウルトラマンメビウスの世界のパラレルワールドの住人。本来なら彼はメビウスを含めたウルトラマン達に負けるはずだったが、彼はウルトラマン達に勝ち、ウルトラマンを滅ぼした。自分を阻む存在が全て消えたため、念願だった宇宙の皇帝になれたのだ。

だが、鳴滝という男性にそそのかされて異世界に赴き、仮面ライダークロスという戦士と対決した結果、敗北。クロスの力によって、この世界の地球人、そして、このロストグラウンド学園の生徒に転生させられてしまったのである。

ちなみに、ここはオーズの世界。クロスとはまた違うが、オーズという仮面ライダーが戦っている世界だ。

皇魔は自分が転生者であるということを話したが、当然信じてもらえない。と思いきや、そういうわけでもなく、この世界の住人は、あっさりそれを信じた。

転生者。まともな人間ならば、信じられる話ではない。だが、もしまともじゃない人間だったら？

そう。このオーズの世界は原典のオーズの世界と少し、いや、かなり違う世界なのだ。というより、もうまるっきり違う世界と言える。このロストグラウンド学園に通う生徒達が、まともじゃない人間達の最たる例なのだから……。

今の時間帯は朝。来ているのは、当然皇魔だけではない。朝礼を間近に控えているので、たくさん生徒がいる。

その中の一人。顔立ちの整った、名前を劉鳳リウフウという男子生徒が、読書に興じていた。そんな彼に、話し掛ける者がいる。その名はカズマ。男子生徒だ。

「なあ劉鳳！ケンカしようぜ！」

「朝会って第一声がそれか。すまんが、もう朝礼が近いから無理だ。それに、朝の読書の時間くらい、喧嘩の話はやめてくれ。」

劉鳳にとってカズマは唯一無二の親友であり、喧嘩友達でもあるが、今は朝である。さすがに朝っぱらから喧嘩をする気はない。

「ちえっ、つまんねー……」

舌打ちするカズマ。と、

「カズくん！」

少女が一人、カズマを訪ねてきた。彼女は由多かなみ。中等部の生徒で、カズマの妹である。

「ん？どうしたかなみ？つかその呼び方やめろって言ってるだろ？」

「だってカズくんはカズくんだもん。それよりほら、お弁当忘れて

るよ?」

かなみはカズマに弁当箱を渡した。

「あれ!?俺忘れてたっけ!?!」

「もう、カズくんだったらそそっかしいんだから…」

「へへっ、わりい。」

「じゃあ、朝礼が始まるからもう戻るね。」

かなみは自分の教室に戻っていった。劉鳳は本に視線を向けたまま、カズマに言う。

「お前も少しは自分の妹を見習ったらどうだ?」

「うっせえ!!」

自分の教室へと急ぐかなみ。と、かなみは奇妙な物を発見する。

廊下に大量の血液を積めた輸血パックが一つ、落ちていたのだ。

「?????」

輸血パックを拾うかなみ。そこへ、

「あれ?かなみちゃん?」

小悪魔をイメージするアクセサリや尻尾を付けた、ピンクの髪の毛の女子生徒が、かなみに話し掛けてきた。

「あっ、ユイ先輩。おはようございます」

彼女はユイ。高等部の一年生だ。

「どうしたのこんな所で？」

ユイはかなみに訊く。

「廊下にこれが落ちてて…」

かなみは輸血パックを見せた。

「保健委員が落としたんじゃないの？」

この学園は、冷暖房から何やらがかなり整っている。当然、輸血パックの用意もバッチリだ。

しかし、二人はこの輸血パックを落としたのが保健委員ではないことを知る。

「ああ、そこにあつたのか。それは私のだ」

眼鏡をかけた男子生徒が現れ、自分の所有物であることを宣言したからだ。

「えっ？でもこれ、輸血パック…」

かなみは聞き返すが、男子生徒はニヤリと笑ってかなみに顔を近づけ、言った。

「私のだ。」

「…は…はい…」

その笑顔のあまりの恐ろしさに、かなみは輸血パックを差し出した。

「ありがとう。」

男子生徒は輸血パックを受け取って去っていく。ユイは呟いた。

「あれ、アーカード先輩のだったんだ…」

どうやら、あの男子生徒の名前はアーカードというらしい。かなみは訊いた。

「アーカード先輩？」

「日向先輩や音無先輩と同じクラスの人。確か、天碎先輩も一緒だったかな？」

「はあ…それで、あの輸血パックをどうするんでしょう？」

再び尋ねるかなみ。ユイは、さも当然というように答えた。

「中身を飲むんだよ。」

「…えっ？飲む？でも輸血パック…」

「それより、朝礼は？そろそろ時間じゃないの？」

「あっ！すいません。じゃあまた！」

ユイに言われ、かなみは急いで自分の教室に向かう。

「あたしも戻ろつと！」

ユイも自分の教室に向かった。

騒がしい朝の教室。しばらくするとチャイムが鳴り、

「席につけ。朝礼を始める」

担任のセフィロスが入ってきた。教室内が静まりかえる。無理もない。セフィロスはこの学園でもトップクラスの剣の使い手で、素手でもかなり強いから。そして、朝礼が始まった。

この学園における朝の風景は大体こんな感じだが、皇魔はこの程度のことのため息をついたりはしない。問題は、昼休みだ。皇魔は昼休みのことを思っただけのため息をつけていたのである。昼休みを迎えることで、この学園は一気にカオスになってしまう。

そして、問題の昼休み。

カズマと劉鳳は、グラウンドに立った。朝は無理だったが、昼休みならたつぷり時間がある。二人は昼休みになると、いつも喧嘩をするのだ。

「行くぜ、劉鳳！」

カズマは何かを真上に放り投げた。それは、黒い球体である。

「ああ！」

劉鳳も同じく、球体を放り投げた。すると、球体が様々な色の混じった光に分解され、カズマが投げた球体の光はカズマの右腕に装甲となって融合した。右肩からは三つの羽根のようなものが生えている。劉鳳の投げた球体の光は、劉鳳の目の前に拘束衣を着込んだ少年のような存在を生み出す。

この世界には、アルター能力という特殊能力が存在している。

アルター能力とは、周囲の物質を分解し、それを様々な形に再構築するという能力で、この方法で物質を分解、再構築することで、アルター能力の持ち主、アルター使いと呼ばれる者達は、各々の特殊能力を発動できるのだ。

カズマのアルター能力は、シェルブリット。融合装着型のアルターで、右腕に装甲として融合させることにより、右腕の腕力を何倍にも増幅する。右肩から生えている三つの羽根を一本ずつ消費することで、さらに強力な拳を繰り出せる。

劉鳳のアルター能力は、絶影。自立稼働型のアルターで、戦闘時は劉鳳が指令を下し、足技や、首のあたりから伸びる伸縮自在な鞭、柔らかなる拳・烈迅を使って攻撃する。自立稼働型アルターは、アルター使いは戦わずにアルターが戦うというものだが、アルター使いとアルターの繋がりが深い状態だと、アルターが受けたダメージがアルター使いに還元することがある。

この学園のアルター使いはカズマと劉鳳だけではなく、まだ大勢いる。しかし、学園のみならずアルター使いが力行使するためには、携帯質量を携帯することが義務付けられている。先ほどカズマと劉鳳が使った球体などがそれだ。質量ならばなんでもいいが、公共物

を分解することは禁じられており、また、大抵の公共物にはアルター能力が及ばないよう対アルター処理が施されている。

互いに準備を整え、早速戦うカズマと絶影。

「衝撃のおおおお!!」

カズマが叫ぶと、羽根の一本が消えて様々な色が混じった光、アルター粒子が放出される。

「ファーストブリットオオオオツ!!!」

カズマは粒子を推進力にして、絶影に殴りかかった。

「絶影!!!」

劉鳳は絶影の名を呼ぶ。すると、絶影は烈迅を伸ばして目の前で交差させ、カズマの拳を受け止めた。その隙を見計らい、絶影はカズマを蹴り飛ばす。

「ぐおっ!! やっぱ簡単には喰らっちゃくれねえか…」

「当然だ。」

「だが…!!!」

カズマはもう一本羽根を消費。

「撃滅のセカンドブリットオオオオツ!!!」

再び殴りかかる。絶影は再び烈迅で受け止めるが、カズマはすぐに後退。

「抹殺のおおおおお!!」

最後の羽根を消費し、

「ラストブリットオオオオオオツ!!!」

さらなる力を込めて殴りかかった。これにより、烈迅は連続で受けた衝撃に耐えられず粉碎し、そのまま拳が絶影の顔面に直撃する。

「ぐっ!!!」

絶影との繋がりを深くしていたため、絶影のダメージを自分も喰らう劉鳳。

「さすがだな。しかし、本番はここからだ!!!」

劉鳳は言い放ち、

「絶影！！」

叫ぶと同時に絶影が変化する。拘束衣によって封印されていた鋭い爪を持つ両腕が解放され、下半身が蛇のような形状に変わった。一言で表現するなら、今の絶影はナーガという怪物に似ている。

「そう来なくっちゃな！！」

カズマも絶影の変化に合わせて、シエルブリットを大きく、より攻撃的な形状に変化させた。右目周りもアルターと融合し、右肩からは羽根の代わりに風車のようなものが生まれている。

アルター能力は進化し、より強力なものにできる。しかし、そこまですることができる者は数少なく、カズマと劉鳳はその限られたアルター使いのうちの二人なのだ。

「シエルブリットオオオオ！！！！」

カズマは進化したシエルブリット、シエルブリット第二形態の手甲内部にあるものを回転させることによって爆発的な推進力を生み出し、さらに風車を回転させて飛行。

「バーストオオオオオオオオ！！！！」

より強力な拳、シエルブリット・バーストを放つ。何十mもある巨大口ポットすら一撃で粉碎できる破壊力だ。まともに喰らえばひとたまりもない。だが、相手は同じく第二形態の絶影。簡単に喰らうはずはない。

「剛なる右拳・伏龍！！」

劉鳳は絶影に命じ、絶影の右脇に装備されているミサイルを発射する。ミサイル、剛なる右拳・伏龍はシエルブリットにぶつかった。先端に超合金すら切り裂く刃を搭載したミサイルだが、シエルブリットは切り裂けず、碎ける。だが、シエルブリット・バーストの威力は弱まった。

「剛なる左拳・臥龍！！」

すかさず残った左脇のミサイル、剛なる左拳・臥龍を発射する劉鳳。シエルブリットとぶつかる。

「うおわっ!!」

臥龍は碎け散ったが、シエルブリット・バーストを押し返すことに成功。カズマを吹き飛ばす。だが、

「まだまだあ!!!」

カズマはすぐに体勢を立て直し、絶影に殴りかかる。

「柔らかなる拳・烈迅!!!」

烈迅をぶつける絶影。

ドガアアアアン!!!

轟音が響き、互いに距離を取るカズマと劉鳳。と、

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

カズマの全身がアルターに融合され、頭部が獅子のような外見に。風車も獣の尻尾のようなものになる。

「ぜつええええい!!!!!!」

同じく絶影に命じる劉鳳。すると、絶影が消えて劉鳳の全身に融合。劉鳳は絶影の第一形態に似たような姿になった。

これこそ、シエルブリットと絶影の最終形態である。この状態になった二人はパワーやスピードが爆発的に上昇するだけでなく、飛行や宇宙空間での戦闘も可能になる。

「りゅうつうつうほおおおおお!!!!!!」

「カズマアアアアアアアアアア!!!!!!」

カズマは金色の光を、劉鳳は青い光を纏って跳躍し、空中戦を繰り広げ始めた。

「ちえっ、いいなあいつら。」

二人の喧嘩を見ながら言ったのは、かなり肥満体質な男子生徒、瓜核だ。その隣には小柄な男子生徒、イーリヤンもいて、一緒に壮絶な喧嘩を見ている。ちなみに、この二人もアルター使いだ。もつとも、カズマと劉鳳のようにアルターを進化させることはできない。そのためイーリヤンは、

「とても真似できない…！」

羨望の眼差しで、喧嘩を見ていた。

皇魔はため息をついた。これこそ、彼にとっての悩みの種だ。この学園の生徒は、強すぎるのである。カズマと劉鳳は極端な例だ。皇魔は教室内にも目をやる。目に入ったのは、外の激戦に全く動じず、輸血パックにストローをさして中身を飲んでいるアーカードだ。

なぜそんなものを飲んでいいのか？答えは簡単である。アーカードは吸血鬼なのだ。吸血鬼といえば、不死身なことで凄まじいまでの戦闘力を持つこと、そして弱点が多いことで知られている怪物だが、アーカードは吸血鬼の真祖であり、一般的な吸血鬼の弱点である太陽や聖水、十字架などが効かない。しかも、真祖ゆえにその力も吸血鬼の中でとりわけ強い。またアーカードはそのままでも充分強いが、普段は拘束制御術式『クロムウエル』によって力を封印しており、それを解放することで、オーズさえも簡単にくびり殺せるほどの力を発揮するのだ。彼もまた、皇魔の悩みの種の一つである。さらに教室内に目をやると、

「うーん…やっぱりこのアニメは最高だ。そう思わないか、ルルーシユ？」

携帯端末を使ってアニメを見る男子生徒、枢木スザクと、

「…そうだな。」

「うおおあああああああ！！！！」

二人は吹き飛ばされる。

「何すんだよいきなり！！」

爆発の直撃を喰らったにも関わらず無傷なカズマはルルーシュに抗議の声を上げるが、ルルーシュは窓から顔を出してカズマと劉鳳に言う。

「お前達が全力でぶつかっただらこの辺り一帯が吹き飛ぶだろう？少しは自重しろ。」

「あ、そうか。」

「それもそうだ。それにもうすぐ昼休みが終わる」

「…戻るか。」

同じく無傷の劉鳳とともに融合を解くカズマ。二人は校舎に戻った。

皇魔は、この世界を支配しようと考えている。だが彼は転生の際、その力が十万分の一以下にまで弱体化してしまったのだ。本来なら太陽系を一撃で消し去れるほどの力を持つ彼でも、それが十万分の一以下になったとなれば、知れたものである。一応今のままでも、転生前に使っていたレゾリウム光線や衝撃波は使えるが、やはり威力は落ちており、せいぜい壊れかけの掘っ立て小屋を一〜二軒消し飛ばせる程度。その程度の力で、こんな人間の常識を遥かに超えた連中と戦って、勝てるわけがない。だから今まで皇魔は何の行動も起こせないでいたのだ。

(…どうにかして力を取り戻さなければ…そして、いつか必ず奴を…クロスを…！！)

皇魔は自分の力を取り戻すこと、そしてクロスへの復讐を誓った。

とある男子生徒、音無結弦は、二人の女子生徒から、

「音無くん！お弁当作ってきたから食べて」

「結弦、あたしのお弁当…」

アプローチを受けていた。女子生徒のうち、短髪で活発な方は仲村ゆりと言い、長髪で感情表現の乏しい方は立華たちばなかなでという。二人は仲良しなのだが、音無を取り合っている。ちなみに、ゆりは様々な武器の扱いに長けているためかなり強く、かなではセフィロスの娘であるため、武術の心得がある。

「かなでちゃんは昨日食べてもらったじゃない！今日はあたしの番よ！」

「…結弦はあたしのだから。」

「大体かなでちゃんが作ってくるお弁当の中身、いつも麻婆豆腐じゃない！しかも激辛の！そんなの毎日食べてたら、音無くんの舌がおかしくなっちゃうわ！」

「そういうゆりのお弁当はいつもサンドイッチ。そんなものばかり食べてたら、栄養が偏るわ。」

「ちょ、ちよつと待てよ二人とも！！」

慌てて口論を止めようとする音無。そんな彼の背後から、友人の日向秀樹なただけが声をかける。

「モテモテだなあお前。」

「日向！お前も止めるの手伝ってくれよ！」
その時、

「音無さ〜ん！遊びに来ました！」

音無を慕う男子生徒、直井綾人なおいあやとが来た。

「ま〜た来たよ、音無のおっかけが。」

呟く日向。それを聞き逃す直井ではなかった。

「…僕には貴様のような無能が音無さんの友人だということが未だに信じられないよ。」

「んだとコラ！！」

怒る日向。直井は日向の目を睨み、言う。

「さあ、洗濯バサミの有能さに気付くんだ。洗濯バサミにも劣る己

の不甲斐なさを、嘆くがいい。」

言ったあと、直井は日向から目をそらさぬよう、近くの机の上に洗濯バサミを転がす。日向は洗濯バサミを見た。

「せ、洗濯バサミ…洗濯物が汚れない…素晴らしい…!!」

何やら言い始める日向。直井は強力な催眠術を会得しており、それを日向にかけたのだ。

「応用も利く!!それに引き換え俺はああああああああ!!」

自己嫌悪に陥り号泣する日向。

「直井!催眠術を使うな!」

「僕はこの無能が音無さんに無礼を働いたので、肅正しただけです。」

「だからって…」

音無は直井を叱りかけ、ある方向を見た。そこには、深いため息をつく皇魔がいる。

「どうかしましたか、音無さん?」

「いや、あいつ…」

「…えっ?」「…」

かなで、ゆりは口論をやめ、日向も立ち直って直井と一緒に皇魔を見る。

「ああ、あいつか。転生者、だっけ?確か学園にもう一人いるよな。」

日向な訊く。ゆりは頷いた。

「ええ。まあ、アルター能力やギアスみたいな特殊能力があったり、吸血鬼とかいろんな人外がいる世界だもの。転生者くらい、いたっておかしくないわ。」

「でも、皇魔くんはいつもため息をついてる…」

かなでは表情に現さず、皇魔を心配する。

「あいつなりに、いろいろと悩みがあるんだろうさ。心配することないって」

「いつも能天気な貴様とは大違いだな。」

「んだと!？」

「さあ、トイレットペーパーの潔さに…」

「待てっつて直井!」

「んによおおお…」

「日向ーっ!」

音無が直井の集中を乱したため、中途半端に催眠術がかかってしまった日向。こうして、カオスな日常は続いていく。

「全く、してやられたな…」

コレクは呟いた。今、彼らデザイア一向は、とある悩みに陥っていた。彼らは『コアメダル』という特殊なメダル数枚を核に、大量の『セルメダル』という同じく特殊なメダルによって肉体を構築している。

そのコアメダルが、なくなっているのだ。

コアが核なら、セルは細胞兼エネルギー。コアがなければセルはくつつかない。つまり、デザイア達は完全復活を果たせていないのだ。この世界の怪人、グリードと同じ悩みである。

「無事だったのはメイカーだけ…」

アプリシイはメイカーを見て言った。ウォントが言う。

「レスティーだ!奴以外に思いつかねえ!」

「…我らが使命を果たすためには、コアメダルを探し出す必要がある。」

コレクは歩き出した。ウォントが訊く。

「どこ行くんだよ？」

「無論、レステイーの搜索だ。」

「なら俺も！」

「わし一人で良い。それより、お前達は早くメイカーを完成させてやれ。」

コレクは去った。

「…申し訳ありません。」

頭を下げるメイカー。

「気にするな。それより、お前を早く完成させる。お前がこの世界からより多くの情報を読み取れる広い場所を探さなければ…」
アプリシイが言い、三人はその場をあとにした。

ここは、世界にその名を轟かせるトップ企業、海馬コーポレーションの本社ビル。社長であり、ロストグラウンド学園における皇魔の同級生でもある海馬瀬人は、地下にある技術開発室を訪れていた。海馬は研究員の一人に尋ねる。

「首尾はどうだ？」

「…予定の装備は既に開発できているのですが、社長ご所望の能力を發揮するとすると、やはりセルメダルのパワーが…」

「…どのくらい不足している？」

「…少なくとも、あと二十倍以上は。」

「…そうか…」

海馬は、ある装備を開発している。現在市民達を恐怖に陥れている怪人、グリードを倒すための装備だ。しかし、海馬の信条は、圧倒的な力で相手を完膚なきまでに叩き潰すというもので、それをやるためには今あるセルメダルではパワーが足りない。

「…散策してくる。何かいい案が見つかるかもしれんからな」

「行ってらっしゃいませ、海馬社長。」

研究員は海馬を見送った。

コレクは、巨大なホールを訪れていた。

今ここでは骨董品の鑑定会が行われており、怪物の乱入によって観客達は我先にと逃げ出す。コレクは気にすることなく、今自分の骨董品を鑑定している老人に近付いていく。

「恐れることはない。その欲望を解き放て」

コレクがセルメダルを出すと、老人の額にメダル投入口が出現。コレクはそこにセルメダルを投入した。

すると、老人の腹から、全身に白い包帯を巻いた怪物が這い出てきた。その姿はグリードが生み出すヤミーという怪人によく似ているが、額に赤いオーブが埋め込まれている。怪人はすぐ近くの壇上に置いてある壺を手にとると、それを食った。

「わ、わしの壺がああああ!!!」

嘆く老人。怪人は老人に掴みかかり、老人の頭から紫色の光を吸い込んだ。老人は倒れる。怪人はそのまま司会にも襲いかかり、光を

吸っていく。コレクはそれを見て笑った。

「良いぞ、『シード』よ。欲望を食らい尽くせ!!」

シードと呼ばれた怪人。これはグリードにおけるヤミーと同種の怪人であり、ヤミーと同じく欲望を食って成長する。だが、ヤミーとの最大の違いは、人間から欲望という感情そのものを吸い取れることだ。欲望を吸い取られた人間は無気力人間となり、欲望が再生するまで何もする気が起きなくなってしまう。再生するまでの期間は人それぞれで違うが、その間は本当に何もする気が起きなくなり、食べたい、寝たい、生きたいと思うこともなくなるため、最悪の場合、欲望が再生する前に死ぬこともある。

そして、シードは人間から欲望を奪った方が早く成長する。この世で最も欲深い生き物が人間であり、そちらの方がより高純度な欲望を吸い取れるからだ。

欲望を一定まで吸ったシードは、槍を携えた戦士のような怪人、ヤリシードへ成長した。コレクはヤリシードに命じる。

「レスティーを捜せ。我らのコアメダルを取り戻すのだ!」

「仰せのままに。」

ヤリシードはホールを飛び出し、コアメダルを取り戻しに行った。

今日は休日。皇魔は街に散策に出ている。彼は自分の力を取り戻す方法を探しており、そのため、時々街に出かける。皇魔は知らないが、この世界は原作のオースの世界よりも遥かに科学技術が進歩しており、探せば何か見つかる可能性はあるのだ。しかし、皇魔は苛

立っている。今まで様々な方法を試してみたが、結局力を取り戻すことは叶わず、戦い方や技が増えたただけだ。

彼の場合、いわゆるチート転生とは真逆の弱体化転生なのだが、全てがマイナスになったわけではない。例えば転生前に彼が使っていた『リフレクターマント』という漆黒のマントだが、あれを自在に出せるようになっていて。また、マントの内部は特殊な異次元空間と繋がっており、中に物を収納できる。これらは転生前はなかった機能だ。飛行能力も失われてはいない。だが当然のことながら、皇魔は満足していなかった。

（何か…何かないのか！？余が力を取り戻す方法は！！）
さらに苛立つ皇魔。

その時、

「いい匂いがするわ。」

背後から女性の声が聞こえた。

驚いて振り返る皇魔。背後にはやはり女性があり、ゆっくりと皇魔に近付いてきている。

いかに力が衰えたとはいえ、皇魔は直感で察することができた。こ

の女はただ者ではないと。

女性は長い黒髪で、黒いドレスを着たスタイルの抜群な風貌だった。しかし、なぜか裸足で、左の頬に何かの刺青があり、額には埋め込まれているとしか思えない赤いオーブが…。

「強い欲望の、美味しそうな匂い。」

女性は妖艶な声を出し、皇魔の顔に触れた。

「感じるわ。あなた、全てを手に入れたって思っているのね？だからこんな強い欲望を…」

そのまま撫で回す。

「ああ、本当に美味しそう…残らず食べてしまいたいわ…」

普通の男性なら一瞬で骨抜きにされそうな声で、ゆっくり囁く女性。

しかし、皇魔は普通の男性ではない。

「余に触れるな！気色の悪い女め！」

皇魔は女性の手を振り払った。彼は異性というものに対して並みではない免疫があり、目の前で裸を見せられても全く動じないほどである。そのまま、できるだけ早足で女性から遠ざかる。

一人残された女性は、きよとんとした顔で皇魔を見送っていた。顔もかなりの美顔で、チャライ男ならすぐにでも声をかけるだろう。

「…ふーん…結構手堅いんだ…」

どことなく楽しそうに呟く女性。と、

「貴様がレスティーだな？」

彼女の背後から、声がかかる。レスティーと呼ばれた女性が振り向くと、そこにはヤリシードがいた。

「あなた、シードね？見た目からして、コレクのシードかしら？」

「やはりか。用件はわかっているな？」

ヤリシードは尋ね、レスティーは言う。

「コアメダルを返せって言うんでしょ？残念ながらそれはできないわ。私はまだ、この世界を楽しみたいもの。」

「ならば、力ずくでも取り返す！！」

槍を構えるヤリシード。レスティーは軽く笑った。

「お好きにどうぞ？やれるものなら。」

「全く、何だというのだ…」

不快感に駆られて歩く皇魔。次の瞬間、爆発が起きた。

「？」

皇魔は大して気にする様子もなく、爆発が起きた方向を見る。彼からすれば自分以外の人間がどうなるうと関係ないのだから、当然といえは当然だが。

爆発が起きた方向では、レスティーがヤリシードと戦っていた。といっても、レスティーは反撃など一切せず、ヤリシードが繰り出す刺突や、槍を振って飛ばしてくる巨大な衝撃波をかわしているだけ

だ。皇魔には、レスティーが遊んでいるようにも見える。

「あの女…」

奇妙な興味を抱いた皇魔は、戦いの場へ走った。

「あれは…」

仮面ライダーオーズの変身者、火野映司は、レスティーとヤリシードの戦いを見かけ、愛用のバイク、ライドベンダーを走らせた。

しばらく戦い続けていたヤリシードだが、レスティーを見失ってしまっ

「おのれ…どこへ行った!？」

レスティーを捜すヤリシード。そこへようやく映司が到着した。

「む、人間か…」

「お前、ヤミーか!！」

「ヤミーだと!?!この私を…あのような低級な存在と同格とみなすか!！」

「!?!ヤミーじゃない!?!」

「許せぬ…死ねい!！」

激怒したヤリシードは、槍を振るって映司に襲いかかる。映司はそれをかわしてベルト、オーズドライバーを装着。コアメダル三枚を投入して、ベルトの右腰にあるスキヤナー、オースキヤナーでスキヤンする。

「変身！」

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバタ・ト・バ

映司は仮面ライダーオーズ タトバコンボに変身した。そのまま剣、メダジャリバーを取り出してヤリシードに挑む。

「貴様…オーズだったか！！」

しかし、ヤリシードは巧みな戦闘術でオーズの攻撃をさばき、槍の石突きでオーズを吹き飛ばした。

「ぐあつ！！」

「ふん…いかにオーズとはいえ、しょせんはヤミーやグリードと同じく低級な存在。この私に勝てるものか」

「ま、まだだ！！」

オーズはメダジャリバーにセルメダルを三枚投入。オースキャナーでスキャンする。

トリプル！スキャニングチャージ！！

「せいやあああああーっ！！！！」

横一閃。オーズはメダジャリバーで空間ごと相手を斬る技、オーズバツシュを放った。しかし、ヤリシードは跳躍して回避。同時に槍を投擲し、オーズを攻撃する。

「うわあああああああー！！！！」

オーズは変身が解除されてしまった。ヤリシードは槍を回収し、刃を向けながら映司に近づく。

「この私を侮辱した罪は重い。貴様には死んでもらう！」

さらに近づくヤリシードは、槍の刃を映司の首に突き付けた。

「冥土の土産に教えてやる。私はシード」

「シード…？」

「そうだ。では、死ね！」

槍を振りかぶるヤリシード。その光景を見て、近くまで来ていた皇魔は呟いた。

「オーズが…負けた？」

声に気付くヤリシード。

「人間か。脆弱な存在の分際で、よく逃げずにいたものよ。」

「!!!」

皇魔はヤリシードの言葉に反応した。

「まあ良い。貴様の欲望も喰らって「貴様、今何と言った？」…何？」

「何と言ったのかと訊いている。余が、脆弱な存在だと…？」

右手にエネルギーを集中させる皇魔。ヤリシードは嘲るように言った。

「そつだ。」

「…余を…舐めるなああああああああああああ!!!」

怒る皇魔は右手からレゾリウム光線を放ってヤリシードを吹き飛ばし、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!!!!」

さらに左手から衝撃波を乱射する。壁に叩きつけられたヤリシードは猛烈な砂煙に包まれる。

「よくも余を侮辱したな!!!貴様だけは許さん!!!跡形もなく消し去ってくれる!!!」

しかし、砂煙の中から現れたヤリシードは、無傷だった。

「なっ!?!」

「この程度でか?消えてなくなるのは貴様の方だ!!!」

驚く皇魔へと飛び掛かり槍で弾き飛ばすヤリシード。そのまま槍を高速で、連続で振り、皇魔を壁に叩きつける。まるで自分がされたことをやり返すかのよう。

「ぐあああああああああ!!!」

苦悶の声を上げて砂煙に包まれる皇魔。ヤリシードは砂煙に飛び込

んで皇魔を中から引きずり出し、みぞおちに膝蹴りを喰らわせ、後頭部に肘鉄を打ち込み、最後に槍で吹き飛ばす。

「あ…ああ…」

映司はその光景に恐怖した。実は、皇魔と会うのは今回が初めてではない。前にグリードの四人に一斉に襲われたところを、皇魔に助けられてもらったことがある。その時皇魔は、圧倒的な力でグリード四人をたつた一人で相手にし、見事撃退してみせた。しかし、その皇魔が、今、目の前で、一方的に叩きのめされている。それほどまでに、ヤリシードは強いのだ。

皇魔は吹き飛ばされたあとも、ヤリシードに殴られ、蹴られ、それはもう、無惨な姿になっていた。再び槍で大きく吹き飛ばされる。また壁に叩きつけられ、皇魔は一人思った。

（余は…また死ぬのか？侮辱されたまま、このような無様な最期をとげるのか…？）

徐々に意識を失っていく皇魔。

（…余をこのような脆弱な存在に転生させおって…恨むぞ…クロス…）

ついに、皇魔は自分を脆弱な存在と認めてしまう。

だが、彼が死ぬことはなかった。

レスティーが瞬間移動で皇魔の側に現れたのだ。

「貴様は…」

ゆっくり呟く皇魔。レスティーはヤリシードを睨み付ける。すると、睨み付けた瞬間に衝撃波が生まれ、ヤリシードは吹き飛ばされた。レスティーはそれを見計らって皇魔に触れる。と、レスティーの手からエネルギーが注ぎ込まれ、皇魔の傷が完治したではないか。皇魔は飛び起きる。

「驚いたな…まさか貴様にそのような力があつたとは…」

「…ねえ。」

レスティーは皇魔に尋ねた。

「あなた、力が欲しくない？」

「……何？」

「力が欲しくなかったって訊いてるの。どうする？力が欲しいなら今すぐに与えてあげるわ。」

「…」

考える皇魔。すると、

「待て!!」

復帰したヤリシードが叫んだ。

「乗せられるな!!その女は自らが快楽を得るために、多くの国を滅ぼしてきた!!その女の口車に乗った者の運命は、破滅だ!!」

「……破滅、か…残念だが、余は既に破滅している。」

「何!？」

「よく考えてみれば、今死んだところで失うものなど何もない。ならば、何を選ぶほうと構うものか。」

皇魔は言い放ち、レスティーに頼む。

「女。その話、乗ったぞ!!さつさと力を差し出せ!!」

「…いいわよ。けど、私の名前はレスティー。女なんて無粋な名前じゃないわ」

「ならばこちらも名乗らねばなるまい。余は天砕皇魔!」

「じゃあ、皇魔ね。お望み通り、力をあげる!」

レスティーは片手を出す。すると、手が光って石造りの何かが現れた。そのまま皇魔の腰に着けるレスティー。今度は物体が光り、才

「ズドライバーに酷似した黒と白のベルトになって、皇魔の腰に装着される。」

「何だこれは？」

「これはエンズドライバー。それじゃあ次は……」

「レステイヤーは三枚のコアメダルを出した。メダルの種類は、クレアボヤンス、ヤリ、ホノオ。」

「このメダルを、ここにはめて。」

「うむ。」

皇魔は言われる通りにコアメダルをはめ込み、プレートを傾ける。

「最後に……」

レステイヤーはエンズドライバーの右腰にあったスキヤナーを取り外し、皇魔に渡した。

「このエンスキヤナーでメダルを読み込んで。」

「よし。」

皇魔は構えを取り、

「変身！」

スキヤンした。

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

奇妙な歌が聞こえて、皇魔は変身する。その姿は、彼の転生前の姿である、エンペラ星人の外見と非常に酷似しており、頭部が黒、上半身が濃い鉄色、下半身が紅だった。偶然近くにあったガラスを見て、自分の姿を確認する皇魔。

「何だこの色とりの外見は！？」

レステイヤーは説明した。

「それはエンズ。変身後の姿は、変身者の最もなりたい姿が反映さ

れるわ。つまり、あなたは転生前の姿に戻りたかったから、そんな姿になったわけ。」

「貴様、なぜそれを!?!」

「傷を治してる間、あなたの記憶を見たの。でも、わかったのはあなたが転生者で、力を取り戻したいってことだけ。それより、早くあいつを倒したら?」

「む…そうだな…!」

皇魔、いや、エンズ クヤホコンボはヤリシードに挑んでいく。

その力は、圧倒的だった。今まで全く敵わなかったヤリシードを、赤子のようにあしらっている。

「おのれ!!」

刺突を繰り返すヤリシード。しかし、

(見える…)

エンズはクレアボヤンスコアメダルの力を発動してよける。常人には見ることもできないであろうその刺突が、エンズの目にはスローモーションに映る。これが、クレアボヤンスコアメダルの力だ。使用者の視力を強化し、さらに透視能力を授ける。エンズは次のコアメダル、ホノオコアメダルの力を発動した。このコアメダルの力を発動することによって、エンズの両足は二十万度にも達する炎を纏い、燃える蹴りを放てるのだ。

「ぬん!せい!!」

連続で蹴りを叩き込むエンズ。さらに、ヤリコアメダルの力も発動する。ヤリコアメダルの力を発動すると、両腕に槍を模した棘、ヤリニードルを生成して攻撃ができるのだ。

「はっ!どあっ!!」

ヤリニードルを生成した腕で拳を繰り返し、ヤリシードを攻撃するエンズ。最後に、

「つあああああーっ!!!!!!」

エンズはレゾリウム光線を放つ。

「ぐわあああああああ!!!」

ヤリシードは数百枚に及ぶセルメダルとなって砕け散った。

「どうやら、こちらの威力も上がっているらしい。」

エンズは変身を解除する。

「お見事！」

拍手をするレスティー。

「この程度、余ならば当然だ。」

「ところで、身体は大丈夫？」

「何を言っている？」

皇魔はレスティーの発言を疑問に思い、レスティーは考えた。

(おかしいなあ…基本コンボのクヤホコンボとはいえ、常人がエンズに変身して戦ったら、三時間は身動きもできなくなるくらいダメージを受けるはずなんだけど…)

そう。本来なら、エンズに変身するとそれくらいの副作用があるのだ。しかし、皇魔にはその副作用がないらしい。

(よっぽど身体が頑丈ってこと？まるであの人みたい…)

「そういえば、あなたは力を取り戻したいのよね？」

「そうだが…」

「だったら、これを使ったら？」

レスティーが言うと、ヤリシードのぶちまけたセルメダルがレスティーの体内に吸収された。

「!?!」

驚く皇魔だが、レスティーは構うことなく、自分の手のひらの上に数枚のセルメダルを出現させる。

「このメダルは、強力なエネルギーの塊でもあるの。エネルギーに還元して吸収したら、あなたの力を取り戻せるんじゃないかしら？」

「…」

皇魔はレスティーに言われるままセルメダルを受け取り、言われる通りにメダルをエネルギーに還元して吸収した。

「!?!」

皇魔は驚く。レスティーが言った通り、微量だが、皇魔の力が回復したのだ。

「これは…」

「まあ、あなたが本来の力を取り戻すにはあと何億、いえ、何千億枚ものメダルが必要になるでしょうけど。」

しかし、皇魔が力を取り戻す方法はわかった。

「構わん。余が力を取り戻す目処は、立ったのだからな。」

すると、レスティーがこんな提案をしてくる。

「ねえ。このままエンズをやってみない？あなたにとってかなりの助けになると思うんだけど…」

それは確かにそうだろう。だが、皇魔は考える。ヤリシードが言っていたことを思い出したのだ。レスティーの口車に乗せられた者の運命は、破滅だと。

（なぜかはわからんが、この女にこれ以上関わるとまずい気がする…）

なので、

「嬉しい申し出だが、断る。余は余の力で、事を成し遂げたいのだ。」

と、断っておく。エンズドライバーも返した。

「そう…」

残念そうな顔するレスティーに、皇魔は言った。

「今日は助かった。それは素直に礼を言う。もう会うこともないだろう。」

皇魔は帰っていく。

レスティーはそれを見送りながら、ニヤリと笑った。

「こんな面白そうなこと、そんな簡単に手を引けるもんですか。」
瞬間移動で姿を消すレスティー。ただ一人取り残された映司は呟いた。

「…俺は…無視…？」

海馬コーポレーション。

密かにエンジンの戦いを目撃し、セルメダルを一握り持ち帰っていた海馬は、研究員にセルメダルを調べさせる。

「どうだ？」

「最高ですね。二十倍どころか三十倍…いや、五十倍以上のエネルギー量です。これなら行けます」

「そうか。」

「しかし、社長は一体どこでこれを？」

「…グリッドを上回る敵が現れた。」

「なっ!？」

「何にせよ、これで装備の一部が使える。あとは…」

「…やはり、どうしてもコアメダルが必要なのですか?」

「当然だ。グリッドを上回る敵が現れた以上、エネルギー源が使い捨てのセルメダルでは効率が悪い。」

「はあ…」

海馬はモニターを見た。

「今に見ている。必ず叩き潰してやる」

コレクは、仲間のデザイア達のもとへ帰還していた。しかし、アプリシィとメイカーはおらず、いたのはウォントだけ。ウォントが尋ねる。

「どうだった？」

「…失敗した。レスティーム、エンズまで持ち出しておったのだ。」

「何だと！？それじゃああの時と同じじゃねえか！！」

驚くウォント。

「だが、勝たねばならぬ。我らデザイアの、崇高なる使命のために。ところで、メイカーは完成したか？」

「心配はいらない。メイカーは完成した」

そこにアプリシィが現れ、アプリシィと一緒にメイカーが来た。しかし、以前のようなブランク体ではなく、全身に銃やミサイルを装備した姿に変わっている。

「ほう…これはなかなか…」

コレクは笑った。

翌日、皇魔は教室で今後の行動を考えていた。

（さて、どうしたものか…）

間もなくして始まる朝礼。セフィロスは言った。

「今日は転校生を紹介する。入れ」

すると、教室のドアが開いて、女子生徒が入ってくる。皇魔は目を見開いた。それもそのはず。転校生が、

レスティーだったからだ。

オーブも刺青も消えているが間違いない。レスティーだ。

(な…)

「今日からこの学園でお世話になる、レスティーです。よろしくお
願いします」

笑顔で挨拶するレスティー。皇魔は、

(何だとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!?!?)

心中叫んでいた。

この出会いは、これから始まる長い物語の序章にすぎない。

それは、闇に堕ちた者が光へと変わっていく物語……。

第一話 皇帝と復活と謎の女（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

レスティー「私達は、今から500年前に生み出された、デザイア
つていう人工生命体。」

海馬「貴様の武器だ。受け取れ！」

皇魔「よこせ！貴様のセルメダルを！！」

第二話

欲望と戦いと絶対破壊の槍

第二話 欲望と戦いと絶対破壊の槍（前書き）

仮面ライダーエンズ！！

前回起きた三つの出来事！！

一つ！怪物の王、デザイアが500年の眠りから目覚めた！

二つ！皇魔が謎の女、レスティーと遭遇！

三つ！皇魔が、エンズに変身した！

第二話 欲望と戦いと絶対破壊の槍

転校生としてロストグラウンド学園にやってきたレスティー。容姿的にも人気があり、当然のことながら質問攻めにあう。

だが、とある二人だけはレスティーを怪しんでいた。

クラウド・ストライフとザックス・フェアという二人の男子生徒である。

なぜ怪しんでいるか。それは、今の季節が秋だからだ。転校の時期としては遅すぎる。それだけならばまだ納得できるのだが、問題はもう一つ。転校とは学校側が連絡を受けて行われるものだが、学園側は何の連絡も受けていなかったという。つまり、何の脈絡もなく突然の転校だというのだ。これはおかしい。噂によると、教員達は今回の転校のことを何も知らず、知っていたのは理事長のカーネル・サンダースだけだったとのこと。

「どう思うザックス？」

クラウドはザックスに訊いた。しかし、不審には思っているものの、ザックスはあまり重く受け止めていない。

「特に心配することなんてないだろ。こんな世界だし」

ちなみに、この学園、いや、この世界に生きる者達は、この世界が異常だという自覚がある。

「な、皇魔？」

皇魔の親友を自称するザックスは、皇魔に話し掛けた。当の皇魔は、

自分の机に頭突きを喰らわせ続けていた。

「ちよっ！どうしたんだよ皇魔！？」

驚くザツクスだが、皇魔はそれを無視して一心不乱に頭突きを喰らわせ続けている。

「落ち着けて皇魔！！」

クラウドと二人がかりで皇魔を羽交い締めにするザツクス。

「離せええええ！！！！こうでもせんと落ち着かんのだああああああああ！！！！」

「他に方法があるだろう！！」

「だから落ち着けてば！！」

完全に錯乱している皇魔。一方レスティは、

「可愛い」

かなでを抱き締めて頬擦りしていた。かなでは学園内で『天使』と呼ばれているほどの可愛らしさを持ち合わせているため、レスティはそれに魅了されたのだ。かなでの方はと言えば、じつとしてされるがままになっている。無表情だが、彼女としてはまんざらでもないのだろう。

「ねえ、名前はなんて言うの？」

「…立華かなで。」

「じゃあ、かなでちゃんね。ん〜可愛い」

ゆりはそれを見て言った。

「どうやら気に入られちゃったみたいね、かなでちゃん。」

「…うん。」

「そうだ、あなたの名前は？」

レスティーはゆりにも訊く。

「仲村ゆりだけど……」

「じゃあゆりちゃんね。可愛い〜」

「うわあ!？」

レスティーはかなでを抱き締めたまま、ゆりも一緒に抱き寄せて頬擦りする。ゆりもかなりの美人なので、レスティーのストライクゾーンにはまったらしい。

「…ええい…!!」

皇魔は立ち上がってレスティーを二人からひっぺがす。

「な、なに?何なの?」

「来い!」

戸惑うレスティーに構わず、皇魔はレスティーを連れて屋上まで行った。

「ヤミーに似た化け物を見た?」

クスクシエという店に戻った映司は、とある理由からとある男性の肉体に寄生し、それからずっと映司に味方しているグリードの一人、アंकクに、昨日あった出来事を話した。

「うん。あいつ、自分のことをシードって名乗ってたけど、何か知らない?」

アंकクは考えるが、

「…知らないな。グリードやヤミーならともかく、シードなんて名前の化け物を見たことも聞いたこともない。」

知らないようだ。

「でも、向こうはグリードやヤミーのことを知ってた。オーズのことも……」

「……だが俺は知らない。直接会って確かめてみる必要があるな……」
アंकは呟いた。映司はもう一つの事実を告げる。

「それから、そのシードってやつは、エンズっていうやつが倒したんだ。何か知らないか？」

「エンズ？知らないな……どんな感じだった？」

「なんか、オーズの同類っていうか……」

（どういうことだ？シードもエンズも、俺が知らないやつだ。何が起こっている？）

アंकは嫌な予感を覚えた。

屋上に着いた皇魔はレスティーに訊く。

「貴様、どういうことだ！？なぜここにいる!？」

「この学園の理事長に私の超能力で少し、ね。」

「……なんという女だ……」

「そう言わないで。私はあなたに協力するって言ってるんだから厄介なやつに目をつけられたと舌打ちする皇魔。しかし、これはチャンスでもある。皇魔はレスティーが何者なのかを知らない。なので、皇魔は尋ねた。

「貴様らは一体何者だ？」

「貴様『ら』？」

「昨日のあれも含めてだ。グリードでもヤミーでもなさそうだが、貴様の正体は何だ？」

「その前に、今年か教えてくれる？」

レスティーに訊かれ、皇魔は今の年数を答える。

「…ふーん…もう500年も経ったんだ…」

「？」

「じゃあ教えるわね。私達は、今から500年前に生み出された、デザイアっていう人工生命体。昨日のあれは違うけど」

「あれは何だ？」

「あれはシード。デザイアの眷族で、まあヤミーの強化版だと思っ
てくれればいいわよ。」

「…貴様はグリードやヤミーのことを知っているようだな。」

「オーズのことも知ってるわ。」

「なぜだ？」

「私達デザイアはグリードを解析して造り出された、いわば戦闘用
グリードだから。そしてエンズもまた、オーズを解析して造り出さ
れたシステム。」

「…強いはずだな。」

「だからこそ、棺に封印したあとで異空間に封印するっていう二重
封印を施されたわ。」

皇魔は納得した。戦闘用とそうでないもの。どちらが強いかと訊か
れれば、当然戦闘用である。皇魔はさらに訊く。

「余は、五体までグリードを見た。デザイアとやらも、当然貴様一
人ではないのだろう？」

「ええ。」

レスティーはデザイアの説明を始めた。

彼女が知っているデザイアは、まず超能力系である自分。武装系の
コレク。炎熱系のウォント。冰雪系のアプリシィ。そして、未完成
なまま封印されたメイカー！。

「未完成？」

「ええ。私以外のデザイアは、生まれた時、みんなblank体だっ
た。デザイアには世界から情報を読み取る力があって、読み取った
情報の中から好きな情報を選んで、自分のコアメダルをその属性に

変えることができるの。コレクが剣や槍みたいな武装系、ウォントが炎や熱みたいな炎熱系、という具合にね。」

皇魔もグリードのことを一から十まで知っているわけではないが、デザインはグリードと根本的な製造法が違うということにはわかった。「そして私以外のデザインは、全員が純粹に世界の滅亡を望んでいる。でも、心配することはないわ。」

レスティーは六枚のコアメダルを出す。鉄色、クリアブルー、紅が二枚ずつだ。

「あいつらのコアメダルは私が奪ってあるから。」
しかし、皇魔は奇妙なことに気付く。

「…メイカーとやらのコアメダルがないが。」
そう、レスティーが持っているのは、コレク、ウォント、アプリシイのメダルだけだ。メイカーのメダルは一枚もない。

「持つてても意味がないから、取らなかつたわ。」

「…待て。つまり、メイカーだけは完全復活しているということか？」

「そうなるわね。」

「…完成したらまずいのではないか？」

「そうね。完全復活しなくてもこの世界を滅ぼせる力はあるから、完全復活してらもつとヤバいかも。」

さらりと恐ろしいことを言うレスティー。

「何だと？完全復活しなくともこの世界を滅ぼせる？ならば完全復活を待たずとも…」

「だってあいつらが破滅させようとしているのは、この世界を含めた全次元世界だもの。」

一瞬、沈黙が流れた。

「でも大丈夫。あいつらは慎重派で、全員が完全復活しないと本格的な行動を起こさないから。」

「そうか…」

なぜか少し安心した皇魔。

(何を安心しているのだ余は？このような世界、どうなるかと構わんではないか…)

と、皇魔はあることを思いつく。

「そういえば、貴様はシードとの戦いの時、なぜ真の姿を使わなかった？」

人間形態時よりも、怪人形態時の方が当然強い。しかし、よく考えてみれば、あの戦いでレスティーは怪人形態を使わずに戦っていた。正直訊く必要のないことだとは思うが、せっかく敵の一人が裏切ってくれているのだ。引き出せる情報は引き出せる限り聞いておきたい。皇魔はそう思っていた。

しかし、レスティーから意外な答えが返ってくる。

「あれが私の本来の姿だけど？」

なんと、あれがレスティーの本来の姿だと言うのだ。確かに刺青や額のオーブなど、常人と異なる点があった。だが、怪人形態には程遠い姿だ。つまり、レスティーには怪人形態が存在しないということになる。

「自分で言うのもなんだけど、私は特別なデザイアなの。より人間に近くなるように、って。」

「…くだらんな。それより、セルメダルだ。余はセルメダルが欲しい」

セルメダルを欲する皇魔。彼が力を取り戻すには、セルメダルをエネルギーに還元して吸収しなければならない。

「こんなことなら、ヤミーと戦った時のセルメダルも集めておけばよかった。」

皇魔は悔やむ。彼は今まで、何度もヤミーと戦って打ち倒しているのだ。

「あらダメよ。」

しかし、レスティイーは止める。

「何がだ？」

「ヤミーのセルメダルはパワーが弱すぎる。そんなのじゃ、力を取り戻すまで何十年、何百年もかかるわ。今だっつていつまでかかるか……」

「……それでも余は必ずデザイアを殲滅し、セルメダルもコアメダルも全て手に入れる。そして、力を取り戻す！」

決意を改める皇魔。レスティイーは心中ほくそ笑んだ。

(やっぱり面白いことになった)

「なら私はあなたに協力する。」

「なぜだ？」

「面白そうだからよ。あなたと一緒に戦うのが」

レスティイーは、使命よりも楽しむこと。つまり、快樂に従って生きるデザイアなのだ。それゆえに、世界を滅ぼそうなどと思ったりはしない。だが、彼女はその結果として、多くの国を滅ぼしてきたのである。皇魔はデザイアを倒すための戦士になったと同時に、レスティイーが快樂を感じるための道具として選ばれたのだった。

「……酔狂な女だ。」

「よく言われるわ。」

レスティイーは肩をすくめる。だが、これで二人の協力関係が結ばれたのは確かだ。

「私にはシードの出現を探知する力がある。私がシードを見つけて、あなたが倒す。これでいい？」

「構わん。」

こうして、二人の戦いが始まった。

二人の会話をこっそり盗み聞きしていた海馬。

(デザイアとシード：それが新たな敵の名か：)
海馬は気付かれないように、その場を離れる。

(奴が倒すというのなら好都合。ならば、『アレ』を渡すとするか
…)

ここは、数年前から廃墟と化している洋館。もはや誰も寄り付かない場所だが、ここに、ある団体がたむろしていた。

「見た目のわりには住みやすそうな場所だよな。」

言ったのは、半袖を着た暑苦しさを感じさせる男性。

「ここがこれからの活動拠点になるのか？」

今度は長袖を着た、冷たい眼差しでの男性が咳く。

「ええ。一応我々にも、そういったものは必要ですからね。」

それに答えるのは、黒いスーツに身を包み、帽子をかぶって黒いサングラスをかけた、いわゆる殺し屋風の男性。

「あとはレスティールからコアメダルを取り戻し、この世界を滅ぼすのみ。」

最後に杖をついて着物を着た老人が結んだところで、一同に変化が現れる。

彼らの身体をメダルが包んだかと思った次の瞬間、半袖の男性がウオントに、長袖の男性がアプリシイに、殺し屋風の男性がメイカーに、老人がコレクに変わったのだ。そう、グリードと同じく、彼らデザイアもこの時代に合わせて人間に擬態できるようになったのである。全次元世界の滅亡を掲げているのだから、それくらいの順応

性は、あつて当然だが。

「さて、わしは行く。」

再び人間態に戻り、どこかへ行こうとするコレク。ウォントは言った。

「おいおい、大丈夫かよ？いくら俺達にはグリッドと違ってセルメダルの自己増殖機能があるつつつても、レスティーほど簡単じゃねえんだぜ？余裕あるなお前。」

デアリアには、自身の欲望を満たすことでセルメダルを増やせるという、セルメダルの自己増殖機能がある。レスティーの場合、彼女は使命よりも快楽に従って生きているため、欲望を満たすのは簡単だ。だが、他は使命に生きているためそうはいかない。しかし、コレクは言った。

「わしの性分を知っておろう？わしは強い相手との戦いを望む。今代のエンズが強ければ、それを利用して欲望を満たすだけだ。」

「…あいつも好きだねえ…」
ウォントは呆れた。

下校時間。

「…!!」

レスティーは何かを感じ取った。

「どうした？」

皇魔が訊くと、レスティーは答えた。

「シードよ。それもすぐ近く!」

「早速来たか…案内しろ!」

「ええ！」

皇魔はレスティーに道案内を任せ、二人はシードを捜しに行く。海馬はそれを見て、すぐに携帯で本社の技術開発室に連絡した。

「俺だ。開発コード『スピアー』のロールアウトは完了しているな？」

「はい、いつでもお届けできます。」

「よし、今から俺が指定するポイントまで輸送しろ。」

街中では、巨大なハンマーを携えた怪人、ハンマーシードが暴れ回っていた。コレクがごろつきを使って生み出したシードだ。ごろつきの『壊したい』という欲望に従って、ハンマーシードは街を破壊しながら、欲望を成長させていく。皇魔とレスティーは近くの歩道橋の上からハンマーシードを発見。

「ベルトを貸せ。奴を倒す」

早速挑もうとする皇魔。しかし、レスティーは言った。

「セルメダルがたくさん欲しいなら、もう少し待った方がいいわよ？」

「何？なぜだ？」

「シードもヤミーと同じで、欲望を食べれば食べるほど成長するの。シードはヤミーと比べて大食いだから、一度の戦いで手に入るメダルの量も多い。だから、成長すればその分メダルも多く手に入る。あいつの場合、欲望は『破壊』らしいから、この辺り一帯を壊させてから倒せばいいんじゃないかしら？」

それを聞いて皇魔は、

「そうか、ならば待つとしよう。」

なんと、承認してしまった。

「やけにあっさりと聞いたわね…ここにいる人達を守るべきだ、とか言っつて、私からドライバーとメダルを取り上げると思っただけだ。」

「馬鹿な。余がこのような世界のゴミクズどものために戦うものか」
皇魔にとつて、自分以外の存在はゴミと同じだ。

「余は余のためにしか戦わん。ゴミなど、守るに値せんわ。もしゴミを守るために戦う者がいたら、見てみたい。そのあとで愚か者と笑い飛ばしてやるがな」

「ふーん…」

(またすごい考えの持ち主ね…まあ、私も自分が楽しめれば何だっていいけど)

レスティーですら一瞬引くほどの外道ぶり。だがレスティーもレスティーだ。

そんな光景を見ていたコレク。今は怪人態になっている。

「あの男…もしか…」

コレクは考え事をし、直後、ハンマーシードに接近する者達の存在に気付いた。

「む？奴らは…」

「あいつ、額にオーブがある！シードだ！」

「あいつがか…」

その者達の正体は、映司とアंकだった。

「オーズ…！」

皇魔は驚き、

「あらら、あつちが先に仕掛けちゃったか。」

レスティーは肩をすくめる。しかし、皇魔は平常心を取り戻した。

「昨日の戦いで奴はシードに完敗した。奴にシードは倒せん」

皇魔はそう思っていたのだ。アंकはハンマーシードに声をかける。

「おいお前！」

「ん？この気配…貴様、グリードか。」

「やっぱりグリードのことを知ってる…」

「お前、何モンだ？」

構わず尋ねるアंक。

「俺はシード。デザイアの眷族…」

「デザイア…？」

「うおおおおおおおおお！！！」

ハンマーシードはアंकに襲いかかった。

「アंक！危ない！」

映司はアंकを突き飛ばす。これによってアंकはハンマーシード

のハンマーをかわし、標的は映司に変わる。

「映司！」

アंकは白いメダルを三枚投げ渡した。

「これ…！」

ハンマーシードの攻撃をかわしながら、映司はメダルを見る。

「お前の話を聞いた限りじゃ相当やるらしいからな。コンボで一氣

に決める…！」

「ああ！」

映司はメダルをオーズドライバーに装填し、オースキャナーでスキヤン。

「変身！」

サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ！！サゴーズ！！！！

映司はオーズ サゴーズコンボに変身した。オーズは同じ種類のメダル三枚を使ってコンボチェンジすることで、タトバコンボのような基本コンボ、それ以外の亜種形態を遥かに上回る力が出せるのだ。また、コンボに応じた固有能力も使える。

「コンボを使った！？」

これには皇魔も焦った。そのことを知っていたからだ。だが、レスティーは落ち着いている。

「心配しなくても大丈夫よ。」

「何？どうということだ？」

「オオオオオオオオオオ！！！」

パワーに優れるサゴーズコンボ。オーズは咆哮を上げながら、ハンマーシードに殴りかかる。しかし、ハンマーシードはオーズの攻撃をハンマーで受け止め、拳でオーズの顔面を殴った。

「ぐっ…おおお！！！」

オーズは再び挑むが、ハンマーシードはハンマーを使った攻撃でオーズを一方向的に叩きのめす。

「弱い！やはりグリードごときを封印するために生み出された存在など、この程度だということだな！」

「何！？」

ハンマーシードの発言にカチンときたアंक。

「まだだあっ！！！」

オーズはオースキャナーでドライバーをスキャン。

スキャニングチャージ！！

「任せておけ。変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身した。

「コアメダルを取り戻すことを優先したいが、貴様も危険だ。来い！」

コレクはハンマーシードを呼び寄せ、二人がかりでエンズに挑む。

「貴様を倒してからゆっくりと回収させてもらおう！」

「くっ…」

能力的に、エンズとコレクは互角レベルだ。しかし、コレクはハンマーシードという味方をつけて戦っている。一対一ならともかく、二対一ではさすがのエンズも部が悪い。しかも相手は武器があり、こちらは素手だ。ヤリニードルを生成するが、ハンマーや剣に比べると威力面で劣り、クレアボヤンスコアメダルの力を解放して、ようやく渡り合えている。

「あいつがお前の言ってたエンズか…なかなかだが、ヤバいぞ！」

「このままじゃ…」

焦るアंकとオース。

しかし、ここで思わぬ援軍が現れた。

「皇魔！！」

海馬である。

「海馬！？」

エンズはホノオコアメダルの力を解放して蹴りを放ち、コレクとハンマーシードを退かせたうえで海馬を見た。

「貴様の武器だ。受け取れ！」

海馬は何かを投げ渡す。エンズが受け取ったそれは、三ツ又の槍だ

った。海馬が説明する。

「その槍は『メダジャベリン』。貴様の意思で重量、硬度、形状、伸縮、切れ味を自在に調整できる。貴様が望めば、スキヤニングチャージも可能だ！」

「…」

それを聞いたエンズは、襲いかかってきたハンマーシードのハンマーを槍、メダジャベリンで受け止め、弾き、刃の切れ味、槍自体の重量を高めて突く。ハンマーシードはかなりのダメージを受けた。

「いい槍だな。」

「当然だ。我が社の技術力を舐めるな」

武器を得たことよって形勢が逆転したエンズは、コレクとハンマーシードを追い詰めていく。そして、エンズは自分が望むことよって柄にプレートとメダル投入口を生成。だが、セルメダルがない。

「そういえば余はセルメダルを持っていなかった。」

今さら気付くエンズ。その時、突然目の前にセルメダルが三枚出現。エンズはそれを掴み、なぜかレスティーを見る。そこには、笑顔で手を振るレスティーが。

「そうか、お前は超能力が使えるな。」

レスティーは超能力の一つ、瞬間移動を使って自分のセルメダルをエンズに届けたのだ。エンズはメダジャベリンにセルメダルを投入。「さあよこせ！貴様のセルメダルを！！」

エンスキヤナーでプレートをスキヤン。

トリプル！スキヤニングチャージ！！

刃にエネルギーを纏わせ、

「つあああああああーっ！！！！」

ハンマーシードに斬りかかる。ハンマーシードは物質、エネルギー、法則すらも切り裂く絶対破壊の槍撃、エンズアルカイドによって両断され、

「ぐわあああああああああ！！！」
砕け散った。

「おのれ…しかし、思わぬ収穫があった。セルメダルはくれてやる！」
コレクは捨て台詞を吐いて去った。

「さすがだな。一瞬で使いこなすとは、転生者は伊達でなないらしい。」

戦いが終わり、エンズに近づく海馬。エンズは変身を解除し、レスティーも瞬間移動でやって来る。皇魔は訊いた。

「なぜ貴様がここにいる？」

「貴様のサポートをするために来たのだ。」

「余の援護を？」

海馬は、皇魔とレスティーの会話を盗み聞きしていたことを話す。

「俺は、一刻も早くグリードとヤミー、デザイアとシードを殲滅したい。」

海馬がそう思う理由は、人々を笑顔にしたいからである。海馬コーポレーションはそういう会社なのだ。

「俺はこれからも、全力でそちらをサポートする。協力させてくれ！」

頭を下げる海馬。皇魔は思った。

（プライドの高いこの男が頭カブを垂れるとは、どうやら本気らしいな…後ろ楯を得ていて、損をすることはない）

「…いいだろう。貴様の援護を受けてやる」

「…感謝する！」「じゃあ…」

レスティーは念動力を使って、数千単位で転がっているセルメダルを回収すると、海馬に言う。

「セルメダルの半分を提供するわ。これがなくちゃ、対策も練れないでしょ？」

言ったあとで、皇魔にも目を向けた。

「いいわよね？」

「…仕方あるまい。この槍は気に入ったからな、その代金とでも思うことしよう。」

リフレクターマントを出し、中にメダジャベリンをしまつ皇魔。

「当然、万全な援護を頼むぞ？」

「それについては心配いらぬ。もう既に、いくつかの装備は完成している。」

「ふん…頼りにさせてもらおう。」
皇魔は帰った。

「セルメダルはあとで瞬間移動を使って送っておくから。」

「ああ、頼む。」

レスティーも続き、海馬も帰る。

変身を解除した映司とアंकは呟いた。

「また無視？」

「俺もか…」

「…レスティー。」

皇魔はレスティーに尋ねた。

「なあに？」

すつとぼけたような顔をするレスティー。すると皇魔は、

「なぜ貴様は余の家に入り込んでいるのだ！！」

と、悲鳴に近い声をあげた。

「いいじゃない別に。デザイアもシードも、いつ襲ってくるかわからないのよ？なら、いつも私が一緒にいた方がいいわ。」

「それはそうだが、寢床はどうする!!」
「そんなの、私がベッドであなただが床に決まってるじゃない。」
「ふざけるな!!ここは余の家だ!!」
「何よ!!女性をいたわる心がないの!?!」
「デザイアの分際で何を言うか!!」
「そつちこそ転生者のくせに!!」
口論は、深夜まで及んだ。

第二話 欲望と戦いと絶対破壊の槍（後書き）

次回、

仮面ライダーエングス！！

？「もつと…もつと速く…！！」

？「速さが足りない！」

海馬「新装備だ！使え！」

？「言っただろう？私にはお前の気持ちがよくわかると。」

皇魔「ええい鬱陶しい！邪魔をするな！！」

第三話

マラソンとバイクともう一人の転生者

設定（前書き）

設定です。

設定

あまくだきおつま
天砕皇魔

イメージC V内海賢二

ロストグラウンド学園に通う高校生。正体は、かつて仮面ライダークロスとの戦いに敗れてオーズの世界に転生させられた、エンペラ星人である。

この世界を支配しようと考えているが、転生の際に大きく弱体化してしまったため、なぜか強い存在ばかりがいるこの世界では、行動が起こせない。なので、いつも苛立つかため息をつくかしている。だが、レゾリウム光線や衝撃波が使えなくなっただけではなく、飛行能力も失われていない。また、変身前変身後に関わらず、リフレクターマントを出せる。このリフレクターマントは転生前と違って、内部が小型の異次元空間と繋がっており、物を収納できる。

性格は傲慢かつ唯我独尊で、気に入らない相手にはすぐレゾリウム光線や衝撃波を打ち込もうとする。また、自分以外の存在をゴミクズ同然としか見ておらず、ヤミーやシードに寄生された人間を平気で見捨てられる、または呑み込まれた人間ごとヤミーやシードを倒せるなど、非常に冷酷。

セルメダルをエネルギーに還元して吸収すれば力を取り戻せるため、どんな手段を使ってでもセルメダルを集めようと考えている。

実力は、素手でもヤミーやグリッドを倒せるほど高い。

仮面ライダーエンズ

皇魔が変身するライダー。複眼の色は青。

オーズを解析して生み出された、デザイアを封印するための存在。オーズの数十倍に及ぶ戦闘力を有しており、皇魔自身の能力の高さも合わさって、非常に強力。しかしその反面、常人が変身すると、基本コンボ形態であるクヤホコンボでさえ、三時間は身動きすらできないほどの苦痛に襲われるほどの副作用がある。オーズと違ってオーラングサークルが存在せず、使用したコアメダルの色に応じて頭部、上半身、下半身の色が変わるのみ。変身後の姿は変身者の最もになりたい姿が反映され、皇魔の場合は転生前の力を取り戻したいと願っていたため、エンペラ星人に非常に近い姿となった。ちなみに、レゾリウム光線や衝撃波の威力も上昇している。

クヤホコンボ

クレアボヤンスコアメダル、ヤリコアメダル、ホノオコアメダルを使って変身するエンズの基本コンボ形態。オーズと同じく、必ずしもこの形態に変身する必要はない。

必殺技は、百万度の炎を纏った両足蹴り、クヤホキック。

パンチ力 84 t

キック力 107 t

ジャンプ力 ひと飛び300 m

走力 100 mを2秒

クヤホキック 480 t

エンズドライバー

皇魔がエンズに変身するために必要なベルト。白と黒のオーズドライバーのような形状をしており、コアメダルを装填して傾け、右腰に装着されているエンズキャナーでスキャンすることで、エンズへの変身を完了する。

デザイン

500年前、グリードを解析して生み出された存在。簡単に言えば戦闘用グリード。額に赤いオーブが埋め込まれている。グリードと同じくコアメダルを核にセルメダルを結合させて肉体を構成しており、自分の眷族である怪人、シードを生み出す。が、力はグリードなど足元にも及ばないほど強い。

また、全員が純粹に世界の破滅を願っており、全次元世界の滅亡を最終目標にしている。自身の欲望を満たすことによりセルメダルを増やせるというセルメダルの自己増殖機能もあるが、欲望よりも使命感を優先させているため、あまり役に立たない。この能力を応用して巨大化することは可能。ちなみに、誕生当初はレスティー以外全員ブランク体だったが、世界から情報を読み取る能力があり、読み取った情報に合わせてコアメダルの属性を変えられる。

レスティー イメージCV釘宮理恵

超能力系デザイン。コアメダルの色は黒。より人間に近く造られたため怪人形態が存在せず、人間の女性の姿をしている。皇魔をエンズにした張本人。名前の由来は、英語の『興味』から。

性格は楽観的で、快楽を感じることを何よりも優先させており、デ

ザイアの中で唯一自分の欲望に忠実。だが、その結果として過去にいくつもの国を滅ぼしている。皇魔をエンズにしたのも、自分が楽しむための一環である。狡猾だが、可愛いもの（主にかなでやゆり）が好きという女性らしい一面もある。

念動力やテレパシー、未来予知など様々な超能力が使える、中でも念動力は小惑星すら押し潰せるほど強力。

現在はデザイアとの戦いに備えてという名目でロストグラウンド学園に転校し、皇魔の家に住居している。

コレク イメージC V 柴田秀勝

武装系デザイア。コアメダルの色は濃い鉄色。全身に武器を装備した西洋騎士のような外見をしている。名前の由来は、英語の『集める』から。

世界の滅亡を崇高な使命と認識しており、デザイアのリーダー的存在。

性格は古風で、強い者との戦いを好む。

全身に装備した武器だけでなく、様々な武器を生成する能力があり、戦闘力はデザイア中最も高い。人間形態は、杖をついた老人。杖は日本刀を仕込んだ仕込み刀になっている。

ウォント イメージC V 白石稔

炎熱系デザイア。コアメダルの色は紅。炎を模した姿をしている。

名前の由来は、英語の『求める』から。

熱血漢で暑苦しいが、仲間思い。アプリシィとは双子の兄弟のような関係にある。

炎や熱を自在に操れるという能力の持ち主で、彼に炎熱系の攻撃は一切通用しない。

人間形態は半袖を着た男性で、ロストグラウンド学園の体育教師である松岡修造とは、通じ合うところがあるらしい。

アプリシィ イメージC.V 櫻井孝宏

氷雪系デザイア。コアメダルの色はクリアブルー。氷を模した姿をしている。名前の由来は、英語の『鑑賞』から。

冷酷で容赦がなく、人間を格下の存在としか見ておらず、デザイア以外は誰も信じようとしない。

ウォントとは双子の兄弟のような関係にあり、ウォントが兄でアプリシィが弟である。

雪や氷、冷気を自在に操れ、またその類いの攻撃は全く効かない。

人間形態は長袖を着た冷たい瞳の男性で、常に他者を見下している。

メイカー イメージC.V 梅津秀行

銃火器系デザイア。コアメダルの色は灰色。全身に銃やミサイルを装備している。未完成なまま封印されたため復活当初はブランク体だったが、世界から情報を読み取り、銃火器系の属性を得た。名前の由来は、英語の『生産』から。

献身的で礼儀正しく、敵にすら敬語を使う。

ありとあらゆる兵器を自在に生み出す能力があり、まさしく爆発的な破壊力の持ち主。

人間形態はスーツを着込み、帽子をかぶって黒いサングラスをかけた、いわゆる殺し屋の風貌。サングラスをかけているため、どんな目をしているか知ることはできない。

シード

デザイアの眷族で、ヤミーと同じような姿をしているが、デザイアと同じように、額に赤いオーブが埋め込まれている。

眷族でありながらその力はグリードやオーズを遥かに上回り、まともに戦えるのはエンズのみ。

ヤミーと同じく欲望を喰って成長するが、人間から直接欲望という感情そのものを抜き取ることができる。吸い取られた欲望は再生するが、欲望を吸い取られた人間は、生きたいと思うことすらなくなる無気力人間になってしまうため、最悪の場合、欲望が再生するまでの間に死亡する。その分一度の戦いで手に入るセルメダルの量がヤミーより多く、少ない時で数百。普通は数千。多い時には万単位で手に入る。また、強すぎる欲望の持ち主に出会った場合は、その

相手に寄生してから欲望の吸収を続け、いずれはカザリのヤミーのように呑み込んでしまう。繭を作った中に籠り、大量増殖して羽化することもある。繭はメズールのヤミーと同様、特別な機械を使うかクレアボヤンスコアメダルを使わなければ視認できない。

エンメダル

デザイアのコアメダルとセルメダルの総称で、どちらもオーメダルの五十倍以上のパワーがある。

クレアボヤンスコアメダル

レスティーのコアメダルで、使用するとエンズの頭部がクレアボヤンスヘッドに変化する。能力を解放すると使用者に透視能力を与え、秒速500kmで動き回る相手も捉えられるほど視力が強化される。また、クロックアップのように別の世界から攻撃を仕掛けてくる相手も視認でき、幻術なども看破可能。

ヤリコアメダル

コレクのコアメダルで、使用者の腕部をヤリアームへと変化させる。能力を解放すると、槍を模した棘、ヤリニードルを生成して攻撃でき、また、メダジャベリンの破壊力を極限まで引き出せる。

ホノオコアメダル

ウォントのコアメダルで、使用者の脚部をホノオレッグに変化させる。能力を解放すると、足に二十万度に及ぶ炎を纏い、燃えるキックを叩き込める。

メダジャベリン

海馬コーポレーションが開発した三ツ又の槍。

思考投影極合金という金属で造られており、そのままでも6400tの衝撃に耐えられるほど頑丈だが、使用者の意思によって硬度をさらに高められ、逆に軟化させることも可能。またそれだけでなく、形状、重量、切れ味なども、自由に換えられる。伸縮も自在で、破壊されても使用者が念じれば、修復する。

使用者が望めばスキヤニングチャージのためのプレートとメダル投入口を生成することも可能で、刃にエネルギーを纏わせ、どんなもの（物質、エネルギー）はもちろんのこと。法則すら（でも破壊できる絶対破壊の槍撃、エンズアルカイドを必殺技としている。オーズバッシュと同じく連続使用が可能。

設定（後書き）

これくらい強くないと、おかしいですよね？

第三話 マラソンとバイクともう一人の転生者（前書き）

仮面ライダーエンズ！！

前回起きた三つの出来事！！

一つ！皇魔がレスティールから、デザイアについての説明を受けた！

二つ！エンズが海馬から受け取った新装備、メダジャベリンで、ハンマーシールドを倒した！

三つ！皇魔とレスティールは、海馬コーポレーションと協力関係を結んだ！！

第三話 マラソンとバイクともう一人の転生者

皇魔は河原に来ていた。

あのあと結局レスティーに自分のベッドを奪われてしまい、床で寝ることになったのだが、当然寝られるわけがなく、変な時間帯に起きてしまった。そのため、気分転換に来たのだ。

皇魔はリフレクターマントを出すと、中からメダジャベリンを取り出し、

「ぬん！」

素振りを始める。新しい武器の感覚を、一刻も早く掴んでおこうと思っただのだ。

「はっ！せい！」

素振りはいつしか華麗な棒術へと変わり、メダジャベリンは一振りごとに波動を生み出し、周囲を薙ぎ払っていく。

「はああっ！！！」

最後に一突き繰り出す皇魔。

ゴオツ！！

巨大な波動が生まれ、川の反対側まで届いた。

「やはりいい槍だ。」

メダジャベリンの出来の良さを確認した皇魔は、再び素振りを始めようとする。

その時、

「おい皇魔ー！」

皇魔は名前を呼ばれ、声がした方向を見る。声の主は瓜核で、イーリヤンと一緒にやって来た。二人とも、なぜかトレーニングウェアである。ちなみに、瓜核はスイカを二玉、網に入れて担いでいた。瓜核のアルター能力は攻撃や防御だけでなく様々な応用が利くが、スイカを媒体にしなければ使えないため、いつもスイカを携帯しているのだ。

「貴様らか。」

「何してんだ？」

瓜核は皇魔に訊き、皇魔は、

「鍛練だ。」

と、素っ気なく返す。

「貴様らこそ何をしている？」

「いや、もうすぐマラソン大会があるだろ？それに備えて二人で練習してんだよ。」

「僕は身体がそんなに頑丈じゃないけど、せめて完走ぐらいはしたいな、って。」

マラソン大会。その言葉を聞いて皇魔は考える。確か、ロストグラウンド学園における毎年の恒例行事だったはずだと。

瓜核は肥満体型にも関わらず非常に機敏で、体力もある。対するイーリヤンは、それほど体力があるわけではない。一応強力なアルター能力の持ち主ではあるが、このアルターも直接的な戦闘には向かない。あくまでも補助的な能力だ。

「そうか。」

「お前は練習しねえのか？」

「…必要がない。」

「お前は余裕だよな。」

「僕は君が羨ましいよ。」

「じゃあな！」

「また学園で！」

瓜核とイーリヤンは帰っていった。

「…時間だな。」

皇魔も帰っていく。

学園の昼休み。

皇魔とレスティイは屋上から、いつものように喧嘩をしているカズマと劉鳳を眺めていた。レスティイは訊く。

「あの二人っていつもあんななの？」

「…ああ、余の心労の一つだ。」

いつも通りため息をつく皇魔。と、

「今日はここにいたのか。ため息をつくとき幸せが逃げるぞ？」

女性の声がかかった。レスティイは自分達に声をかけた『女子生徒』を見て、そのまま見とれてしまう。

「わあ美人さん…こんな娘がいたなんて…」

「仮にも同じクラスなんだが…まあお前は転校生だし、こうして話をするのは初めてだな。」

苦笑した女子生徒は名乗った。

「私は月影^{つきかげ}しおん。先ほども言ったが、お前達と同じクラスだ。」

「私はレスティイ。って、もう知ってるかしら。」

レスティイも名乗る。と、

「…レスティイ。」

皇魔がレスティイに声をかけた。

「なに？」

「席を外せ。」

「な、何ですよ？」

「いいから外せ。お前にもそれくらいはできるだろう？」

「わ、わかつたわよ……」

皇魔に言われて、渋々席を外すレスティー。レスティーが屋上から去ったのを確認して、しおんと名乗った女子生徒は皇魔に尋ねる。

「皇魔。まだこの世界を支配しようと考えているのか？」

「当然だ。」

「なぜお前はそう支配にこだわる？」

「皇帝だからだ。皇帝とはすなわち支配者…支配なくして皇帝を名乗ることはありえん。お前こそなぜ余に干渉する？」

皇魔の質問に、しおんは答えた。

「前にも言っただろう？私にはお前の気持ちがよくわかると。」

「ふん…お前に何がわかるというのだ？」

「わかるさ。私もお前と同じ……」

しおんは少し間を開けてから言う。

「転生者だからな。」

月影しおん。彼女の正体は、ハートキャッチプリキュアの世界の戦いにおいて、キュアムーンライトに敗れた悪の戦士、ダークプリキュアだ。気付いた時には、この世界に転生していたのだという。彼女は敗北したにも関わらず、満ち足りた状態で死亡したため、もはや悪の心は残っていない。今では普通の女の子として、この世界で第二の人生を謳歌している。

皇魔が転生者であると知った時、彼女は真っ先に自分の過去を皇魔

に打ち明け、また、彼女も皇魔の過去を聞いた。しおんとしては、元悪の戦士として、それから転生者として、通じ合うものを感じたのだ。

「だからどうしたというのだ？それだけで余に支配をやめるかどうかと言う理由になるのか？」

「そういう問題ではない。大体、お前は力を取り戻す目処が立っていないのだろうか？何をしても……」

「力を取り戻す目処なら立っている。」

「…何？」

しおんは皇魔の発言を聞いていぶかしむ。そんな彼女の目の前で、皇魔は七枚ほどのセルメダルを取り出し、それをエネルギーに還元して吸収した。

「これは一体!？」

「貴様になら話しても構わんだろう。」

皇魔は自分が戦っている相手、デザイアについての情報と、力を取り戻す方法を語る。

「そんなことが……」

「…余は必ずこの世界を手に入れてみせる。」

皇魔は歩き出し、

「必ずな。」

一度振り返ってそう言ったあと、屋上をあとにした。

「皇魔…お前は……」

取り残されたしおんは、静かに呟いた。

その日の夜。

とある男子生徒が、必死にジョギングをしていた。
彼の名は網走颯太。あはしりそつたなぜ彼がジョギングをしているかというところ、瓜核やイーリヤンと同じく、マラソン大会に備えて練習しているからだ。

ロストグラウンド学園には、アルター使いを始めとする特殊能力者が何人もいる。しかし、網走は能力者ではない。そのため、彼は自分が何の能力もないことにコンプレックスを感じている。だからこそ、少しでも多くの努力を重ね、何かに秀でようと躍起になっていた。

どれくらい走っただろうか。網走は自販機を見つけ、スポーツドリンクを買って飲んでいた。一気に飲み干して、

「もつと…もつと速く…!!」

そう呟く。焦燥感に駆られる網走。

その時、

「燻ってる。燻ってるねえ」

ウォント人間態が現れた。

「お前の欲望。」

「な、何ですかあなたは？」

しかし、ウォントは網走の質問に答えず、

「だけどき。燻ってるくらいなら燃やした方がお前のためになるし、俺のためにもなる。ま、そういうわけだから…」

怪人態になって網走の額にメダルの投入口を出現させ、

「燃やせよ。その欲望」

セルメダルを投入した。間もなくして網走の腹からシードが生まれ、
「う、うわ…うわあああああああ!!!」

再び網走の体内に潜り込み、網走の手足に包帯のようなものが巻かれ、額に赤いオーブが現れる。網走はシードに寄生されたのだ。

「ん？シードが寄生した？そんなに強い欲望だったか。まあいいや」疑問に思うウォントの目の前で、シードに寄生された網走は唸り声を上げながら走り出す。ウォントはそれを見て、

「もつとー！熱くなれよおおーっ！ー！」
と叫んだ。

人通りの少ない夜道を、なんとも形容しがたい車が走っていた。乗っているのは、ストレイト・クーガーという男性。ロストグラウンド学園の国語教師を務めており、カズマから兄貴と慕われている。

「やれやれ俺としたことが、新しい本を買い忘れるとは…店がまだ開いていてよかった。」

助手席にはビニール袋入りの本が数冊ばかり、積んであった。

実は彼が乗っているこの車、ただの車ではない。クーガーのアルター能力、ラディカル・グッドスピードによってアルター化した車なのだ。クーガー号というこの車は、時速200kmのスピードから猛烈に加速し続けていく。本来は緊急用なのだが、時間帯が時間帯なので、急がなければならない。そういう理由で使用した。ちなみに、車に相当な負担をかけているため、普通の車に使った場合、アルター化を解くと同時に廃車になってしまうのだが、今のクーガーの車は海馬コーポレーション製のオーダーメイド。簡単には壊れない。

アルター能力にも種類があり、カズマが使うシエルブリットは融合装着型。劉鳳の絶影は自立稼働型（最終形態は融合装着型）。クーガーのアルター能力は具現型である。もっともクーガーの場合、それだけではないのだが。

「ん？」

走り続けること数分。クーガーは何かを発見し、クーガー号を止めて、降りる。そこにいたのは、うつむいてこちらに顔を見せない網走だった。

「なんだ、網走か。こんな時間にどうした？」

尋ねるクーガー。網走は顔を上げてクーガーを睨み付ける。

「っ！？」

クーガーは反射的に身構え、網走は唸りながら襲いかかってきた。

「うおっ！！」

かわすクーガー。かわしながら、クーガーは網走の手足に巻かれていた包帯のようなものに気付いた。

「なるほど、お前、ヤミーってのに取り憑かれちゃったのか！！」

正確にはシードだが。再び襲いかかってくる網走の攻撃をかわしながら、クーガーは言う。

「お前は努力家だからなあ、そこをつけこまれちゃったってわけだ。だが！」

クーガーは距離を取り、携帯質量を投げ上げて分解し、自身も跳躍。

「ラディカル・グッドスピード脚部限定！！」

そして着地した時、クーガーの両足にはアルターの装甲が融合装着されていた。これがラディカル・グッドスピードのもう一つの姿である。ラディカル・グッドスピードは具現型だけでなく、融合装着型としての一面もあるのだ。クーガーは蹴りをよく使うため、よく脚部だけ限定して融合装着を行う。その気になれば全身に装甲を融合装着する最終形態も使用可能だが、今回はそこまでする必要はない。

「速さが足りない！」

高速で動き、網走を蹴り飛ばす。

「う…ウウ…」

網走は逃げ出した。

「逃げる気かい？そうは…」

追いかけてよととするクーガー。しかし、その前に怪人態のウォントが立ち塞がった。

「へえ、お前がグリードか！」

「残念ながら、俺はグリードじゃなくてデザイアだ。」

「デザイア？」

「知る必要はねえよ。ついでに言うと、あいつに寄生してんのはヤミーじゃなくてシードで、倒させるわけにもいかねえ。」

ウォントは腕を交差させると、全身から超高温のスチームを噴き出す。

「おわっ!?!」

下がるクーガー。

「じゃあな！」

ウォントはスチームに紛れて撤退し、網走も逃げてしまった。

「逃げられたか…しかしまずいな…」

網走はシードに寄生されている。このままでは非常にまずい。

「読書はあとだ！今はとにかくあいつを捜す！」

クーガーは両足のアルター化を解くと、クーガー号に乗り込んで網走の捜索に向かった。

翌日。

その日はマラソン大会の前日であり、学園が準備をしなければなら

ないので、休日だ。

シードがいなかったかと散策に出る皇魔とレスティー。と、

「皇魔！シードよ！」

早速レスティーがシードを感知。二人は現場へ急行する。

現場にいたのは網走。前回と同じく、二人はまず事態の把握から始める。レスティーは網走の今の状態を皇魔に教えた。

「彼、シードに寄生されてるわ。」

「ヤミーと同じか……」

シードに寄生された場合、シードの方から宿主を解放することはない。こちらがシードを宿主から引きずり出すしかないのだ。

「あれはまだ育ちそうか？」

「ええ。」

「ならば待とう。」

皇魔は網走をシードから解放することも、戦うことすらせず、シードの成長を待つことにした。つまり、網走を見殺しにしたのだ。

「いいの？あの子、仮にもあなたの同級生でしょ？」

「知らない。ゴミクズの顔など、いちいち覚えてる暇はない。」

やはりゴミクス扱いの皇魔。そんな彼は、苦しむ網走を見ながら嘲笑う。

「所詮ゴミクスはゴミクス。どうせ死ぬのなら、せめて余の役に立つてから死ね。」

どこまでも冷酷だった。

そこへ、

「あいつは……シードか！まさかシードも人間に寄生するなんて……」
映司とアंकが来た。

「またか！雑魚の分際でうるちよろしおって……！」

怒る皇魔。

「レスティイー、ベルトをよこせ。まずあの肩から先に叩き潰してやる！二度と邪魔ができませんようにな！！」

「はいはい…あら？」

ベルトを出すレスティイー。しかし、レスティイーはベルトを渡すのをやめた。

「どうした？まさか奴の味方になるというわけではないだろうな？」

「違う違う。よく見て」

レスティイーに言われ、皇魔は網走を見た。

「うう…おアアアアアア！！！」

網走の全身から大量のメダルが噴き出し、網走を覆い尽くす。網走はそのまま、バイクを模した怪人、バイクシードになってしまった。

「あらあら、呑み込まれちゃった。」

「ちょうど狩り時だったというわけか。」

あんまり驚いていないレスティイーと、喜ぶ皇魔。一方映司は、

「そんな…呑み込まれた！」

慌てている。慌てたまま、映司はアंकクに頼んだ。

「アंकク！頼む！」

「ああ。」

了承したアंकクはオーズドライバーとメダルを渡し、映司は変身する。

「変身！」

タカ！トラ！チーター！

映司はオーズ タカトラーターコンボに変身した。

「うおおおおおおおお！！！」

超高速でバイクシードに接近したオーズは、バイクシードの両肩を掴んで自分の身体を持ち上げ、超高速両足蹴りでセルメダルを剥がしにかかると。こうすれば、ヤミーやシードに呑み込まれた人間を助

け出せるのだ。

しかし、オーズはいつもそれを『ヤミーに』やっていた。シード相手に使うのは初めてである。

「ウオツ！」

バイクシードは自分の両腕に装備されている車輪を手甲まで移動させ、チェーンソーの要領で高速回転させながら腕を降り下ろし、オーズを斬った。

「うわっ！！」

引き離される。バイクシードはそのまま超高速移動を開始し、全方向からオーズをいたぶる。オーズもチャーターレッグのスピードで對抗しようとするが、バイクシードのスピードはそれ以上。全く追いつけない。

「雑魚が…でしゃばるからだ。レスティー！」

「はい」

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・

皇魔はエンズに変身し、メダジャベリンを抜いてバイクシードに斬りかかる。

「グツ！」

下がるバイクシード。

「君は！」

突然の加勢に驚くオーズ。エンズはレスティーに命じる。

「レスティー。その二人に、シードとデザイアについて教えてやれ。そうすれば力量の差を思い知り、邪魔をすることもなくなるだろう。」

「

「はい」

レスティーはオーズとアंकの頭に触れ、超能力を使ってデザイア

とシードの情報を流し込んだ。

「これが…デザイア…」

「俺達を解析して生み出された存在だと!？」

「そう。だから私達は、あなた達のことをよく知ってる。」

それらが起こっている間に戦い始めるエンズ。バイクシードは再び超高速移動をするが、エンズはクリアボヤンスコアメダルの力を解放。

「見えてさえいれば…」

車輪攻撃を回避し、

「かわすことなど造作もない!!」

メダジャベリンで反撃する。

この激闘を、ある存在が見ていた。

「…あれが…エンズ…」

彼の名は後藤慎太郎。彼は映司からデザイアの話聞き、それに対抗できる力の持ち主であるエンズを監視しているのだ。

「強い…まさかこれほどとは…」

「う…うおおっ!!」

敵わないと見たバイクシードは、バイク形態に変形して逃走した。

「おのれ…!!」

悔しがるエンズ。彼は戦闘にこそバイクシードに対応できるが、移動手段ではバイクシードの方が勝っていたのだ。

「それなら大丈夫!」

言ったのはオーズ。エンズの手を引き、近くに自販機形態のマシンベンダーモードで配置されていたライドベンダー二台の前まで連れ

ていく。

「セルメダルを入れて、ここを押すんだ。」

オーズはライドベンダーをマシンバイクモードに変形させる。

「ふむ……」

エンズもそれに習ってライドベンダーをマシンバイクモードに変形させようとするが、

チユドーン！！！！

セルメダルを投入した瞬間にライドベンダーが爆発した。

「……………おい。」

「あ、あれえ！？こ、こんなはずないんだけど…もしかして壊れた！？」

うるたえるオーズ。一方それを見ていた後藤は、

「馬鹿な…ライドベンダーの状態はいつも完璧なはず…」

と、やはり驚く。レスティーは冷静に言った。

「前にも言ったでしょ？グリードのセルメダルとデザイアのセルメダルではパワーが違いすぎる。きつと機械の方が耐えきれなかったのね……」

どうやら、そういうことらしい。

その時、

「皇魔！！！」

真上から声がした。見ると、そこにはへりから身を乗り出した海馬がいる。

「新装備だ！受け取れ！」

部下に命じて何かをへりから投下する海馬。エンズの目の前に落ちてきたそれは、スロットだった。海馬が説明する。

「それは『ライドスロットター』！詳しい説明についてはあとでマニュアルを送っておく！今はセルメダルを入れて中央のボタンを押せ

！」
エンズは言われる通りにセルメダルを投入し、中央のボタンを押す。すると、ライドスロッターというらしいスロットが、マシンスロットモードから、マシンバイクモードに変形した。

「よし、追っぞー！」

エンズはライドスロッターにまたがり、バイクシードを追う。レスティーもすぐあとから投下されてきたライドスロッターを変形させて、アंकも近くのライドベンダーに乗って、オーズとともにエンズを追った。後藤もこっそりついていく。

時速1200kmもの超高速で逃げ回るバイクシード。しかし、ライドスロッターの最高速度は1700km。エンズはすぐに追いつき、背後からレゾリウム光線で狙い撃つ。

「グアアアア！！！！」

吹き飛ばされたバイクシードはバイク形態が解除され、気付くと戦いの場は河原。全く容赦のない攻撃でバイクシードを追い詰めるエンズ。

「やめる！」

ようやく追いついたオーズ、アंक、レスティー。オーズはエンズのあまりにも容赦のない攻撃に危機感を抱き、エンズを羽交い締めにする。

「あの中には人間が呑み込まれてる！そんな攻撃をして、中の人が見たらどうするつもりだ！！」

「ええい鬱陶しい！邪魔をするな！！」

「うわああっ！！！！」

エンズはオーズを振りほどき、そのままメダジャベリンの刺突を繰り出す。凄まじい威力に、オーズの変身は解除された。

「余はセルメダルの力を吸収することで、本来の力を取り戻せる。より多くのセルメダルが必要なのだ！そのためなら余は、手段を選ばん！！」

再びバイクシードを攻撃するエンズ。アंकはレスティイーに言った。「映司もあんなやつだったらな…お前が羨ましいぜ。デザイアのレスティイー」

「…私も500年前一緒に戦ったエンズがあれくらい冷酷だったら、あんなつらい想いをしなくて済んだんだけど…」

「…？何か言ったか？」

「何も。」

レスティイーの言葉を聞き逃したアंक。そうこうしている間も、映司は生身でエンズに挑み、その度にエンズに蹴り飛ばされている。密かに追いついていた後藤は、ある人物の言葉を思い出す。

『後藤君。欲望を止めてはならない』

(…俺は…)

後藤はエンズの姿を見て、言い知れない何かを胸の内に抱いていた。

月影しおんは偶然通りがかったため、その戦いを目にし、全てを聞くことができた。

「あれがシード…中には人間が呑み込まれているのか…!!」
事態を重く見たしおんは、あるアイテムを出す。それは、香水瓶に似た道具、ココロパフューム。次の瞬間、しおんはノースリーブのワンピースのような黒い光の衣に包まれ、ココロパフュームに黒いこころの種を装填し、

「プリキュア！オープン・マイ・ハート!!」

と掛け声をかける。しおんはココロパフュームを全身に吹き掛け、コスチュームを纏い、告げた。

「生まれ変わりし一輪の花！ダークプリキュア!!」

彼女は転生者。しかし、皇魔と違ってプリキュアの力を失ったわけではなく、転生前との違いこそあれど、ダークプリキュアに変身できるのだ。

「はあああつ!!!!」

ダークプリキュアは飛翔し、バイクシードを蹴り飛ばす。レスティとエンズは驚いた。

「えっ!? 誰あの娘!?」

「ダークプリキュア…月影か!」

「ええっ!? しおんちゃんなの!?!」

ダークプリキュアはエンズに言う。

「呑み込まれた人間は私が救う。お前はそこを叩け!」
言うてから、

「闇の力よ集え!」

彼女の武器、ダークタクトを召喚。

「プリキュア！ダークパワー・フォルティシモ!!」

ダークタクトでフォルティシモ記号を描き、赤いエネルギーを纏って突撃。バイクシードを貫き、網走を救出する。

「今だ！」

合図するダークプリキュア。エンズはエンスキャナーで、エンズドライバーをスキャン。

スキャニングチャージ！！

するとエンズの両足が炎に包まれ、エンズは跳躍する。同時に三つのリングが、バイクシードに向けて並ぶように出現。

「つああああああああーっ！！！！！」

エンズはリングを突き抜けて相手に飛び蹴りを喰らわせる技、クヤホキツクを放つ。

「ガアアアアアアアアアアア！！！！！」

バイクシードは爆発し、セルメダルを散らした。

「あーあ、やられちまったか。」

しかし、勝利の余韻に浸る暇もなく、新たな相手が現れる。レステイーはその相手の名を口にしました。

「ウォント！」

「久しぶりだなあレステイー。だが、再会の挨拶は抜きだ。まずエンズを倒して、俺達デザイアの脅威を消したうえで、コアを取り戻させてもらっぜ！」

その言葉を聞いて、ダークプリキュアはエンズに訊いた。

「加勢は？」

「必要ない。」

即答である。

「行くぜ！」

ウォントは手から火球を連射してきた。エンズはそれをメダジャベリンで斬り払っていく。

「熱くなれよおおおお！！！！！」

今度は炎を灯した拳で殴りかかるウォント。エンズも拳を繰り出し、互いの力は拮抗する。

「コレクの言つてた通りだな！今代のエンズはやりやがる！500年前と同じだ！」

「言つておくが、余の力は貴様らの知るエンズよりも遙かに上だぞ！」

ウオントは拳と炎で、エンズはメダジャベリンで、それぞれ互角の戦いを展開する。その最中、ウオントはまたコレクが言つていたことを思い出す。

『収穫があつたつて、何のだよ？』

『…今代のエンズは、我々の側に引き込めるかもしれん。』

（エンズが引き込めるかもだと？冗談じゃねえ！俺はエンズなんか…）

「お断りだね！！」

「ぐうっ！！」

ウオントはエンズを殴り飛ばした。

「もっと！！熱くなれよおおおお！！」

今度は巨大な火球を生み出し、それを投げつけるウオント。エンズはそれをメダジャベリンで斬り裂くが…。

「む…」

メダジャベリンの刃が、熱で溶解していた。

「これでもうその槍は使えねえな！」

「…そう決めつけるのは、まだ早いぞ！」

エンズはメダジャベリンに使われている金属、思考投影極合金の特

性を使い、メダジャベリンの刃を修復。

「なっ!?!」

「おおおっ!?!」

再び斬り込む。すると、

「皇魔! コンボチエンジをやってみて!」

レスティーが二枚のメダル、フブキコアメダルとヒヨウケツコアメダルをエンズに投げつけ、エンズはそれを受け取ってエンズドライブに装填。エンズキャナーでスキャン。

クレアボヤンス! フブキ! ヒヨウケツ!

エンズはクレフブヒコンボにコンボチエンジした。そのままメダルのパワーを解放し、冷気を纏った拳と蹴りをウォントに当てる。

「おおあああああああ!?!」

氷雪系の攻撃はウォントにとって弱点であるため、ウォントは大ダメージを受けた。

「くっそ…油断した!?!」

「もらっぞ! 貴様のメダルを!?!はっ!?!」

メダジャベリンで全力の刺突を繰り返すエンズ。

しかし、その攻撃がウォントに直撃することはなかった。横から飛び出してきた者が、ウォントの盾になったからだ。

「ぐほっ!?!」

ウォントはその者の名を呼ぶ。

「アプリシイ!?!」

そう、怪人形態のアプリシイだ。

「何!?!」

乱入者に驚くエンズ。だが、彼は見逃さなかった。攻撃が当たったと同時に飛び散ったアプリシイのセルメダル。その中に一枚、クリアブルーのメダルがあったのを。エンズはそれを掴み取った。同時

に距離を取る。アプリシイはウオントの身を安じた。

「ウオント…大丈夫か…？」

「俺のこと心配してる場合かよ！？今のでお前のコアが…」
しかし、二人に互いを気遣う余裕はない。

「衝撃のおおおおおおおお！！！！！」

「！！！！！」

「フアアアアストブリットオオオオオ！！！！！！！」

「ぐああああああああ！！！！！！！」

クーガーが飛び込んできて、二人に飛び蹴りを喰らわせたからだ。
無論、両足は既にラディカル・グッドスピードが融合装着されている。

「ぐっ…てめえ…まだ嗅ぎ回ってやがったのか！！！」

「あいつは仮にも俺の大事な生徒なんでね。デザイアだかなんだか知らねえが、そんな連中の食い物にさせるわけにはいかねえんだよ。」

「くっ…仕方ねえ。引き上げるぞアプリシイ！」

「ああ…」

二人は逃げた。

その後、皇魔、レスティー、しおんの三人はクーガーに事情を説明した。しかしこんな世界なので、クーガーはあまり驚いていない。
それよりも網走のことが心配ということで、クーガーは網走を病院まで搬送していった。

「行くぞ、レスティー。」

皇魔はセルメダルを回収したレスティーとともに帰っていく。それ

を、

「待て！」

ボロボロの映司が呼び止めた。

「もしあの子を助けられなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「知らんな。ゴミクスがどうなるうと関係ない。むしろ、目障りな

ゴミが減ってくれて喜ぶべきだ。」

「ふざけるな！！」

「余はふざけてなどおらん。ふざけているのだとしたら、それは貴様だ。」

「何だと！？」

皇魔は映司の胸ぐらを掴み、尋ねる。

「貴様はいかなる手段を講じてでも何かを成し遂げねばならんと思つたことがあるのか！？その場その場で乗り切れれば、それでいいと思つていのではないか！？身を焦がすほどの欲望に駆られたことではないのか！？」

あまりの気迫に、映司は言い返せない。言いたいことはあつた。だが、言い返せなかつたのだ。皇魔は映司を離し、それから言う。

「貴様のような目先のことしか考えて生きられんやつに、余を理解することなどできん。理解してもらおうとも思つてはおらん。愚か者に認められたところで、不愉快でしかないからな。」

皇魔は再び歩いていく。それからライドスロッターにまたがり、走つていった。

「また会いましょう。グリードのアンク」

レスティーも自分のライドスロッターに乗って皇魔についていくが、すぐにライドスロッターを止めて振り返り、アンクに言った。

「言い忘れてたけど、デザイアのセルメダルを取り込むのはやめておいた方がいいわよ？きつとあなたの身体が耐えられないから。」それはそうだろう。一枚でもライドベンダー五十台以上の燃料をまかなえるのだ。まだ腕しか復活できていないアンクが取り込めば、肉体が耐えられずに碎け散ってしまう。レスティーは今度こそ去つ

た。アंकは映司に言う。

「早い話が、あいつらにはあいつらのやり方があるってことだ。大体、俺達にはあいつらに構ってる暇なんてない。お前には一刻も早く俺のメダルを取り戻してもらわなくちゃいけないんだからな」

「…わかってるよ…わかってるけど…こんなの…」

映司は言葉では現せないものを感じていた。

「皇魔…駄目だ…そんな生き方をしては…」

皇魔とレスティーの後ろ姿を見送りながら、しおんは呟くことしかできない。後藤は、

「…こついう…ことなのか…」

やはり不快感を抱いていた。

皇魔の家。

レスティーは皇魔が回収したアプリシイのコアメダルを見ている。

「ついに三枚…これで皇魔はコンボが使えるようになったわけだけど…」

エンズはオーズを解析して生み出された存在。オーズと同じく、コンボが存在する。レスティーはライドスロッターのマニユアルを読んでいる皇魔を見た。

「…問題は今の皇魔に耐えきれるか、よね…」

と、電話がかかってきて、皇魔が出る。相手は海馬だ。

「マニユアルは届いたか？」

「今読んでいるところだ。そういえば、貴様は余の援助をすと言っていたな？」

「そつだ。不足しているものがあれば、すぐにでも言ってくれて構

わない。」

「ならばちよつど頼みたいことがある。」

「何だ。」

皇魔は頼みを言った。

「ベッドを一台頼む。大至急でな」

第三話 マラソンとバイクともう一人の転生者（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

？「僕にも…友達がいたら…」

メイカー「その欲望、私が叶えましょう。」

皇魔「面白い。使つてやる！！」

第四話

友達と増殖と初コンボ

ライドスロットー

海馬コーポレーションが開発したバイク。スロット形態のマシンスロットモードと、バイク形態のマシンバイクモード、飛行形態のマシンフライトモードを備えている。

セルメダルを投入してスロットのレバーを引くと、止まった目に応じてスロットにおけるメダルの出口から攻撃を仕掛ける。炎の目なら火炎放射。氷の目なら吹雪。剣の目ならナイフ、クナイ、手裏剣などの攻撃。銃の目ならノズル付きマシンガンが出てきて銃撃、といった具合だ。また、レバーにはマインドスキャンシステムが搭載されており、あらかじめどの目を止めたいか決めてからレバーを引けば、必ず任意の目が止まる。

最高速度 時速1700km

最高飛行速度 時速2200km

フブキコアメダル

アプリシイのコアメダルで、エンズの腕部をフブキアームに変化させる。冷気を纏った拳を放ったり、レゾリウム光線が冷凍光線になったりする。

ヒョウケツコアメダル

アプリシイのコアメダルで、エンズの脚部をヒョウケツレッグに変化させる。冷気を纏ったキックを放つ。

月影しおん イメージCV高山みなみ

ロストグラウンド学園に通う高等部二年生の女子生徒。正体は皇魔と同じく転生者で、ハートキャッチプリキュアの世界のダークプリキュア。

満ち足りた状態で死亡したため悪の心は消えており、今では普通の女の子として、第二の人生を謳歌している。自分と同じ元悪の戦士であり、転生者でもある皇魔に対しては通じ合えるものを感じており、何とか皇魔の中から悪の心を消そうと思っているが、うまくいっていない。

転生はしたものの、プリキュアの力まで失ったわけではなく、有事の際はダークプリキュアに変身する。変身時の名乗りは『生まれ変

わりし一輪の花！ダークプリキュア！』。決め台詞は『その野望は砕かせてもらう。私の心で！』。プリキュアとしての使命を完全に自覚しているという精神的な変化があるためか、実力はキュアムーンライトとの最終決戦時を上回る。

第四話 友達と増殖と初コンボ（前書き）

仮面ライダーエンズ！！前回起きた三つの出来事！！

一つ目！網走颯太が、バイクシードに寄生された！

二つ目！皇魔が、バイクを得た！

三つ目！エンズは、ダークプリキュアとの連携攻撃で、バイクシードを倒した！！

第四話 友達と増殖と初コンボ

「どういうことだ!!」

ロストグラウンド学園。

皇魔は先日海馬から届いたライドスロッターのマニュアル。そのあるページを海馬に見せていた。

そのページには、ライドスロッターの飛行形態、マシンフライトモードの絵が載せられていたのだが、形態の図が、どう見ても海馬の愛するモンスター、『青眼の白龍』フルトアイヌホワイトドラゴンだったのだ。

「問題はないだろう?この雄々しくも美しいフォルム…化け物どもと戦う貴様にはうってつけ」

「そのようなわけがあるかッ!!完全に貴様の趣味だろう!!」

「…そんなことはない。」

「目をそらすな!!」

怒りの皇魔。その時、

「待て!!」

全身に蜘蛛の巣を模したスーツを着込んでいる男子が割り込んできた。

「親友の喧嘩を仲裁する男!!スパイダーマン!!!!」

テンテテンテテレット テレットレーン

「誰が親友だ!!余は貴様のような友人など持った覚えはない!!」
男子、スパイダーマンの発言に、皇魔はさらに怒る。

「いいじゃない。私と皇魔だって、もう友達みたいなものだし。もっと仲良くしましょう?」

「貴様は馴れ馴れしすぎるのだあああああ!!!!!!」

レスティーの言葉に完全にキレた皇魔。彼は誓った。一刻も早く力

を取り戻すと。

この学園は、朝からカオスだ。

「結弦」

「音無くん」

左右から音無の両腕に抱きつくかなでとゆり。

「ちよつ、お前らやめろつて……／＼／＼／＼」

二人の美少女に抱きつかれ、顔を赤くしている音無。しかも柔らかいものが当たっているため、思考回路はショート寸前だ。いつものことだが。

「だから何でお前はいつも来るんだよ!？」

「音無さんを慕う者としては当然だろう?」

睨みつける日向とあしらう直井。これもいつものことだ。

「劉鳳!ケンカしようぜ!」

「だから、いつも言っているだろう?朝の読書の時間くらい、喧嘩の話はするなど。」

「んなこと言ったって退屈なんだよ〜つまんねえんだよ〜ケンカしてくれよ〜」

「昼休みだ。それまで待て」

ケンカの話をするカズマと劉鳳。これもまた、いつものことだった。

「やはり、このクオリティーは神と言わざるを得ない。そう思わないかルルーシュ?」

「……ああそうだな。」

端末でアニメ動画を見るスザクと、新聞を読みながら生返事するルルーシュ。いつものことだ。

そんな光景を、一人の男子生徒が羨望の眼差しで見ている。彼の名は藍藤幸治。彼には、とあるコンプレックスがある。何の能力もない無能力者であることもそうだが、一番のコンプレックスは、友人が一人もないことだ。元々からこの学園の生徒であるわけではなく、去年からこの学園に来た転入生である。彼は中学生時代、前の学校でいじめを受け、友人が一人もできないまま、卒業式を迎えてしまったという、苦い人生経験があった。それ以来ロストグラウンド学園でなんとか友人をつくらうと奮闘しているが、うまくいかない。

(みんな、いいなあ…)

幸治は一刻も早く友人をたくさんつくり、自分をいじめた連中に報復してやるという夢があった。この学園の生徒は強い者が多いので、不可能ではない。だが、だからこそ、友人にするのが難しくもあった。

まず皇魔。彼には取りつく島もなく突っぱねられた。次に音無。しかし、ゆりとかなでにいつも邪魔され、友人関係を結べない。その次はアーカード、と思ったが、怖すぎて近寄れず断念。その次に近付いた相手は、ブラックウオーグレイモン。名前が長いため、周囲からはブラックと呼ばれている金髪的美青年だが、それは仮の姿。正体はデジタルモンスター、略してデジモンという生命体で、黒い竜人の姿だ。群れることを好まず、仲間をつくらうとしない一匹狼な性格のため、幸治は諦めていたのだが、それでもダメ元で、と声をかけたところ、こんな答えが返ってきた。

『お前の魂胆は読んでいる。俺はお前のような腐った性根の持ち主が大嫌いだ。失せろ』

「何が腐った性根の持ち主だ！」

下校後、幸治は路地裏にて壁を殴った。

「友達をつくるのがそんなに悪いか！友達と一緒にやり返すことがそんなに悪いことなのか！」

黒い内心を吐露する幸治。

(僕にも…友達がいれば…!!)

「友達がいれば…!!！」

思いを口に出した時、

「その欲望、私が叶えましょう。」

現れたのは怪人形態のメイカー。驚き振り返った幸治の顔面には、既にメダル投入口が出現しており、メイカーは幸治が振り返ったと同時にセルメダルを投入した。間もなく幸治の腹から現れたシードは幸治を襲い、欲望を喰らう。幸治から欲望を奪ったシードは、どこかへと去っていく。

「あなたの欲望は仲間、ですね？ならば、私が与えて差し上げましょう。最高の仲間を…」

メイカーは人間形態に戻ると、不敵に笑った。

「皇魔！シードの気配よ！」

「よし、行くぞ！」

シードの気配を感知したレスティー。皇魔はレスティーの先導に従って走る。やがて二人はシードを発見した。

「あれはまだブランク体ね…」

「ならば、もう少し待つとしよう。」

いつものことながらシードの成長を待つ二人。外道である。しばらく成長を待っていると、シードはマシンガンを装備した兵隊のような怪人、ヘイタイシードへ成長した。

「狩り時だな。レスティー！」

「はい」

レスティーは皇魔にエンズドライバーとメダルを渡し、

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

エンズに変身。

「さあ、貴様のメダルをよこせ！」

ヘイタイシードに挑む。

次の瞬間、エンズはロケットランチャーの一撃によって吹き飛ばされた。

「ぐおあっ！！」

転がるエンズ。

「不意打ち失礼。」

そこへ現れるメイカー。

「き、貴様は！？」

「お初にお目にかかります。私の名は、メイカー。聞き及んでいると思いますが、デザイアの一角です。」

「貴様がメイカーか！」

エンズは素早く起き上がってメダジャベリンを出す。対するメイカーは両手にマシンガンを生成し、射撃を行う。エンズはそれをかわす。「申し訳ありませんが、そのシードを狩るのは今しばらく待っていたいただきます。それまでは、私が相手を勤めましょう!」

言いながらマシンガンを破棄し、今度はガトリングガンとミサイルランチャーを生成して同時攻撃を行うメイカー。

「ぐあああああああああああ!」

あまりの火力に再び吹き飛ばすエンズ。

メイカーはレスティール以外のデザイアの中で、唯一完全復活を果たしているデザイア。当然、その力は凄まじい。レスティールは思った（今の皇魔に、完全復活したデザイアの相手は厳しい…か…）

エンズはメダジャベリンを杖代わりにして立ち上がる。

（これが、完全復活したデザイアの力か…認めたくはないが、今の余では勝てん…!!）

彼がそう思うほど、メイカーは強かった。近づくことさえ、できていない。

「…」

メイカーは以前コレクに言われたことを思い出していた。

『貴様の實力ならば、問題なくエンズを葬れるだろう。だが、今はまだ殺すな。対峙することがあっても、痛めつける程度に留めておけ。』

『確か、今代のエンズはこちらに引き込めるかもしれない、でしたか？私にはとてもそうとは…』

『…ともかく、最終的な判断はわしが下す。今はエンズを討つな』

『…了解しました。』

「…今回はこれくらいにしておきましょう。」

「何!?!」

「では。」

「ぐあああああああああああああ!!!」

メイカーはミサイルランチャーの残弾を全て撃つてから、姿を消した。ダメージによつて変身を解除されながら、メイカーとヘイタイシードの動向を確認する皇魔。どうやら、ヘイタイシードは今の戦いの間に逃げてしまったようだ。どのみち、今の皇魔に追撃は不可能。それほどダメージを受けている。

「おのれ!!!」

「皇魔!大丈夫!?今治してあげるから!」

レスティーは超能力を使い、皇魔を治療した。

その時、

「おい!おい!すっかりしろ!」

しおんの声が。すぐに駆けつける二人。そこには、虚ろな目で横たわる幸治を介抱するしおんがいた。

「これは…シードに欲望を抜き取られたのね…」

レスティーはセルメダルを一枚出し、幸治の頭に置いて念じる。すると、セルメダルがエネルギーに還元され、幸治の身体に宿った。こうすることで、欲望を抜き取られた人間の回復を早めることができるのだ。

「つつ…」

無気力状態から昏睡状態になった幸治。

「これで大丈夫。あとは、病院に連れていけば…」

「よし、なら私は救急車を呼ぶ！」
レスティーと皇魔に幸治を任せ、しおんは携帯で病院に連絡した。

間もなくして到着した救急車は、幸治を病院に搬送した。念のためということ、しおんも同行している。

「助かるといいけど…」

レスティーは心配して呟く。しかし、皇魔は不機嫌そう。負けたのだから、余計に気が立っている。

「ふん、余計なことを…これで貴重なセルメダルが無駄になった。」

「そう言わないであげて。さっき治療ついでにあの子の記憶を読み取ったんだけど、どうもあのシード、あの子から生まれたみたいなの。」

「ならば、己の欲望に敗れたということが。そのような者のためにセルメダルが…!!」

「無駄になったっていつても、一枚だけよ？そんなに気にする量じゃないわ。」

「黙れ！貴様も見ただろう？余が…この余が、近づくことさえできなかったのだ！一刻も早く力を取り戻さねば、余はいつまで経っても奴に勝てん!!」

「完全復活してるデザイアだもの。当然でしょ？」

「ますます不機嫌になる皇魔をなだめるレスティー。そこへ、

「詳しい話を聞かせてくれ。」

何と、ブラックが現れた。

「ブラックか…貴様には関係のない話だ！」

「いや、あのシードとかいうやつが幸治から生まれたのなら、原因

は俺にある。」

「貴様、なぜシードを知っている!？」

「ずっと見ていたからだ。それ以外のことは、アーカードから聞いている。」

「アーカードから?」

皇魔は考えた。このことは、アーカードも知らないはずなのだ。しかし、アーカードがなぜシードを知っているのか、その理由はすぐにわかった。アーカードは吸血鬼の真祖であり、他の吸血鬼にはない能力をいくつも所持している。そのうちのひとつとして、自身の肉体を自在に変化させる、というものがあるのだ。大方、コウモリにでも変身して、今までの戦いを見ていたのだろう。

「全く…レスティー。教えてやれ」

皇魔はレスティーに命じ、レスティーは超能力を使ってシードのこと、デザイアのことをブラックに教える。

「そうか…やはり、原因は俺にある。」

ブラックはそれだけ言ってから、病院へ向かう。

「今回は、私達も引き上げましょう。」

「…シードを見失った以上、それしかない、か…」
レスティーと皇魔も帰っていった。

戦いから逃げ延び、十分な欲望を溜め込んだヘイタイシードは、どこかの廃墟に入り込んでいた。すると、いきなり額のオーブが発光し、ヘイタイシードの身体が光に包まれる。光が収まった時、ヘイタイシードは巨大な繭となっていた。しかも、ただの繭ではない。

どんどん大きくなっている。人間形態のメイカーは、その繭を見ながら満足そうに頷いていた。そこへ、人間形態のコレクが来る。

「ほう…貴様のシードが繭になったか。」

「はい。二日も経てば、大量に増殖して羽化するでしょう。」

「それは楽しみだな。」

コレクは廃墟から去る。メイカーは繭を見ながら言った。

「もうすぐできますよ。最高の仲間が、ね…」

二日後。

「う…う…」

病院のベッドの上で、幸治は目を覚ました。

「起きたか。」

「ブラックさん!？」

すぐ側にいたブラックに驚く幸治。ブラックはこの二日間、毎日幸治のお見舞いに来ていたのだ。

「…今さら何の用ですか？」

しかし、幸治の態度は冷たい。ブラックからあんな風に言われたのだから、当然といえば当然だが。

しかし、ブラックからは予想外な答えが返ってきた。

「…俺は謝らなければならない。言い方が悪かった…」
「えっ…?」

繭は極限まで膨れあがり、内側から廃墟を突き破って、廃墟の何倍も巨大なものになっていた。そんな状況になっても、誰も繭には気付かない。廃墟のある場所が街から少し離れた所だということも理由だが、繭には迷彩効果があり、特別な機械を使うか、クレアボヤンスコアメダルを使うかしなければ、視認できないのだ。

やがて、繭を破ってヘイタイシードが現れたわけだが、一体だけではない。何体も、いや、何百体ものヘイタイシードが出てきたのだ。ヘイタイシードは街に向かって進撃していく。メイカーはそれを見て言った。

「仲間とともに報復を、でしたね。もうすぐ叶いますよ…フッフ…」

ライドスロッターに乗ってヘイタイシードを捜す皇魔とレスティー。

「どこへ行ったのだ!？」

「もしかしたら、街の外に行ったのかも…」

その時、悲鳴が聞こえた。見ると、何百体ものヘイタイシードがマシンガンを乱射しながら進撃してくるではないか。

「どういうことだ!？」

「増殖したのね…」

「何!？」

驚く皇魔に、レスティーは説明した。

「シードは極限まで欲望を食べると、繭を作って大量増殖するのよ。」

「その結果がこれか…!!」

皇魔は、人々から欲望を吸い取りながら進撃してくるヘイタイシード達を見た。

「言い方が…悪かった…?」

「そつだ。」

ブラックは、自分が本当に伝えたかったことを言う。

「お前は、自分がやりたいことをやるための手段として、仲間をつくるうとしていた。だが、そんなことのために仲間をつくるのは間違っている。」

幸治は自分が今までいじめられた報復をするために、仲間をつくるうとしていた。しかし、そんなことのために仲間をつくっても、意味がないのだ。仲間をつくることの真の意味には、ならないのである。仲間というものは、苦しみを分かち合い、協力し合い、何かを成し遂げるためにあるのだ。

「確かに仲間は、自分が動かなければつくれない。だが、だからと

「……って闇雲につくっていいものでもないんだ。」

「じゃあどうしろっていうんですか！僕は……どうすれば……」

幸治の弱音に、ブラックは打開策を告げた。

「……強くなれ。」

「えっ？」

「お前が強くなれば、仲間というものは自然とできてくる。お前を正しい方向に導いてくれる、本当の仲間がな。」

ブラックは言うべき言葉を全て言ったので、帰ろうとする。その間に、ブラックは言った。

「お前が望むなら、俺が協力してやる。」

ブラックは帰った。

「……」

幸治はブラックの言葉の意味を、しっかりと考えていた。

「皇魔、これを使つて。」

レスティーは皇魔にコアメダルを三枚渡した。しかし、メダルの種類は、この前手に入れたカンパコアメダルに加え、フブキ、ヒヨウケツ。三枚ともクリアブルー……アプリシイのメダルである。

「エンズもオーズと同じく、同じ色のメダルを三枚使うことでコンボを使えるの。ただ、オーズよりずっと強力だから、死ぬかもしれない……覚悟はある？」

「……」

皇魔は考えた。この戦いは、大量のセルメダルを手にできるまたとないチャンスだ。だが、それは倒せればの話。これほどの数で来られては、いくら彼でも勝ち目は薄い。

ならば、迷うことはなかった。

「面白い。使つてやる!!」

皇魔はエンズドライバーにメダルを装填し、スキャンする。

「変身！」

カンパ！フブキ！ヒョウケツ！カーンカンカンフブヒ　カンフ
ブヒ

皇魔は全身がクリアブルーのエンズ、エンズ　カンフブヒコンボに変身した。

「あれが…エンズのコンボ…!!」

監視に来ていた後藤は呟く。すると、周囲の気温が突然下がりはじめた。すぐに温度計を見る後藤だが、

「ま、マイナス30!? まだ下がる…まずい!!」

あまりにも急激な気温の変化に、すぐ離脱した。

エンズはヘイタイシード達を見据える。ヘイタイシード達はマシンガンを乱射しながら向かってきた。しかし、全く動じないエンズ。そのまま、メダルのパワーを足に込めて、一步を踏み出す。

その瞬間、ヘイタイシード達の足元から何本もの巨大な氷の棘が出現し、ヘイタイシードを数十体、貫いた。

さらに歩き続けるエンズ。一步踏み出す度に相手の足元から氷の棘が突き出し、貫いて倒れていく。それはもう戦いとも呼べない、一方的な殲滅。

レスティーは一人思った。

（エンズのコンボは強力無比。この私が恐怖を感じるほど、その力はあまりにも強い…）

一方、このままでは勝てないと見たヘイタイシード達は、一つに合体し、巨人となって巨大マシンガンを撃つ。

スキャニングチャージ！！

対するエンズは、エンスキャナーでエンズドライバーをスキャン。

自分の正面に氷でできた巨大な狼を造り出し、

「砕けて失せよ。」

突撃させる。氷の狼はヘイタイシードに飛びかかり、その巨体を噛み砕いたあと、咆哮をあげて消滅した。

技の名は、カンフブヒファンク。圧倒的な力によって、ヘイタイシード達は殲滅された。

変身を解除するエンズ。同時進行でセルメダルを回収するレスティ
！。

「お疲れ様。」

「当然だ。余の力をもってすれ…ば…？」
突然倒れる皇魔。

「皇魔！」

レスティは受け止めた。

「馬鹿、な…余が…これしきの…こと…で…」
眠りにつく皇魔。レスティは思う。

（やっぱりコンボはまだキツいか…仕方ないわ。常人が使えば、一瞬で死に至るレベルの副作用があるもの。まあ、力を取り戻したら副作用なしで使えるようになるんでしようけど）
レスティは皇魔を連れて瞬間移動で帰った。

「ふふふ…」

鴻上ファウンデーション社長の鴻上光生は、上機嫌でケーキを作っていた。目の前には、特別な温度計がある。その温度計が示している気温は、マイナス880度。彼は、密かにこの温度計で戦場の気温を計っていたのだ。光生の秘書を勤める女性、里中エリカは尋ねる。

「マイナス880度？絶対零度はマイナス273.15しかないは

ずでは？」

「よく見ておきたまえ里中君。欲望に、限界はない。欲望が絶対零度の、『絶対』という壁を突破したのだ。」

そして完成するケーキ。光生は、

「素晴らしいッ！」

と言った。

ロストグラウンド学園。

今回の戦いで手に入ったセルメダルは数十万枚。その半分をエネルギーに還元して吸収した皇魔は、上機嫌だった。

「これでまた余の復活は近付いた…フッフ…」

「…」

レスティーは一度皇魔を見てから、退院してきた幸治を見る。そこには、

「あの…もしよかったら、友達になってくれないかな…？」

「…うん、いいよ！」

「あ、ありがとう！」

勇気を出して他の生徒に話しかけ、見事友人関係を結んでいる彼がいた。

第四話 友達と増殖と初コンボ（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

皇魔「幽霊、だと？」

アプリシィ「俺が化け物なら、お前は狗だ。」

アーカード「化け物を殺すのは、いつだって人間だ。」

第五話

真祖と死の鎌と幽霊騒動

カンフブヒコンボ

エンズがカンパコアメダル、フブキコアメダル、ヒョウケツコアメダルを使って変身する、エンズのコンボ形態。エンズのコンボ形態は三枚のメダルのパワーが相乗効果によって何倍にも向上しているため、普段よりも強力な効果を出せる。しかし、その反面、常人が使用すれば一瞬で死に至るレベルの副作用がある。

氷や吹雪、マイナス880度にも及ぶ冷気を自在に操ることが可能で、広範囲の敵との戦いに長けている。水中戦も得意。

必殺技は氷でできた巨大な狼を生み出して相手にぶつける『カンフブヒフアング』。

パンチ力 240t

キック力 310t

ジャンプ力 ひと飛び350m
走力 100mを2秒

カンパコアメダル

アプリシィのコアメダルで、エンズの頭部をカンパヘッドに変化させる。

鎮静作用があり、思考が冷静になる。他にも、口から吹雪を吐いて攻撃できる。

第五話 真祖と死の鎌と幽霊騒動（前書き）

仮面ライダーエンズ！！前回起きた二つの出来事！！

一つ！ヘイタイシードが大増殖！

二つ！エンズはカンフブヒコンボを使った！

三つ！エンズはカンフブヒコンボの力で、ヘイタイシードを殲滅した！！

第五話 真祖と死の鎌と幽霊騒動

どこかの施設。

二人の警備員が、巡回を行っていた。

「今日はここで最後か……」

「早く済ませようぜ。」

言って、とある部屋に入っていく二人。二人は無事、巡回を終わらせた。

「ふう、終わった終わった。」

「じゃあ帰るか。」

その時、片方が異変に気付く。

「……なあ、なんか寒くないか？」

「はあ？今秋なんだから、寒いのは当たり前だろ？」

「そうじゃなくて、だんだん気温が下がってきてるよう……な……」
そこで、片方の警備員は見た。

もう片方の警備員の背後に存在する、長い髪の女性に。

「……何見てんだよ？」

もう片方の警備員も見てみる。見て、そしてその顔は青ざめた。ニヤリと笑う女性。

「……ぎゃああああああああああああ……！！！！！！」
施設中に、二人の絶叫が響いた。

「…幽霊、だと？」
皇魔は日向から話を聞いていた。

日向の話だと、近くにある工場に女性の幽霊が出たのだという。この話が広まり始めたのは数日前。そして今回、日向の耳に入った。皇魔は日向に訊く。

「それで、なぜ余にその件を伝える？」

「いや、お前この間言ってたろ？自分には闇の力への耐性があるって。」

皇魔は、闇の力への耐性がある。それは転生後も失われることなく、レゾリウム光線や衝撃波、リフレクターマントと同じく、残されていた数少ない能力の一つだ。

「そうだが、何の関係があるというのだ？」

「幽霊ついていやあ闇の存在じゃねえか。戦うなら、お前が一番うってつけだろ？」

さも当然とばかりに言う日向。しかし、皇魔は異議を申し立てた。

「待て。それは余に戦えと言っているのか？」

「他の意味に聞こえたのか？」

「なぜ余がそのようなことをせねばならんのだ！」

「しょうがねえだろ。今はまだ目撃証言がある程度だが、もしその幽霊が悪霊の類いで、悪さなんかしたらどうするよ？ここは人助けだと思っただな…」

「人助けだと？貴様は余を誰だと思っておる！」

「転生した皇帝閣下だろ？なら、下々の者共に力添えするのも、皇帝の仕事つてもんだ。」

「断る！なぜ余がゴミどものために」

「あら、面白そうね。」

そこへレスティーが割って入った。

「せっかくなんだから行つたら？私も行くし。」

しかし、皇魔は嫌がる。

「だからなぜそうなるのだ！その手の話は、セフィロスかアーカード辺りにでも」

「私が、どうかしたか？」

「今度はアーカードも来た。」

「ああ、実はな…」

事情を説明する日向。

「なるほどなるほど、興味深い話だ。なら、私も行こう。」

アーカードは同行を申し出た。レスティーは提案する。

「そういうことなら、しおんちゃんを誘ってもいいんじゃない？皇魔の話だと、あの子も闇の力に耐性があるみたいだし。」

「おっ、賛成！噂だと冷気を使うらしいから、須田も連れていこうぜ！」

誰を連れて行くかで盛り上がる日向とレスティー。

「…余は、行く方面で話が決まっているらしいな…」

皇魔は頭を抱え、

「ククク…」

アーカードは笑っていた。

「カズマアアアアアアアア！！！！」

「りゅつづつづつほおおおお！！！！」

いつも通り喧嘩をしているカズマと劉鳳。スザクはそれを見ながら、ルルーシュに尋ねる。

「ルルーシュ、そろそろ止めた方がよくないかな？」

「そうだな、そうするか。」

手榴弾を出すルルーシュ。しかし、それをブラックが制した。

「今回は俺が行く。」

言うが早いか窓から飛び出すブラック。ブラックは空中で光に包まれ、漆黒の竜人たる本来の姿を見せた。

「ウォーブラスター！！！」

まずブラックは、大量のエネルギー弾、ウォーブラスターを飛ばしてカズマと劉鳳を牽制する。

「うおっ！？」

「ぐわっ！！」

直撃を受ける二人。

「ドラモンキラー！！！」

その隙を突き、ブラックは両腕に装着されている爪のような武器、ドラモンキラーでカズマを叩き落とす。

「ぐわっ！！」

「カズマ！！！」

「ブラックトルネード！！！」

間髪入れず、ブラックは両腕を前に向けて旋回しながら突撃する技、ブラックトルネードを以て劉鳳を吹き飛ばす。

「ぐっ…ブラック！！！」

「面白え！！！」

復帰したカズマと、体勢を立て直した劉鳳はブラックに向けて突撃し、全力の拳を放つ。

「ガイアフォオオオオス！！！！」

ブラックは頭上で巨大なエネルギー弾、ガイアフォースを作って投げつけた。

ドガアアアアアン！！！！

巻き起こる大爆発。

「チツ…やっぱ強えな、ブラック…」

「さすがだ。」

「…ふっ…」

互いに無傷の三人。三人は臨戦態勢を解き、教室に戻っていった。スザクはルルーシュに訊く。

「…あそこまでやること、なかったんじゃないかな？」

「あいつも最近欲求不満だそうだ。暴れたい時くらい、あいつにもあるさ。」

夜。

皇魔、レスティ、日向は、数人の仲間を連れて工場に来た。いるのは、アーカード、しおん、それから、須田恭也という男子生徒。ちなみに、工場の関係者には『アーカードが』許可をとってあるらしい。アーカードは目で見た相手を操れる能力、魔眼が使えるので、それを使って説得したのだろうか。

日向の話だと、幽霊が現れる直前に、必ず周囲の気温が下がるらしい。このことから、幽霊には冷気を操る能力があると見るべきだ。だからこそ、須田を呼んだのである。彼はとある理由から不老不死となっており、あらゆるものを焼き払う炎を放つ武器、宇理炎と、不死の相手を殺すための炎を宿す刀、焔籬を所有している。日向は須田に言った。

「相手は冷気を使うから、お前の宇理炎と焰薙が切り札になる。頼んだぜ？」

「ああ。」

頷く須田。しおんは日向に訊いた。

「では、始めてもいいか？」

「ああ。須田、頼む。」

「よし。」

須田は不老不死の他に、視界ジャックという能力の持ち主でもある。視界ジャックとは、その名の通り相手の視界を一時的にジャックし、相手が見ている景色を自分も見ることができるといえる能力だ。

須田はまず、この能力を使って幽霊の視界をジャックし、そこから幽霊の居場所を割り出そうとしているのである。確かに、闇雲に捜し回るよりはこちらの方が遥かに早く見つけられる。

（幽霊相手に視界ジャックが通じるだろうか…）

疑問に思うしおん。しかし、答えは割合早く出た。

「視界ジャックができた。」

須田がそう言ったのである。

「でも…」

だが、すぐに言いよんどんでしまう。

「でも何だよ？」

尋ねる日向。須田は答える。

「俺、この工場の内部構造を知らないから、幽霊がどこにいるかまではわからない。」

「あらら…」

それを聞いて苦笑するレスティー。ため息をつく皇魔。アーカードは普通に、そして不気味に笑っていた。

結局闇雲に捜すことになった一同。皇魔とレスティイー、日向としおんは互いに組んで捜すことにしたのだが、須田とアーカードは単独行動である。もちろんそれぞれ理由はあった。

皇魔とレスティイーの場合は、エンズに変身するためである。ちなみに、皇魔とレスティイーはそのことを日向と須田には話さず、適当にはぐらかしておいた。

日向としおんの場合、日向には何の力もないため、護衛が必要とのこと。

須田の場合、彼が使う宇理炎は、不老不死でなければ使用者さえ死んでしまうほどの武器であり、巻き込みたくないから、というのが理由だった。

しかし、アーカードの場合は、ただ楽しみたいから、というのが理由である。

「レスティイー。シードの気配はするか？」

皇魔はレスティイーに訊いた。

「…うまく隠してるけど、間違いないわ。シードの気配がする」

「そうか。無駄足では、なかったというわけだな。」

「ええ。日向くんの話からすると、幽霊の正体は、恐らくアプリシイのシードよ。」

「アプリシイ…確か、冰雪系のデザインだったか…」

アプリシイは冰雪系デザインであり、生み出すシードも当然冰雪系。ありえる話ではある。

「急ぐぞ。」

「ええ。」

皇魔とレスティイーはシードを捜しに行った。

アーカードは愛用の拳銃、カスールとジャツカルを抜き、射撃を行っていた。相手は、幽霊騒動を起こしていた張本人、ユキオンナシードである。しかし、ユキオンナシードにはアーカードの攻撃が全く効いていない。

「ほう…ずいぶんと力のある化け物だな。」

だが、どこことなく余裕があるアーカード。

「これがシードか…」

少し前から皇魔の戦いを目撃し、さらに話の盗み聞きも行っているアーカードは、シードのことを知っている。カスールもジャツカルも、ヤミーが相手なら十分通用する武器だが、シードはヤミーの数倍近い耐久力の持ち主だ。しかも、シードはアーカードが得意とする相手、吸血鬼やグール、ゾンビのような存在ではないため、銃に装填している13m爆裂鉄鋼弾の原材料となっている十字架の祝福儀礼、つまり、対化け物用の術式が通用しないのである。

その時、

「そうということだ。」

人間形態のアプリシイが現れた。

「お前がデザイアか。」

「アプリシイだ。吸血鬼アーカード」

「私の名を知っている？」

「俺達デザイアには、世界から情報を読み取る力がある。それを使ってお前を調べたんだ」

不可能ではない。事実、アプリシイもそうやって冰雪系の属性を得たのだから。

「いろいろ調べさせてもらったが、驚いたぞ。まさかお前ほどの力

の持ち主が、人間に飼われているとはな。」

アーカードは、ある人物の従者をしている。

「所詮、格下は格下ということか。」

アプリシイにとって、デザイア以外の存在は全て格下だ。唯一同格と認めているのは、皇魔が変身するエンズぐらいのものである。

「自分と自分以外の種族は全て格下扱い…なるほど、化け物らしい実に身勝手な見解だな。」

嘲笑うアーカード。

「黙れ。」

それに激怒したアプリシイは怪人形態となり、右手を氷の刃に変えてアーカードに向けた。

「俺が化け物なら、お前は狗だ。愚かな人間の飼い狗…人間以下の存在だ！」

駆け出したアプリシイは、アーカードの首を斬り落とす。それから左手も氷の刃に変え、両手を使ってアーカードを肉塊に変えた。しかし、肉塊は突如として黒い霧に変わり、一カ所に集中して人間の姿となる。そのまま、霧はアーカードになった。

アーカードは不老不死の吸血鬼。だが、ただの不老不死とはわけが違う。アーカードは、血を吸うことで命のストックを持つことができる。一人分吸えば一人分、二人分吸えば二人。そして自分が死んだ場合、命のストックを一つ減らすことで復活できるのだ。ちなみに消滅させられても復活でき、宇理炎や焔薙、メダジャベリンのような武器でも、アーカードは倒せないのである。アーカードを倒すには、アーカードのストックを全て潰し、それからアーカードを殺すしかない。そして、現在のアーカードのストックは、数百万だ。

「そうだったな。このぐらいのことでは、お前は死なない。」

アーカードの不死性を思い出すアプリシイ。

「そういうことだ。」

アプリシイに言われたことを返すアーカード。だが、アプリシイの耐久力はシード以上。このままでは倒せない。そこでアーカードは、

奥の手を使う。

「拘束制御術式第三号、第二号、第一号、解放。」

クロムウエルの解放である。クロムウエルは第三号、第二号、第一号、第零号の四つが存在し、それらを解放することで、アーカードはより強力な力を発揮できるのだ。

クロムウエルを解放したことで、アーカードの全身に目が出現。アーカードは黒い不定形な姿となり、身体から大量の腕を出してアプリシイを攻撃する。だが、そこでユキオンナシードが口からあらゆるものを凍結させる吐息を吐き、アーカードの腕を全て凍結させ、その間にアプリシイが接近。今度はアーカードの胸を真っ二つにする。

「やはりお前は弱い。雑魚だな！」

再生するアーカードを再び切り裂くアプリシイ。それでも再生するアーカードだが、今度はアプリシイが放ってきた大量のツララに全身を貫かれる。そこをまた切り裂かれ、再び再生する。同じことの繰り返しだが、アーカードのストックも無限ではない。このままでは、いつか倒されてしまう。

(ならば…)

アーカードは一度自身を霧に変えて離脱。距離を取ってから再び実体化する。

「認めよう。お前は確かに強い…だが…」

言いながら、何かを取り出すアーカード。

「これで終わりと思ってもらっては困る。」

それは、携帯質量。と、それは一瞬にしてアルター粒子に分解される。

アーカードは、血を吸った相手の能力を使うことができる。アーカードが吸血を行った相手の中には、アルター能力者もいたのだ。やがて、アーカードの手元に巨大な鎌が生成される。アーカードは鎌の名を告げた。

「『ライフコスト』。以前、吸血鬼化したアルター使いがいてな、それを倒した際、手に入れた能力だ。」

言うが早いか、ユキオンナシードに斬りかかるアーカード。

「アアアアアア！！」

今まで攻撃が全く効かなかったユキオンナシードは、紙のように切り裂かれてしまった。断末魔を上げながら、大量のセルメダルとなつて碎け散る。

アーカードが手に入れた能力、ライフコストは、己の命を削つて刃の切れ味を上昇させる具現型アルター。アーカードの場合は、命をまるまる一つ削れるので、切れ味は非常に強力になる。まさに『命の代価』ライフコスト。相性は最高だ。

「…そんな能力もあったのか。だが、俺の脅威にはなり得ない。」
ユキオンナシードが倒されたにも関わらず落ち着いているアプリシイ。そんな彼に、アーカードは言う。

「お前に一つ教えてやろう。」

言いながら、アプリシイの背後に視線を移すアーカード。

「化け物を倒すのは、いつだって人間だ。」

そこにはレスティールと皇魔がいた。

「！」

慌てて振り返るアプリシイ。しかし、アーカードは態度を変えずに続けた。

「エンズは人間がお前達を倒すために生み出した技術だろう？つまり、お前達化け物は、人間デサイアによって倒されるべきというわけだ。」

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身し、アプリシィに殴りかかった。

「くっ！」

かわすアプリシィ。

「皇魔！」

レスティーはエンズに一枚のメダルを渡し、

クレアボヤンス！コウセン！ホノオ！

エンズはそれを使って亜種形態、クレコーホーコンボにコンボチェンジした。コウセンコアメダルはウオントのメダルであり、エンズの腕をコウセンアームに変化させ、腕だけ光速で動かせるようになるのだ。

「うおおお！！！」

「ぐあああっ！！！」

光速の正拳突きを受け、吹き飛ばされるアプリシィ。そこへ、

「プリキュア・ダークフォルテウェイブ！！！」

光弾が飛んできた。

「ちいつ！」

よけるアプリシィ。光弾を放ったのは、ダークプリキュアだ。さらに、

「うおおおおおおお！！！」

炎を纏った刀、焔薙で斬りかかる須田。

「くっ！」

それもかわすアプリシィ。そして、エンズ側の戦力を見る。状況は、四対一だ。

「…どうやらここは退くしかなさそうだな…！」
アプリシイは吹雪を発生させ、逃げていった。

「大丈夫かアーカード…って、大丈夫か。」

日向はアーカードを心配するが、アーカードはクロムウエルをかけ直してから言う。

「当然だ。私が敗れると思うか？」

「しかし、まさかアルター能力を使えるようになっていたとは…」
ダークプリキュアも変身を解除する。レスティーは超能力で日向と須田にシードやデザイアのことを教え、須田は言った。

「何はともあれ、幽霊騒動はこれで解決だな。」

「そうだな…うわっ！もうこんな時間じゃねえか！」
時計を見て驚く日向。明日は休日ではないので、あまり遅くなるとまずい。一同は帰宅することにした。

皇魔の家。

皇魔はため息をついていた。

「どうしたの？」

「…余の周囲がまた強くなってしまった…」

そう、ただでさえ強いアーカードが、さらに強くなってしまったのだ。

「はあ……」

「この世界の支配がさらに遠のいた気がして、さらに深いため息を吐く皇魔だった。」

第五話 真祖と死の鎌と幽霊騒動（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

音無「かなでが誘拐された！？」

クラウド「…死人が出るな…」

ウォント「返してもらおうぜ。アプリシイのメダルを！」

第六話 修羅と鬼神と誘拐事件

コウセンコアメダル

ウォントのコアメダルで、エンズの腕部をコウセンアームに変化させる。

腕だけが光速で動かせ、レゾリウム光線の威力が数倍以上に引き上げられる。ちなみに、このメダルを使った場合のみ、両手からレゾリウム光線を出せる。

ライフコスト

アーカードが吸血鬼化したアルター能力者の血を吸って手に入れた、具現型アルター。形状は、巨大な鎌。

自身の命を削ることによって切れ味を上げるといふ単純な能力だが、アーカードは命をまるまる一個削れるので、高層ビルをまとめて何本も両断できるほど、切れ味を上げられる。また、光の刃を飛ばす

ことで、遠距離攻撃も可能。

第六話 修羅と鬼神と誘拐事件（前書き）

仮面ライダーエンズ！！前回起きた、三つの出来事！！

一つ！ユキオンナシードが、幽霊騒動を引き起こした！

二つ！アーカードがアルター能力、ライフコストを発動！

三つ！アーカードはユキオンナシードを倒した！！

第六話 修羅と鬼神と誘拐事件

立華かなでは、暗い夜道を一人で帰宅していた。彼女には生徒会長という役職があるため、どうしても帰宅が遅くなってしまう。もつとも、他の役員の仕事まで全部一人でこなそうとするせいだが。かなでは少々、真面目すぎるのだ。

（お父さん、心配してるかしら？）

自分にとって最高の父親、セフィロスのことを考えるかなで。セフィロスも教師であるため、やはり帰宅時間は遅いのだが、それでもかなでよりは早かった。

（早く帰らないと…）

かなでは歩を速める。

と、

「お嬢ちゃん、急いでるみたいだね？」

いきなり背後から声がかかった。かなでが振り向いてみると、そこには人のよさそうな男性が、五人ほどいる。先ほど声をかけた男性、男性Aは続けた。

「俺達を送っていつてあげようか？」

それを聞いてかなではお願いしかけたが、思いとどまる。セフィロスから、知らない人についてはいけけない、と言われたことを思い出したからだ。

「せっかくだけど、遠慮しておきます。」

「ああそう。でも、そういうわけにもいかねえんだよな。」

男性Aが言くと、他の男性達がかなでを取り囲む。

「俺達と来てもらおうぜ！」

すると、男性Aが携帯質量を出し、それを分解して再構築。剣を生み出した。他の男性達も、それに習う。どうやら彼らは、アルター能力者の集団だったようだ。そして目的は、かなでの誘拐。

しかし、かなでも黙って連れていかれはしない。

「ガードスキル・ハンドソニック」

かなでが呟くと、彼女の両手の甲から光が溢れ、刃を形成した。これぞ彼女の能力、ガードスキルである。あらゆる事象を発現させられるという能力で、かなではこれを使って戦うのだ。もちろんこの刃、ハンドソニック、はガードスキルの一部でしかない。

「ガードスキル・デイレイ」

さらなるガードスキルを発動するかなで。デイレイは超高速移動を可能にするガードスキルだ。かなでは超高速かつ最小限の動きをしながら、男性達のアルターをハンドソニックで刻む。

「あ…うあ…」

かなでの戦闘力の高さにたじろぐ男性達。かなではハンドソニックを構えた。

「ひ、ひいいいいい!!」

「うわあああああ!!」

一目散に逃げ出す男性達。かなではそれを追わず、ガードスキルを解除した。ガードスキルの名の通り、彼女は自衛にしかこの能力を使わない。去る者は追わず。戦意を喪失した相手を、追いかけてはしないのだ。

「…またつまらぬものを斬ってしまったわ。」

若干中二病なかなではどこかの剣豪のような台詞を言い、再び帰路についた。

そんな彼女を物陰から見つめる男性が、一人。

「フフフ…」

彼の名は小池玄人。こいけくまんと世界にその名を轟かせる誘拐犯だ。とにかく誘

拐が大好きで、可愛い女の子や絶世の美女を見つけたりすると、つい誘拐してしまうという精神異常者である。今回のターゲットは、かなでだ。

「フフフ…！」

小池はクロロホルムを染み込ませたハンカチを取り出し、かなでに飛び掛かった。彼女のこととは前もって調査しており、ガードスキルを解除する隙を見計らって行動したのだ。先ほどの男性達も、そのための噛ませ犬である。タイミングは完璧、の、はずだった。しかし、かなでは一瞬にして姿を消してしまう。

「!?!」

驚いてかなでを捜す小池。と、いた。かなでは近くの家の屋根に着地している。

「ば、馬鹿な！ガードスキルを発動する暇はなかったはずだ！」

「…オーバードライブは、パッシブだから。」

かなでは駆け出し、屋根の上を次々と忍者走りで飛びうつって逃げていく。やがて、かなでの姿は見えなくなった。

「…くそっ…！」

怒る小池。これは、彼の人生で初めての誘拐失敗だった。

「諦めないぞ…必ずお前を誘拐してやる！」

この男、マジで変態である。

由多かなみは、いつものように弁当を忘れたカズマに弁当を届け、自分の教室に戻ろうとしていた。と、廊下に教師が二人、何か話しているのを見つけ、会話を盗み聞きする。

「知ってますか？最近この辺りで小池玄人が目撃されたそうです。」
「確か、世界中で有名な誘拐常習犯ですよ？まさかウチの生徒が狙われるなんてことは…」

「ありえると思いますよ？それなりにレベルがありますからなあ…」
かなみはそれを聞いてから、自分の教室に戻った。

（誘拐犯、かあ…）
考えるかなみ。と、

「かなみ！おはようでゲソ！」
彼女に挨拶する女子がいた。

「ああ、イカ娘ちゃん。おはよう」
かなみの友人のイカ娘である。

「どうしたでゲソ？なんか元気がなさそうじゃないカ。」
「う、うん。最近この辺りで、小池っていう誘拐犯が目撃されたらしいから…」

「ああ私も知ってるでゲソ！100%の誘拐成功率を誇る、世界一の誘拐常習犯！嫌でゲソねえ…」

「…イカ娘ちゃん。」
「何でゲソ？」

「…今日一緒に帰らない？」
かなみは誘拐を恐れ、できるだけ大人数で帰宅するという作戦を取った。

「いいでゲソよ。」
「ありがとうイカ娘ちゃん！」

「ただ、研も誘った方がいいと思うでゲソ。」
イカ娘が言った研というのは、彼女達と同級生の泉研という男子生徒のことだ。

「それもいいね。研くんは…」
研を捜すかなみ。研は、三人のクラスの副担任、魔王先生と会話をしていた。

「魔王先生。誘拐犯についてどう思いますか？」

「気にするな！」

これが口癖の魔王先生。

「はい！」

納得した研。

「…なぜ納得するんでゲソか…」

「あ、あはは…」

イカ娘はげんなり。かなみは苦笑していた。

小池は世界中に存在する多くの誘拐犯と連絡を取り合い、かなでについて調べていた。聞くところによると、かなでを誘拐しようと思っていた誘拐犯はかなりいるらしい。無理もないだろう。かなでは周囲の人間から天使と呼ばれるほどの美貌と知能、優しさを備え、誰からも好かれていた少女だ。精神異常者なら、誘拐したいとも思う。しかし、かなではガードスキルという強力な能力を有しており、誘拐しようにもうまくいかない。例えばガードスキルの解除後という隙を狙っても、肉体を強化するオーバードライブというパッシブタイプのガードスキルがあるのだ。隙がない。

と、小池はある有力な情報を得た。

かなでは麻婆豆腐を好物としており、これを前にと校則のような大事なことも全て忘れてしまうほど、夢中になるのだという。

これを知った小池は誘拐犯達を集め、作戦を練り、そして実行した。

かなでは今夜も、暗い夜道を一人で帰宅していた。かなではセフィロスのことを考えながら、時々笑みを浮かべる。

かなだとセフィロスは、血縁関係にある父娘ではない。とある理由によってセフィロスに拾われ、そして彼の娘となったのだ。かなではセフィロスが大好きだった。だから、学園でも会えるというのは、彼女にとって最高の幸せである。

一刻も早くセフィロスに会いたいと願うかなで。と、かなではあるものを発見する。

皿に盛られた麻婆豆腐だった。

道の真ん中に、麻婆豆腐が置いてあるのだ。

普通の人なら、絶対におかしいと気付くだろう。だが、かなでは若干天然であるため、全く疑問を持たず、麻婆豆腐に手を伸ばした。

と、麻婆豆腐は何の前触れもなく突然後退し、かなでの手は空振りする。

「？」

再度手を伸ばすかなで。麻婆豆腐は再び後退し、かなでの手をよける。かなではむきになって麻婆豆腐を捕まえようと追いかけるが、麻婆豆腐は逃げていく。いつしか彼女は人通りの全くない道に来ていたのだが、そんなことは気にせず、かなでは麻婆豆腐に飛び掛かった。

その時、かなでの身体は空中で何かに引っ掛かってしまい、そのまま空中に固定される。

気付けば、かなでは巨大な蜘蛛の巣に絡め取られていた。

「っ！？」

驚いてもがくかなで。しかし、いくらもがいても抜け出せず、逆に糸が絡みついてどんどん動けなくなっていく。ハンドソニックで糸を切るうとするが、もう腕を動かせなかった。

次の瞬間、

「ああっ！！」

かなでは電流を浴びて気絶する。スタンガンを当てられたのだ。

「うまくいったぜ！」

小池は中和剤をかなでにかけ、蜘蛛の巣を溶かす。最初この罠を仕掛ける時は、本当に引っ掛かるかどうかかなり不安だったのだが、

かなでは見事に引つ掛かった。小池はそのまま、仲間の待つ車までかなでを運んでいった。

「ふう、すっかり遅くなっちゃったわ。」

仲村ゆりは、買い物帰りに暗い夜道を歩いていた。と、あるものを発見する。

車に乗せられるかなでだ。

「あれは…!」

荷物を置き、慌てて駆け出すゆり。しかし間に合わず、車は行ってしまった。

「まずいわね…」

ゆりは携帯を出し、急いで仲間達にメールした。メールの内容は、『大変なことが起きたわ!今すぐ皇魔くんの家の前まで来て!』

しばらくして、ゆりから召集令を受けた音無、日向、直井、クラウド、ザックス、瓜核、イーリヤン。そして、皇魔とレスティー。

「なぜ余の家の前なのだ!」

「仕方ないでしょ、緊急事態なんだから。」

怒る皇魔とたしなめるゆり。

「それで、一体何が起きたんだ？」

音無は本題を訊いた。ゆりは説明する。

「かなでちゃんが誘拐されたわ。」

「かなでが誘拐された!？」

驚く音無。日向はさらに尋ねる。

「本当なのかゆりっぺ？」

「残念ながら本当よ。しかも犯人は、誘拐常習犯の小池玄人。」

「マジかよ!？じゃあ、セフィロス先生に知らせた方がよくねえか

!？」

ザックスは父親であるセフィロスに知らせるべきだと言うが、

「それは得策ではないわ。」

ゆりは却下した。

「何でだよ!？」

追求するザックス。対するゆりは、ザックスだけでなく全員にわかるよう、説明した。

「よく思い出して。セフィロス先生が、かなでちゃんのことをどれだけ深く愛しているか…」

セフィロスは、かなでを溺愛している。成績を優遇したりはしないが、それでも溺愛している方だ。そんな彼に今回の誘拐を知らせたら、どんなことになるか…。

「…死人が出るな…」

クラウドが結論を出した。そう、死人が出る。

「セフィロス先生は生徒会長に危害が加わると、修羅になりますからね…」

「修羅なんてもんじゃねえよ。ありゃあ鬼神だ」

直井と瓜核も同意した。

「だから、できるだけ穏便に事件を解決しようと思うの。幸いにも、小池は今まで何人も誘拐してるから、罪状は十分。あたし達が逮捕

すれば、かなでちゃんを誘拐したことは知られないはず。」

ゆりとしては、担任に殺人などさせたくない。

「それで、どうすればいいの？」

尋ねるイーリヤン。

「まずイーリヤンくん。あなたのアルターで、かなでちゃんの居場所を割り出して欲しいの。お願いできる？」

「うん、やってみる。」

イーリヤンは携帯質量を出して分解。再構築する。と、イーリヤンの上半身を、アームが付いたいびつな金魚鉢のようなものが覆った。そのまま、内側にコンソールのようなものを出現させ、操作する。これがイーリヤンのアルター、絶対知覚である。指定した範囲のあらゆるものを知覚できる能力だ。

「なるほど、これならすぐ見つかるわね。」

感心するレスティー。もつとも、彼女にも超能力があるため、それを使えば見つけれられるのだが。

「…見つけた。こっち」

どうやら発見したらしい。イーリヤンは知覚した方向へ向かっていく。

「行くわよ！」

ゆりが一同を先導する。

「待て。余は行か」

「はい！」

「…」

皇魔はレスティーに無理矢理連れていかれた。

一方、別の場所には『ブラックドッグ』というテロリストの集団が

潜伏していた。しかし、この集団、人間は一人だけだ。集団の全員がアンドロイドであり、ただ一人の人間は、アンドロイド達を率いる隊長である。

今は本部から、作戦の決行指令が来るのを待っているところだ。と、
「ん？」

装甲車両に乗っていた隊長は、レーダーに反応があったことに気づき、もっとよく見ようとモニターに近付く。しかし、反応は隊員達に探索の指令を出すまでもなく、すぐに消えてしまった。

「…気のせいか…」
モニターから目を離し、背後を振り返る隊長。

その時、

「その欲望、私が叶えましょう。」

イーリヤンの絶対知覚を頼りにかなでを捜す一同は、今はもう使われていないはずの廃墟を発見した。

「ここね…イーリヤンくん。中には何人くらいいる？」

ゆりに訊かれ、イーリヤンは調べる。

「えっと…二十人くらい。」

「結構いるんだな…それで、どうする？」

「正面突破か？」

ゆりに尋ねる日向とザックス。ゆりは首を横に振った。

「さっきも言ったけど、今回は穩便に、つまり、できるだけ人に知られないように解決しなきゃいけないの。正面突破なんてしたら、目立つでしょ？」

「なるほど、それでカズマやブラックは誘わなかったのか…」

納得するクラウド。確かにカズマやブラックのような派手な戦い方をする者を連れてきていたら、穩便には済まないだろう。選抜もしつかりしている。

「作戦はこうよ。まず、レスティーさんと瓜核くんの能力で、何人かを内部に瞬間移動させ、混乱させる。その隙を見計らって突入し、敵を倒しながらかなでちゃんを奪還。奇襲メンバーは、皇魔くんとレスティーさんで。突入メンバーは、クラウドくんとザックスくんを先頭に、あたし、音無くん、日向くん、直井くん。イーリヤんくんはこれで連絡しつつここで待機。万一に備えて、瓜核くんもここで待機。」

作戦を簡単に説明しながら、トランシーバーを出して全員に配るゆり。イーリヤんの絶対知覚は探知に優れた非常に強力な能力だが、直接的な戦闘力はない。イーリヤンは戦えないのだ。そのため、バツクアツプに徹する。瓜核は護衛だ。

「奇襲メンバーが少なすぎる気がしますね…」

と直井。

「奇襲だから人数が少なくても、かき回してもらえばいいの。二人で十分よ」

「余が遅れを取ると思うか？余一人の手で殲滅してくれる！」

直井に言うゆりと、自信満々な皇魔。レスティーは皇魔に耳打ちした。

「変身は？」

「必要あるまい。相手がただの人間ではな…」

「さあ、突撃よ！オペレーション・スタート！」
ゆりの言葉を最後に、作戦が始まった。

小池はほくそ笑んでいる。

「ついにあのセフィロスの娘を誘拐した！さあて、たっぷり身代金をふんだくってやるぞ！」

気絶し、縛られたかなでを見ながら、さらに意気込む小池。

別の部屋。

「なあ、これ、なんだ？」

誘拐犯の一人が、異常を告げた。見回りの誘拐犯達が、反応してそれを見る。

そこには小さなスイカがあり、どんどん大きくなっていったのだ。やがて人間大サイズまで巨大化したスイカの中から、メダジャベリンを持った皇魔が飛び出してきた。瓜核の技の一つ、瓜核ワープである。

「うわっ！」

驚いて銃を構える誘拐犯だったが、皇魔に斬られ、気絶する。今回は皇魔がメダジャベリンの特性を利用して刃を潰してあるため、殺す心配がない。さらに、レスティーが瞬間移動で現れ、誘拐犯の一人に蹴りを食らわせ、気絶させる。二人はそのまま暴れ始めた。

「大変だ！正体不明の敵勢力が…うわあああ！！」
トランシーバーで小池に連絡する誘拐犯。

「な、何！？どうしてここが…」

すると、今度は別の誘拐犯からも連絡が入る。

「変な餓鬼どもが突入してきた！応援を！」

「な、何なんだ、次から次へと…」

小池は慌てていた。

クラウドは合体剣という剣を、ザックスはバスターソードという剣を振るいながら、次々と誘拐犯を倒していく。向こうも銃で反撃してくるが、二人は互いの得物でそれを斬り払い、さらに日向と直井から銃による援護を受けて有利に戦いを進めていく。

ゆりと音無は戦いをクラウド達に任せ、かなでを搜索していた。ゆりはトランシーバーでイーリヤンと連絡を取る。

「こちらゆり。かなでちゃんの居場所は？」

「そのまままっすぐ進んだ突き当たりの右にある部屋。小池も一緒にいるみたいだから、気を付けて。」

「了解。」

「この餓鬼！」

「！」

廊下の陰から突然現れた誘拐犯。連絡していたゆえに反応の遅れたゆり。だが、誘拐は音無に狙撃され、倒れた。銃に入っているのは麻酔弾のため、死ぬことはない。

「ありがとう。」

「ああ。かなでは？」

「このまままっすぐ進んだ突き当たりの右にある部屋。小池も一緒にいるらしいわ」

「厄介だな…もしかたなでを人質に取られたら…」

「間違いなくするでしょうね。向こうもこっちには気付いてるはずだし…でも、進むしかないわ。」

「…よし、行くぞ！」

二人は一気に駆け抜け、かなでが監禁されている部屋に突入した。

「う、動くな！」

小池はかなでを抱え、頭に銃を突き付ける。

「かなでを放せ！」

「嫌だ！俺はまだ、身代金を要求してない！それに、これからも誘拐を続けるんだ！」

音無の要求を無視し、喚く小池。

「こいつ…」

思わず舌打ちするゆり。

その時、

「キモいのよ。あんた」

突然小池の背後から声が聞こえ、小池は振り向く。だが、声の主はおらず、気付くと自分が抱いていたかなでも消えていた。前を見る小池。そこには、瞬間移動でかなでを救出したレスティーが、ゆりと音無の間に並び立っていた。

「な、何だと！？ガアッ！」

再び驚く小池。しかし、直後、隣の部屋から壁を突き破ってきた皇魔から衝撃波を叩き込まれ、吹き飛ばされて気絶した。

「助かったよ。」

レスティーに礼を言う音無。

「私は可愛い娘の味方だから」

「は、ははは…」

音無はレスティーも危ないのではないかと思いつながら、かなでを受け取る。

「かなで、起きろー。」

「…んう…まーぼー…どーぶ…」

どうやら麻婆豆腐の夢を見ているらしいかなで。

「もう、かなでちゃんったら…」

かなで起こしに参加しようとするゆり。

と、

「気を付けて！何か近付いてる！」

彼女のトランシーバーに、イーリヤンから連絡が入った。すると、壁を破壊して鎧を着た戦士のような怪物、ヨロイシードと、黒い石でできたような怪物、セキタンシードが侵入。ゆり、かなで、音無をタツクルで吹き飛ばした。

「うあつー!!」

「ぐあつー!!」

壁に叩きつけられて気絶する音無とゆり。かなではまだ目を覚まさない。

「皇魔！」

慌ててエンズドライバーとメダルを渡すレスティー。

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身し、今度はメダジャベリンの切れ味を最大まで

高める。

「今回は諦めかけていたが、どうやら当たりだったらしい。来い！」
エンズはシード達を挑発して外に飛び出し、二対一の大立ち回りを展開する。レスティーも飛び出していった。ヨロイシードもセキタンシードも頑強な肉体を持ち、メダジャベリンによる攻撃をたやすく弾いてしまう。

「ならば…レスティー！フブキコアメダルだ！」

「オツケー！」

要望を受けたレスティーはフブキコアメダルをエンズに投げ渡す。

クレアボヤンス！フブキ！ホノオ！

エンズは亜種形態のクレフブホコンボにコンボチェンジ。フブキコアメダルの力を解放した、凍てつく拳をセキタンシードに。ホノオコアメダルの力を解放した、燃えるキックをヨロイシードに。それぞれ叩き込む。金属を纏ったような存在であるヨロイシードは熱をセキタンシードは冷気を弱点にしているため、大ダメージを与えている。よろめく二体のシード。

二体がうまく一カ所に集まったところで、エンズはフブキコアメダルの力によってレゾリウム光線が変異した冷凍光線をシード達に浴びせ、凍らせた。

「これで詰みだな。」

トリプル！スキヤニングチャージ！！

エンズはエンズアルカイドを発動して突撃。

「ぬん！！ずあああーっ！！！！」

一回ずつ斬りつけ、シード達を爆砕した。

シード達を倒し、戻ってきた皇魔とレスティー！。

「二人とも、大丈夫!？」

レスティーはゆりと音無を助け起こす。

「ん…うう…レスティーさん？痛たた…」

「何だよ一体…」

目を覚ましたゆりと音無。

「ゆりっぺ!」

「音無さん!」

間もなくして、日向達もやってきた。当然、イーリヤンと瓜核以外だが。

「無事か？」

クラウドが尋ね、

「ああ、何とかな…」

音無が答える。と、皇魔はあることに気付いた。

「…立華がいないようだが…」

「……えっ?」

ゆりは辺りを見回す。確かに、かなでがいない。そこで、ザックスが近くに落ちていた紙を拾い、書いてある内容を読む。そこには、こう書いてあった。

『この娘は、我らブラックドッグが預かった』

ザックスは思わず叫んだ。

「ただだけ狙われてんだよ!?!?!」

「悪いな、手伝ってもらっちゃまって。」
ウォントはコレクとメイカーに礼を言った。メイカーとコレクは順番に言う。

「私がステルス能力を使ってテロリストの隊長にシードを寄生させ、より大規模な行動を起こすように仕向ける。」

「さらにわしと貴様があらかじめ生み出しておいたシードを罠に使い、うまくエンズと一対一で戦える状況を作る、か…考えたな。」

そう、第二の誘拐は、ウォントの策略だったのだ。ちなみに、かなでがブラックドッグに誘拐されたことを教えるための紙を残したのもウォントである。ウォントは呟いた。

「返してもらっぜ。アプリシイのメダルを！」

その日はちょうど休日であり、セフィロスは非番。かなでは帰ってきていないが、彼はかなでが誘拐されたことを知らない。ゆりから、かなでは彼女の家に泊まると連絡を受けていたためだ。かなでの帰宅を気長に待ちながら、ニユースを見るセフィロス。

「臨時ニユースが入りました。テロリスト集団、ブラックドッグが立て籠っているようです。」

セフィロスはそのニユースを見ながら、日本茶を飲む。

「ブラックドッグは、立華かなでという少女を人質に取っているようです。」

「ブーーーーッ!!!」

そして盛大に吹いた。

「何だ!?!? どういうことだ!?!? かなでは仲村の家に…」

と、頭のいいセフィロスは察する。かなでがゆりの家に泊まっているというのは、ウソだ。恐らく、自分に気付かせないように解決しようとして、ウソをついたのだろう。自分がどれだけ彼女を愛しているか知っているから、心配させまいと…。

「…気遣いには感謝しよう。だが…」

静かに呟くセフィロス。

「…必要ない。」

彼は修羅に、いや、鬼神になっていた。

第六話 修羅と鬼神と誘拐事件（後書き）

次回、

仮面ライダーエンス！！

ゆり「もはや一刻の猶予もないわ。」

音無「今、助けてやるからな…！！」

ウォント「やっと、この時が来た。」

皇魔「返り討ちにしてくれる…！！」

セフィロス「覚悟は、いいな？」

第七話 突入と乱闘と奪還作戦

第七話 突入と乱闘と奪還作戦（前書き）

仮面ライダーエンズ！！前回起きた三つの出来事！！

一つ！立華かなでが誘拐された！

二つ！仲村ゆりが、救出作戦を始動！

三つ！誘拐犯は倒したが、今度はかなでが、テロリストに誘拐された！！

今回はライオットさんのところからスネークが来ます。

第七話 突入と乱闘と奪還作戦

街の中心部にあるビル。イーリヤンの知覚によると、ブラックドッグはそこに立て籠っているらしい。しかも、適度に兵士を街に放って破壊活動までやっているそう。早朝だったために、社員は一人もいない。うまく人のいない場所に立て籠ってくれたので、一同にとっては奪還作戦をやりやすくなった。だが、問題はそこではない。「マスコミが動き出した以上、もはや一刻の猶予もないわ。」

そう。ゆりが言った通り、マスコミが動き出してしまったのだ。本来なら、セフィロスに気付かれる前になでを奪還しなければならぬのだが、これではもう完璧に気付かれてしまった。すぐにブラックドッグを殲滅しに、やってくるだろう。本来なら夜のうちにでもかなでを救出すべきだったが、小池一味との戦いの際弾薬を消耗したため、補給に手間取ったこと。ブラックドッグの居場所の特定に時間がかかったこと。小池達を警察へ連行していたことなど、様々な要因が重なり、結果として翌日までかかってしまった。

ブラックドッグは世界でも有名なテロリストであり、そのやり口には特徴がある。限りなく人間に近い人口知能、AIを搭載したアンドロイドを使って対象を殲滅し、そのために使う『人間』は、アンドロイド達の指揮に必要な数人のみ。セフィロスが動いたところで、死人が出ることは、まずない。

「だが、万が一という可能性はある。」
クラウドの言う通り、それはありえる話だった。いずれにせよ、セフィロスが来る前に解決することにこしたことはない。ビルの近くまで到着したところで、ゆりは説明する。

「作戦は昨日と同じよ。奇襲メンバーも、突入メンバーも同じ。特に瓜核くん」

「ん？」

「昨日は暇だったろうけど、今回はブラックドッグの兵士が街中をうろついているわ。イーリヤンくんは作戦の要だから、しっかり守ってね。」

「おう！」

「それじゃあ、オペレーション・スタート！」
作戦開始を告げるゆり。

しかし、

「悪いが、約二名は俺に付き合ってもらっぜ。」

そこへ人間形態のウォントが現れた。

「誰だ貴様は？」

尋ねる皇魔。

「そうそう。この姿で会うのは初めてだったな」

ウォントは怪人形態になった。

「ウォント！」

驚くレスティー。

「やっと、この時が来た。」

ウォントは静かに拳を握りしめる。

「さあ、アプリシイのメダルを返しな！」

「レスティー。」

「わかったわ。」

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身してメダジャベリンを構えた。

「皇魔！？」

「これは…一体!？」

皇魔の変貌に驚く音無と直井。

「ここは余が引き受ける。貴様らはさっさと行け」

「けど…」

「いいわ。」

渋るザックスだが、ゆりは動じていない。

「その代わり、あとでしっかり説明してもらわよ。いいわね？」

「…好きにしる。」

エンズはウォントとの戦いに身を投じた。

「このことは日向くんが知ってるから、突入しながらでも聞いて！」

レスティーも追いかける。

「日向…お前いつの間？」

尋ねる音無。

「この前、ちよつとな。」

「話はあとで聞くわ。それより、奇襲メンバーをどうするかよ。」

日向の話を遮るゆり。確かに、奇襲メンバーがいなくなってしまう

た。

その時、

「私が引き受けよう。」

と声が聞こえ、地面から湧き出るようにして、アーカードが現れた。

「どっから出てんだよ!？」

思わずツッコミを入れるザックス。

「いずれにせよ、大抜擢ね。お願いするわ、アーカードさん。」

「ふふふ…」

ゆりはアーカードを採用し、アーカードは嬉しいのか不気味に笑っ

た。そこへ、

「私にも手伝わさせてくれ。」

しおんも来た。

「戦力は多い方がいいわ。お願い」

しおんも採用するゆり。

「今、助けてやるからな。」
ここにはいないかなでに向けて言う音無。こうして、立華かなで奪還作戦が始まった。

かなみはアンドロイドに追いかけていた。実は彼女もアルター能力者なのだが、彼女の能力は『ハート・トゥ・ハート』といい、相手の心を読む能力。つまり、心を持たないアンドロイドが相手では、役に立たないのだ。

「きゃっ！」

かなみは転んで足をすりむいてしまう。もう、逃げられない。しかし、

「かなみ！危ないでゲソ！」

イカ娘が現れ、触手でアンドロイドを貫いて倒した。

「大丈夫でゲソ？」

「うん、ありがとうイカ娘ちゃん。」

「それにしても、大変なことになったでゲソね……」

「ジユラル星人の仕業に違いない！」

そこへ唐突に現れる研。

「違うでゲソ。ブラックドッグの仕業でゲソ」

「ジユラル星人め……今度という今度は許さないぞ！」

「ちよつと待たないイカ！話を聞かないイカ！」

イカ娘の話の全く聞かない研。と、研は跳躍して一回転し、着地。

「チャージングGO！」

ポーズを取る。すると、研はスーツを身纏い、ヘルメットをかぶった少年、チャージマン研になっていた。研はポーズを取ってチャー

ジングG0と声をかけることで、光の力を得てチャージマン研に変装するのだ。ちなみに、変身ではなく、変装である。チャージマン研は変装するや否や、愛用の万能飛行船、スカイロッド号に乗ってどこかへ行ってしまった。

「どこ行く気でゲソ!!」
怒るイカ娘。

(…もしかして…)
かなみには、チャージマン研が何をするつもりか、予想がついていた。

ビルに侵入したアーカードは、カスールとジャツカルを使って大暴れしていた。どちらも海馬コーポレーションのオーダーメイドであるため、非常に強力な銃だ。鋼鉄の身体を持つアンドロイド達を、ほぼ一撃で仕留めている。向こうもマシンガンを撃ってくるが、アーカードはそのくらいでは死なないため、気にせず攻撃している。よけようともしていない。彼からすれば、余裕がありすぎるくらいだ。

と、アンドロイド達が隔壁の一部を閉めた。アーカードはその場にいるアンドロイド達を全滅させてから一旦カスールとジャツカルをしまい、携帯質量を出して分解、ライフコストを再構築。

「Open sesame (開けゴマ)…」
隔壁をライフコストで紙のように切り裂く。人間に近い思考の持ち主であるアンドロイド達は、あまりの出来事に固まる。

「兵士諸君。任務ご苦労」

対するアーカードは悠々と近付き、

「さようなら。」

ライフコストの一撃で、全てのアンドロイドの首をはねた。

ゆり達はクラウドとザックスとダークプリキュアを先頭に援護しながら突撃するが、相手はアンドロイド。通常の銃ではあまりダメージを与えられないので、うまく倒せない。クラウドとザックスとダークプリキュアの攻撃が一番よく効いているのだが、誘拐犯とは比べものにならない数と実力が相手なのだ。限界はある。

「やっぱカスールやジャツカルくらいの武器じゃないとダメか…」

「場所が場所だけに、重火器を使うわけにもいかないわ。我慢して」

ぼやく日向と、それをなだめるゆり。

「音無さん。大丈夫ですか？」

「大丈夫だが、セフィロス先生が来る前に片付けなきゃいけないとなると、今のままじゃペースが遅すぎる。もっと素早く片付けないと…」

音無を心配する直井と、セフィロスの来訪を警戒する音無。

その時、

「ならまず、相手の弱点を狙うことだ。」

声が聞こえて、ソリッド・スネークが現れた。魔王も一緒だ。

「あ、あんたは!?!」

「それに、魔王先生!?!」

驚く音無と直井。

「スネークだ。」

「我がジュラル星人の頭脳が生み出したロボットを使って連れてきた助っ人だ。」

「助っ人?」

聞き返す日向。スネークはライフルを使って、アンドロイド達の弱点である頭部を狙撃しながら、ゆり達に言う。

「そう、味方だ。急いでるんだろ? だったら早くしよつぜ。」

「助かるわ。」

思わぬ助っ人を得たゆりは、スネークと一緒にアンドロイド達を狙撃する。

「行ってみよー!」

魔王は目から光線を出して攻撃。と、

「ヒール・アンド・トウー!!!」

ラディカル・グッドスピードを両足に融合装着したクーガーが、アンドロイド達を薙ぎ払った。

「クーガー先生!」

驚くザックス。

「俺より速く動くとはいい度胸じゃねえか!」

クーガーは言いながら、アンドロイドを蹴り飛ばす。

「早くしないとな! モタモタしたら、セフィロスが来るぜ!」

クーガーもセフィロスと同じく教師。セフィロスの強さはよくわかっているし、娘が人質に取られている状況だ。どうなるかもわかっている。一同は急いで進撃していった。

「瓜核バルカン!!」

瓜核はイーリヤンを守りつつ、アンドロイドを倒していた。

「くそっ!あと何匹いやがる!?!」

「瓜核!四時方向!」

「おう!」

イーリヤンは絶対知覚を使つて的確な指示を出し、瓜核はそれに従つてアンドロイドを倒す。

と、イーリヤンは自分の知覚領域に、ある存在が入り込んだことを察知する。

「あ…ああ…!!」

「どうした!?!」

イーリヤンは答えず、トランシーバーを出してゆり達に連絡した。

「セフィロス先生だ!セフィロス先生が来た!」

「何ですって!?!」

応対するゆり。

「ものすごいスピードでそっちに向かってる！しかもすごい殺気だ
！！！」

「まずいな…早く突破しねえと…！！！」

日向は焦り、一同は攻撃の手を強める。そこで、またイーリャンから連絡が来た。

「今セフィロス先生がビルに入ったよ！」

「もう！？」

「なんてスピードだ！クーガー先生と同じくらいの速さじゃないのか！？」

驚くゆりと音無。だがこのビルは十五階立てであり、かなでの位置はビルの最上階。現在ゆり達がいる場所は、九階。アーカードの居場所は十二階だ。セフィロスが来るには、まだ時間がある。

「急ごう。」

ダークプリキュアが言い、一同はさらに進撃を速めた。

「オラッ！！！」

「ぐうっ！！！」

エンズはウォントと激戦を繰り広げ、だが劣勢に陥っていた。

「アプリシイは俺の弟分だな…どうしてもメダルを返してもらわなきゃなんねえ。だから本気を出すことにした！！！」

「…よかるう。ならば、こちらも本気を出す。レスティーー！！！」

エンズはレスティーーを呼び、レポートで渡されたメダルを使い、

カンパ！フブキ！ヒョウケツ！カーンカンカンフブツヒ カンフ
ブヒ

カンフブヒコンボにコンボチェンジした。そのまま、全身に冷気を纏う。

（待ってたぜ。お前がアプリシィのコンボを使うこの瞬間を！！）
思いながら全身に炎を纏うウォント。

そして、

二人はぶつかり、大爆発が起こった。

「…んう…？」

爆発を聞いたかなでは目を覚ました。

「…何であたしは縛られてるの？」

今の自分の状態を確認するかなで。しかし、

「…まあいいわ。おやすみなさい…」

かなでは二度寝した。

スネークの指示に従って射撃するゆり。

「いいセンスだ。」

「どうも。」

その時、

「!?!」

彼女達の前に、いや、一同の前にいたアンドロイド達が、突然全滅した。何が起こったのか、全く把握できない。

しかし、速さを極めた男、クーガーのみ、何が起きたのかを知ることができた。

「真空の斬撃、か…間に合わなかったらしいな…」

言いながら振り向くクーガー。そこには、あまりにも長すぎる日本刀、正宗を握りしめたセフィロスがいた。

「せ、セフィロス先生…!!」

日向は腰砕けにその名を呼ぶ。

(なんとという殺気だ…!!)

ダークプリキュアはセフィロスが放つ殺気に、心中焦った。

「セフィロス先生…あの…これは…」

ゆりは震えながらセフィロスに弁解を行おうとする。対するセフィロスは、

「全てわかっている。気遣いには感謝しよう」

礼を言った。

「だが、今度からは必ず俺に言え。お前達が思っているほど、俺はものわかりが悪くない。」

言って、セフィロスは先行する。そこから、進撃の速度は一気に早くなった。

激突したエンズとウォント。

「…ちつ…」

エンズは舌打ちした。ウォントの手に、カンパコアメダルとフブキコアメダルが握られていたからだ。激突した瞬間、ウォントはエンズドライバーからカンパコアメダルとフブキコアメダルを取り外し、奪ったのである。ウォントとしてはヒョウケツコアメダルも一緒に奪うつもりだったが、直前でウォントの意図に気付いたエンズから攻撃を受け、二枚にとどまってしまった。

「まだだ！まだ一枚残ってる！！」

再び挑みかかろうとするウォント。しかし、エンズから受けた弱点属性による一撃で、彼もかなりのダメージを負った。しかも、自分がメダルを奪った瞬間に、エンズもまたウォントから一枚、メダルを奪っている。いかにメダルを奪ってエンズを弱体化させたとはいえ、このまま戦うのはあまりにリスクが高すぎた。

というわけで、両者の戦いを監視していたメイカーが、ミサイルランチャーを生成してエンズに攻撃を仕掛ける。

「ぐおおおおおおお!!!」

吹き飛ばされるエンズ。メイカーはそれを確認してからウォントに駆け寄り、肩を貸す。

「無事ですかウォント?」

「メイカー!手を出すなつて言っただろうが!これは俺の問題だ!」
ウォントは少し前に起きた出来事を思い出した。

「あの時、アプリシイは俺のせいで奴にメダルを奪われた。俺の不始末で奪われたメダルは、俺が取り戻さなきゃなんねんだ!!!」

「ですが、エンズは我々デザイアにとって共通の敵です。あなた一人が戦う必要はありません」

メイカーはミサイルランチャーの弾頭を補給。

「よつて私も加勢します。」

エンズに向ける。それを聞いたエンズは、

「…いい度胸だ。まとめて相手になつてくれる!」

リフレクターマントからリモコンを出し、スイッチを押した。すると、エンズの側にマシンスロットモードのライドスロットターが現れたではないか。

「海馬に搭載させた空間転移システムだ。他にも、多くのシステムが搭載してある。少しは使つてやろうと思つてな…」

エンズはセルメダルをライドスロットターに投入。

「まずこれだ!」

レバーを引く。すると、スロットが回転して炎の目が止まり、メダル排出口から火炎放射が放たれた。

「メイカー!」

咄嗟に飛び出し、メイカーを守るウォント。ウォントは言う。

「残念だが、俺にこの手の攻撃は効かねえぜ?」

「ならばこれはどうだ?」

再びセルメダルを投入してスロットを回すエンズ。今度は氷の目で止まり、メダル排出口から吹雪が放出された。

「ぐあああああああ!!!」

「ウォント!!」

弱点属性の攻撃であるためダメージを受けるウォント。

「まだ終わらんぞ。」

エンズは間髪入れずにセルメダルを投入してスロットを回す。今度は剣の目で止まり、メダル排出口から手裏剣やクナイなどの暗器が発射され、

「ぐわああああ!!!!」

「ぬああああ!!!!」

ウォントはメイカー共々ダメージを受けた。

「これも受けてもらおうか!」

再度スロットを回すエンズ。今度は銃の目で止まる。すると、メダル排出口からノズル付きのマシンガンが出てきて、ウォントとメイカーを銃撃。

「ああああああああ!!!!」

倒れる二人のデザイア。

「さて、仕上げといくか。」

エンズはライドスロットに、今度はセルメダルを三枚投入する。投入しながら、エンズは言った。

「かつて、余が自作した機動兵器が存在した。その名は、インペライザー。」

それは、無双鉄神の異名を取る強力な兵器。

「余はそれを再現できぬかと思った。」

そして先日、エンズは海馬に頼んで、その機能を搭載させた。

「そして、それは成った!」

エンズはライドスロットのレバーを引き、スロットを回す。スロットは、7の目で止まった。同時に、光に包まれるライドスロット。光が消えた時、ライドスロットはエンズが言った兵器、インペライザーに酷似した姿となっていた。エンズは命じる。

「行け!インペライドスロットー!!」

インペライドスロットはそれに答えるかのように、自身に搭載し

である全砲門から、エネルギー弾を乱射した。

「くっ！」

ミサイルランチャーを発射するメイカー。しかし相殺が間に合わず、ウオントと一緒に吹き飛ばされた。

「ちいっ！！！」

ウオントは特大の火球を生み出して、インペライドスロッターに投げつける。これによってインペライドスロッターは小破したが、そのダメージはすぐに修復された。

「自己修復だと！？」

「ウオント、ここは退くべきです。」

「だがまだあと一枚！」

「まだチャンスはあります。今は退いて、体勢を立て直してからでも遅くはありません。」

「…くそっ！！！」

ウオントはメイカーに言われ、スチームを発生させて撤退した。レステイヤーはエンズに駆け寄る。

「大丈夫？」

「無論だ。」

エンズの変身を解除する皇魔。

「それにしてもすごいわね…皇魔が対メイカー戦用に海馬くんを搭載させた機能…ここまでとは思わなかったわ。」

そう。このインペライドスロッターは、皇魔がメイカーの火力に対抗するために考えたものだったのだ。インペライザーの設計図が皇魔の頭の中に記憶されているので、あとはそれを提供するというものだったが。とりあえずインペライドスロッターを元に戻しておく皇魔。

「あつちは終わった頃かな？行ってみましょ。」

「やれやれ…」

レステイヤーに言われ、皇魔は二人でビルへ向かった。

最上階。

アーカードは、目の前の相手を睨み付けていた。そこにいるのは、ブラックドッグの隊長だった存在。しかし、今はガトリングガンを装備したシード、ガトリングシードだ。

一体何が起こったのか。答えはいたって単純である。最上階まで到達したアーカードの目の前で、寄生していたシードに呑み込まれたのだ。

「まさかシードに寄生されていたとはな…」

呟くアーカード。ガトリングシードの背後には扉があり、奥にかなでがいるのは間違いない。だが、かなでを救出するにはガトリングシードを倒さなければならぬのだ。

「せめて挑む国を間違えていなければ、こつはならなかったもの…」
ライフコストを振りかぶるアーカード。と、そこへゆり達が到着した。

「なんだよあいつは!?!」

驚く音無。だが、ダークプリキュアは目の前の存在を知っている。

「シードか!」

「ああ。人間が呑み込まれている」

「ならば私が…」

ブリキユア・ダークパワー・フォルティシモを使って救出を試みる
ダークブリキユア。しかし、それをセフィロスが止めた。

「中身を傷付けなければいいんだな？」

「そうだが…」

「なら俺に任せてもらおう。」

言うが早いか駆け出すセフィロス。ガトリングシールドは当然反応して射撃を行うが、セフィロスは正宗で銃弾を全てさばき、ガトリングシールドに肉薄。一閃、斬り捨てた。すると、

「ウオオ…!!」

ガトリングシールドは大量のセルメダルとなって砕け散り、あとには無傷の隊長だけが残される。

「中身以外『だけ』を斬ったか。ま、あいつにしかできない芸当だな。」

セフィロスがやったことを分析し、評価するクーガー。セフィロスは中の隊長を傷付けないようにして、ガトリングシールドだけを斬ったのだ。しかしこれは剣豪たるセフィロスだからこそできる技であり、それ以外がやろうと思っても簡単にはいかない。いや、できない。

「さすがはセフィロス先生、だな。」

ザックスは頷いた。彼はセフィロスの強さをよく知っているので、これくらいはできるだろうと思っていたからだ。

「雑魚に時間をかけている暇はない。」

セフィロスは扉を正宗で切り刻み、中を確認する。中には、縛られて横になっているかなでがいた。

「かなで！」

「かなでちゃん！」

かなでに駆け寄り、縄をほどいてやる音無とゆり。セフィロスはゆつくりと近寄って、かなでを抱き上げた。かなでは安らかな寝顔を見せている。ずっと凄まじい殺気を放っていたセフィロスだが、その顔を見た瞬間に、全ての殺気が消えた。表情も、心なしか安堵し

ているように見える。

「一件落着、か…」

「ああ！」

「これで事件は解決な。会長が無事でよかった」

クラウドが言い、頷く日向と直井。と、

「ん？何か聞こえないか？」

スネークが異常を伝えた。

「飛行機がこっちに飛んでくるような音が…」

「それくらいはあるだろう。気にするな！」

魔王は気にしていないが、クーガーは気付く。

「…いや、これは普通の飛行機の音じゃねえ。」

クーガーはその音に聞き覚えがあった。

「確か、スカイロッド号だったか…」

再びアンドロイドに狙われていたかなみとイカ娘だが、間一髪でカズマと劉鳳が助けに入り、事なきを得ていた。

「大丈夫かなみ？」

「ありがとうカズくん！」

「助かったでゲソ！」

「礼には及ばない。」

そこで、イカ娘はビルの屋上にスカイロッド号が接近していることに気付く。

「今さら何をしに来たでゲソか…」

「…もしかして…」

かなみはアルターを発動し、チャージマン研の考えていることを読み取る。

「…！カズくんすぐに止めて！」

「あ？何をだよ？」

「早く行って！じゃないと大変なことに…」

チャージマン研は理科担当教師、ボルガ先生を連れてきていた。しかし、実はボルガは、人工的に産み出された爆弾人間なのである。

「何をする！？」

「ボルガ先生！お許しください！」

チャージマン研はスカイロッド号にあるスイッチの一つを押す。すると、ボルガの足元に穴が開き、

「ウオ〜！」

ボルガは落ちていった。そのままビルの屋上へ。

ドガアアアアン！！！！

ボルガは爆発した。

「ああああああああああ！！！！！！！」

爆発に巻き込まれた魔王は壁を突き破って吹き飛ばされていった。

「魔王先生ええええええええ！！！！」

思わず叫ぶ音無。

「音無！魔王先生はもうダメだ！それより、まずいぜ！」

日向は告げた。今の爆発のせいで、ビルが連鎖崩壊を起こしている
と。

「早く脱出した方がいい。」

「んなこたわかつてるよ！！」

クラウドとザックスがそんなやり取りをしている。すると、

（みんな！そこを動かさないで！）

レスティーからテレパシーによる通達があり、直後に一同はビルの
外へと瞬間移動していた。

全壊したビルを見ながら、変装を解除した研は言う。

「可哀想なボルガ先生。でもこうして、立華先輩を救出することが
できました。」

「って何まとめようとしてるでゲソ！お前のせいで余計な被害が出たじゃないカ！！」

「うふふ ごめんごめん」

ひたすらウザイ研に対して本気で殺意が沸きかけているイカ娘。そこへ、

「お菓子好きかい？」

さつき爆発したはずのボルガが現れた。ボルガは爆発しても、いつの間にか復活しているのだ。

「うん、大好きさ」

馴れ馴れしい研。そんな二人を見て、イカ娘は思わず呟いた。

「…キチガイでゲソ…」

「あはは…」

苦笑するかなみ。劉鳳はセフィロスに訊いた。

「セフィロス先生、立華は？」

「無事だ。」

セフィロスはかなでを見せる。かなでは全く目を覚まさず、眠っていた。カズマは呆れる。

「しかし、爆睡してんなあ…自分が危ない状況だったってことにも気付いてないんじゃないかねえか？」

「こいつはそういう子だ。お前だって知ってるだろ？カズヤ。」

「カズマだ！」

クーガーの名前間違いを訂正するカズマ。クーガーは親しい人間の名前をよく間違えるのだが、素で間違っているわけではなくわざとであり、彼なりに遊んでいるだけなのだ。クラウドはカズマに訊く。「そういえば、他にテロリストはいなかったのか？」

「ああ、そいつら「そのことなら、心配はいらないよ。」」
会話に割り込むような形で、イーリヤンと瓜核が現れた。瓜核が説明する。

「さつきイーリヤンに知覚してもらったんだが、他のアンドロイドはブラックとスパイダーマンが片付けたらしいぜ。」

「あいつらいつの間に来てたんだよ…」

ザックスは驚いた。しおんはレスティーに礼を言う。

「先程は助かった。」

「私は可愛い娘の味方だから。」

「…ふん。」

鼻を鳴らす皇魔。ゆりは言った。

「さあ、事件も解決したことだし、説明してもらいましょうか?」

事件を解決したあとはエンズやデザイアについて説明する約束をしていたので、ゆりはそれを求めているのだ。

「教えてくれ。頼む」

「僕にも頼もうか。」

音無と直井もである。

「…レスティー。」

「はい」

皇魔は説明をレスティーに任せた。超能力を使って説明するレスティー。

「エンズ…デザイア…シード…」

「お前ら…こんな連中と戦っていたのか!？」

ゆりと音無は驚き、直井は日向を睨み付けた。

「貴様…なぜこんな大切なことを黙っていた?」

「いや、説明するタイミングがなくてな…」

「説明する必要などない。」

皇魔が不機嫌そうに言う。

「貴様らのような雑魚が真実を知ったところで、足手まといにしかならん。第一、何ができる?」

「…わからない。でも、何かはできるはずだ。」

返したのは音無。

「音無くん?」

「音無?」

「音無さん?」

ゆり、日向、直井は三人揃って音無を見る。そこへ、しおんも割り込んだ。

「皇魔。弱い者には、弱い者なりの戦い方というものがある。」
今しおんの脳裏には、かつて自分が叩きのめしながらも、諦めずに立ち向かってきたとあるプリキユア達の姿があった。

「…くだらん。帰るぞレスティー」

「…じゃあ。」

皇魔は踵を返し、レスティーは軽く手を振って、帰っていった。

「では俺も帰る。かなでをゆっくり休ませてやらなければ…」
かなでを抱いたまま進言するセフィロス。

「お前って過保護だよなあ…ま、せつかくだし、俺の車で送ってやるよ。」

「頼もつ。だが、安全運転でな。」

「了解。」

セフィロスはクーガーと一緒に帰っていく。日向はゆりに訊いた。

「じゃあ、俺らも帰るか？」

「…そうね。かなでちゃんも助けられたし、それじゃあ解散！」

こうして一同は解散することに。

「さて、私も帰るか。」

言ったのはアーカード。と、スネークが訊いてきた。

「なあ。俺、あの先生がいないと帰れないんだが…」

あの先生とは、魔王のことである。

「けど死んじまつたし…どうすりゃいいんだ？」

その時、

「気にするな！」

ボロボロの魔王が来た。

「うわっ！？生きてたのか！？しかしボロボロだな…」

「気にするな！」

気にするなの一点張りな魔王。

「…この男もある意味不死身だな…」

アーカードは呟いた。このあとスネークは、魔王の手で元の世界に返してもらったという。

家に着いた皇魔とレスティー。レスティーは尋ねる。

「そういえば、コンボを使ったのに何ともなきやつ!?!」

皇魔は突然倒れ、慌てて受け止めるレスティー。皇魔は気絶していた。

「…我慢してたのね…」

レスティーは皇魔を担いで家にあがり、ベッドに寝かせたあと、自分の身体から大量のセルメダルを出した。これはガトリングシードのもので、ゆり達を瞬間移動で回収すると同時に、こちらと同じく瞬間移動で体内に回収していたのだ。とりあえず念動力を使って、皇魔の分と海馬の分に分けておく。

「この分だと、私のコアを使ったコンボを使うには、まだまだかかりそうね。」

言ったあと、レスティーは皇魔がウォントから奪ったコアメダルを出し、眺める。

「まずはこっちかな?」

「…ん…」

かなでは目を覚ました。

「起きたか。」

すぐ側にはセフィロスがいる。

「あたし…どうしてここに？」

セフィロスはかなでに説明をし、説明を聞いたかなでは、

「ごめんなさい。」

と謝った。

「お前が気にかけることじゃないさ。」

すると、

「ちわー。ちんとん亭ですが、チャーシュー麺と麻婆豆腐持って来ました。」

セフィロスが頼んでいた出前が来た。時刻はもう正午である。

「お前の好きな麻婆豆腐を頼んだ。すぐに持つてくる」

取りに行くセフィロス。かなでは、

「…麻婆豆腐に釣られたなんて、口が裂けても言えないわ。」

と、自分が誘拐された理由を黙っておくことにした。

第七話 突入と乱闘と奪還作戦（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

？「当たれ…当たれ…来い…来い…！！」

アプリシィ「人間というのは、つくづく愚かだな。」

レスティ「今回は、このコンボで行きましょう。」

第八話 成金と博打と炎熱コンボ

インペライドスロットー

ライドスロットーにメダルを三枚投入し、7の目を揃えることによつて起動するライドスロットーのバトルモード。皇魔がメイカーの火力に対抗するため、海馬に命じて搭載させた。見たまま人間サイズのインペライザー。

基本的にエンズとレスティ、海馬の命令に従うが、超高性能なAIが搭載されており、ある程度の自己判断が可能。人間サイズとはいえ、機能はインペライザーと全く同じで、凄まじい火力と馬力、自己修復機能を持つ。腕を剣に変化させられるので、格闘戦も得意。

第八話 成金と博打と炎熱コンボ（前書き）

面倒くさくなっただんでオーズ式あらずじはやめます。でも、気まぐれでやるかもしれない。

第八話 成金と博打と炎熱コンボ

皇魔は、ルルーシュとチェスをやっていた。勝負は、五分五分である。

「やるじゃないか。」

「貴様には負けん。」

盤上の駒を動かし合う二人。

「…」

かなではじつとそれを見ている。レスティーに抱かれながら。

「レスティーさん。そろそろ離してくれないかしら？」

「やーだ 嫌なら力づくで逃げてもいいのよ？」

「…」

嫌ではない。だが、それならとづくにやっている。しかし、

(…動けないのだけど…)

今かなではレスティーがかけた金縛りによって動きを封じられており、逃げられなかった。かなではオーバードライブによって、屈強な男性すら片手で払いのけられるほどの力を発揮できる。だが、レスティーの念動力はそれを遥かに上回っており、かなでの脱出を完璧に封じていた。ちなみに、レスティーの正体やエンズについては既にゆりから説明を受けている。セフィロスもだ。

そうこうしているうちに、勝敗が決まる。勝ったのは、ルルーシュだ。

「チェックメイト。今回は俺の勝ちだな」

「ちっ…」

思わず舌打ちする皇魔。そこでレスティーはようやくかなでを解放し、皇魔に言う。

「かなりいい勝負だったんじゃない？」

「どこがだ。余の完敗ではないか」

「いや、そんなことはない。」

「僕から見たら、かなりの接戦だったと思うよ？」
自棄になる皇魔を、ルルーシュとスザクが励ます。

「戯言はよせ。素直に貴様は弱いと言ったらどうだ？」

しかしやはり自棄になる皇魔。それを見ていた日向は、音無に尋ねた。

「いや、いい勝負だったよな、音無。」

「ん？ああ。」

「こんなことなら、なんか賭けてりゃよかったぜ。」

そこで直井が割って入り、鼻を鳴らす。

「ふん。チェスなどルールの大半も理解していない馬鹿の貴様に、

今の勝負の具合がわかるのか？どうせ当てずっぽうだろう。」

「んだと！？」

「おいお前ら！」

慌てて仲裁に入る音無。

「賭けと言えば……」

切り出したのはゆりだ。

「かめやまたくや亀山拓也の話は有名よね。」

ゆりが言う亀山という男は、無一文から博打、すなわちギャンブルを使って一攫千金を手に入れ、そこからさらに博打を続けて、会社を経営できるまでの財力を身に付けたという、かなり有名な人物だ。要するに成金だが。

「羨ましいよなあ……俺もそれくらい当ててみたいぜ。」

亀山の強運を羨む日向。それに対し、皇魔は言った。

「そんなもの、ただ偶然が重なっただけだ。その亀山とやらは、賭けに頼らねばならぬほど、追い詰められていたのだろう？そうなるまで、一体どのような生き方をしておったのか……情けないやつだ。」

「……言われてみれば、確かに情けない話ではあるな。」

ルルーシュは同意する。

「何かに賭けるようでは駄目だ。常に最善を考え、それを実行し、そして確実に成し遂げるだけの力を身に付けねば。」

「で、あなたはそれだけの力を持っていたかつての自分を取り戻したいと。」

「そういうことだ。」

レスティーの言葉に頷く皇魔。音無は進み出る。

「皇魔。何か協力してほしいことがあったら、遠慮なく言ってくれ。できる限り力になる。」

「…結弦がやるなら、あたしも。」

「あたしもやるわ。」

「じゃ、俺も。」

「勘違いするな。僕は貴様ではなく、音無さんに協力するんだ。」

「…よくわからないが、俺も手を貸す。」

「じゃあ僕も。」

次々に協力を申し出るかなで、ゆり、日向、直井、ルルーシュ、スザク。皇魔は、

「貴様らなど足手まといだ。だが、邪魔さえせねばよい。好きにしろ。」

と、そっけなく返す。そこで、レスティーはあることに気付いた。

「そういえば、あなた達には教えてなかったわね。」

そう、レスティーはルルーシュとスザクにディアのこと、エンズのことを教えていなかったのだ。というわけで、いつもの通り超能力を使つて教える。

「なるほど…こういうことか…」

「…」

納得するルルーシュと、なにやら黙って震えているスザク。皇魔はため息を吐いた。

「また貴様は勝手に…」

「いいじゃない別に。味方は多い方がいいでしょ？」

レスティーはそう言うが、実際には、このことを知っている者が多いと面白いことになりそうだというのが理由だ。

その時、

「すごいじゃないか!!」

スザクが突然皇魔の手を握った。どうやら先ほどの震えは、あつちの意味の震えだったようである。

「まさか君がこんなすごいことをしていたなんて！燃える！なんて燃えるんだ！僕は惜しみない協力をさせてもらうよ!!」

「わ、わかった。わかった離せ。気色悪い」

あまりの熱意に引く皇魔。

「あの皇魔が…」

「引いてる…」

日向やゆりを始めとするクラスメイト達は、珍しい光景に一斉に目を向けていた。

「…」

音無はそれを見て、何かを感じていた。

亀山拓也の息子、亀山裕一は、いつも通り夜遅くに帰宅していた。

そして、いつも通りにため息を吐く。これまたいつも通りに、拓也がいなかったからだ。拓也はいつも自分が帰る前に仕事が終わっているの、本来なら家にいるはずである。だが、どこにいるかはわかっていて。また、博打をしに出掛けたのだ。拓也はかつて博打で大勝し、自分の会社を持つまでに利益を得ている。その時の快感が忘れられず、仕事のあとはほぼ毎日、博打をしに言っているのだ。

（また、か…）

と思う裕一。そこで、

「ただいま」

拓也が帰ってきた。裕一はまたいつも通りに、拓也に注意する。

「親父：いつも言ってるだろ？賭け事はもうやめろって。ちゃんと稼ぎもあるんだから、そんなことを毎日しなくたって……」
すると、思いがけない答えが返ってきた。

「ああ、会社な、今日倒産しちゃった。」

「……………はあ!？」

耳を疑う裕一。拓也は再度説明する。

「だから、今日会社が倒産しちゃったんだって。」

その説明を聞いて、裕一は拓也に掴みかかった。

「ふざけんなよ!倒産!？そんな大変なことになってたのに、賭け事やって遊んでたのかよ!？」

「こんな時だからこそだ。」

「…は？」

突然の言葉に思わず手を離す裕一。拓也は説明する。

「幸い、借金をすることはなかった。残った金を使って、また賭け事に打ち込めばいい。そうすれば、また」

「いい加減にしろよ!…」

裕一はついに激怒した。

「金が残ってんなら、それを元にしてまた仕事を始めりゃいいだろ!？なのにもまた賭け事!？何で現実を見ねえんだ!！またうまくいくとも思ってたのかよ!？」

「大丈夫、うまくいくさ。幸運の女神は、いつだって俺に微笑んで

るんだからな。」

それを聞いて、裕一は思った。駄目だこいつ。このままじゃ絶対まずい、と。

「じゃ、もう寝るわ。」

自室へ戻る拓也。裕一は必死に打開策を考え、そして思いついた。

「…あの人に頼るしかない…!!」

「なるほど、話はわかった。だがなぜ余なのだ!!」

裕一から話を聞いて、それから怒る皇魔。裕一が頼ろうと考えていた人物は、皇魔だったのだ。裕一は理由を話す。

「昨日皇魔さんが、賭け事の勝ちなんて偶然の重なりすぎない。

何かに賭けてるようじゃ駄目だって、言ってたから…」

裕一は昨日の皇魔の言葉を聞いていたのだ。

「俺、本当にその通りだって思ったから…だから、いざって時は皇魔さんに頼ろうと思ってる…!」

「貴様の親のことだろう?ならば赤の他人でしかない余になど頼らず、息子である自分の手で」別にいいじゃない皇魔。「…レスティ…」

唐突に割って入るレスティ。

「確かに、自分の身内の問題は自分で解決しなきゃいけない。でも、誰かに頼らなきゃ解決できない問題だってあるのよ。」

「だが「それに…」?」

レスティーは皇魔に耳打ちした。

「それだけの強い欲望…デザイアが目をつけないはずがないわ。いつデザイアが現れてもいいよう、監視くらいは付き合っただけあげべきじゃない？あなた自身のためにも。」

「…」

皇魔は考えた。他人の家庭事情など、彼にとってはどうでもいい。だが、デザイアが絡むとなれば話は別だ。今回のようなケースは、特に大きな欲望が生まれる可能性が非常に高い。大量のセルメダルを手に入れるチャンスである。

「…よし、貴様の両親の更正に付き合っただけやる。」

「っ！ありがとうございます！！」

裕一は思い切り頭を下げた。しかし、皇魔は内心こう思っている。

（既に手遅れかもしれんがな）

とあるパチンコ店。拓也はここに来ていた。

今彼は、非常に焦っている。

かれこれもう三時間は経つのだが、一向に当たりが来ないのだ。台を変えてみても、同じである。

こんなことは初めてだった。今までは開始から十五分もすれば、確変大当たりが来ていたのだ。しかし、疑似連すら来る気配がない。
(何でだ…何で今日に限って…!!)

昨日までは来ていた連続大当たり。そのおかげでまだまだ打てるが、このままでは大損だ。

と、突然リーチがかかった。7のリーチだ。

「来い…来い…当たれ…当たれ…!!」

思わず口に出す拓也。しかし、リーチは無情にも外れてしまう。

「ああああああああ!!!!」

拓也は敗北の絶叫を上げる。

その時、

「強い欲望の気配を感じて来てみれば、素晴らしいな、ここは。欲望が渦巻いている」

人間形態のアプリシイが現れた。実はこのパチンコ店には、海馬がデザイアの襲来を阻止するために、欲望の気配を遮断する装置を設置したのだが、

「その中でも、お前の欲望はより強い気配を放っていた。」

拓也の欲望は装置のパワーを上回り、アプリシイの到来を許してしまつたのだ。

「解放してもらうぞ、その欲望を。」

怪人形態となつたアプリシイは、拓也にセルメダルを投入した。

「…シードの気配…」

レスティーはシードが誕生した気配を感じ取つた。しかし、今は授業中だ。抜け出すわけにはいかない。と、

『授業中失礼します。先生方は、直ちに職員室へ集合してください。繰り返します。先生方は直ちに…』

放送が入つた。

「そういうわけだ。各自、自習をしている。」

セフィロスは教室から出ていく。

「皇魔！」

「…よし。」

レスティーはそれを見計らい、瞬間移動を使って皇魔とともにシードを探索しに行った。

街中では、見たまま氷を模した姿のシード、コオリシードが暴れ回っていた。だが、コオリシードはパチンコ店の客全員分の膨大な欲望を吸収したため、全長9メートルという巨体に成長していた。コオリシードは街を破壊しながら、さらに欲望を吸収していく。それを見ながら、アプリシイは呟いた。

「人間というのは、つくづく愚かだな。ここまでシードを成長させるほどの欲望を生み出すとは…人間など、俺達にとって道具にしかならん存在だ。せいぜい、その責務を果たしてもらおう。」

逃げ惑う人々を一瞥し、アプリシイは嘲笑う。

「シードを成長させ、この世界を破滅させるという責務をな。」

「ほう…これは…」

皇魔はニヤリと笑う。そこで、レスティーは気付く。

「あのシード、中に人間が呑み込まれてるわ。」

「知ったことか。ベルトとメダルをよこせ」

「その前に…」

レスティーはコオリシードに呑み込まれている人間を、瞬間移動によって救出した。呑み込まれていたのは、拓也だった。レスティーは拓也の頭に手を置き、超能力で意識を覚醒させる。

「…俺は…」

呆然と呟く拓也に、皇魔は尋ねた。

「貴様が亀山拓也だな？」

「…そうだが、君は？」

「貴様の息子に、貴様を更正するよう頼まれた者だ。」

「更正？」

「とはいえ、実際には貴様をどうこうするつもりはない。ただ一つ言うことがあるとすれば…」

皇魔は、言う。

「全てを賭けでどうにかできるほど、世界は甘くない。ということだけだ」

そして行ってしまった。

「うまく逃げてくださいね。」

レスティーも行く。

「…」

拓也は、二人の背中を見送っていた。

皇魔はコオリシードを見る。

「なるべく急いで片付けるべきだな。」

「だったら今回は、このコンボでいきましょう。」

レスティーが出したのは、紅に輝く三枚のコアメダル。ウォントのメダルだ。

「わかった。」

皇魔はベルトとメダルを受け取り、歩き出す。そしてコオリシードの目の前で止まった皇魔は、

「…賭けるものは命。」

まず先日ウオントから奪ったマグマコアメダルを、エンズドライブに装填。

「敗北の代償は死。」

続いてコウセンコアメダルを装填。

「勝利の報酬は力の回復、か…」

最後にホノコアメダルを装填し、エンスキャナーで、

「これぞ真の博打よ!!変身!!」

ベルトをスキャンした。

マグマ!コウセン!ホノオ!マホマホ! マグコーホー

皇魔は全身が真紅のエンズ、エンズ マグコーホーコンボに変身した。

「うおおおおオオオオオ!!!」

光生はいつものようにケーキを作りながら、エリカに訊いていた。

「どうしても欲しいものが手に入らない時、この上ない精神的苦痛を味わったことはあるかね?」

「あります。」

「私にもある。その苦痛は、まるで業火に全身を焼かれているかのようにだった。」

ケーキを完成させた光生。

「私はこう思うのだよ。エンズこそまさしく、欲望の体現者だね。」

続いて、咆哮を上げ続けるエンズに目をやる。

「素晴らしいッ！！」

エンズのコンボは、三枚のコアメダルの力を全身に行き渡らせ、相乗効果で強化しているというものだ。つまり、肉体の部分的にしか発揮しない効果を全身で、より強力な形で発現できるのである。

例えば、

腕部だけを光速で動かせるという能力が、

全身を光速の十倍で動かせるという能力に強化されるように。

エンズはそれを利用してコオリシードの拳を避け、逆にこちらから燃える拳を叩き込む。弱点属性かつ高威力な攻撃を受けたコオリシードはよろめき、口から氷の棘を吐いて反撃する。これも回避したエンズはコオリシードの腹へラッシュを、全力で、全速力で食らわせた。

「オオオオオ！！！！ウオオオオオアアアアアアアア！！！！！」

カンフビコンボとはうって変わって変わり、喉が潰れるのではないかと思うほど大声で叫ぶエンズ。マグマコアメダルには興奮作用があり、そのため精神が高揚し、叫ばずにはいられないのだ。

「アアアアッ!!!!!!」

両手から超パワーのレゾリウム光線を放ってコオリシードを転倒させるエンズ。

スキヤニングチャージ!!

それをチャンスと見たエンズはベルトをスキヤン。全身に3兆度ものの業火を纏い、光速の十倍、つまり最大速度で突撃する技、マグココーホーストライクを発動する。

「ガアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

大量のセルメダルとなって碎け散るコオリシード。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

エンズは一際大きな咆哮を上げ、それで落ち着いたのか、変身を解除。コンボの副作用でダメージを受けた皇魔は、倒れる。

しかし、その身体は地面に着く前に、レスティーが受け止めた。皇魔は呟く。

「一度の賭けで全てを取り戻せるなら、余は迷わず…挑むのだが…

…な……………」

皇魔は気絶した。そんな彼を抱き締めながら、レスティーは言う。

「…きつと取り戻せる。それまで、全力でサポートするから…」

レスティーは一度家に瞬間移動して皇魔を寝かせてから学園に戻り、セフィロスに皇魔は早退したことを伝えた。

「…撤退する。」

アプリシイは人知れず姿を消した。

「なあ裕一。」

拓也は偶然帰宅途中の裕一と出会い、一緒に帰っていた。

「…なに？」

「…俺、賭け事やめて真面目に働こうと思うんだ。」

「…!!」

「全部賭け事でどうにかなるほど世界は甘くないって言われてな…
こんなことを言うのは筋違いかもしれないが…また一からやり直そ
う。」

「…うん!!」

父は変わった。その事実を前にして、裕一は思う。やっぱり皇魔さ
んに相談してよかった、と。

第八話 成金と博打と炎熱コンボ（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

日向「来客全員が人質かよ！！」

音無（考えるー！！考えるんだー！！）

皇魔「貴様らはなぜ面倒事に余を巻き込むのだ！！」

第九話 策謀と挑戦とデスゲーム

マグコーホーコンボ

マグマコアメダル、コウセンコアメダル、ホノオコアメダルによって完成する、エンズの炎熱系コンボ。ウォントとアプリシイが双子の兄弟のような関係にあるため、カンフブヒと似通った部分がある。

3兆度もの業火を操り、任意に光速の十倍のスピードで動ける。

必殺技は、全身に炎を纏って突撃する、マグコーホーストライク。

パンチ力 250t

キック力 320t

ジャンプ力 ひと飛び360m

走力 100mを2秒

マグマコアメダル

ウォントのコアメダルで、エンズの頭部をマグマヘッドに変化させる。

興奮作用があり、精神が高揚する。他にも、口から炎を吐くことが可能。

第九話 策謀と挑戦とデスゲーム（前書き）

今回は、あのネタです。

第九話 策謀と挑戦とデスゲーム

現在ロストグラウンド学園は、とある話題で持ちきりだった。

内容は、今絶賛人気沸騰中のシューティングゲーム、『インキュベーターマストダイ』についてだ。プレイヤーは戦闘機のパイロットになって、インキュベーターという宇宙怪獣と戦っていく、まあよく言うところのインベーターゲームのようなもののだが、バーチャルシステムが採用されているため実際に自分が操縦して戦っているかのような感覚が楽しめ、意表を突かれるような敵の攻撃など、なかなかレベルの高いゲームに仕上がっている。

そもそもインキュベーターとは、とある魔法少女系アニメに登場するマスコットの可愛らしいキャラクターの本名なのだが、実際はそのアニメにおける全ての黒幕であり、やっていることも外道そのもの。あまりの外道っぷりにかなりの視聴者が激怒し、『こいつを好きだけいたぶれるゲームを開発してほしい』という多数の要望のもと、このゲームが開発された。タイトルの意味も、インキュベーター死すべし、と、そのまんまである。当然ロストグラウンド学園にもそのゲームにハマっている者がおり、攻略情報を交換し合っている者までいた。

「僕としてはこのアニメ、かなりの良作だと思うんだよ。」

スザクもまたこのゲームのプレイヤーで、元となったアニメについて、いつものように親友、ルルーシュに熱弁していた。

「なぜだ？俺からすれば、あんなつまらないアニメはないと思うが。」
ルルーシュはそう言うが、スザクは否定する。

「甘いねルルーシュ。いいかい？これまでの魔法少女モノといえば、魔法の杖に使い魔、さらに異形の怪物と戦っていくというのが一般的だった。しかしこのアニメは、実は使い魔こそが全ての黒幕であるということ。戦い続けていけばいずれ主人公も怪物になってしまうということなど、魔法少女モノとしての常識を破壊している。あまりにも設定がありきたりすぎて『飽き』が来ていた魔法少女アニメ業界だが、このアニメの出現はその業界に新たな風を巻き起こすはずだ！世間でこそ鬱アニメと言われているが、僕は新たな革命が起きると信じる！」

「わかったわかった！わかったから落ち着け！！」
いい加減スザクの熱弁にイライラしてしまうルルーシュ。当然だが、「おっと、つい熱くなっちゃったよ。じゃあ本題に入るね？」
どうやら本題はここかららしい。

「実は今週の土曜日、このゲームの全国大会がこの街であるんだ！それに参加しようと思っただけで、ルルーシュも参加しない？」
「断る。」

「何でさ？シューティングは、ナイトメア戦で慣れてるだろう？」
「興味がない。」

「うーん…それじゃあ皇魔。一緒に参加しない？」
「なぜそこで余に振るのだ!？」
いきなり話を振られて驚く皇魔。

「いいじゃないか。もしかしたら君がデザイアと戦うのに有効な何かを得られるかもしれないし」

「断る。余は興味が『いいじゃない。』…レスティー…」
皇魔とスザクの会話に割り込むレスティー。

「自分は一刻も早く力を取り戻さなきゃいけないから、遊んでる暇なんてない…そう思ってるのはわかるわ。でも、休息だって必要よ？それに、ここ数週間あなたの側にいてわかったけど…」

「…何だ。」

「あなた、人付き合いが苦手みたいじゃない。人付き合いって大切だから、こういうのをきっかけに少しでも慣れていくべきよ？」

「必要ない。余はデザイアと戦うための力さえあれば、何もいらぬ。」

「…そう言うなって。俺も行くし」

今度は日向が割り込んできた。ゆりも一緒に言う。

「あたしも行くから。音無くんやかなでちゃんも一緒にね」

「僕も行くことを忘れないでほしいな。」

自己アピールする直井。

「余が行く理由にはならないか！」

「そんなこと言わないで。土曜日の大会には、結弦も選手として出場するから。」

言ったのはかなでだが、

「それが何だというのだ！余が行く理由にはならんだろう！」

断固として拒否する皇魔。

「そう言わずに、見るだけでもいいから来いよ。気分転換にはなる」
最後に音無が言い、

「だから、貴様らはなぜ面倒事に余を巻き込むのだ！！」

皇魔は悲鳴にも近い声を上げた。

結局レスティーの、自分のセルメダルをあげるから、という言葉に

折れ、皇魔は行くことになった。

街を散策していたメイカーは、自分の足元に飛んできたポスターを拾う。そこには、『第一回インキュベーターマストダイ全国大会開催！』と書いてあった。

「ほう…これは…」

土曜日。

ついに始まった全国大会。ロストグラウンド学園から出場するのは、スザク、日向、音無の三人であり、皇魔、レスティ、ゆり、かなで、直井、ルルーシュは観客席での応援だ。

試合形式は、各ブロック一対一でゲームを始め、クリアまでの得点を競うというものである。クリアできなかった場合はその場で敗北が決定し、両方ともクリアできなかったらその時点での得点を競う。

と、ルルーシュは皇魔の様子に気付く。

「どうした？すごいクマだぞ？」

皇魔の目元に、すごいクマができていたのだ。

「…」

皇魔は何も言わない。だんまりを通して。レスティーはルル―
シュにテレパシーで伝えた。

（実は皇魔ね、夢を見たの）

（夢？）

（こんな夢よ）

皇魔の目の前に、小動物がいた。小動物は言う。

『僕と契約して、魔法少女になってよ！』

この小動物こそ、インキュベーターである。たまにアニメを見るの
で皇魔は知っていた。しかし、同時に妙にも思う。

『余は男だぞ？契約を迫るのは筋違いなのではないか？』

それを聞いて、インキュベーターは言った。

『何言ってるんだい？君は女の子じゃないか。』

『何を血迷ったこと…を…？』

皇魔は見た。

そして気付いた。

自分が、例のアニメの主人公である少女と同じ姿、
服装であるとい
うことに。

『な…な…』

声まで同じになっている。

「ぬああああああああああああああああああああああ
！！！！！！！！！！」
そこで皇魔は目を覚ました。

(で、起きた時間は真夜中だったんだけど、同じ夢を見そうので、今まで眠れなかったの)

(…災難だな)

ルルーシユは皇魔に、哀れみの視線を向けた。

試合はヒートアップし、何とスザク、音無、日向は三人とも決勝戦まで残った。決勝戦は残った選手四人によるバトルロワイヤル方式である。といっても、やることは今までと変わらないが。

「結弦、すごい。」

「さすが、音無くんね。」

「音無さんは当然だが、あの二人が残ったのは奇跡だな。」

それぞれ感想を言うかなで、ゆり、直井の三人。

「スザクはかなりやり込んでいるからな。」

ルルーシユは頷く。

「でも相手は…」

ゆりは四人目の選手を見た。その選手の名前は、なしまさんへい名島三平。様々なゲームの全国大会に出場しており、今のところ負けなしというかなり有名なゲーマーである。

「けど、なんだか様子がおかしくないかしら？」

かなでは名島の不審な点に気付いた。目がうつろで、しかも小刻みに震えている。明らかにまともな状態ではないのだが、それでもここまで負けなしだ。さすが天才ゲーマー、と、全員が思っていたが、

とある言葉によって、それは驚愕に変わる。

「さつきからシードの気配がするんだけど、周囲の欲望が強すぎるせいで、うまく居場所が掴めないわ……」

言ったのはレスティー。それを聞いたルルーシュは驚く。

「シードの気配だと!?!」

「まさか、シードに寄生されてるとか!?!」

ゆりは再び名島を見るが、名島はなんともなっていない。シードに寄生された場合、身体に包帯のようなものが巻き付いていたり、額に赤いオーブが出現しているはずなのだ。

その時、

「な、なんだ君は!?!うわっ!?!」

「ぎゃあっ!?!」

司会者と警備員をはね除け、怪人形態のメイカーが現れた。大パニックになる会場。だが、

「静粛に!」

メイカーがマイクで言った瞬間、観客達は黙った。メイカーはそのまま演説する。

「今日はゲームが好きらしいあなた方を、素晴らしいゲームにご招待しようと思います。」

メイカーの発言に、再びざわつき始める会場。メイカーは構うことなく続ける。

「ルールは簡単。彼と勝負をして、勝っていたらいいのです。」

「

メイカーが指名した相手は、名島だ。」

「試合形式は対一で、挑戦者は自由です。今勝ち残っている方も、会場からの飛び入りでも構いません。ですが、全ての挑戦者が敗れた場合は…」

メイカーは、何かのスイッチを出す。

「このスイッチを押して、会場に仕掛けてある爆弾を爆破させていただきます。」

「ば、爆弾!?!」

「おいおい! 観客全員人質ってことかよ!?!」

驚く音無と日向。会場からも悲鳴が上がる。

「さあ、早速始めましょう! まず誰からですか!?!」

それらを尻目に催促するメイカー。名乗りを上げたのは…

「くそつ!?! 俺だ!?! やってやる!?!」

日向だった。

「では、準備を始めてください。あと、会場の皆さん。」

メイカーは観客達を睨み付ける。

「当然ながら逃げようとしても爆破しますから、ご注意ください。」

「準備は終わったぜ! その代わりに、俺が勝つたら…」

「わかっています。皆さんを解放しましょう」

そして、ゲームが始まる。バーチャルシステムが作動し、出現するインキュベーター達。ここまででは普通だ。しかし、日向は異議を申し立てる。

「何だよこれ!?! ライフが二つしかねえじゃねえか!?!」

そう、本来なら五つあるライフアイコンが、二つまでしかなかったのだ。しかし、メイカーはしれつと言う。

「天才ゲーム相手に、ただやるのではつまらないでしょう? それから、難易度もさらに高いものには上げさせてもらいました。」

「汚ねえ!!」

「そうでしょうか？彼を見てください。」

メイカーは名島を見る。名島は敵の攻撃を避け、確実に得点を増やしていた。

「マジかよ…うわっ!？」

被弾してしまう日向。

「よそ見をしている暇がありますか？」

「くっそ…!!」

メイカーから指摘を受けた日向はすぐに反撃に出る。しかし、難易度が半端なく、既に一撃喰らっている状態なので、すぐ負けてしまった。

「ゲームオーバーですね。さあ、次は誰の番ですか!？」

さらなる挑戦者を捜すメイカー。今彼は、こう思っていた。

（いいですよ…観客達の『生きたい』という欲望が高まっています。彼らには、我々の使命の尊い犠牲になってもらいましょう）

メイカーの目的は、観客達の生きたいという欲望を利用して、セルメダルを増やすことだったのだ。

「くそ…まずいぜこいつは…」

音無のところまで来る日向。

「確かにまずいな…」

音無は状況を確認する。難易度は極限まで高い状態で、相手は最高のプレイヤーを味方につけている。その上、挑戦者がいなくなれば大量虐殺…どう考えても不利すぎだ。

（くそ…どうすればいい!?考える!!考えるんだ!!）

必死に打開策を考える音無。と、スザクが言った。

「僕が行くよ。」

「枢木!?!でも!!」

「僕ならいける。いろいろと慣れてるからね」

音無が止めるのも聞かず、挑もうとするスザク。

次の瞬間、

「余が相手だ!!!」

会場に声が響いた。名乗りを上げたのはもちろん、皇魔である。皇魔は一度跳躍し、空中で一回転してゲームのコックピットにたどり着く。

「始めようではないか。」

「…ずいぶん自信ですね。いいでしょう」

承諾するメイカー。音無は慌てて駆け寄る。

「おい皇魔！お前、このゲームやったことあるのか!？」

「ない。だが、操作法は知っている。それだけわかれば十分だ」

音無は、皇魔の言っていることの意味がわからなかった。相手は天才ゲーマーで、自分は全くの初心者。にも関わらず、操作法さえわかれば十分だと言ったのだ。

だが、音無はなぜか安心できた。

皇魔なら、絶対に大丈夫だと。

やがてスタンバイが終わり、ゲームが始まる。相変わらず天才的なプレイを見せる名島だが、観客達はそれ以上に、皇魔の操作に目を奪われていた。

ここで改めて説明しておくが、皇魔の正体は転生したエンペラ星人である。宇宙船の操作は手馴れたものだ。

そして、今まで生きてきた数万年分の記憶と経験が、皇魔の中には残っている。

「遊びと実戦。どちらの次元が上かと訊かれれば、当然実戦だ。遊びの経験しか積んでおらん小僧に、実戦経験を積み続けてきた余が敗れると思うか？」

そして、ついにゲームクリア。得点は満点。名島の得点は、皇魔に一步、及んでいない。皇魔の勝ちだ。糸が切れたかのように倒れる名島。

「ちっ…洗脳が…」

メイカーは舌打ちした。メイカーは既に洗脳能力を備えたシードを生み出しており、洗脳が解除される条件として名島の敗北を設定していたのだ。

「遊びは終わりだ。」

皇魔はリフレクターマントを出しながらコックピットから飛び出すと、流れるような動作でメダジャベリンを取り出し、柄を伸ばしてメイカーの手からスイッチを弾き飛ばす。

「本当の意味でな。」

そのままレゾリウム光線でスイッチを消滅させたあと、メダジャベリンを真上に放り投げ、レスティーのもとから瞬間移動で飛んできたエンズドライバーとコアメダルをセット。

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

変身してメダジャベリンをキャッチし、メイカーに向けた。会場から歓声上がる。

「さあ、貴様のシードを出せ！」

「…いいでしょう。来なさい！」

エンズから言われ、メイカーは自分が生み出したシードを呼び寄せた。やがてやってきたものを見て、エンズの思考は停止する。

やってきたシードは、インキュベーターがそのまま人型になったようなシード、インキュベーターシードだったからだ。

「…」

エンズは沈黙し、観客達も黙る。すると、インキュベーターシードはカタコトで、しかも野太い声で、こう言った。

「僕ト契約シテ、魔法少女ニナツテヨ！」

その言葉を聞き、今度こそ弾かれるように逃げ出す観客。ついに観客は、音無、日向、スザク、ルルーシュ、かなで、ゆり、直井、レスティーしかいなくなった。

「僕ト契約シテ、魔法少女ニナツテヨ！」

同じことを繰り返して言うインキュベーターシード。

「……」

エンズはまだ黙っている。そして、

「僕ト契約シテ」「うあああああああああああああ！……」

エンズはインキュベーターシードに襲い掛かり、メダジャベリンで滅多打ちを始めた。

「な、なに！？」

「皇魔くん、どうしたの？」

「錯乱したか！？」

驚くゆり、かなで、直井。レスティールルージュは事情を知っているのです、何も言えなかった。

数分後。

「ボ……ボクト……ケイ……ヤ……」

必殺技さえ喰らうことなく、インキュベーターシードは砕け散った。

エンズはメイカーを睨む。

「貴様……よりによってなんとというシードを生み出すのだ……！」

「えっ！？えっ！？？」

エンズの気迫が凄まじすぎて加勢できなかったメイカーは、さらに慌てる。エンズはゲーム中ですら理性を保つのに苦労していたのだから、こんなシードを生み出されたのは、全くもって運が悪いとしか言いようがない。

「レスティール……！」

「はっ、はいっ……！」

レスティールは気迫に圧されながらもエンズの要求を察し、メダルを瞬間移動で渡す。

マグマ！コウセン！ホノオ！マホマホ！ マグコーホー

「貴様は…生かして帰さん！！！！」

エンズはマグコーホーコンボにコンボチェンジし、光速の十倍で動きながら、反撃も許さぬ攻撃を繰り返す。

スキヤニングチャージ！！

「ウオアアアアアアアアアアアア！！！！」

マグコーホーストライクを放つエンズ。

「くっ！！」

対するメイカーは電磁シールドを生成し、正面から受け止める。

拮抗する力と力。やがて、

「ぐああああ！！！！」

メイカーは敗れて弾き飛ばされ、

「ぐっ…次こそは必ず…！！」

スモークグレネードを使って逃げた。

その日の夜。

「…」

皇魔はベッドの上に横になっていた。レスティーは今回の皇魔が可哀想すぎて声をかける気が起きず、自分達の分と海馬に渡す分のセルメダルを分けていた。と、

「…」

レスティーは一枚のメダルを出す。

それは、灰色のコアメダル。メイカーのコアメダルだった。

後日。

例のアニメは最終回を迎え、スザクは皇魔に感想を言った。

「やっぱり神アニメだったよ！」

「もっ良いわ!!！」

第九話 策謀と挑戦とデスゲーム（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

カザリ「嫌だつて言つたら？」

コレク「貴様には知る権利がある。」

海馬「デザイアの研究資料！？」

第十話 取り引きと研究とデザイアの秘密

第十話 取り引きと研究とデザイアの秘密（前書き）

今回はデザイアの誕生に迫ります。あと、グリードとデザイアの力の差を知っていただけるでしょう。

第十話 取り引きと研究とデザイアの秘密

一人の老人が、街を散策していた。しかしこの老人、ただの老人ではない。コレクの間態だ。

と、コレクは唐突に歩みを止め、言う。

「それで気配を消しておるつもりか？姿を見せたらどうだ。」
すると、

「…へえ、バレてたんだ？僕のこと。」

近くの柱の陰から、一人の青年が姿を現した。青年の名はカザリ。グリードの一人である。コレクはそちらを向き、カザリに尋ねる。

「貴様：グリードのカザリだな？」

「驚いたなあ、本当に僕達のこと知ってるんだ。いつから気付いてたの？」

「貴様が我らの周囲を嗅ぎ回り始めてからだ。」

「最初からってわけ？鋭いなあ。何でほっといたの？」

今度はカザリから質問し、コレクは淡々と答える。

「特に害はなさそうだと思ったからだ。」

「なるほど…今回僕に声をかけた理由は？」

「貴様と取り引きがしたかった。」

「…取り引き？」

首を傾げるカザリ。コレクは自分の要求を伝える。

「要求は一つ。我らデザイアと、エンズへの絶対不干涉。」

「…つまり、君達に何もするなってこと？」

「そういうことだ。代わりに、こちらからも貴様らには干涉せん。」

実は、カザリはある人物からデザイアとエンズの情報を聞き、同時にそれらを探ってほしいとも依頼されている。カザリ自身も興味があったことであり、ここで手を引くわけにはいかない。

「嫌だっって言ったら？」

「…ならばどうしよう。」

コレクは怪人態に変身し、両肩から剣を抜く。

「貴様が勝てば、好きにして構わん。しかし、わしが勝ったら、手を引いてもらう。これで良いな？」

「…いいよ、それで。」

コレクの提案をのんだカザリは、怪人態に変身する。

「君達は相当強いって聞いてるけど、進化した僕に勝てるかな？」

「ほう…進化したのか。では、どう変わったのか見せてもらうとしよう…」

こうして、グリッドvsデザイアの戦いが始まった。

「…」

海馬は技術開発室で、レスティーから届けられたメイカーのコアメダルを見ながら、ある人物の到着を待っていた。待ちながら、海馬はかつてレスティーに依頼したことを思い出す。

『私のコアメダルを？』

レスティーは聞き返し、海馬は頷く。

『俺は今、技術班に対してデザイン用の特殊装備を開発させている。だがそれを起動するためには、コアメダルのデータが必要だ。』

『要件はわかったわ。それで私のコアを解析したいんですけどでも、もう少し待って。』

『?』

『デザインの中に、メイカーっていうデザインがいるの。そいつのコアの方がいいわ』

『どういうことだ?』

『見たところメイカーのコアの属性は、重火器系。つまり近代兵器だから、そっちの方が解析しやすいと思って。』

『なるほど...』

海馬は考える。

『よし、それまで待とう。だが...』

『わかってる。そこまで時間はかけないわ』

(そして、そのコアメダルは手に入った)

そう、必要な素材は揃った。ちなみに、このコアメダルは解析が終わったあと、レスティの元へ返還するつもりだと、

「瀬人様、お見えになりました。」

海馬の秘書を勤める黒服の男性、磯野が、来客の到来を告げた。やがて来客が現れ、海馬が挨拶する。

「お待ちしていました。インテグラ局長」

やって来たのは、ヘルシング機関という組織の局長を勤める女性、

インテグラル・ファルブルケ・ウィンゲーツ・ヘルシング、通称インテグラと、その執事、ウォルターだ。インテグラはアーカードの主でもある。

「お久しぶりです、海馬社長。」

インテグラも海馬に挨拶した。そのまま、海馬に尋ねる。

「ところで、アーカードは？」

「何の問題もありません。今回あなたが来ることは伝えていないので、ここにはいませんが。」

ここで、アーカードがロストグラウンド学園にいる理由を教えよう。彼が所属しているヘルシング機関は、様々な化物を相手にする組織である。そのヘルシング機関にもグリード復活の情報は届いており、グリードによる世界の破滅を防ぐため、アーカードが派遣されてきたのだ。その際に海馬がツテを回し、アーカードがこの国で活動するために、ロストグラウンド学園の学生という仮の身分を偽造したのである。

「驚きましたよ。まさかグリードを遥かに上回る脅威が現れるとは言ったのはインテグラ。彼女は海馬に依頼され、機関の人員を総動員して、デザイアについての情報を調べていた。

「ただでさえグリードの調査に追われているというのに、わざわざ申し訳ない。」

海馬は謝る。

「いえ、そちらが謝罪する必要はありません。こちらとしても、収穫がありましたから。」

そこまで言うてから、

「ウォルター。」

「は。」

インテグラは執事を呼び、執事、ウォルターは古ぼけた本を取り出してインテグラに渡す。海馬はインテグラに訊いた。

「それは？」

「デザイアのものと思われる研究資料です。」

「デザイアの研究資料!？」

驚く海馬。デザイアについて情報を集めてほしいとは頼んだが、相手の研究資料などという貴重なものが手に入るとは思ってもみなかったからだ。

「ええ。解読もほぼ完了しています」

「それで、資料には何と？」

催促する海馬。インテグラは本を開き、資料を読み上げ始めた。

カザリは他にいるグリッド、ガメルとメズールのコアメダルを体内に取り込んでおり、自分の風を操る能力に加え、重力操作や水を操る能力も使えるのだ。それがカザリの進化である。

「はっ!」

カザリは両手を前に向け、巨大な竜巻を放つ。

「ぬんっ!」

しかし、コレクは双剣を使って竜巻を斬り裂いた。続いて重力操作を使い、コレクの身体を宙に浮かべようとするカザリだが、コレクは自分にかかる力を、それ以上のパワーによって吹き飛ばす。

「なら…!」

今度は水流を放つかザリ。するとコレクは双剣を振り回し、そのままカザリに突進。水流を斬り裂きながら突き進み、

「ぬえいつ!!」

「ぐあつー!!」

カザリを斬った。セルメダルを撒き散らしながらのけ反るカザリ。

「貴様の進化については知っている。だが、その程度のものか？」

コレクはデザイアとしての能力を使い、カザリの進化について知っていた。しかし、彼からすればカザリの進化は、まだまだ未熟だ。

「所詮貴様らグリードは失敗作。進化しても出来損ないは出来損ないのままということだ」

「何だと!？」

コレクの言葉に怒って格闘戦を仕掛けるカザリ。しかし、それすらコレクにとつては無駄な抵抗だ。双剣で斬りつけ、軽くあしらう。

「何より、貴様は己の欲望を優先させ、同胞を餌にかけ、使命を忘れた愚か者。貴様のような存在に、わしが負けるはずはない!」

双剣にエネルギーを込め、エネルギー波を飛ばすコレク。慌てて回避するカザリだったが、背後にあったビルが四本、跡形もなく消し飛んだ。この辺りがゴーストタウンでなければ、大変なことになっている。

「言うておくが、これでもわしは本気の三分の一も出してはおらんぞ。」

今のコレクはコアメダルが二枚欠落した不完全体、カザリと同じくセルメンと呼ばれる存在だ。にも関わらずこれだけの力を有しており、しかもまだ本気を出していない。もしコレクが完全復活しており、全力を出していたら、恐らくこの世界は一瞬で破壊されているだろう。デザイアは、シードのさらに数倍以上の戦闘力を持っている。コレクは能力こそ他のデザイアには劣るものの、戦闘力自体はデザイアの中で最強なのだ。もうコレクの勝利は決まったものである。だが、

「まだまだ…僕も全力を出したわけじゃない!」

カザリは諦めない。

「やはり失敗作だな。往生際の悪さも失敗作か!」

コレクはカザリに追撃を仕掛けた。

後藤は偶然見つけたコレクとカザリの死闘を監視していた。しかし、彼一人ではない。彼の師とも呼べる存在、伊達明も一緒だ。

「あれがデザインか？火野からの情報だと、確かコレクだっけ？なるほど、ヤバそうなやつだな。」

伊達はコレクの強さを目の当たりにして言った。それはそうだろう。カザリは伊達すら苦戦するほどの実力者。しかし、コレクはそんなカザリを全く寄せ付けず、圧倒しているのだ。

「伊達さん。今見ている通りデザインは強く、正面から戦うべきではありません。」

「わかってるよ後藤ちゃん。ここは漁夫の利を狙うべき、だろ？俺だって、あんな強すぎるやつとは正面きって戦いたくないからな。」
後藤からの提案で、両者が弱ったところを叩くことにした伊達。カザリが負けるか、コレクが負けるか。どちらに転んでも、二人には都合がいい。今回の場合は、ほぼ100%の確率で前者だろうが。
そこへ、

「伊達さん！後藤さん！」

映司とアネクが来た。

「おお、お前らも来たのか。」

「何だこりゃ？一体どうなってる？」

アネクは伊達に尋ねる。

「さあな。俺らも今偶然見かけただけで、何がどうなってるかなんてさっぱりだ。」

「何にせよ、ここは漁夫の利を狙って、弱ったところを叩くべきだ。デザインの戦闘力を確認するいい機会にもなる。」

「…そうだな。」

後藤の提案に従うアंक。彼にはもう、わかりきっていたのだ。例えカザリと協力して全員がかりで挑んでも、コレクには絶対に勝てないと。

しかし、

「アंक、メダルだ。カザリを助けるぞ」

映司は、そう思わなかった。これに対してアंकは猛反論。

「ああ！？お前、今の話聞いてなかったのか！？カザリは俺達にとつて、いずれ倒すべき相手だ！それにお前、シードにだって敵わなかつたろ！あいつは絶対シードより強いぞ！」

「だとしても！」

映司は異を唱え、再びグリッドとデザイアの死闘に目を向ける。

「…一方的すぎるだろ…こんなの…」

そう、一方的すぎる戦いだった。既にカザリは満身創痍である。

「お前もカザリの二の舞になるぞ！」

「あとで好きなだけアイスやるから！」

「…ちっ！」

アイスで納得したアंक。

「あいつ相手に小細工は無意味だ。こいつで一気に決める！」

アंकは赤いコアメダルを三枚、映司に渡す。

「サンキュー！」

映司はオーズドライバーを装着してメダルを装填し、オーズキャンナードでスキャンする。

「変身！」

タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜

映司はオーズ タジャドルコンボに変身し、コレクに殴りかかった。コレクはそれをかわしてオーズを見る。

「貴様、オーズか。」

コレクはグリードを解析して生み出された存在なので、オーズにいても知っていた。カザリはオーズに言う。

「邪魔しないでよ。僕には僕で、目的があつてこいつと戦ってるんだからさ。」

「邪魔なんてしない。こつちもこつちで戦うから！」

「二対一か…それもいいだろう。来い！」

コレクは挑発し、激闘は再開した。

「全くあいつは…」

伊達はオーズを援護するべく、ベルト、バースドライブを装着。セルメダルを装填し、バツクルのレバーを回転させる。

「変身！」

カポーン！

伊達は仮面ライダーバースに変身した。

「伊達さん！俺も！」

「いや、あいつはやバすぎる。だから今回、後藤ちゃんは見学な」
バースは後藤に言い聞かせ、

「うおおおっ！」

銃、バースバスターによる射撃をしながら突撃していく。バースの存在に気付いたコレクは双剣でバースバスターのエネルギー弾をさばき、左手の剣から衝撃波を飛ばす。それをかわしたバースは、オーズの側に駆けつけた。コレクはバースのことも知っている。知っているうえで、カザリ、オーズ、バースを順番に見た。

「失敗作、失敗作を封印するための道具、失敗作を解析して生み出された道具。失敗作が勢揃いか！」

「何だと！？」

「はっ！」

バースはバースバスターで射撃を、オーズは左手から炎を放つ。すると、コレクの目の前に巨大な盾が出現し、全ての攻撃を受けきつ

たと同時に大量のセルメダルに分解され、大量のナイフへと再構築。
「行け！」

宙に浮かぶナイフはコレクが右手の剣を振るのを合図に、オーズ達へとマツハで飛んでいく。

「くわああああああああつ！！！！」

オーズ達は吹き飛ばされた。

「やはり失敗作ではないか。」

余裕のコレク。カザリと同じく満身創痍になってしまったオーズは、バースに耳打ちする。

「伊達さん。ここは同時攻撃で一気に決めましょう！」

「…それしかなさそうだな…！」

オーズの作戦を聞いて立ち上がったバースは、セルメダルをバースドライバーに投入し、レバーを回す。

B L E S T C A N N O N

すると、バースの胸部に巨大な大砲、ブレストキャノンが装備された。オーズも飛翔し、左腕にタジャスピナーという円盤を生成し、オーズドライバーに装填されているメダルを三枚取り外し、今度はタジャスピナーに装填する。バースは再度バースドライバーにセルメダルを装填し、レバーを回転。

C E L L B U R S T

オーズはタジャスピナーをオースキャナーでスキャン。

！
タカ！クジャク！コンドル！ギン・ギン・ギン！ギガスキャン！

「せいやああああああーっ！！！！」

全身に炎を纏って突撃する技、マグナブレイズを放つ。バースはもう一枚セルメダルをバースドライバーに投入し、レバーを回転させ、

CELL BURST

「ブレストキャノンシユート!!」

ブレストキャノンから光線を撃つ。

「はあっ!!!!」

カザリもそれに便乗し、特大の竜巻を生み出した。これだけの攻撃を当てれば、さすがのコレクもダメージを負うはず。誰もが、そう思っていた。

しかし、それは当たればの話である。

コレクは双剣の柄を連結させ、一瞬セルメダルに分解。薙刀に再構築したあと、自分の真上で振り回し、

「くだらんわあっ!!!!」

振り降ろして超弩級のエネルギー波攻撃を繰り出した。

「なっ……」

「うあっ……」

「え……」

一同はその一撃に呑み込まれる。そして光がやんだ時、

「ぐあっ…がああっ!!」

「ああっ…うおおっ!!」

「うがあっ…あうあっ…!!」

オーズとバースは変身を解除され、カザリは人間態に戻っていた。

「映司!!」

「伊達さん!!」

驚くアंकと後藤。

「つまらん……」

コレクは薙刀を担ぎ、呟いた。

「やはり、わしを満足させられるのは…」

そして、ある方向を向く。

「貴様だけだな。」

そこにいたのは、皇魔とレスティーだった。

「ずいぶんと派手に暴れているようだな、コレク。」

「なあに。取り引きに応じない愚か者に、力の差を見せつけたただだ。」

コレクはカザリへと目を向け、カザリは顔を背ける。

「約束は約束だ。守ってもらうぞ」

「…」

カザリは何も言わない。皇魔はコレクに言った。

「雑魚が相手ではつまらんだろう？次は余が相手になってやる。」

腰には、既にエンズドライバーが装着されていた。しかし、

「まあ待て。」

コレクは待ったをかける。

「わしは貴様とも取り引きをしたかったのだ。」

「取り引きだと？」

コレクは頷き、皇魔に取り引きを持ちかけた。

「貴様、我々と来るつもりはないか？」

「…何？」

突然の勧誘である。コレクはさらに続けた。

「貴様は先代のエンズと違い、欲望にまみれている。エンズはまさしく、貴様のような存在にこそふさわしい。我々とともに来れば、その欲望を満たしてやろう。貴様の望みも、全て叶えてやる。どうだ？悪い話ではないと思うが…」

「…」

考える皇魔。映司は当然、

「ダメだ！そんな話を聞いちゃいけない！」

と言っが、

「貴様は黙っておれ。」

コレクは映司を黙らせた。レスティーは考える皇魔に、そっと囁く。

「…あなたの好きにしていいわよ。私は、あなたに従う。」

「…」

そして、皇魔は答えを出した。

「…聞いてやっても良い。だが、貴様に聞きたいことがある。」

「何だ？」

「貴様らデザインについてだ。貴様らが生まれた経緯について、余は知りたい。レスティーに聞いてもよかったが、話したがるんなら。そして、余を誘う理由も話せ。」

「…良いだろう。今代のエンスである貴様には、知る権利がある。」

コレクは了承し、

「貴様らも聞いておけ。特に、その失敗作はこれくらいでもしなければ納得せんだろうからな。」

映司達に、特にカザリに言ってから、語り始めた。

「今から500年前のこと。世界に絶望した、一人の科学者がいた。

どこを見ても欲望だらけ…科学者は、そんな世界に絶望したのだ。」

コレクの話からして、それがデザインを生み出した科学者であることは間違いないだろう。

「ある時、科学者は偶然グリードの研究資料を手に入れた。そして、こう思っただのだ。」

「そんなに欲望にまみれて死にたいなら、望み通りにしてやる、と。」
「インテグラは資料を読んだ。」

「それがデザイアの開発理由か…。」

「科学者が世界に絶望するというのは、よくある話です。」

「ふん、愚かな自己逃避だな。」

鼻で笑う海馬。インテグラは資料に書いてあった内容を、簡単に要約して伝える。

「まず、グリードのコアメダルが生物のデータを吹き込まれて生み出されたのに対し、デザイアのコアメダルは人間から欲望を抜き取り、それを凝縮して生み出されたものです。それも一人や二人ではなく、何百何千と…。」

「つまり、製造法そのものが違うということか…強いわけだ。」

「それだけではありません。グリードのコアメダルが九枚なのに対し、デザイアのコアメダルは七枚。二枚少ないのです。」

「!?!?」

海馬は驚いた。

「意外だな。あれだけ強いことから、二十枚はあると思っていたが…。」
それに関しては、ウォルターが説明する。

「ただ単純に数を増やせば、それで強くなるというわけではありません。少なくて強いこともあれば、多くして逆に弱くなることもある。デザイアの場合も、少ないという点がさらに彼らを強くしているのです。」

「どうということだ?」

今度はインテグラが説明する。彼女の話だと、デザイアにはグリードの情報が吹き込まれており、それによって、『グリードの方が自分達よりメダルの数が多い』という事実が伝わる。そしてその事実が、『そんなことでグリードに負けたくない』という欲望を生み出し、『足りないゆえに満たしたい』という原初の欲望と増幅し合う。

さらに、『破滅を望む』という欲望を吹き込むことで欲望が三つ揃い、それが相乗効果によってさらに増幅し合った結果、あれほどまでに強大な存在、デザイアを生み出したらしい。デザイアは生み出された目的通り、多くの世界を破壊していった。当時はこの世界が様々な世界と繋がっており、転移能力を持たない彼らでも、異世界を滅ぼすことができたのだ。

「しかし、それを快く思わぬ者どもがいた。そして、その者どもがオーズを解析して生み出したのがエンズだ。」

コレクは語る。デザイアを生み出した科学者に対して、反対の意義を唱えていた科学者達が、オーズのデータを解析して、エンズを生み出したと。

「だが、エンズを扱える者は誰一人としていなかった。貴様と、先代のエンズを除いて。」

エンズは、デザイアの力を利用して戦うための道具。そのデザイアの力が、あまりにも強すぎたのだ。そしてコレク曰く、先代のエンズは正義感の塊のような存在だったらしい。デザイアを世界を滅ぼす悪とみなし、世界を守るために戦ったのだと。

「わしは思った。あれほどの力、奴にはもつたない。もっと欲深い、そう、まさしく貴様のような存在にこそふさわしいと。だからこそ、わしは貴様を誘いたいのだ。」

「…貴様の言いたいことはわかった。だが！」
皇魔はあらかじめレスティーから受け取っていたメダルをエンズド

ライバーに装填する。

「余は貴様の仲間にはならん。」

「なぜだ？貴様の欲望は好きなだけ満たせるといふのに。」

「余は、自分自身の手で成し遂げたいのだ。」

皇魔は決めていた。必ず、自分の手でこの世界を支配すると。誰の手も借りず、あつてもそれは借りるのではなく、ただ使うだけ。誰かの仲間になるなど、もつてのほか。

「そこには何者の介入も許さん！」

そう、許さない。彼のプライドが、信念が。

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身した。

「…それが貴様の答えか…ならば仕方あるまい。」

残念そうだが、どこか納得した様子のコレク。そして、コレクは尋ねた。

「貴様、名は？」

「…皇魔。天碎皇魔だ」

「では皇魔。受け取るがよい」

コレクは一枚のメダルを、エンズに向けて投げた。エンズはそれを掴み取り、静かに驚く。

「これは…」

コレクが投げたものは、コレクのコアメダルだった。

「それは次に会う時まで預けておく。だがその時には、それも含めた全てのコアメダルを返してもらう。」

その場にいる誰もが、コレクの行為の真意を疑う。しかし、エンズ、いや、皇魔だけは気付いていた。

コレクは皇魔を認めたのだ。エンズとして、自分達の好敵手として。

「…後悔するぞ。」

「後悔などするものか。貴様のような存在と出逢えたというのに」
コレクは使命に忠実なデザインだ。しかし、強い相手との戦いを望む、武人氣質な面もある。

「だが、これだけは覚えておけ。」

しかし、コレクは忠告した。

「エンズとはその名の通り、全てを終わらせる者。世界も、時間も、空間も、命も。そして、貴様自身の存在すらも…。」

「…」

意味深な言葉を呟いて去っていくコレク。エンズはレスティーに訊いた。

「どついう意味だ？」

「…ごめん。そのことについては、もう少し気持ちの整理をさせて？あんまり思い出さたくないことなの。でも、いつかちゃんと話すから…」

「ならばさっさとしろ。余も気が長い方ではない」

エンズは変身を解除する。それを見て危機が去ったのを確認したアंकと後藤は、映司と伊達に駆け寄る。カザリはいつの間にか姿を消していた。

「映司！」

「伊達さん！大丈夫ですか!？」

「アंक…」

「何とか死なずに済んだ。あいつに感謝しなくちゃな」

「…帰るぞレスティー。」

「…うん。」

二人は映司達を無視し、帰っていく。だが、皇魔は密かに映司達を意識しながら、こう思っていた。

(せいぜい捨て駒くらいには使ってる)

「資料はこれだけですか？」

海馬はインテグラに訊く。

「今はまだ調査中の段階ですが、これだけです。何か不備が？」

「いえ、これだけあれば十分です。それで、本題ですが……」

海馬がインテグラを呼んだ理由。それはコアメダルの製造だ。コアメダルは科学的な部類よりも、魔術的な部類に近いアイテム。それは海馬コーポレーションよりも、ヘルシング機関の方が適任だ。しかし、ヘルシング機関にも限界はある。そこで海馬コーポレーションとヘルシング機関は、グリードとデザイアという共通の敵を倒すため、協力関係を築いたのだ。

「欲望の方はセルメダルで代用できるでしょうが……やはり数の問題は無視できませんね……」

ウォルターの言った通り、コアメダルはセルメダルを遙かに上回るパワーがある。そんなコアメダルを造るとなれば、量を揃えなければならぬ。しかし、それは既に海馬が解決済みだ。

「心配はいらない。磯野！」

「はっ！」

磯野に命じて、何かの装置を起動させる磯野。すると、隠し金庫が出現した。扉を開けてみると、中には大量のセルメダルが詰まっている。今まで皇魔とレスティーが戦って集めた、数十万単位のセルメダルだ。インテグラはそれを見てニヤリと笑い、呟く。

「パーフェクト。」

第十話 取り引きと研究とデザイアの秘密（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

ザックス「やって来ましたコスタ・デル・ソル！！」

ゆり「ねえ、行ってみない？」

皇魔「全く貴様らは……」

第十一話 波乱と再会と修学旅行

第十一話 波乱と再会と修学旅行（前書き）

もうすぐこのサイトで小説を書き始めて一年になります。なんとか一周年までには次の話を投稿したいです。

第十一話 波乱と再会と修学旅行

「ヤッホー!!」

ザックスは飛び上がった。今彼がいる場所は、ロストグラウンド学園ではない。世界でも有名な常夏のリゾート地、コスタ・デル・ソルだ。今日は待ちに待ったロストグラウンド学園修学旅行の一日目。こういった行事が大好きなザックスは、思いつきりはしゃいでいる。「やって来ましたコスタ・デル・ソル! 思いつきり遊ぶぜ!!」
「はしゃぐなザックス。俺達は遊びに来たんじゃないんだぞ?」
ザックスの気分に水をさすクラウド。

「んなこと言っただって、あのコスタ・デル・ソルだぜ!? お前もいつかは来たいって言ってたじゃねえか!」

「それとこれとは話が別だ。」

クラウドは勉強と遊びの両立ができているので、誘惑されない。

「さっさと班に戻るぞ。」

「…はい…」

クラウドに言われ、ザックスは渋々従った。

コスタ・デル・ソルはあくまでも宿泊地。今回の旅行では五人一組の班にわかれ、様々な観光地を巡り歩き、外国の文化というものを学習する。ちなみに皇魔の班は、皇魔、レスティ、音無、ゆり、かなでの五人組だ。

「ここからは自由行動だ。予定はお前達が前もって決めていたはずだから、予定に従い、時間を守って、必ず全員で再びここへ集合すること。では、解散だ。」

セフィロスから簡単な注意事項を受け、ついに始まる自由行動。こ

の自由行動はそのまま、時間内だったら何をしてもいいというものだ。ビーチで泳いでも構わない。

「というわけで、午前中はビーチで遊んで、午後から観光地を巡りましょ」

班長を勤めるゆりは、行動を決める。副班長はかなでだ。ちなみに、なぜ皇魔が班長副班長に立候補しなかったかということ、本人曰く嫌な予感しかしないからとのこと。

そんなこんなで、まず海水浴から始まった。

「音無くん どう?」

ゆりは今日のために買った水着を着て、音無に見せる。紫を基調としたビキニだ。

「あ、ああ、似合ってるよ…」

音無には少々刺激が強かったらしい。

「結弦。どう?」

今度はかなでが、自分の水着を見せる。白を基調としたワンピースだ。

「うん。いいんじゃないかな?」

音無から見て、ぴったりだった。

「あつちでビーチバレーやってるから、行きましょ!」

「行きましょう結弦。」

「わっ、ちよっ!引っ張るなって!」

音無はゆりとかなでに引っ張られ、ビーチバレーに参加させられた。

一方皇魔は、着替えもせずに海を見ているばかり。

「皇魔は行かないの?」

レスティーが訊いても、

「行く理由がない。」

完全に興味なしだ。

「じゃあ私、泳いでくるわね。」

レスティールは一瞬自分の身体をセルメダルに分解すると、肉体を再構築。見た目は変わっていないが、水着を着ている。レスティールはこうやって本来の姿から、ロストグラウンド学園の生徒の姿になっているのだ。レスティールは行ってしまおう。

ポツンと一人残された皇魔。だが、別に孤独を感じてはいなかった。数万年前の、あの闇の中に比べれば、どうということはない。

「お前は行かないのか？」

声を掛けたのはセフィロスだ。

「行く理由がない。」

本日二度目の答えを返さなければならぬので、少しうんざりしている皇魔。すると、

「セフィロス？」

誰かがセフィロスを呼んだ。セフィロスと皇魔が見てみると、そこには二人の男性がいる。

「アンジール？ ジエネシスも…」

「セフィロスじゃないか！ 久し振りだな！」

アンジールと呼ばれた男性は、感激の声をあげた。

セフィロスは、かつて神羅カンパニーという会社で働いていた。いや、今も働いている。とある事情で神羅を離れ、教師をしているだ

けだ。アンジールとジェネシスはセフィロスの同僚であり、親友でもある。今日二人は休暇を取り、コスタ・デル・ソルへ来たのだ。

「しかし驚いたな。ソルジャー最強の英雄も、今では一児の父親か。」

ジェネシスが今言ったソルジャーとは、神羅が抱える精鋭の戦士である。セフィロスは幼少時から神羅で数々の功績を打ち立て、最強のソルジャー、英雄などの称号をほしのままにしていた。

「しょうがないだろう。かなでは俺にしかなくなかったんだ」

それを聞いて、アンジールは音無やゆりと一緒に遊んでいるかなでを見る。

「立華かなで…お前に似た容姿を持つ少女、か…」

「それだけなら何の問題もない。問題は、あの子がいた場所だ。」

セフィロスが言い、皇魔は思い出す。

「そういえば、余は貴様ら父娘が出会った経緯を知らなかったな…いい機会だ。話せ」

「…セフィロス。」

ジェネシスは目配せをしながら、セフィロスに話しかけた。どうやら、少し面白い話らしいが…。

「構わないさ。そんなに大した話でもない」

セフィロスは話すことにした。

「…あれは、今から四年ほど前の話だ。」

それは、セフィロスがソルジャーとして、神羅で戦っていた頃の話。いつも通りに仕事を処理し、要請があれば任務にも出動する生活を送っていたセフィロス。

ある日、彼にある任務が下された。任務の内容は、一月ほど前から違法な研究を行っている謎の施設の破壊。神羅側からの再三の警告にも関わらず、それを無視して研究を続けているため、ついに殲滅指令が下ったとのことだ。要するに、実力行使である。

そしてその施設でセフィロスが見つけたのが、かなでだ。すぐに保護されたかなでだったが、なぜかセフィロス以外の人間になつこうとせず、ガードスキルなどの不可解な能力も備えており、彼女の保護者として、そして神羅側からの監視として、セフィロスがかなでの父親になったというわけだ。教師になったのも、セフィロスがよりかなでを監視しやすくするためである。

「つまり任務というわけか。」

「そうだ。」

きっぱりと言うセフィロス。しかし、少ししてから、

「…最初はな。」
と続けた。

「俺はいつしか、かなでを実の娘のように感じていた。血の繋がりにこそないが、それでも俺はできる限りであの子を幸せにしていきたい。」

「…貴様がどう思うかは勝手だ。だが、後悔だけはせんようにな。」

「…ああ。」

かなでに目を移すセフィロス。アンジールは訊いた。

「どうやらあの子には、好きな人ができたみたいだな。親としてはどうだ？複雑な気分か？」

「さあな。微妙だ」

と、ジェネシスの携帯電話に連絡が来る。少し何かを話したあと、ジェネシスは連絡を切ってアンジールに言う。

「急な仕事だ。アンジール、俺とお前に出勤要請がかかった。戻るぞ」

「ああ。」
「仕事か。」
「すまないセフィロス。久し振りに話せてよかった」
「またいつか会おう。今度は、ゆっくりとな。」
アンジールとジェネシスは交互に言ったあと、神羅に戻っていった。
「あの二人が同時に出勤要請を受けるとは、相当な任務だな。」
セフィロスは任務の内容を予想する。皇魔はセフィロスに尋ねた。
「そこまで強いのか？あの二人は。」
セフィロスは笑って答える。
「当たり前だろう？仮にも俺の親友だぞ？」

とある飲食店。

ここでは今、二人の男性が何かの会議を行っていた。ルパン三世と、次元大介である。次元はルパンに訊く。

「おいルパン。お前、今度こそおかしくなっちまったんじゃねえか？」

「いんやあ俺はいたって正気だぜ？」

「だったらんなトコに忍び込むなんて言うわけねえだろ！！」

「おぬしら、何の話をしているか知らぬが、客の迷惑も考えろ。」

そこへ、ルパンから要請を受けていた石川五エ門が到着した。次元は五エ門に頼む。

「なあ五エ門。お前からも言っちゃれ！」

「だから、おぬしらは何の話をしているのだ？」

今来たばかりなので話の内容を知らない五エ門。ルパンは説明する。「別にいつもと変わらねえぜ？ちよーっと不二子ちゃんに頼まれてさ。」

「はあ…またか。」

五エ門は思わずため息を吐いた。不二子とは、彼らの仲間の一人である女性、峰不二子のことだ。しかし基本的に行動をとることはなく、不二子自身他の組織と手を組むことが多いため、面倒なことになりやすい。彼女にとっては特別な場合を除いて、ルパン達ですら目的達成のための存在なのだ。無論ルパン達はそのことに気付いているのだが、次元や五エ門はともかく、ルパンはホイホイ話に乗って何回も騙されているので、二人にとって悩みの種となっている。

「それで、今回は何を狙うのだ？」

それはともかくと話を続ける五エ門。ルパンは今回狙うお室について、五エ門に説明した。

「代行者の碑文さ。」

代行者の碑文とは、今から一月ほど前に発掘された、謎の円盤石のことだ。

「なぜそのようなものを？」

「ただの円盤石じゃあないのよ。なぜか常に膨大な量のエネルギーを発していて、円盤石自体が一種のエネルギー永久機関になってる。古代のオーバーテクノロジーによって生み出されたものだとも言われているが、まだ研究段階で、ほとんど全容がわかっていない。けど、かなり実用的だろ？不二子ちゃんはその目に付いたってわけさ。」

「なるほど…それで、次元は何をそこまで渋っておるのだ？」

最初の問題に戻る五エ門。次元は答える。

「お室は問題じゃねえ。お室の置いてある場所が問題なんだ」

「置いてある場所が？一体どこだ？」

「第三神羅博物館だよ。」

「!!!」

五エ門は即座に反応した。第三神羅博物館とは、その名の通り神羅の管轄にある博物館の一つで、常に多くのソルジャーが警備を行っている。

「考え直セルパン！相手が悪すぎる！」

ソルジャーの実力を知っている五エ門は、次元と同意見だ。しかしルパンは、

「いや、俺の考えた作戦で行きやあ大丈夫さ。」

と、考えを変えるつもりがない。次元はさらに食い下がる。

「確かに五エ門がいりやあ、2ndや3rdはどうにかなるかもしんねえ。だがクラス1stや英雄セフィロスが来たらどうするつもりだ？」

ソルジャーは1st^{ファースト}、2nd^{セカンド}、3rd^{サード}の三つに階級分けされており、最上級の1stともなれば、一人一人が軍隊をも上回る戦闘力を有しているのだ。そして、セフィロスの実力はその中でも飛び抜けており、その名は次元のような闇の世界に生きる者達にも知れ渡っている。恐らく不二子を含めた四人がかりで行っても、勝ち目はゼロだろう。

「拙者もセフィロスが相手では勝てる気がしない。だから考え直せ！」

「心配しなくても、セフィロスは来ねえさ。」

ルパンはあらかじめセフィロスが今教師をやっているという情報を知っており、それを二人に伝える。

「今修学旅行でこっちに来てるらしいが、それでも俺達に構ってる暇はねえさ。あの学園の生徒は曲者揃いだからな」

「…それはわかった。だが、間違いなく1stが何人が派遣されてくるぜ。そっちはどうするつもりだ？とつつあんだけど厄介だつてのに。」

ルパンの話に納得した次元は、次の話題を切り出す。とつつあんと

は、ルパンをライバル視して追っている警部、銭形のことだ。予告状も出してしまった以上、間違いないくるだろう。

「その点も心配はいらねえ。今回、ある情報を手に入れてな……」

「ある情報？」

次元は聞き返した。

「ああ。今日を逃せば神羅博物館に忍び込める日は、たぶん二度と来ない。」

「そんなにすげえ情報なのか？」

「そうだ。」

「……では聞かせてもらおう。」

次元と五エ門はやっと乗り気になり、ルパンはプランの説明を始めた。

夜。コスタ・デル・ソルのリゾートホテルにて。

ゆりは自分とかなで、レスティーに割り当てられた部屋に皇魔と音無。日向、直井、クラウド、ザックスを呼び出していた。

「何だよゆりっぺ？」

「今僕は機嫌が悪いんだが？」

音無と同じ班になれなかった不満を隠そうともしない日向と直井。しかしゆりにとってそんなことはどうでもよく、話を始める。

「今日あたし達の班は、第三神羅博物館に行ったわ。」

今回彼女達が巡った観光地には、第三神羅博物館が含まれていた。

しかし、博物館にはルパンからの予告状が届いており、厳戒体勢であつたために入館できなかったのだ。

「信じられる！？せつかく前々から行こうって決めてた観光地なのに、おかげでこっちは急いで新しく巡る観光地を探さなきゃならなかったのよ!？」

さすがゆり。相手がルパンだろうと全く恐れていない。どころか、むしろ怒りをぶちまけている。

「そこで、あたしはルパンの計画をとことん邪魔してやろうと思うわ。」

「だから俺達を呼んだのか。」

それを知ったクラウドは、少しげんなりした。

「さすがクラウドくんね。そういうわけだから……」
ゆりは改めて持ちかける。

「ねえ、行ってみない？」

「面白そう！俺は行くぜ！」

ザックスは真っ先に乗った。

「でも校則「お前らだけに行かせるわけにもいかないし、俺も行くよ。」結弦が行くならあたしも行くわ。」

音無につられて、かなでも行くことに。

「音無が行くなら俺（僕）も!」「」

日向と直井もつられた。

「仕方ない。俺も行く」

クラウドもだ。だが、

「却下だ。」

と言つたのはいつも通り、皇魔である。

「いいじゃない。行きましょうよ」

レスティーが持ちかけるが、

「行く理由がない。」

皇魔は聞かない。

「また私のセルメダルあげるから。」

「…全く、貴様らは…」
セルメダルで折れた皇魔。

「そうと決まったら早速出発ね！幸い近くだし、さっさと片付けましょー！」

ゆりはなんだか生き生きしていた。と、皇魔はゆりに訊く。

「そういえば、ルパンは何を狙っているのだ？」

「代行者の碑文っていう円盤石よ。」

ゆりは代行者の碑文について簡単な説明をする。

「品はわかった。だが、なぜ代行者の碑文という名前なのだ？」

皇魔のさらなる質問に、ゆりはさらなる答えを返した。

「円盤石の表面に、古代文字で、『我は王の審判を聞き、裁きを代行する者なり』って書いてあるからよ。」

「それで代行者か…」

「でも、王って誰なんだろうな？」

「古代の品だ。該当する王ならいくらでもいる」

あまり重く受け止めていない日向、ザックス、クラウド。しかし、
「…」

レスティーだけは沈痛な面持ちで、何か考えている。

「どうしたの？」

心配そうに話しかけるかなで。レスティーはゆりに尋ねた。

「その碑文って、いつぐらいに作られたものかわかる？」

「さあねえ…まだまだ研究の段階だけど、一応500年くらい前の品じゃないかって話みたい。」

「デザインが産み出されたのと、同じ時期だな…」

「そうですね。」

考える音無と、同意する直井。

「…」

レスティーは、ある存在のことを思い出していた。

『聞けい人間ども。我は王の審判を聞き、裁きを代行する者なり。汝らに下った王の審判は、死だ!』
その存在は純白の装束を身に纏った神官のような姿で、様々な現象を引き起こし、『王』の審判を代行していった。碑文と同じ言葉を口にしながら。

(まさかあいつと…イズマと関係があるの?)

「レスティー。どうした?」

「えっ?う、ううん、何でもないわ。」

慌てて取り繕ったレスティーは、皇魔や仲間とともに準備を済ませる。

「待つてなさいよ、ルパン三世!」

ゆりは意気込み、一同の先頭に立って博物館を目指していった。

それを見ている影が一つ。

無論アーカードである。

「ククク…」

アーカードは姿をコウモリに変化させ、こっそりと彼女達を追った。

第十一話 波乱と再会と修学旅行（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

アンジール「まさか…奴らは…」

次元「おイルパン！こいつも計算のうちか！？」

アーカード「なかなか面白そうなことになっているな。」

皇魔「だから余は嫌だったのだ！！」

第十二話 計画と予想外とお宝争奪戦

第十二話 計画と予想外とお宝争奪戦（前書き）

いつもそうですけど、ラストが支離滅裂です。

今日で僕は、このサイトで小説を書き始めて一年になります！

光生「ハッピーバースデー！」

ありがとう！それでは本編をどうぞ！

第十二話 計画と予想外とお宝争奪戦

第三神羅博物館。

ルパン対策の警備として派遣されたアンジールとジェネシスは、銭形警部に会っていた。急な仕事とは、博物館の警備だったのである。

「ソルジャー・クラス1stのアンジールです。」

「同じくクラス1st、ジェネシス。」

「ICPOの銭形であります。今日は何とぞ、よろしくお願い致します。」

挨拶するアンジールとジェネシス。銭形は敬礼で応えた。アンジールは訊く。

「早速ですが、我々はどこを警備すればよろしいのです？」

「警備する部屋は、展示室と制御室の二カ所です。」

展示室は代行者の碑文があるため、一番警備が重要視される部屋だ。制御室はその名の通り、監視カメラ等のセキュリティや冷暖房などを管理するための部屋なのだが、この博物館は毒ガスや催眠ガスの対策用に、全ての部屋に非常に強力なエアクリナーを設置してある。これも管理しているのだ。なので、こちらは展示室の次に重要視される部屋である（当然補助電源は設置済み）。銭形の予想では、展示室と制御室への襲撃を行う、両面作戦が展開される可能性があるとのこと。

「あなた方はクラス1stですから、どちらか片方に一人ずついれば、それで十分でしょう。どちらがどちらの部屋の警備に行くかはそちらの自由です」

銭形からそれを聞いて、アンジールがジェネシスに言う。

「俺は制御室に行こう。お前は展示室に行ってくれ」

「わかった。」

というわけで、アンジールは制御室。ジェネシスは展示室を警備することに。銭形は展示室を警備するらしい。

「しかし、ずいぶんと酔狂なやつなんだな。まさか神羅の管轄にある博物館にまで手を出すとは……」

展示室。ジエネシスは銭形に言った。展示室の真ん中には、問題の代行者の碑文が安置してある。碑文を入れてあるガラスケースはバリアで守られており、ケースそのものも防弾ガラス製で、電流も流れていて触れたら即感電。他にも、様々なトラップが発動する仕組みとなっていた。

「ルパンは目的の品がある場所なら、どこへだろうと忍び込む男です。油断なさりませんように」

「わかっている。それと、敬語はよせ。俺も使わない」

「は、はあ……」

たじろぐ銭形。彼はソルジャー、それもクラス1stと接触するのが初めてなため、少し緊張していた。何せ神羅自体が、国家にも匹敵、あるいは超えるレベルの巨大組織なのだ。いかにルパンを逮捕するまでは死なないと豪語している銭形とはいえ、正面から立ち向かって勝てる可能性は、ないに等しい。絶対に敵に回したくない相手だ。なので、あまり失礼なことはしたくない。

と、ジエネシスは突然、何かの本を取り出した。銭形は尋ねる。

「それは？」

「『LOVELESS』。俺が愛読している古典叙事詩だ」

「警備の最中に読書など！」

「犯行予告の時間まではまだ少しある。それより、お前は今回こそルパンを逮捕できるように専念しろ。」

「ぬう……」

銭形は黙らされた。ジエネシスの方が立場も実力も口も上なので、反論できない。そこへ、銭形の部下がやってきて、銭形に耳打ちする。

「なんか、すごいですねソルジャーって。」

「わしも見るのは初めてだ。しかし、ソルジャーのクラス1stとというのは全員こうなのか？」

「悪かったなまともじゃなくて。」
「どうやら耳も上らしい。」

「他者からの基準はどうか知らないが、アンジールはわりとまともな方だぞ。」

ジェネシスはそう付け足しておいた。

ルパン、次元、五エ門の三人は、少し離れた場所から、あらかじめ博物館に仕掛けておいた隠しカメラを使って、博物館内の様子を見ていた。

「アンジールにジェネシス、か：1stの中でも特に名の知られたソルジャーだな。まさかこの二人が派遣されてくるとは……」

二人のことを知っていた五エ門。

「それだけ俺達が警戒されてるってことさ。」

あまり深く受け止めていないルパン。

「のん気なこと言ってる場合か。例の情報に本当に確かなんだろうな？」

「やっぱり乗り気じゃない次元。それはそうだろう。最低ランクの3rdでさえ、五エ門と同じことができるのだ。それを遥かに上回る1stの相手など、絶対にしたくない。」

「ああ。もうすぐ、『連中』が行動を起こす。そしたら、作戦開始だ。」

ルパンは、ある集団が今夜、碑文を狙って博物館を襲撃するという

情報を知っていた。間違いなく、大混乱が起こる。彼らは、その混乱に乗じて碑文を横取りしようと考えていたのだ。

そしてそれは、予告時間きっかりに起こった。

「…外が騒がしいな。」

まず異変に気付いたのは、ジェネシスだった。

「外が？」

銭形は首をひねった。実はこの展示室。博物館の中央にあるため、外の様子は容易には把握できない。しかし、ジェネシスは外の様子がおかしいと言うのだ。

その時、

「警部！大変です！」

無線で銭形に連絡が届いた。

「どうした！？」

「突然謎の一団が…う、うわあああああああ…！！！」

「おい！どうした！？応答しろ…！！」

断末魔とともに途切れる無線。

「い、一体何が…」

「…」

ジェネシスは携帯電話を出し、アンジールに連絡した。

アンジールは制御室のモニターから、外の様子を見た。なんと、博物館は今、奇妙な集団から襲撃を受けていたのだ。しかも、その集団の戦力がおかしい。明らかにアンドロイドなのである。

「まさか…奴らは…！」

アンジールにとって、アンドロイドによる襲撃を行う相手など一つしか思い当たらない。

「ブラックドッグか…！！」

そこへ、ちょうどいい感じにジエネシスから連絡が来た。

「アンジール。今外で何が起きている？」

「ブラックドッグだ！ブラックドッグが襲撃をかけてきた！」

「ブラックドッグだと？まさかあのテロリストどもが？」

ジエネシスとしても、それはかなり意外だったようである。銭形も驚く。

「ブラックドッグが！？」

「今外のソルジャー達が交戦しているらしい。」

そこへ、ジエネシス達と一緒に警備を行っていたソルジャーの一人

が来た。

「ジエネシスさん！俺達はどうしたら!？」

ジエネシスは少し考え、命令する。

「お前達は行って、外の防衛に参加しろ。ここは俺と銭形がいれば十分だ」

「はっ！」

「ちよっ、何を…」

銭形が止めるのも聞かず、ソルジャー達は外の防衛をするために出て行ってしまった。部下数名とともに残される銭形とジエネシス。

「どういつつもりだ！」

銭形は当然問い正すが、ジエネシスは再びLOVELESSに目を戻し、ひどく落ち着いた様子で言う。

「ルパンの目的は、恐らくこの混乱に乗じて碑文を盗むこと。ならばなおさら、メインの戦力である俺とお前がここを離れるわけにはいかない。」

「まさかルパンは、連中の襲撃を知っていたと!？」

「そうでもなければ、ここに忍び込もうなどとは思わないはずだ。

奴らもまだ命は惜しいだろうからな」

「な、なるほど…しかし、ブラックドッグの目的は一体…」

「決まっているだろう。連中もまた、碑文を欲しがっているんだ。」

代行者の碑文からは、常に膨大な量のエネルギーが放出されている。

これをアンドロイドにでも組み込むつもりなのだろうというのが、ジエネシスの予想だ。

「確かにその可能性は十分に…」

「お前も部下をブラックドッグの迎撃に当たらせる。どうセルパンと渡り合えるのは、俺とお前しかない。」

その言葉を聞き、銭形は自分の部下達をブラックドッグの迎撃に向かわせた。銭形はジエネシスに対して、密かに戦慄する。

（知能だけでも凄まじいというのに、実力はどれほどだというのだ？）

皇魔達は、ブラックドッグの襲撃から少し遅れて、博物館に到着した。

「何だ？もう始まってるぞ？」

日向は襲撃者の正体がわからず、ルパンの仕業だと思っている。しかし、ザックスは敵の正体を即座に看破した。

「あいつら、ブラックドッグのアンドロイドだ！」

「まさか旅行先でも連中とかち合うとはな……。」

クラウドはブラックドッグと鉢合わせたのにうんざりしている。アンドロイドの相手なら、一度きりで十分だ。

「でも、これは好都合だね。」

しかし、ゆりにとってこの状況は、行幸だった。普通に考えれば、『警備に協力しに来ました』なんて言っても、追いつかれるだけだ。本来ならレスティの超能力でなんとかしてもらおうと思っていたところだが、その手間が省けたのである。

「どうするの？」

ゆりに作戦を訊くかなで。ゆりは作戦を伝えた。

「アンドロイドを排除しつつ、代行者の碑文を防衛。可能なら、ルパン一味を倒す！」

これが作戦の内容だ。

「音無さん！背中には任せてください！」

「抜け駆けすんな！音無の背中を守んのは俺だ！」

「お前ら！こんな時に喧嘩すんなよ！」

「大丈夫。結弦はあたしが守るわ」

「そついう問題じゃねえよ！」

次々とボケる（当人は本気）直井、日向、かなでに対してツッコミを入れまくる音無。

「行くわよ！」

ゆりが自分の銃を抜くと、他の者も戦いの準備を整え、突入する。

「だから余は嫌だったのだ！！」

しかし皇魔は突入せず、悲鳴のような声をあげた。もう面倒事の匂いがプンプンするので、当然と言えば当然だが。

「大丈夫よ皇魔。」

しかし、嘆く皇魔をレスティーが慰める。

「何が大丈夫だというのだ！！」

「私にはセルメダルの自己増殖機能があるって言ったでしょ？今回私を楽しませれば、それだけ私の中のセルメダルは増える。だから私を楽しませてよ」

確かに、今回はメダルを一枚も手に入れられない状況だ。ならば、レスティーが唯一の補給源となる。

「…乗せられているようにしか聞こえんが…」

「いいのいいの！はい！」

レスティーはエンズドライバーとメダルを渡す。

「一応ね。」

「ふん…変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身し、レスティーとともに、先に突入したゆり達に続いていった。

一方、ルパン達はそれを目撃しており、次元はルパンに訊いた。

「おいルパン！こいつもお前の計算の内か！？」

「まさか。だが、やることは変わらねえ。手筈はわかってるな？」

「うむ。」

「ちっ！しょうがねえ…ここまで来たら、覚悟を決めるか！」

ルパンの確認に応じる五エ門と次元。

「よし、じゃあ行くぜ！」

突入するルパン一味。

こうして、代行者の碑文を巡るお宝争奪戦が始まった。

「かなで？入るぞ？」

仕事を終えて戻ってきたセフィロスは、かなでの班の部屋に入る。

しかし、かなではいなかった。かなでだけではなく、ゆりとレステイーも。

「かなで？仲村？レステイー？」

部屋の中を捜すセフィロス。と、なぜかセフィロスは、今日査察に訪れた第三神羅博物館のことを思い出した。そういえば今日、あの博物館はルパンから予告状が来たとかで、厳戒体勢が敷かれていた。

一般客の来訪はもちろん、ウチの生徒の来訪も禁じられていたはずだ。

「…まさか…」

妙な胸騒ぎを覚えたセフィロスは、窓を開けてホテルから飛び出していった。

先陣をきって進むザックスとクラウド。すると、早速アンドロイドが数体現れ、マシンガンを撃ってきた。

「いらっしやいませー！」

ザックスはバスターソードを振って銃弾を防ぎながら駆け抜け、大きく跳躍。

「ロストグラウンド学園二年A組、ザックス参上！」

そのまま敵陣の真ん中に飛び込む。アンドロイド達の両腕からはかなでのハンドソニックのような刃が飛び出し、すぐにザックスに斬りかかっていくが、ザックスの方が強いので、返り討ちだ。と、ザックスの背後から襲いかかるうとしていたアンドロイドを、クラウドが斬った。

「同じく二年A組、クラウド。」

「サンキュークラウド！」

「突出しすぎだ。もっと周りを見る」

「りょーかい」

二人はそれぞれの得物を振るい、アンドロイド達を片付けていく。

「先に行け！」
道を切り開いたクラウドは、ゆり達に叫んだ。
「ありがとう！」
「頑張つて。」
「気を付けるよ！」
「任せませ！」
「頼むぞ。」
「お願いね。」
ゆり、かなで、音無、日向、直井、レスティーはそれぞれ言っ
て駆け抜け、エンズは何も言わずに走っていった。

「……」
アンジールは背負っているバスターソードを抜くと、目を閉じなが
らその側面に額を当てて、何かを祈り始めた。
そこへ、
「願掛けか？礼儀がなってるな。」
次元が現れる。アンジールはそれを聞き、バスターソードを背負い
直した。

「そのバスターソード…使わないって噂は本当らしいな。」
アンジールは、バスターソードを使わない。それは、アンジールの
家族に関係があった。
アンジールの家は貧しく、それでもと彼の父が必死で働いて、この

バスターソードを購入し、アンジールはそれを受け継いだのだ。アンジールにとって、いや、アンジールの家にとって、このバスターソードは誇りなのである。形状こそザックスが使っているものと同型だが、込められている想いが違っていた。だからこそ、滅多なことでは使わない。彼がバスターソードを使うとしたら、それは自分にとって最も大切なものを守る時だ。次元はアンジールがバスターソードを使わないという情報を知っており、ゆえに一人で来たのである。剣を使わないソルジャーが相手なら、次元の勝率は一気に高まるからだ。

「どういう理由があるかは知らねえが、俺相手にも使わないつもりか？」

「甘く見てもらっては困る。お前ごときに使う剣などない！」
言うが早いか、アンジールは次元に殴りかかった。次元は音速を超える速度で繰り出される拳をかわして距離を取り、愛用のリボルバーでアンジールの顔面を撃つ。しかし、アンジールはそれを、首を軽く動かすことでかわした。

「さすがは1st、だな。剣なしでもそれくらいはできるか…」

「…お前に誇りはあるのか？」

「？」

いきなり問いかけてきたアンジール。

「お前にも誇りがあるのなら、それを見せてみる!」
アンジールは再び殴りかかった。

相変わらずLOVELESSを読みふけているジエネシス。

「いい加減にせんか！こんな大変な時に！」

ついに激怒する銭形だったが、ジエネシスはLOVELESSに目を向けたまま、銭形に言う。

「そこに立っていると危ないぞ。」

「？」

次の瞬間、目の前にあるドアの向こうからマイクロミサイルが飛んできて、銭形に直撃した。

「うおわあああああああ！！！」

銭形はミサイルを抱き抱えるような形で背後の壁まで吹き飛び、ミサイルの爆発を受けて気絶した。

「ルパン……逮捕だあ……」

完全にダウンしている銭形。と、

「深淵のなぞ それは女神の贈り物 我らは求め 飛びたった」

ジエネシスは突然、LOVELESSの朗読を始めた。

「さまよい続ける心の水面に かすかなさざ波を立てて」

「LOVELESS第一章、だな？」

破壊されたドアの向こうから、バズーカを持ったルパンと、五エ門がやって来る。

「ほう…お前達のようなこそ泥でも、こういったものは読むらしいな？少し意外だ。」

ジエネシスは朗読をやめ、LOVELESSをしまつ。

「まあ、大人のたしなみってやつだな。」

ルパンはジエネシスの背後にある台座、そこに安置されている代行者の碑文を見てから、言った。

「そのわりには、盗みなどという大人らしくないことの常習犯らしいな。」

ジエネシスは自分の武器である刀身の赤い剣、レイピアを抜く。

「痛いところを突くねえ。」

ルパンはそれを見ても軽口を崩さない。ジェネシスも余裕を保ったままだ。

「お前達に憧れを抱く犯罪者は多い。つまり、ここでお前達を仕止めておけば、今後の犯罪の抑制にも繋がる。」

「俺達が簡単に捕まると思ってたんのか？」

「逆に聞こう。俺に勝てると思うのか？」

「まあ苦戦は強いられるだろうなあ。お前はソルジャーで、こっちはただの人間だし。」

「なら、痛い目を見る前に降参すべきだと思うが？」

ソルジャーと普通の人間では、モノが違う。ルパン達は他人より能力が高いたけのただの人間であり、人間以外の敵との戦闘を想定して生み出された存在であるソルジャーと戦えば、まず苦戦は避けられない。

しかし、

「そいつはできねえ相談だ。俺にだって、意地があるからな。」
ルパンに退く気はなかった。五エ門も自分の武器、斬鉄剣に手をかける。

「ソルジャー・クラス1st ジェネシス！いざ尋常に勝負！！」

「…いいだろう。」

ジェネシスは軽く笑い、レイピアの刀身を撫で、魔力を込めた。すると、刃が光り輝く。

「少しは俺を楽しませろ。」

ジェネシスは斬りかかった。

「ガードスキル・デイストーション」

かなでが呟くと、かなでの身体を一瞬光が包んだ。一斉射撃を行うアンドロイド達。しかし、かなでに向けて放たれた銃弾は、直撃する前に全てあらぬ方向へ飛んで行ってしまふ。これぞ、かなでのガードスキルの一つ、デイストーションだ。ある一定レベルの威力までの遠距離攻撃を歪曲させ、無効化してしまう能力である。ゆり、音無、日向、直井はかなでを盾に射撃を行う。

「おおおっ!!!」

エンズは銃弾をもるともせずメダジャベリンを振ってアンドロイド達を倒していき、レスティーも念動バリアで攻撃を防ぎつつ、たまに衝撃波を出して反撃する。

「しかし何体いるんだ？キリがねえぞ！」

倒しても倒しても現れるアンドロイド達に対し、危機感を覚える日向。するとそこへ、どこからともなく大量のコウモリが飛来し、それが一カ所に集中して、アーカードになった。

「なかなか面白そうなことになっているな。」

「アーカード!？」

驚く音無。アーカードはカスールとジャツカルを抜いて、アンドロイドの頭部だけを正確に撃ち抜き、倒していく。

「ここは私が引き受けよう。お前達は行け」

「アーカードさんナイス！」

ゆりは迷うことなく駆け出し、展示室へ向かった。

「おいゆり!!」

慌てて追いかける音無。その後ろを迷うことなくついていくかなで。「音無さん！待ってください!!」

直井も続く。

「ちよっ、お前ら…ああくそ！すまねえアーカード！」

日向は仕方なく、アーカードにこの場を任せた。アーカードはエン

ズとレスティーにも言う。

「お前達も行け。」

「えっ！？でも…」

「ならば任せよう。」

「皇魔！？」

「この男がそう簡単に死ぬか。行くぞ」

エンズは渋るレスティーを無理矢理つれて、この場を離れる。

「ククク…それでいい。」

全員が行ったのを確認したアーカードは、一人でアンドロイド達を相手にする。例のごとくアンドロイド達の攻撃は避けようとせず、全ての攻撃を受けながら、それでいて何の問題もなく反撃、カスールとジャツカルのリロードを繰り返す。

(さて…どこにいるか…)

次元は満身創痍だ。アンジールにボコられまくったからである。

「てこずらせてくれる…だが、終わりだ！」

ファイティングポーズを取るアンジール。次元は今のアンジールの位置を見て、薄ら笑いを浮かべる。そして、

「準備なら、こっちも終わったぜ！」

アンジールの背後にあったセキュリティのコントロールパネルを撃ち抜いた。

「何！？」

驚くアンジール。次元はずっとこの時を待っていたのだ。直後、次

元はスモークグレネードを使い、煙幕を張って逃げた。

「しくじったか…ジエネシス…!!」

アンジールは展示室に向かって駆け出した。

ルパンがバズーカを持ってきたのは、単純にジエネシスの圧倒的な戦闘力に対抗するためだ。しかし、ジエネシスは五工門の攻撃を防ぎながら、バズーカから放たれるマイクロミサイルも的確に斬っている。要するに、あまり意味がない。そうこうしているうちにミサイルも尽き、仕方なくバズーカを破棄したルパンは、拳銃で攻撃を始めた。それすらも防ぐジエネシス。

「どうした？まさかそれで終わりじゃないだろうな？」

「くっ…これほどとは…」

「やるじゃねえか。」

五工門には余裕がない。ルパンも平静を装ってはいるが、こちらあまり余裕はなかった。

そこへ、

「ルパン！セキュリティを破壊したぜ！」

ルパンの耳にかけてある無線機へ、次元からのメッセージが。

「五工門！」

ルパンは叫んだ。その一言で全てを察した五エ門は、
「おおおおおおお！！！」

突撃し、可能な限りジエネシスを碑文から引き離す。

「ルパン！！！」

「あいよお！！！」

ルパンは超小型爆弾を取り出し、碑文に投げつけて爆発させ、ケースを破壊。間髪入れずにマジックハンドを出し、碑文を掴んで引き寄せた。

「何だと！？」

驚愕のジエネシス。当然だろう。碑文を守るバリアの制御をしているのは、制御室。バリアが消えているということは、アンジールが負けたということだからだ。実際は負けたわけではなく、コントロールパネルを破壊されたただけだが。

「ずらかるぜ五エ門！！！」

すかさずスモークグレネードを出そうとするルパンだが、

ズダアアアンツ！！！！

ルパンの足元の床を、銃弾が跳ねた。

「碑文を渡してもらおうかしら？こそ泥さん」

撃ったのは、ルパンの背後にいるゆりだ。

「…へえ…なかなかのじゃじゃ馬娘じゃねえか。」

ルパンは即座に振り向き、射撃を行う。ゆりはそれをかわして近くの柱に隠れる。そのまままた撃とうとするが、銃は弾切れを起こしていた。

「ちっ…！！」

ゆりは隠していたコンバットナイフを二本抜いて突撃。ルパンの銃撃を掻い潜って肉薄し、

「はあっ！！」

右のナイフで刺突を繰り返す。ルパンはそれをかわすが、ゆりはすぐに左のナイフを使って応戦。

「やるなあお前。何もんだ？」

「あなたに研修を邪魔された学生とだけ答えておくわ。」

二人の実力はおおむね互角。ジエネシスと五エ門は完全に空気であり、五エ門はジエネシスに訊いた。

「あれもソルジャーの一人か？」

「いや、俺の友人から聞いていた、友人の教え子、だったか？」

ジエネシスはセフィロスから定期的に生徒の情報を得ており、ゆりの情報も聞いている。ずいぶんわがままで自分勝手だが、年相応な面もある女子生徒だと。

その時、

「ゆり、下がって。」

「！！」

声が聞こえて、ゆりは下がる。ルパンは声が聞こえた方向を見た。

「ガードスキル・シャウト」

そこにはかなでがいて、口からルパンに向けて光線を吐いた。

「立華かなで！？」

驚くジエネシスの目の前で、光線はルパンへと飛んでいく。

「うおおっ！！」

間一髪で回避したが、それでも衝撃によって吹き飛ばされるルパン。その拍子にルパンの手から碑文が離れ、宙を舞った。

「碑文が！」

落ちてくる碑文をキャッチしようと走るゆり。ジエネシスと五エ門も駆け出す。

しかし、碑文が地面に落下することはなかった。
どこからかワイヤー付きのマジックハンドが伸びてきて、碑文をか
っさらっていったからだ。

全員がマジックハンドが伸びてきた方向を見る。マジックハンドが
伸びてきたのは窓。そして、その窓には、

「不二子！」

そう、峰不二子がいたのだ。不二子は碑文を手に、ルパンに言う。

「ごめんなさいねルパン。あなたも次元も五エ門も、あのアンドロ
イド達も全員利用させてもらったわ。」

「何い！？」

ルパンは不二子の発言に驚く。彼女がルパン達を利用することは、
前にもあった。しかし今不二子は、ルパン達だけでなくアンドロイ
ド達まで利用したと言ったのだ。普通はこの混戦に乗じて横取りす
るつもりだったのだろうと考えるが、ルパンは長年の経験から不二
子の言葉の真意を読み取った。

「まさかお前、ブラックドッグとも手を組んでたつてののか！？」

「そういうこと。あと一分でこの博物館に対してミサイル攻撃が行
われるから、早く逃げた方がいいわよ？」

さっさと逃げようとする不二子。

「かなでちゃん！！」

ゆりの言葉を聞き、碑文を奪い返そうと不二子に挑むかなで。しか
し不二子は素早くサングラスをかけると、手元でフラッシュグレネ
ードを発動。

「！！！！」

強烈な光を顔面に浴びたかなでは気絶し、まっ逆さまに落ちていく。

しかし、別の窓を破って現れたセフィロスがかなでを救出した。

「セフィロス先生！？」

「セフィロス!?」

驚くゆりとジェネシス。セフィロスはかなでの顔を見てから、不二子のいた窓を見た。だが、不二子とはとくに逃げてしまっている。ルパンと五エ門も、どさくさ紛れに離脱したらしい。そこへ、ようやく音無達が到着した。

「セフィロス先生!？」

「どうしてここに!？」

音無と日向は驚き、セフィロスは少し睨む。

「聞かせてもらおうか。なぜお前達がここにいいのかを」

しかし、

「説教ならあとにしろセフィロス。」

ジェネシスが状況を説明した。もうすぐこの博物館は、ブラックドッグのミサイル攻撃によって吹き飛ばされてしまう。早急な離脱が必要だ。と、エンズとレスティーが追いついてきた。ジェネシスは二人にも状況を説明する。

「レスティー。貴様の瞬間移動で離脱するぞ」

エンズは最良の提案をした。しかし、

「これ、使ってみて。」

レスティーはそれに答えず、一枚のコアメダルを渡した。メダルの名は、サイコネシスコアメダル。念動力が使えるようになるメダルだ。

「それを使って、ミサイルを止めるのよ。」

「なぜそのような面倒な真似を?」

「確かめたいことがあるの。やって」

「…」

仕方なく、エンズはサイコネシスコアメダルを装填し、ドライバ―をスキャン。

クレアボヤンス!サイコネシス!ホノオ!

クレサイホコンボにコンボチェンジした。そのまま跳躍したエンズは天窓を突き破って屋上に着地し、遠くの空を見つめる。夜なので暗いが、クレアボヤンスコアメダルの力を解放することで、数十ものミサイルを確認することができた。エンズは両手をミサイル群に向けると、サイコキネシスコアメダルの力を解放。ミサイル全てを握り潰すのだった。突然の爆発を見たザックスが、

「うお!? 花火!?!」

と驚いていたのは言うまでもない。

アンドロイド達が全滅し、

「全く…気付いたのが俺だからよかったものの、他のやつだったらお前達は停学になっていたところだぞ?」

などとセフィロスから厳重注意を受け、皇魔達は帰されることになった。彼らを先に帰し、セフィロスはジェネシスとアンジールに謝る。

「すまなかつたな。」

「謝る必要はないさ。むしろ、ルパン一味相手によくやったと褒めてやりたい。」

「それに引き換え俺は…降格ものだな…」

「アンジール…」

落ち込むアンジールを、どうにかしたいと思うセフィロス。

「…大丈夫だ。お前はお前で、教え子達を守ってやれ。」

「…すまない。」

セフィロスはアンジールに一言謝り、帰っていった。

「…さて…」

ジエネシスは何かの端末を取り出す。実は彼は、碑文に超小型の発信器を取り付けていたのだ。これはそれを追うための端末である。

当然アンジールはそのことを聞かされており、知ったうえで、未だにのびている銭形を起こしに行っていた。アンジールは銭形に回復魔法をかけ、意識を覚醒させる。

「はっ！ル、ルパンは!？」

飛び起きた銭形。

「もう逃げました。」

「くそうルパンめえ…」

悔しがる銭形。しかし、アンジールは言った。

「しかし、任務はまだ終わっていません。」

「え？」

「あーもう！ホントムカつく!」

ゆりはご立腹だった。ルパンの邪魔はできたが、結局碑文は盗まれてしまったからだ。しかし、そこへアーカードが現れた。

「ずいぶんと荒れているな？」

「うわっ！アーカードさん!」

「相変わらず何の前触れもなく現れるよなあ…っーかどこ行ってたんだ？突然いなくなっちまうし。」

驚くゆりとザックス。

「そんなことはどうでもいいだろう？それより…ブラックドッグのアジトを知りたくないか？」

アーカードはアンドロイド達と戦っている間、アンドロイド達を指揮しているブラックドッグの隊長を捜していた。読者の皆様は不二子が隊長だと思っただろうが、実はブラックドッグ側も彼女を信頼してはおらず、監視の意味も込めて、隊長を派遣していたのだ。それを見つけたアーカードは、その隊長に対し、吸血を行ったのである。アーカードは吸血した相手が持つ情報を読み取ることができると、ブラックドッグのアジトの情報も入手できたのだ。隊長は死んでしまったが。

「やっぱりナイスアーカードさん！」

ゆりはアーカードの両肩に全力で手を置き、そして拳を握りしめた。

「リベンジよー！」

「……はあ……」

クラウド、日向、直井は同時にため息を吐いた。

気絶したままのかなでをおぶっている音無は皇魔を見た。

「なあ、なんかお前：息上がってないか？」

皇魔は、明らかに息が上がっていた。しかし皇魔は、

「気の、せいだ……」

と強がる。音無は、かなり戦ったから、そのせいだと思っていたが、

「……」

レスティーは違った。

彼女が確かめたかったこととは、皇魔が自分のコアメダルのパワーに耐えられるかどうかである。実は彼女のコアメダルは、コレク達の数倍近いパワーを秘めており、コレク達のコアメダルを使うより負担が大きいのだ。今までクレアボヤンスコアメダルのパワーに耐えてきたのだからもしかしたらと思ったが、やはり一枚増えるとなると違うらしい。

（この分だと私のコンボを使うのは、まだまだ先になりそうね……）

レスティーがそう思っていると、

「レスティー。」

皇魔が尋ねてきた。

「貴様、確かめたいことが、あると言っていたが…何だったのだ…」

「？」

「…」

レスティーは真実を告げようかどうか少し迷い、結果、

「ううん、何でもないわ。」

言わないで、ごまかしておくことにした。

第十二話 計画と予想外とお宝争奪戦（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

ゆり「大サービスで見せてあげるわ。」

かなで「お父さん……」

スパイダーマン「悪の絡繰を粉碎する男！スパイダーマン！！」

皇魔「コレク。貴様の力、貸してもらっぞ。」

第十三話 リベンジと天使と武装コンボ

ガードスキル・シャウト

かなでが遠距離攻撃用に生み出したガードスキル。口から光線を吐く。

サイコネシスコアメダル

レスティーのコアメダル。エンズの腕をサイコネシスアームに変化させる。

強力な念動力を使うことが可能。

第十三話 リベンジと天使と武装コンボ（前書き）

遅くなりました！修学旅行編、完結です！

第十三話 リベンジと天使と武装コンボ

コスタ・デル・ソルから数十km離れた場所にある、陸地に近い孤島。ブラックドッグのアジトは、ここにあった。しかし、孤島のどこかにアジトがあるわけではない。孤島そのものが、実は無人島に偽装された要塞なのだ。ブラックドッグが所有する船や飛行機には全てステルス機能が搭載されており、従ってそこがテロリストのアジトなどということには、誰も気付けない。ブラックドッグはこの要塞の中でアンドロイドを始めとする様々な兵器を開発し、日夜テロに勤しんでいるのである。

「エネルギーの放出を確認。本物です」

ブラックドッグ科学班班長ピューロ・マクベルは、ブラックドッグのリーダー、ガルシア・グラナに報告した。現在二人は、不二子から届けられた代行者の碑文が本物かどうかを確認していたのだ。代行者の碑文からは常に膨大な量のエネルギーが放出されているため、それが確認できれば本物。できなければ偽物、と、大変わかりやすい。今確認していた碑文からはエネルギー放出が確認できたため、本物だ。ガルシアは不二子に言う。

「確かに碑文は受け取った。」

「ただあげるわけじゃないわ。交換条件ってこと、忘れてないわよね？」

「当然だ。そちらについては応接室でお渡しするので、先に行っていてはもらえないだろうか？」

「仕方ないわね…待ってるから早めに来てちょうだいよ？」

不二子はそれを聞いて、応接室に行った。不二子がいなくなったのを確認し、ガルシアはピューロに尋ねる。

「どうだ？」

「はい。リーダーの予想通り、発信機が取り付けられています。」
今碑文がセットされているエネルギー測定機には、測定対象についている発信機を感知する機能がある。しかし元からあった機能ではなく、ガルシアが不二子の裏切りを避けるために、後付けさせた機能だ。もっとも、科学班の人間にしか発信機の反応がわからないように細工をしてあるが。

「どうしますか？」

「せっかく向こうから出向いてくれるというのだ。このままにしておけ」

ガルシアはあまり気にしていない。それほどまでに、彼には余裕があるのだ。

「碑文さえ手に入ればいい。これさえあれば、ようやく完成したアしを起動させられるのだからな。いずれここを嗅ぎ付けるであろう連中を相手に、試運転を行うのも良い。」

「あの女は？」

「始末しろ。どのみち組織の秘密を知った部外者を生かしておくわけにはいかん」

「かしこまりました。」

ピューロは了承し、無線で待機させてあるアンドロイド達に命令を下す。

「命令。峰不二子を始末せよ」

不二子は、とある相手に連絡していた。

「ルパン。聞こえる？」

不二子が連絡している相手は、ルパンだ。実は、ルパンを利用していたというのは演技であり、ルパンと不二子は始めからブラックドッグを壊滅させるために共闘していたのである。正確には、代行者の碑文の破壊、もしくは封印が目的だが。

碑文が発掘され、それを一目見た時から、ルパンと不二子は予感を覚えていた。これは、見つけられるべき品ではなかった。直ちに破壊するか、封印する必要がある、と。普段ならそんなことを思ったりはしない二人だったが、二人の直感がそう告げてしまうほどの、得体の知れない何かが碑文には込められていたのだ。ブラックドッグの壊滅は、そのついでである。以前に何回か二人の仕事にブラックドッグが介入してきたことがあり、ルパン自身もテロリストは大嫌いなため、これ以上邪魔をされる前にということだ。ブラックドッグの行動は、守りの厚い神羅博物館から碑文を持ち出せる唯一のチャンスでもあったので、行幸と言える。

「聞こえてるぜ。」

「向こうもそろそろ気付く頃だから、先に始めてるわね。」

「おう。こっちも、あと二三分で着くから、それまでもたせな。」

「了解。」

不二子は連絡を終わった。

要塞へと向かう小型ジャイロ。ルパンが操縦し、次元、五エ門は半分外に身を乗り出す形で乗っている。本当は二人乗りなのだからしようがない。次元は言った。

「しかし、あんな手の込んだ芝居を打つなんてな。」

当然、あの演技のことは次元と五エ門には伝えられていない。

「敵を欺くにはまず味方から。常套だろ？」

「しかし、あの碑文はそれほどまでに危険なのか？」

今度は五エ門が訊く。

「…ああ。あの碑文からはなんとというか…危険を通り越して絶望的な匂いがするんだよ。このままにしておいたら絶対ヤバイ」

「絶望的な匂い、か…」

ルパンはうまく口で言い表せていないようだったが、五エ門はルパンが言おうとしていることを理解した。

そうこうしているうちに、もう要塞に着く。

「じゃ、派手に行こうぜ！」

「おう！」

「心得た！」

ルパンの合図を聞き、次元と五エ門が飛び降りる。迎撃に出てきたアンドロイド達が、一斉にマシンガンを乱射してきた。次元は弾丸の嵐を掻い潜ってアンドロイドの弱点を銃撃し、五エ門は弾丸を斬鉄剣で斬り払いながら、アンドロイドを斬る。ルパンはジャイロに搭載された機関銃を撃ち、敵の数を減らしていった。

神羅の輸送機に乗り、要塞へと近づくアンジール、ジエネシス、銭形。銭形は要塞を見る。

「見つけた！ルパンがいるぞ！」

「どうやら、先を越されたらしいな。」

ジエネシスも確認した。アンジールが告げる。

「三十分後に軍が投入される。その前に、俺達の手で碑文を回収するぞ！」

アンジール達はルパン一味の逮捕と碑文の奪還を命じられているが、もし不可能な場合、神羅軍によってルパン一味と碑文、ブラックドッグを全部まとめて破壊することになっている。敵に利用されるくらいなら破壊した方がマシというのが、神羅上層部の決定だ。そうなる前に、碑文を回収しなければならない。打ち合わせとしては、三人が降下すると同時に輸送機を離脱させ、ルパン一味の逮捕と碑文を奪還。その後時間に応じて軍の攻撃を遅らせ、離脱したのちにブラックドッグを軍が壊滅させる、という流れになっている。と、

「ルパンー！！」

アンジールが降下の合図を出す前に降下する銭形。銭形はルパンの乗るジャイロに飛びついた。

「と、とつつあん！？」

「ルパンー！！逮捕だー！！」

「だから空気読みなさいってば！」

「知るかー！！わしは貴様さえ逮捕できれば、何だっていいんだー！！」
銭形を振り落とそうとするルパンと、必死でジャイロにしがみつく銭形。やがて操作をミスったジャイロは墜落して爆発するが、ルパンと銭形はその前に脱出し、

「うわー！！！！」

「ルパンー！！！！」

追いかけてつこをしながら要塞の内部へ入って行ってしまった。

「ルパン！？くそ…追うぞ五エ門！」

「承知！」

既にアンドロイドを全滅させていた次元と五エ門は、ルパンと銭形を追いかけていく。完全に置いてきぼりを食らったアンジールとジエネシスだがすぐに降下し、輸送機は打ち合わせ通り離脱していった。

「あそこか！」

アーカードの道案内を頼りにたどり着き、要塞を発見する音無。

「お？なんかもう始まつてるぞ？」

ザックスの言う通り、要塞のあちこちから煙が上がっている。ルパン達が戦い始めた影響だ。

「急がないと、今度はルパン達に碑文を奪われるわ！」

ゆりは危機感を抱く。しかし、

「だがあそこまでどうやって行く？」

クラウドが行った通り、行く手段がない。いくら陸地に近いとはいえ、要塞との間は結構な距離がある。船か飛行機を使わなければ、乗り込むのは不可能なのだ。当然のことながらあの島に船は出ておらず、飛行機などもつてのほか。しかし、

「私の瞬間移動を使えば問題ないわ。」

レスティーは言った。確かに彼女の瞬間移動ならば、簡単に乗り込

める。

「決まりね。じゃあお願い」

「わかったわ。」

ゆりの頼みに応じてレスティーは瞬間移動を使い、一同は要塞に乗り込む。待ち受けていたのは、また新たに迎撃に出てきたアンドロイド達。

「結局付き合わされてしまったか…」

「ここまで来たら、やるしかないわよ。」

嘆息する皇魔にベルトとメダルを渡すレスティー。

「誰のせいだと思っっているのだ…変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

皇魔は愚痴りながらもエンズに変身し、レゾリウム光線を出してアンドロイド達を薙ぎ払う。アンドロイドは一瞬で全滅した。

「相変わらずすげえな…」

「貴様もあれぐらいの働きはしたらどうだ？」

「うっせえ！お前もだろ！」

日向と直井はこんな状況でも喧嘩をしている。

「馬鹿やってないで、さっさと行くわよ！」

先行するゆり。

「ちよつと待てよ！危ないって！」

ザックスは慌てて追いかけ、クラウドは黙って続いた。

「行くぞかなで！」

「わかったわ。」

「あつ！待てよ音無！」

「僕も行きます！」

音無、かなで、日向、直井も走る。

「ほら、あなたが先行しなくちゃ！」

「ええい面倒な…!!」

「ククク…」

最後にレスティ、エンズ、アーカードが突入していった。

「…」

実はずっと皇魔達を尾行していたセフィロス。理由は、またゆりが何かよからぬことを企んでそうだったからだ。完全に行動パターンを読まれている。まあ、ブラックドッグやルパンに対しては、セフィロスも別件で用があった。

ロストグラウンド学園に来る前、いや、かなでと出会う前。セフィロスは誰にも心を開かず、自分のことを話したがらなかった。そんな彼が心を許せた相手が、ジェネシスとアンジールなのである。しかし、今回ルパン一味とブラックドッグのせいで、二人が持つソルジャーとしての誇りは汚されてしまった。セフィロスはそれが許せず、両者に復讐するという名目で、ここにいる。

だが、来たはいいが要塞まで行く手段がない。

「…翼でもあれば、話は別だが。」

彼らしくない無い物ねだりをしてみるセフィロス。

その時、

セフィロスの身体に異常が起きた。

「こ、これは…？」

その異常は、彼が要塞に行くための方法にはなる。しかし、

「何なんだ…これは…」

彼にとっては、化け物の証。

「…考えても仕方ない。」

今まで人外ばかりがいる学園の教師をやっていたおかげで耐性がついていたセフィロスは、要塞へ向かった。

エンズ、レスティー、クラウド、ザックス、かなで、アーカードが前線で戦ってくれるが、敵は圧倒的な数の暴力で攻めてくる。倒しても倒しても追いつかない。そのうち、

「くっ……」

ゆりの銃が弾切れを起こした。

「ゆり！」

慌てて駆け寄る音無。

「予備の弾倉は！？」

「もうないわ。」

今のが最後だった。

「俺のを使え！」

音無は代わりに自分のマガジンを渡す。しかし、

「……いいえ、大丈夫よ。」

ゆりはマガジンを音無に返した。

「どうして！？まさか接近戦を挑むつもりじゃないだろうな！？」

「そのまさかよ。」

ゆりは恐れることなく前に出る。

「無茶だ！戻れゆり！」

叫ぶ音無。ゆりはエンズやレスティーのように頑丈なわけでも、クラウド達のように弾丸を無力化する手段を持っているわけでもない。危険すぎる。

しかし、ゆりはあるものを出して襲い来るアンドロイド達に言い放った。

「大サービスで見せてあげるわ。」

それは、携帯質量。

「あたしのアルター能力を！」

ゆりは携帯質量を分解した。再構築した形状は、コンバットナイフ。

「お前、いつの間にアルター能力を！？」

驚く音無。

「一週間くらい前ね。まあ見てて」

言うと、突然ゆりの姿が消えた。

「あれ？ゆりっぺは？」

「どこへ行った？」

日向と直井はゆりを捜す。

次の瞬間、アンドロイドの一体が何の前触れもなく両断された。

「!?!」

再び驚く音無。アンドロイド達も驚いていたが、その間にまた一体両断される。またまた一体。またまたまた一体とどんどん倒されていき、最後には全てのアンドロイドが倒された。

これが、ゆりの身につけたアルター能力である。自分の姿を消し、自分が出す音や声、影さえも消してしまい、レーダーにも探知されない究極のステルス。

「名付けて、サイレントアサシン。」

姿を現したゆりは自分のアルターに付けた名前を言った後、再びステルスをかけ、アンドロイドを倒していく。

「すげえなあアルター能力って。」

感嘆する日向。

「…」

音無は、どこか悔しそうな顔をしていた。

アンドロイドを倒しながら進撃していく一同は、やがて広い場所に出た。そこでは、ルパン、次元、五エ門、不二子、ジェネシス、アンジールが、共闘している。

ちなみに銭形は、

「ルパンン！！どこだあゝ！！？」
「要塞内を迷走していた。」

エンズがジェネシスに話しかけた。

「貴様、確かジェネシスと言ったな？」

「その声、セフィロスが言っていた皇魔か。」

「これは一体どうなっている？」

エンズの言うこれとは、なぜルパン一味と共闘しているのか、だ。

「別に共闘しているわけじゃない。敵の戦力が予想以上の数だったから、手を出す暇がないだけだ。」

説明しながら、ジェネシスはアンドロイドの一体をレイピアで斬る。

「なるほど。」

納得しつつ、エンズもメダジャベリンでアンドロイドを斬った。

その時、

「そこまでだ！」

ガルシアが現れた。隣に一体、アンドロイドを連れている。

「何だ奴は？」

「ブラックドッグの首領、ガルシア！」

エンズの疑問にはアンジールが答えた。

「ならば、奴を倒せば終わるな。死ね！」

エンズはメダジャベリンを構えてガルシアに飛び掛かる。しかし、隣にいたアンドロイドは瞬時に反応し、胸部のハッチを開いて内蔵してあるキャノン砲を撃った。

「ぐおあっ!!」

距離が近すぎて避けられず、直撃を受けたエンズは吹き飛ぶ。アンドロイドは間髪入れずに両腕から刃を伸ばし、エンズに追撃を仕掛けた。エンズも素早く体勢を立て直して反撃するが、アンドロイドの動きに翻弄され、防戦一方となる。クラウドは驚いた。

「何だあのアンドロイドは!？」

このアンドロイドだけ、パワーもスピードも動きも技も、他のアンドロイドとは全く比較にならないほどに精練されたものだったのだ。ガルシアは説明する。

「我々が開発した最高傑作のアンドロイド、シルバーベリオンだ! 量産型とはわけが違う!」

シルバーベリオンはなおもエンズを圧倒する。

「ぐっ… 人形ごときが…!」

エンズはシルバーベリオンの攻撃をメダジャベリンで受け止めるが、直後にキャノン砲で吹き飛ばされた。

「シルバーベリオン! そいつらを足止めしろ!」

「了解。」

ガルシアの命令を了承したシルバーベリオンは、一度エンズを弾き飛ばし、両腕に内蔵されていたガトリングを使って周囲を一斉攻撃する。ガルシアはその間に近くのドアを開けて逃げてしまった。

「くそ… 見境がねえ…」

次元は悪態をつく。シルバーベリオンの戦闘力は恐るべきものがあり、また同時に周囲のアンドロイド達まで相手にしなければならなかったため、碑文の破壊もガルシアの撃破も、非常に難しくなっていた。アンドロイドだけならまだ撒けるが、シルバーベリオンだけはそうもいきそうにない。

と、

「かなでちゃん！」

ゆりが驚愕の声をあげた。かなでがシルバーリベリオンに突撃をかけたのだ。ルパンは同時に、周囲の状況を見る。全員アンドロイドとの戦いに手一杯で、今こちらに気をかけられる余裕のある者はいない。

「チャンス！」

ルパンはこの隙を逃さずに駆け抜け、ガルシアが消えたドアをくぐった。次元、五エ門、不二子も続く。

「よせ！立華！」

エンズまでがかなでを止めようとしていた。もはやルパン達の姿は見えていない。かなではかなでで善戦するが、相手はエンズをも凌駕する力の持ち主。徐々に追い詰められていく。やがて交差させたハンドソニックの刃が、シルバーリベリオンの左腕の刃を受けて砕け散った。

「！！！」

驚くかなでに、続いて襲いかかる右腕の凶刃。

しかし、その刃がかなでを真つ二つにすることは、なかった。

セフィロスが割り込んできて、正宗で受け止めたからだ。そのまま、シルバーリベリオンを押し返す。シルバーリベリオンはそれを利用して飛び退き、大きく距離を取った。

「お父さん…？」
首を傾げるかなで。状況を知らないはずのセフィロスがここにいるから、というのも理由だが、それ以上に、セフィロスの身体に起きている異常について、かなでは疑問に思っていた。

セフィロスの右肩から、漆黒の翼がはえていたのだ。彼はこれを使って、ここまで飛んできたのである。

「セフィロス…その翼は…！？」

アンジールは驚いて尋ねるが、

「わからない。翼が欲しいと思ったなら、いきなりはえてきた。」

セフィロスは首を横に振るばかり。

「その翼についてはまたゆっくり聞こう。今はこいつらを殲滅することが優先だ！」

ジエネシスが言い、セフィロスは頷く。と、

「おのれ…！！」

突然エンズから声が。エンズは、ほんの少しでもかなでを助けようと思ってしまった。今までの彼ならありえなかったことだ。なので、（余は一体どうしたというのだ！？これも全てあのアンドロイドのせいだ！なにがなんでも殲滅してやるぞ…！！）
という具合に、勝手にシルバーリベリオンのせいにしていた。

「レスティ―！あのメダルをよこせ！」

「あれね。わかったわ！」

エンズの要望を察したレスティ―は、あるメダルをエンズに渡す。

そのメダルは、ケンコアメダルと、ハンマーコアメダル。どちらもコレクのコアメダルだ。

エンズはメダルに向かって言う。

「コレク。貴様の力を貸してもらおうぞ」

言ってから、エンズは二枚のコアメダルをドライバーにセットし、エンスキャナーを手に取る。

『だが、これだけは覚えておけ。』

しかし、スキヤンしかけたところで、唐突にコレクの言葉がエンズの頭をよぎった。

『エンズとはその名の通り、全てを終わらせる者。世界も、時間も、空間も、命も。そして、貴様自身の存在すらも…』

「…」

「皇魔？」

エンズがスキヤンしかけた手を突然止めてしまったため、妙に思っ
て声をかけるレスティー！

「…どのような事情があるか知らんが、余は終わるつもりなどない
！」

エンズは気持ちを改め、ドライバーをスキヤン。

ケン！ヤリ！ハンマー！ケヤーハ！！ケヤーハ！！！！

ケヤーハコンボにコンボチェンジした。

「！」

「あっ」

このコンボの危険性を本能的に感知したセフィロスは、かなでを抱いて翼をはためかせ、空中へ逃げる。

「……」

「……」

睨み付けるエンズと、その視線を受け止めざるシルバリベリオン。やがて、エンズは言った。

「さあ、戦え！」

その言葉を聞いた瞬間、シルバリベリオンはエンズに向けてキャノン砲を撃った。

ドガアアアアアッ！！！！

直撃だ。しかし、エンズは全くダメージを受けていない。戦車を五台をまとめて粉碎できるキャノン砲が、効かないのだ。

「！！！！」

今度はガトリングを撃つシルバリベリオン。脅威の命中率によって弾は全弾直撃するが、やはりエンズはノーダメージ。どころか、ゆっくりとシルバリベリオンに近付いていく。一発一発が、厚さ80cmの鉄板を撃ち抜ける威力なのだが。射撃が無駄とわかったシルバリベリオンは両腕の刃を出し、さらに刃を振動させ、エンズに斬りかかった。

ガギンッ！！

これも直撃。だが、
「そんなものか？」
エンズは全くの無傷。さらに、空中に剣を生成して掴み取り、シルバリーベリオンを斬る。榴弾を零距离から受けても傷一つ付かないボディーに、大きな傷ができた。

鴻上ファウンデーション。モニターを見ながら、光生はケーキを作っていた。実は、ブラックドッグにはロストグラウンド学園の修学旅行に合わせて鴻上ファウンデーション製のアンドロイドを極秘に潜り込ませており、それでエンズを監視していたのだ。
光生はエリカに訊く。

「里中君。武器と聞いたら、君は何を思い浮かべるかね？」

「…銃とか、剣とか、槍とか、あと戦車とか…いろいろですね。」
「とりあえず、全て武器だ。」

「確かに、それも武器のうちに入る。しかし、動物が使う爪や牙なども、立派な武器だ。単純な腕力や敏捷性も、武器になる。」
それは古来よりあった天然の、自分だけの武器。

「時として生き物は、自分の武器を試してみたくなる。戦いたい！と思う。それこそまさしく、『闘争本能』という欲望だ。そしてその闘争本能に従い、人間の武器はより強い敵をより多く、より確実に、そしてより効率的に倒すために進化を繰り返してきた。全ては、

欲望の集大成だ。」

ケーキを完成させた光生は、モニター越しにシルバーリベリオンを
圧倒するエンズを見た。

「素晴らしいッ！！！」

スキヤニングチャージ！！

エンズはドライバーをスキャンした後、片手をシルバーリベリオン
にかざす。すると、シルバーリベリオンを包囲するように、剣、槍、
斧、ナイフ、矛、様々な武器が出現。そしてそれらの武器はエンズ
の合図で、

シルバーリベリオンを串刺しにした。

「ぬん！」

さらに両腕にヤリニードルを生成したエンズは、両腕を交差させる

ようにしてシルバーベリオンを斬りつける。

ケヤーハバイオレント。それがこの技の名前だ。

ズドガアアアアアアンツ！！！！！

シルバーベリオンは爆発し、粉々になった。

「す、すげえ……」

「あのアンドロイドを……こうも簡単に……」

新たなるコンボの力を目の当たりにし、戦慄するザックスとクラウド。ちなみに、他のアンドロイドは全滅していた。

「さすが、皇魔くんね。」

ゆりは感心し、

「これは……」

「何だ、あの力は？」

アンジールとジエネスまでが恐れる。

「全く、見ていて飽きない。」

余裕を崩さないアーカード。

「なるほど、やはり俺の勘に狂いはなかったか。」

セフィロスはかなでを抱いたまま降り立ち、かなでを降ろす。

「……」

音無はまた、悔しそうな顔をしていた。

ガルシアがやってきたのは、真つ暗な格納庫。そこへ、ルパン達が追いついてくる。

「来たか。ちょうどお前達にも見せてやろうと思っていたところだ」
ガルシアは電源を入れ、格納庫内をライトアップした。

「な、何だこりゃあ!？」

ルパンは驚く。格納庫に、巨大なロボットがあつたからだ。ガルシアは説明する。

「我らブラックドッグの決戦兵器、ゴールドリベリオンだ! 代行者の碑文を得て、ついに完成したこの兵器。今こそ我らの力を、世界に知らしめる時だ!」

演説をしてから、ありえない身体能力で一気にコックピットまでたどり着くガルシア。碑文は既にセットしてあるため、あとは起動するだけだ。

「おいヤバくないか!？」

次元は警戒するが、不二子は笑う。

「大丈夫よ。ゴールドリベリオンには、前もって私が細工をしてあるわ。起動した瞬間に自爆装置が作動するようにね」

そう。不二子は最初にブラックドッグと接触した時、起動と同時に自爆装置が作動するよう、ゴールドリベリオンの内部配線をいじつたのだ。そしてガルシアはゴールドリベリオンを起動し、自爆装置が作動………しない。

「ええっ!？何だよ!？」

不二子が驚いていると、ガルシアは言った。

「貴様がゴールドリベリオンに細工をすることは、既に計算済みだ! 配線は全て元に戻してある!」

「やはりあてにならなかつたか……」

「んなこと言ってる場合か！」

どうせこうなると思っていた五エ門と、ツツコミを入れる次元。すると、ゴールドリベリオンの足元の床が、競り上がり始めた。リフトだったのだ。

「さあ、素晴らしき時代の幕開けだ！」

歓喜するガルシア。

「斬る！」

五エ門はゴールドリベリオンをスクラップにするべく、斬鉄剣を構えて跳躍した。

しかし、

「ルパン！！！」

その上層からルパンの姿を確認して飛び降りてきた銭形が、間違つて五エ門と顔面衝突した。

ゴーン

五エ門と銭形は星を出してから気絶し、墜落する。

「とつつあ〜ん！」

あまりの間の悪さに嘆くルパン。

「あ〜あ…」

次元は呆れ、不二子は無言で頭を抱えている。そうこうしているうちに、ゴールドリベリオンは要塞の上に出てしまった。

「よし、まずは主砲のテストだ。」

ガルシアはゴールドリベリオンのコントロールパネルを操作し、海をロックオン。そのまま操作に従い、胸部の主砲を展開し、光線を

発射する。

海が割れた。

圧倒的な破壊力をもたらすゴールドリベリオン。その主砲の影響は、要塞の内部にまで及んでいた。

「な、何だ!?!」

アンジールは慌てて無線機を取る。現在要塞の状況は近くにいる神羅スタッフが監視しており、連絡すればわかるのだ。

「要塞の上に巨大なロボットだと!?!」

「そういうことか……」

驚くアンジールと、呟くアーカード。

「アーカード?」

音無は尋ねる。

「ブラックドッグが巨大な機動兵器を所持しているという情報は知っていた。恐らく、碑文を動力にして完成させたんだろう。」

「いつも思っけどお前よくそんなこと知ってるよな。」

「心配することはない。」

「いや、別に心配してないけどさ。」

「しろよ。」

「不謹慎だぞ。」

アーカードの発言に返した日向に対し、ツッコミを入れる音無と直井。アーカードは気にせず言う。

「こういう状況を想定して、助っ人に連絡を入れてある。」

「ハツハツハ！！計算以上の威力だ！これならやれるぞ！」
高笑いするガルシア。その時、

「待て！！！」

ゴールドリベリオンに、ガルシアに向かって叫ぶ者がいた。ガルシアはパネルを操作し、その相手を見る。いたのは、

「悪の絡線を粉碎する男！スパイダーマン！！」

テンテテンテテレッツ テレッツテレーン

スパイダーマンだった。スパイダーマンはブレスレット、スパイダーブレスレットにコールする。

「マーベラー！！！！！」

すると、巨大な宇宙戦艦、マーベラーが飛来。スパイダーマンはマ

ーベラーに搭乗し、ボタン操作を行う。

「マーベラー・チェインジ・レオパルドン!!!」

操作とともにマーベラーは、ゴールドリベリオンよりもさらに巨大な口ポット、レオパルドンに変形した。

「小癩な!!!」

ガルシアも負けじとパネル操作を行い、ゴールドリベリオンはバルカン、ミサイル、レールガン、ビーム砲など、搭載されている兵器を一斉掃射してレオパルドンを攻撃する。これだけで街が一つ消し飛ぶ威力だが、レオパルドンには全く効かず、

「ならば!!!」

ゴールドリベリオンは主砲を撃とうとする。しかし、主砲を撃つためにはチャージのための時間が必要であり、その隙を逃さずスパイダーマンは再びボタンを操作。

「レオパルドン・ソードビッカー!!!」

レオパルドンは右足に収納されている剣、ソードビッカーを抜き、主砲の砲身に向けて投擲。

「馬鹿なああああああ!!!」

ソードビッカーは寸分変わらず砲身に突き刺さり、主砲のエネルギーが暴発。ゴールドリベリオンは大爆発を起こして、ガルシアもろとも粉々に吹き飛んだ。

アンジールはスタッフから入った情報を、全員に伝える。

「もう一機ロボットが現れて、撃墜したらしい。」

「思いのほか早かったな。」

アーカードは頷いた。音無は訊く。

「まさか、お前が呼んだ助っ人って…」

「スパイダーマンだ。」

そう、アーカードが呼んだ助っ人とは、スパイダーマンのことだ。

「なるほど、スパイダーマンのレオパルドンなら、確かにいけるな。」

「

クラウドは納得する。それはそうだろう。レオパルドンは、特撮界

最強の秒殺ロボットと言われているほど強力なロボットなのだ。ジ

エネシスはアンジールに尋ねた。

「アンジール。時間はあと何分だ？」

アンジールは大切なことを思い出し、時計を見る。

「あと二分。ギリギリ間に合ったな。」

「何の話だ？」

セフィロスが訊いた。アンジールは事情を説明し、軍の投入を遅ら

せることを伝える。しかし、

「遅らせる必要はないわ。私が瞬間移動で送るから。」

レスティールが言った。

「しかし、銭形警部を見つけなければ…」

アンジールは渋る。銭形は一人で突貫し、行方不明になってしまっ

たのだ。と、

「それならあそこにいるぞ。」

ジエネシスが指を差した。そこには、目を回して気絶している銭形

がいた。

「これでいいわね？行くわよ！」

レスティールは瞬間移動を発動し、一同は離脱。

二分後、要塞は神羅軍の攻撃を受けて壊滅した。ちなみに、スパイ
ダーマンは音無から連絡を受けて離脱している。

「ブラックドッグの最期、か…これでもう、連中とかち合うこと
もないわね。」

壊滅した要塞を見ながら、感想を言うゆり。

「といつても、まだまだ面倒事に付き合わされそうな気はするがな
。」

「それがあなたの宿命だから。」

「そのような宿命は断じて嫌だ。」

ため息を吐く皇魔と、すごく楽しそうなレスティー。

しかし、セフィロスだけは暗い表情だった。今、あの翼はしまつて
ある。かなでが声をかけた。

「お父さん…。」

「…子供の頃から思ってたはいた。俺は、周りの連中とは違つと。だ
が、こんな意味じゃない！」

セフィロスは、自分が才能に恵まれた『人間』だと思っていた。だ
が、普通の人間に翼があるはずはない。もしかしたら自分は化け物
なんじゃないか、彼は今、そう思っている。
と、

「お父さん。あの翼、もう一回出して。」

「？ああ…。」

かなでが翼を出すように言い、セフィロスはそれに従つて翼を出す。
すると、

「ガードスキル・エンジェルズウイング」

かなではあるガードスキルを発動した。

かなでの背中に現れたのは、二枚の、純白の翼。まるで天使のよう
な、美しい翼。これはエンジェルズウイングという、飛行用のガー
ドスキルである。ガードスキルは能力の新規開発、拡張が可能なの

だ。かなではセフィロスに言う。

「これであたしも同じになったわ。色も数も違っけれど」
「！」

セフィロスは、かなでの意図に気付いた。かなでは自分の背中に翼を出現させることで、翼は化け物の証ではないとセフィロスに教えようとしているのだ。お父さんは化け物なんかじゃないよ、と。

今のセフィロスには、かなでが本物の天使に見えた。そして、いと
おしさから、

「かなで！」

思い切り抱き締める。

「お前は…お前は本当に優しい子だな…！」

「お父さん…大好き。」

「かなで！」

父娘の心暖まる風景。しかし、皇魔は全く気にしない。

「何を今さら…ロストグラウンド学園は人外の宝庫ではないか。一人増えたところで、何も変わりはない。」

「…ああ、そうだな。どうかしていた」

セフィロスは泣きそうになっていたのをこらえ、翼をしまつ。かなでも翼を消した。

「さあ、帰るぞ。アンジール、ジェネシス。お前達にも世話になった」

「気にすることはない。こっちも助かった。なあジェネシス？」

「ん？ああ。」

ジェネシスは少し考え事をしていたようだ。

ブラックドッグを壊滅させ、帰っていくロストグラウンド学園の面々。

「さて、俺達も帰るぞ。」

ジェネシスに声をかけるアンジール。だが、ジェネシスは答えない。

「ジエネシス？」

「…」

ジエネシスは、かなでの姿を見ていた。と、

「はっ！ルパンは！？」

銭形がようやく目を覚ました。アンジールが言う。

「恐らく、軍の攻撃に巻き込まれたと思いますが…」

「ルパンがその程度のことです死ぬか！わしは絶対に捕まえてみせるぞ！ルパン！！！」

銭形の叫びがこだました。

「元気そうで何よりだぜ。」

ルパンは少し離れた場所から、双眼鏡で銭形の様子を見ている。ちなみに、銭形をアンジール達のもとまで送り届けたのは、ルパン達だ。

「いや、ものの見事に完全壊滅だな。」

「あれだけの爆発のうえに神羅軍の攻撃だ。碑文は跡形も残ってはいまい」

次元と五エ門は要塞を眺める。

「じゃ、私達もさっさと帰りましょ。銭形に見つかからないうちにね」

「そりゃいい。とつつあんの鼻は、犬より利くからな。」

「うむ。」

不二子の提案を聞き、次元と五エ門も帰る。しかし、ルパンだけはその場を動かない。

「ルパン？」

「…いや、何でもねえ。」
次元に言われ、ようやく動き出す。

（おかしい…碑文は壊れたはずだ…なのに、何で胸騒ぎが収まらねえ…？）

修学旅行の最終日。帰りの飛行機に乗る直前、

「立華かなで。」

かなでは呼び止められた。そこにいたのは、ジェネシスだ。

「ジェネシスさん。」

「これをお前にやる。」

ジェネシスはかなでに、LOVELESSを渡した。

「これ、ジェネシスさんのLOVELESS…」

かなでは数日ほど神羅で過ごしており、ジェネシスがLOVELESSを愛読しているということは、その時に知った。

「俺には予備がある。それより、頼みがあるんだ。」

「何でしょう？」

「…セフィロスを支えてやって欲しい。」

ジェネシスはかなでがセフィロスを慰める場面を目撃し、悟っていた。かなでこそ、セフィロスの娘にふさわしい存在だと。

ジェネシスもアンジールも、セフィロスとは近い関係にあるが、しょせんは友人の段階。彼を支えるには限界がある。だが、彼の娘であるかなでなら、自分達にはできないこともできる。ジェネシス

はそう思っていた。

「それは饞別だ。どうか、セフィロスのことを頼む。」

「……はい。大切にします」

かなではLOVELESSをしつかりと手にし、飛行機に乗る。

「深淵のなぞ それは女神の贈り物 我らは求め 飛びたった」

ジエネシスはLOVELESSの第一章をそらんじ始めた。

「さまよい続ける心の水面に かすかなさざ波をたてて……」

「……」

飛行機の中。レスティーは考えている。皇魔は訊いてみた。

「何を考えている？」

「……代行者の碑文がどんなものだったか、見れなかったなって。」

「気にすることはあるまい。粉々になったのだからな」

「……だといいけど……」

その日の夜。

要塞の近くの海中に、大きな亀裂の入った碑文が沈んでいた。ゴードリベリオンの主砲と碑文はかなり遠い所にあり、しかもゴールドリベリオンが爆発した瞬間に海まで飛ばされたため、粉々にならずに済んだのだ。と、亀裂がどんどん大きくなっていき、やがて碑文は今度こそ粉々になった。

一体誰が予想しただろうか。

碑文から常に放出されている膨大な量のエネルギーの源が、

碑文の中に埋め込まれていた、七枚のコアメダルによるものだったと。

コアメダルは発光し、ひとりでに浮かび上がって陸地まで到達。しばらく空中を浮遊した後、セルメダルを大量発生させて、怪人の姿を取る。

それは、白装束を身に纏った神官の姿の怪人だった。

神官の怪人はゆっくりと宣言する。

「我、復活せり。」

第十三話 リベンジと天使と武装コンボ（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

コレク「学ぶべきことはある。」

皇魔「何だ、このシードは！？」

音無「仮面ライダー、ビーツ？」

第十四話 連携と合成と二号ライダー

ケヤーハコンボ

ケンコアメダル、ヤリコアメダル、ハンマーコアメダルによって完成する、武装系コンボ。

スピードは劣るが、全コンボ中最強のパワーを誇り、核ミサイルの直撃にも無傷で耐えられる防御力を持つ。また、様々な武器を自在に生成できる能力を持っており、それを空中に浮かべて相手に飛ばすなど、近接戦コンボでありながらオールレンジな攻撃も可能としている。

必殺技は、相手を大量の武器で串刺しにし、ヤリニードルでとどめを刺す『ケヤーハバイオレント』。

パンチ力 850 t
キック力 1220 t

ジャンプ力 ひと飛び80 m
走力 100 mを5.6秒

ケンコアメダル

コレクのコアメダルで、エンズの頭部をケンヘッドに変化させる。

感覚が鋭敏になり、闘争本能を活性化させる作用がある。

ハンマーコアメダル

コレクのコアメダルで、エンズの下半身をハンマーレッグに変化させる。

まさしくハンマーのような重いキックを叩き込めるようになる。

サイレントアサシン

ゆりのアルター能力。具現型で、形状はコンバットナイフ。

使用者に高い身体能力を与え、また、自分の姿と、自分が出す音を全て消すことができる。これ自体も暑さ50cmの鉄板を一撃で両断できるほど強力。

ちなみに、名前は音無から取っている。

第十四話 連携と合成と二号ライダー（前書き）

ついに、一号ライダーの登場です！

第十四話 連携と合成と二号ライダー

コレクはウォント達に、ある相談をしていた。

「合成シード？」

ウォントは聞き返す。

話の発端は、コレクがカザリの産み出したヤミーを目撃したことだった。現在カザリは、ガメルとメズールのコアメダルを取り込んでいるため、ガメルの重量系、メズールの水棲系、さらに自分の猫系の属性を併せ持った、合成ヤミーを産み出すことができるのだ。

そこでコレクは考えた。自分達も同じことができないか、と。

「いかに失敗作のグリードとはいえ、学ぶべきことはある。」

コレクの言う通り、いくら自分達デザインに劣るとはいえ、良い部分があるならグリードであっても取り入れるべきだった。

「なるほど、同じメダルから造られた存在なら、グリードにできて俺達にできない道理はない。」

アプリシイは同意する。

「なかなか熱いねえ。乗ったぜ！」

「確かに、それならかなりの戦果が期待できそうです。賛成しましょう。」

ウォントとメイカーも賛同した。

「ではまず……」

コレクが切り出し、一同は悪巧みに入る。

「どうしたんだ？」

音無は海馬に尋ねる。今彼は海馬に連れられ、海馬コーポレーションビルのエレベーターに乗って地下へ向かっていた。何の前触れもなく突然呼び出されたため、理由を聞いてみるが、

「貴様に見せたいものがある。」

「見せたいもの？」

「着いてから話す。」

海馬ははぐらかす。

やがて地下にたどり着き、音無はインテグラとウォルターに出会った。インテグラは海馬に訊く。

「海馬社長。彼が例の？」

「はい。」

海馬は頷いた。どうも始めから打ち合わせのようなものをしていらしい。音無はインテグラに尋ねた。

「あなたは？」

「インテグラ、と言えばわかるだろう。アーカードから聞いているはずだ」

「インテグラ！？アーカードの主人の！？」

もちろん聞いている。

「そうだ。いきなりだが、君には被験体になってもらう。」

「ひ、被験体って…一体何の！？」

インテグラからの通達に、何をされるのかと怯える音無。しかし、ウォルターは落ち着いた物腰で言った。

「対デザイン用の装備、仮面ライダービーツのです。」

「…仮面ライダー、ビーツ？」

聞き慣れない単語に首を傾げる音無。海馬はわかりやすく説明した。
「Battle Extra Action Trans System。通称^{ビーツ}BEATS。言ってみれば、エンズと同じくパワード
スーツタイプの装備で、これを使えば、デザイアと互角以上に渡り
合える。」

「!」

音無は驚きっぱなしだ。

「…どうして、そんなものを俺に？」

「…俺が気付かないとでも思っていたのか？」

「？」

海馬は、音無の思いを言い当てる。

「貴様は皇魔に憧れの念を抱いている。」

ズバリ、その通りだ。

音無が皇魔に憧れ始めたのは、今から数ヶ月以上前。

彼が学園でもちよつとした話題を呼んでいる二人の美少女、ゆりとかなでから想いを寄せられているのは、読者の皆様もお気付きだろう。もちろん、ひがみも受ける。そしてある日、音無は彼をひがむ人物達全員から袋叩きにされた。音無は、その時皇魔に助けられたのだ。

暴力的な数に正面から立ち向かい、これを圧倒的な力で駆逐する皇魔の姿は、音無にとって非常に印象に残った。その日から、音無は皇魔に憧れたのである。いつか、自分もあれくらい強くなれたら。そんなことを考えながら…。

「だが、皇魔はさらに力をつけた。そして今も、強くなり続けている。このままでは、まず追いつけない。」
海馬の指摘は、的確だった。皇魔はエンズという力を手に入れ、セルメダルによって力を取り戻している。常人でしかない自分では、追いつくことは不可能だ。

だが、もし追いつける方法があったとしたら？海馬は、それを音無に与えようとしているのだ。

「データは知っている人物からの方が取りやすい。そして、幸いにも貴様は信頼するに足る。これほど都合のいい相手もいないだろう」
「…何でもいいさ。力が手に入るなら、何だっしてやる！」
音無の決意は固かった。皇魔の力が増していることや、ゆりがアルター能力という新たな力を手にしたことも、彼を焦らせている。

「よし、では早速始めるぞ。」
海馬は音無とインテグラ、ウォルターを連れ、ビーツがあるという部屋に入ってしまった。

「深淵のなぞ　それは女神の贈り物　我らは求め　飛びたった」
休日。

かなではジェネシスからもらったLOVELESSを朗読している。

「さまよい続ける心の水面に　かすかなさざ波を立てて…」

「かなでちゃんまた読んでるの？」

そこへ、ゆりが現れた。

「ここのところ毎日読んでるじゃない。」

「大切にすつて、約束したから。」

かなでは超いい人だ。

「かなでちゃんって律儀よね。」

「約束は約束なもの。」

ところで、二人がここにいる理由だが、偶然ではない。今日はゆりとかなでの買い出しが重なっており、一緒に行こうと前もって打ち合わせしていたのだ。本当なら音無も呼ぶつもりだったが、急な予定が入って来れなくなっただけらしい。

「まあ仕方ないわ。行きましょかなでちゃん」

「うん。」

というわけで、二人して出かけるわけだが、

こころで一つ問題が起きた。

二人の目の前に、右半身が赤く、左半身が赤い怪人が現れたからだ。
その額には、赤いオーブが…。

「シード!?!」

「!?!」

二人は慌てて飛び退いた。

「!」

レスティーはシードの気配を感知した。

「皇魔!シードよ!」

「来たか!」

二人はシードを倒しに向かう。

「はあっ!」

サイレントアサシンを構えて突っ込むゆり。姿は消してあり、声も消してあるので聞こえてはいない。しかし、シードは突然左手を周囲に振った。すると左手から冷気が生まれ、同時にゆりの動きが止まる。

「足が！」

ゆりの足が凍りついていたのだ。

「そこか。」

今度は右手をかざすシード。すると熱気が放たれ、足の氷を溶かさないうつ、ゆりの上半身だけを攻撃する。

「う…あああ…！」

焼き殺されるような感覚に呻くゆり。ステルスも解けてしまう。と、かなでがシードを蹴り飛ばした。それから、ハンドソニックでゆりの足の氷を破壊する。

「ありがと！」

「ゆり！下がって！」

今度はかなでが突っ込む。シードは両腕を正面で交差させ、防御の構え。しかし、ただの防御ではなかった。

「くっ…くっ…！」

強烈な圧力の壁が発生し、ハンドソニックを押し込めない。

「きゃっ！」

かなでは弾き飛ばされてしまった。そこへ、ようやく皇魔とレスティーが駆けつける。

「何だ、このシードは！？」

これが皇魔の第一声。

「とりあえず、変身よ！」

レスティーは皇魔にベルトとメダルを渡し、

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

エンズに変身し、シードに挑む。

右手で熱気を操り、左手で冷気を操り、さらには圧力を操る。キアツシード。それがこのシードの名前だ。

「お、結構イケるんじゃない？」

特性を生かしてエンズを攻めるキアツシードの戦いぶりを見るウォントとアプリシイ。キアツシードはこの二人が産み出した合成シードである。手順としては、まずどちらか片方が対象の人間の正面に立ってセルメダルを投入し、間髪入れずにもう片方が後ろに投入口を出現させ、セルメダルをもう一枚投入する、というものだ。

「これなら勝てる。エンズを倒し、レスティーも倒せば、もはや俺達の敵は一人もいない。」

アプリシイは自分達が産み出したシードの力を見て、勝利を確信する。

「どうやら、うまくいったようですね。」
メイカーも来た。

「お前も来たのか。すげえだろ？」

「ええ。やはり、二つの特性を持つシードは強い。ですが…」

トリプル！スキヤニングチャージ！！

「これで終わりだ！」

エンズはメダジャベリンにセルメダルを投入してスキヤンし、エンズアルカイドを発動した。これなら、キアツシードの圧力も切り裂ける。

「や、ヤバいんじゃないか！？」

あの技を知っているウォントは慌てる。しかし、

「心配はいりません。」

メイカーは落ち着いている。

「合成シードは、一体だけではありませんから。」

「うおおおおっ！！！！」

今まさに斬り込まんとするエンズ。その瞬間、

突然エンズは全方位からの光線を喰らった。

「ぐおおっ！！」

完全に技を崩され、さらにダメージによって倒れるエンズ。彼を攻撃したのは、六つのビット。それもただのビットではなく、シールドビットだ。シールドビットは、全身に盾を装備した別のシードの

もとへと帰っていく。

このシードこそ、コレクとメイカーが産み出した合成シード。シールドビットシードである。

「シードがもう一体!？」

「しかもまた混ぜ物!！」

驚くレスティーとゆり。デザイア達は彼女達が修学旅行に行っている間にかなりのセルメダルを入手していたため、一度に合成シードを何体も産み出せるだけの余裕があるのだ。

ここから、合成シード達の一方的な蹂躪が始まる。

まずキアツシードが圧力でエンズを吹き飛ばし、次にエンズが攻撃に移る瞬間を見計らってシールドビットシードがシールドビットで攻撃。行動を封じている間に、またキアツシードが圧力で吹き飛ばす。この流れを反復し、二体の合成シードはエンズを追い詰めていく。

「皇魔!」

「「皇魔くん!」」

あまりの惨状に悲痛な声を上げる三人。

(くっ…なんと…無様な…!!)

エンズ自身、もはや万事休すの状態だった。とどめを刺そうと近付いていくシード達。

その時、

「待て！」

声が聞こえて、シード達は歩みを止める。

そこに立っていたのは、音無だった。

「何をしている貴様！さつさと逃げる！」

「逃げない！俺は、お前を助けに来たんだ！」

インズの警告をはねのけ、音無はあるものを腰に装着する。

それは、一本のベルトだった。

ベルト、ビードライバーを装着すると同時に、バックル部から右に向けてプレートが飛び出す。次に音無は、縁が青で彩られている白いコアメダル、ヘンシンコアメダルを出し、

「変身！」

プレートに装填。そのままの勢いで、プレートをバックル内に押し込んで格納する。

M u s i c , S t a r t !

ベルトから声が響き、音無は様々な色の音符に包まれ、変身した。

胸部に八分音符が刻まれ、背部に四角い宝石が埋め込まれていて、ブルーアイズを模した頭部の口の中に、さらに仮面がある、白い戦士に。

この戦士こそ、仮面ライダービーツである。

「お、音無くん……」

「なんと言うか……」

「趣味全開ね……」

「違う！俺の趣味じゃなくて、海馬の趣味だ！！」

ゆり、かなで、レスティーのコメントに、悲鳴に近い返答をするビーツ。彼も海馬に、もう少し何とかならなかったのかと聞いたのだが、海馬コーポレーション製なのだから当然とのこと。

「音無：貴様、その姿は！？海馬がどうかしたのか！？」

ただ一人外見に惑わされなかったエンス。

「話はあとだ。ビット持ちの相手は俺がする。お前は二色のやつを……」

「……仕方あるまい。」

こうして、かなりいきなりだが、二大ライダーの共闘が始まった。

エンズはキアツシードと戦う。キアツシードの熱気かわし、さらに冷気をホノオレツグで防ぎ、メダジャベリンの刺突を繰り出す。キアツシードはそれを圧力で受け止め、エンズごと弾き飛ばした。「時間の無駄だな。」

トリプル！スキヤニングチャージ！！

「今度こそもらうぞ！」

エンズはメダジャベリンにセルメダルを三枚投入してスキヤン。この技の危険性を察知したキアツシードは、全身から圧力を噴射して飛んで逃げようとするが、

「はっ！！！」

エンズはそれよりも速く跳躍し、キアツシードを斬りつけ、爆砕した。早々にケリを着けたエンズは、ブーツの戦闘を見る。

「シャッ！」

シールドビットを飛ばして攻撃するシールドビットシード。

「こういつ時は……」

ブーツはそれをかわしつつ、別のコアメダル、ユニットコアメダルを出し、左腕に装着されているプレスレット、ブーツプレスに装填。

「こいつだ！」
そのまま、右手でビーツプレスに触れる。

Disc Cakram!

すると、ビーツの背部に埋め込まれている四角い宝石、ビーツオルゴールが発光し、一度分解されて金属の箱に再構築され、ビーツの背中に装着された。それに構わずシールドビットを飛ばしてくるシールドビットシード。

「行け！」

ビーツが叫ぶと、箱から六枚のチャクラムが飛び出していった。

ビーツオルゴールはバースのバースCLAWSに似たような装置なのだが、こちらはアルター能力を応用したシステムで、ビーツプレスと連動しており、ビーツプレスにユニットコアメダルを装填することによって起動し、自分が望むユニットを念じながらビーツプレスに触れることで、対象となるユニットに分解、再構築されるのだ。ディスクチャクラムは、ディスクを模したチャクラムを最大六枚まで飛ばし、遠隔操作で操るといふもの。

チャクラムは光線を切り裂きながらシールドビットを追いかけ、次々と破壊していく。

「又ウツ！」

再びシールドビットを生成するシールドビットシード。しかし、シールドビットシードが新たにシールドビットを生成するには、約五秒のタイムラグがある。ビーツはその隙を逃さず、一度ビーツオルゴールにディスクチャクラムを収納し、ビーツプレスからユニットコアメダルを抜いて、別のコアメダルを装填した。

コアメダルの名は、ヒツサツコアメダル。

CORE BURST!!

「チャクラムダンシングカット!!」

ビーツが叫ぶと、再びチャクラムが飛び出す。しかし、その刃は強力なエネルギーを纏っており、切断力は何倍にもはね上がっている。

「グワアアアアアアア!!」

エネルギーを纏ったディスクチャクラムで相手の全身を切り刻むビーツの必殺技、チャクラムダンシングカットを喰らい、シールドビーツは爆砕した。

「何だあいつは!？」

驚くアプリシイ。

「…これまでですね。撤退しましょう」

「メイカー?」

ウォントはメイカーの撤退発言を聞いて振り向く。

「心配しなくても、合成シールドの有用性は実証されました。それだけでも大きな進歩でしょう?今度はもっと強力な合成シールドを造ればいいだけの話ですよ。」

「あ、ああ…」

「…それもそうだな。」

メイカーの言葉に納得したウォントとアプリシイは、メイカーとともに引き上げていった。

音無は、自分が海馬からブーツを授かったことを話す。皇魔に憧れていることも。

「俺さ、皇魔やかなでが強いだけじゃなく、ゆりまで強くなったことに、焦ってたんだ。何で俺だけ……って……」

「音無くん……」

ゆりは不覚に思っている。自分がアルター能力に目覚めてしまったことが、音無を焦らせてしまうとは思っていなかったからだ。

「けど、これからは俺も戦える。ゆりも、かなでも守れるし、皇魔にだって追いつけるんだ。」

「……好きにしろ。」

皇魔はさして興味もなく、背を向けて帰っていった。

「皇魔！ごめんなさいね。けど、今回は助かったわ。皇魔にコンボを使わずに済んだから」

レスティーも皇魔を追って帰る。

「……結弦。」

かなでは音無に話し掛けた。

「かなで？」

「……ありがとう。あたし達だけだったら、きっと負けてた。」

「こつちも、間に合ってよかったよ。」

すると、今度はゆりが尋ねた。

「音無くん。これから予定ある？」

「いや、もうない。元々今日の予定は、海馬の呼び出しだったしな。」

「じゃあ……」

「……ああ。一緒に行けるよ。」

「やったあ！早速行きましょー！」

「うわっ！引っ張るなよ！」

「……」

「二人とも待つて。あたしも行く」
こうして、三人は今日一日、買い物を楽しんだ。

「素晴らしい順応性だな…まさかすぐに使いこなすとは…」
ビーツの戦闘データを見ていたインテグラは、感嘆する。ビーツは
元々誰にでも使えるように設定されたシステムだが、音無が使用し
たビーツの戦闘力は、データを上回っていたのだ。
「ともあれ、これで実行に移せますな。」
ウォルターは海馬を見る。
「ええ。ビーツとエンズのサポートシステムの設計…ビーツの強化
…ビーツの量産。おかげでようやく実行できますよ」
海馬はさらなる先を見据えていた。

皇魔は不機嫌だった。

「どうしたの？」

レスティーが尋ねても、無視を決め込んでいる。理由は、音無がシード達の前に立ち上がった時、自分が音無を助けたいと思ってしまったからだ。修学旅行のことといい今回といい、皇魔としては由々しき事態である。

（本当にどうしてしまったのだ？余は！）

第十四話 連携と合成と二号ライダー（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

メイカー「インフィニット・ストラトス、ですか…」

？「私は…私は…！」

？「お前…仮面ライダーか？」

皇魔「…そうかもしれん。」

第十五話 月と牙と皇帝の邂逅

仮面ライダービーツ

海馬コーポレーションが開発した、本作における二号ライダー。胸部に八分音符が刻まれ、ブルーアイズを模した頭部の口の中にさらに仮面がある。複眼の色は青。

ビーツとは、Battle Extra Action Trans System（より高次元な戦闘を行うための変身システム）の略である。

非常に高い戦闘力と数多くの装備を有しており、その力はエンズに匹敵する。変身者は音無。

パンチ力 83t
キック力 103t
ジャンプ力 ひと飛び290m
走力 100mを3秒

ビーツドライバー

音無がビーツに変身するためのベルト。装着するとバックルから右に向けてプレートが飛び出し、ヘンシンコアメダルを装填してからプレートを格納することで、ビーツへの変身を行う。

ビーツオルゴール

ビーツの背部に埋め込まれている宝石。アルター能力を応用したビーツの支援ユニットであり、使用したいユニットに分解、再構築できる。

ビーツブレス

ビーツの左手に装着されているブレスレットで、ビーツオルゴールと連動しており、ユニットコアメダルを装填することによって起動し、その状態で使用したいユニットを念じながらビーツブレスに触れると、そのユニットに分解、再構築できる。また、ユニットを再構築した状態でヒツサツコアメダルを装填すると、ユニットに応じた必殺技を使える。

ディスクチャクラム

ビーツオルゴールの攻撃形態の一つ。ディスクを模したチャクラムを六枚まで収納しており、それを遠隔操作して攻撃する。必殺技はチャクラムにエネルギーを纏わせて相手の全身を切り刻む、チャクラムダンシングカット。

ビーツ専用コアメダル

海馬コーポレーションが、ヘルシング機関の協力を得て開発した、縁が青で面が白のビーツ専用のコアメダル。現在はヘンシンコアメダルが一枚、ユニットコアメダルが一枚、ヒツサツコアメダルが三枚存在するが、まださらなる種類を開発予定。

ヘンシンコアメダル

変身のために必要なコアメダル。

ユニットコアメダル

ビーツオルゴールの起動に必要なコアメダル。

ヒツサツコアメダル

必殺技の発動に必要なコアメダル。

第十五話 月と牙と皇帝の邂逅（前書き）

今回はユートピアさんとのコラボです。長くなったので、二つに分けます。

第十五話 月と牙と皇帝の邂逅

突然灰色のオーロラが現れ、突然消えた。

「…あれ？」

消えた後に残されたのは、一人の少女。彼女の名は音梨楓。二ことは違う世界の住人だ。

「私はIS学園にいたはずなのに…」

IS学園とはIS、インフィニット・ストラトスという兵器の操縦者を育成するための学園だ。

ISとは、女性にしか反応しないパワードスーツ型の兵器で、数も限られている。だが、戦闘力や機動性能は極めて高く、彼女がいた世界では、まさしく究極の兵器だった。

「二ことは？」

突っ立っていても仕方ないので、散策してみることにする楓。

彼女は、あの灰色のオーロラを見たことがあった。別の世界同士を繋ぐ架け橋の役割を持ったものであるということも、知っている。

（また、別の世界？）

彼女があれを使って異世界に来たのは、これが初めてではない。こういうことは前にもあったのだが、あの時訪れた世界は、それはそれはひどいものだった。謎の敵から命を狙われ、一緒に来た仲間達と分断させられ、罠にかけられ、何度も何度も死にかけたのである。それでも何とか切り抜けたのは、自分の腕と、自分の専用ISの性能と、信じ合える仲間達のおかげだろう。それから、自分の中にあるもう一つの存在からの手助けも。

ともあれ、彼女は安心していた。今いる世界は見たところ普通の世

界で、自分の命を脅かすものなど何もない。気になるのは、なぜ自分がこの世界に来てしまったのか。その理由だけ。

その時、悲鳴が聞こえた。

驚いて駆け出す楓。たどり着いた先で待っていたのは、全身にコーグルやカメラなどを装備したシード。

「あれは!?!」

当然彼女はシードを知らない。だが、まずは人命の確保である。楓は自身のISの名を言い放つ。

それは、永遠に輝く月。

「輝け、エターナルムーン。」

エターナルムーンを展開し、刀、ルシファーと銃、ゼウスを抜いた楓は、ゼウスを乱射して牽制しながら、シードに接近。

「はあああああつ!?!?!」
ルシファーで斬りかかった。

「…ここは？」

黒谷終は、街中にいた。彼もまた、灰色のオーロラによってこの世界に飛ばされてきたのだ。

「またか…」

彼は楓の友人であり、また彼女と同じような目にあつたことがあるので、ため息を吐く。とりあえず周囲を見回した終は、一緒にオーロラをくぐつたはずの楓がいないことに気付き、

「…探すか。」

と歩き出す。

「その前に、余に何か言うべきではないか？」

「ウエイ!？」

突然の声に飛び退いた終。声をかけたのは、レスティーと一緒にシールド捜しをしていた皇魔である。すぐ近くにいたにも関わらず自分をスルーしようとしていた終が気に入らず、声をかけたのだ。

「びっくりした…何だお前ら？」

「それはこちらの台詞だ。貴様こそ、一体何だというのだ？」

終は皇魔の威圧的な態度に不満を抱きながらも、自分について説明した。

「つまり、あなたは別の世界の住人ってこと？」

「そうなるな。」

レスティーの結論を肯定する終。

「そうだ、音梨楓って女を知らないか？」

終は楓の特徴を伝えるが、

「…知らん。」

「知らないわ…」

二人は首を横に振った。

「そうか…」

終はどうしたものかと考える。前に訪れた世界でも離ればなれにされ、それでもどうにか合流できたが、今回もそうなるとは限らない

からだ。

「もしよかったら、手伝ってあげましょうか？」

提案したのはレスティー。

「…いいのか？」

終は驚く。協力してもらえとは思わなかったからである。彼としては、現地の協力者ほどあてになる存在はない。

「もちろんよ。」

「レスティー。貴様また勝手に」

「いいじゃない別に。シード捜しのついでだとも思えば」

レスティーは皇魔を無理矢理協力させる。

「シード？」

終は当然シードについての知識などない。

「行きながら説明するわ。そうそう、挨拶が遅れたわね。私はレスティー」

「…皇魔だ。」

簡単な自己紹介を済ませ、皇魔、レスティー、終は楓を捜しに向かう。

「はあ…はあ…」

シードを倒した楓は、肩を上下させながら荒い息継ぎをしていた。

相対していたシードはどういうわけか終始無抵抗であり、彼女としては戦い易い相手だったのだが、シードの耐久力は非常に高いため、

高スペックを誇るエターナルムーンの使い手たる楓でも倒すのに苦労したのだ。

「倒せた…はあ…」

一息つく楓。そのままエターナルムーンを待機状態に移行させようとした時、

「面白いデータを取らせてもらいました。」

怪人形態のメイカーが現れた。

「また!?!」

慌てて構える楓。しかし、メイカーは悠長に歩き続ける。

「インフィニット・ストラトス、ですか…この世界には存在しない兵器ですね。」

「!?!?どうしてISのことを!?!」

楓はメイカーの発言にも驚いた。メイカーは今確かに、ISはこの世界に存在しない兵器と言った。知らないはずなのだ。しかし、メイカーはISの正式名称を口にしたのである。

「今あなたが倒したのはスキャンシードと言いまして、一度戦った相手のデータを全て読み取り、私に転送するという能力を持っているのです。」

本来ならこのシードは、イレギュラーな存在であるビーツのデータを取るために産み出したのだが、手違いで楓が倒してしまったのだ。終始無抵抗だったのは、楓からデータを読み取っていたからである。「ですが、失敗ではありませんでした。あなたのIS、エターナルムーンは倒されることが目的だったとはいえ、シードを倒したのです。このデータは有効活用させていただきますよ」

「そんなこと、させません!」

楓はゼウスを発砲した。だが、メイカーは全くダメージを受けてい

ない。

「私をシードと同じと思ってもらっては困ります。」

「くっ…」

楓の目から見ても、メイカーとスキャンシードでは、レベルそのものが違うというのは明らかだった。

と、

（楓！私に代わって！）

「！」

彼女の中の別の人格が叫んだ。

とたんに楓の瞳はコバルトブルーに変化し、エターナルムーンもダイクムーンというISに変化する。

「ここであなたが出ましたか。」

メイカーは楓が二重人格者だというデータも入手している。今出てきたのは楓の中にあるもう一つの人格で、名前は椛。楓と違って好戦的だ。

「人格の変化に伴って機体も変化するとは、なんとも興味深い。」

「ゴチャゴチャうるさいわよ。私はこれ以上あなたとお話なんてしたくないし、するつもりもない。ついでに言えば、あなたを生かしておく気もね。」

「ほう…」

「楓の敵は私の敵。敵は敵らしく…」

次の瞬間、椛はメイカーの背後に回り込んだ。瞬間加速イケンニッシヨン・ブーストという高速移動を使用したのである。そしてそのまま、

「死になさい。」

ルシファアを振り降ろした。

しかし、メイカーは振り向かず、左手にビームシールドを生成してルシファーを受け止めてしまう。

「なっ!?!」

恐るべき超反応をしてみせたメイカーに驚く椀。メイカーは間髪入れず、右手に超大型の拳銃を生成して、零距离から椀を撃った。

「ぐはっ!?!」

椀は吹き飛んで倒れる。白ヤミーなら一撃で粉碎できる威力にも関わらず無事でいられたのは、やはりダークムーンの防御機能によるものだろう。だが、吹き飛ばされた瞬間に頭を打ってしまった。朦朧としている椀へと、メイカーは語りかける。

「…私はあなたが今まで倒してきた相手とは違います。いや、同じでは困るんですよ。我々にも、デザイアとしての誇りがありますから。」

「…」

その言葉を聞きながら、椀は意識を手放した。

「さて…」

メイカーは椀をどうしようか思案に入る。ISのデータが手に入った以上、彼女に用はない。気絶しているので、殺すのも簡単。だが、それでは面白くない。彼女の中には、強い欲望が渦巻いているのだ。こんなに強い欲望の持ち主はなかなかいないし、それをあっさり消してしまうのは惜しい。ならばシードを産み出すか？

「…!」

その結論に至った時、メイカーは実にデザイアらしいゲームを思い付いた。だが、その前に…。

「おっと。」

椀を殺害しに飛び込んできた怪人形態のアプリシイを止める。

「なぜ止める!?!?ずっと見ていたが、今がこの女を殺せる最大のチャンスだろう!?!」

「駄目ですよ。彼女を殺しては」

「貴様：俺達デザイアの使命を忘れたのか！！俺達は全次元世界を滅ぼすために、一人でも多くの人間を殺す必要があるんだぞ！？」
それはメイカーも心得ている。

「忘れてはいませんよ。ただ、面白いことを思い付きましたね…」

「面白いこと？」

「ええ。アプリシイもきつと気に入ります」

言いながら、メイカーはセルメダルを出し、椀の額にメダル投入口を出現させ、

「その欲望、私が叶えましょう。」

セルメダルを投入した。

音無は現在、二人の天使に無理矢理付き合わされ、デートの真っ最中だった。

「結弦。あーん」

「あ、あーん…」

自分のアイスを食べさせるかなでと、赤面しながら食べる音無。

「音無くん。あーん」

「あ…あーん…」

今度はゆりにせがまれ、そちらのアイスも食べる。

「…恥ずかしいからやめてくれないか？周囲の視線が痛い…」

音無は、もう耐えられなかった。元々恋愛経験が皆無であり、なにこんなどう考えても恥ずかしすぎることをさせられ、しかも周囲

の人間からかなり痛い眼差しで睨まれ、もう限界である。

そう思っていた時、近くの建物が爆発した。

「何だ!？」

音無は二人を庇うようにして後ろに隠し、目を凝らして爆発の原因を確かめようとする。建物が爆発した原因は、楓から産まれたシード、ダークムーンシードの攻撃だった。

「シード!？」

その姿は、ゆりとかなでも確認した。

「俺が戦うから、その間に逃げろ!」

「音無くん!？」

「結弦!？」

二人を守るために駆け出す音無。やがてダークムーンシードの前まで来た音無は、

「俺が相手だ。」

ビーツドライバーを装着し、

「変身!」

M u s i c S t a r t !

ヘンシンコアメダルを装填して、ビーツに変身。ダークムーンシードはビーツに気付いてルシファーとゼウスを構える。対するビーツは、左腰に装着されている剣、ビーツソードを右手で抜き、右腰に装着されている銃、ビーツブレイザーを左手で抜き、臨戦態勢に入った。

レスティーがシードの気配を察知し、もしかしたら楓が襲われているかもしれないと予想した皇魔、レスティー、終は、シードがいると思われる方向へ向かう。しかしシードはおらず、代わりに楓が倒れていた。エターナルムーンを展開したままで。

「楓!!!」

終は駆け寄り、楓を揺する。

「楓!!!しつかりしろ!!!楓!!!」

「...終...さん...」

楓は目を覚ました。

「...まったく心配かけさせやがって...」
無事なようなので安心した終。

しかし、楓は無事ではなかった。

「私は...私は...!!」

突然頭を抱えて震えだしたのだ。

「楓!?!どうした楓!!!」

楓の肩を掴んで呼び掛ける終。

「ちよつと失礼。」

レスティーは楓の頭に触れて、超能力で記憶を読み取った。

「...この子、メイカーと戦ったのね。」

しかし、レスティーが知ったのはそれだけだ。楓が途中で気を失ってしまったからである。

「...一体どうして...」

終は震え続けている楓を見て、彼女の身を案じていた。

「さつき記憶を読み取ったついでにわかったんだけど、彼女の中から何かが欠落しているわ。それが原因だと思う」

「何かが欠落している？」

「言われても、わかるはずがない。」

「いい加減にしる。さっさとシードを捜しに行くべきだ」

ついに痺れを切らした皇魔。

「お前、楓をこのままにしておけっというのか!？」

「そうだ。余は貴様らのくだらん茶番劇に付き合っつもりはない」

「てめえ…」

皇魔の発言にブチキレた終は、皇魔と一触即発状態になる。終にとつて楓は大事なクラスメイトだが、皇魔にとっては赤の他人。他人がどうなるうと、知ったことではないのだ。

その時、

「あっち…」

楓が突然、ある方向に手を伸ばした。

「…何かあるのね？」

レスティーの問いに頷く楓。もしかしたら、楓から欠落した何かがあるのかもしれない。

「行くぞ!」

終は走った。

「私達も行きましょう!」

「だから余は…」

「あとでセルメダルあげるから!」

「…ちっ」

いつものようにセルメダルに釣られる皇魔。二人が終を追っていったあと、楓もエターナルムーンを待機モードにしてから遅れてついていった。

ダークムーンシードは、ダークムーンを模したシード。ダークムーンの武器や特性を全て持っている上に、シードなため能力も高い。ビーツのハイスペックと音無の順応性がなければ、とっくに負けていたところだ。

「ウツ！」

ダークムーンシードは空へと逃げる。空中から仕掛けるつもりなのだろう。

「ならこれだ！」

ビーツはビーツプレスにユニットコアメダルを装填し、触れる。

Sky High Jet!

すると、ビーツオルゴールが分解、再構築され、ロケットブースターになった。ビーツオルゴールの飛行形態、スカイハイジェットである。ビーツはスカイハイジェットを使い、ダークムーンシードを追いかけた。飛びながら、互いに撃ち合うビーツとダークムーンシード。やがて、

「はあっ！！」

ビーツはビーツソードによる一撃を食らわせ、ダークムーンシードを叩き落とした。追って地上に降り立つビーツ。そこへ、ゆりとかなでも来た。ビーツは驚く。

「お前ら、何で逃げなかつたんだ！」

「心配だからに決まってるでしょ！」

「あたし達も戦う。」

図を計りかねる中、一人だけ、行動する者がいた。楓である。楓は
ダークムーンシードに手を伸ばし、言った。

「椛さん…」

「何だと!？」

真っ先に反応したのは、終。

「貴様、何か知っているのか？」

「…楓は二重人格者なんだ。」

終は皇魔の問いに答えた。

「お前から一体何の話してんだよ？」

「詳しく教えて。」

事情など知らないビーツ、ゆり、かなで。レスティーは超能力を使
って終達のことを教え、さらに告げた。

「わかったわ。あの子の中から何が欠落しているのか」

レスティーが気付いたそれはすなわち、楓のもう一人の人格である
椛だ。

人格が二つあることによって安定していた楓が、椛というもう一つ
の人格を失うことによって不安定になる。それはさながらパズルの
ピースで、揃わなければ完成しないのと同じ。不安定になるのは当
然である。

「シードの種類からして、これをやったのはメイカーね。」

「その通りです。」

レスティーに言い当てられた瞬間、メイカーが現れた。

「私が彼女からもう一人の人格を抜き取り、シードに移植しました。」

「

ゆりはメイカーの発言に驚く。

「人格を抜き取ったって、そんなことできるの!？」
それについては、レスティーが答えた。

「シードはデザイアの眷族であると同時に、心の在り方を映し出す鏡でもあるの。その特性を応用すれば、多重人格者から人格を抜き取ることだってできるわ。」

なんとも意外な特性である。ビーツはメイカーに訊いた。

「何でそんなことしたんだ!？」

「我々デザイアは、一人でも多くの人間を抹殺しなければなりません。ですが、ただ殺すだけでは面白味がないんですよ。そこで、元は存在を同じくする者同士を殺し合わせる、という殺し方を考えたんです。面白いと思いませんか？」

「：ゲームだともいうの?」

「ええ。」

ゆりの質問に即答するメイカー。ちなみに、楓と椋を分離させたあとすぐに殺し合わせなかったのは、椋の人格が宿ったダーククムーンシードにセルメダルを稼がせ、より強くした状態で戦わせるためだ。
「アプリシイは人間嫌いですが、私は人間が大好きです。だって、こんな面白いゲームができるんですから!」

メイカーは笑っていた。外道である。外道としか言い様がない。

「ウウ：ウウウツ：!」

苦しむダーククムーンシード、いや、椋。そんな彼女へと、メイカーは語りかける。

「何を苦しむことがあるのです?これはあなたが望んだ結果なのですよ?」

「私：が：?」

「そのダーククムーンシードは、あなたの中に存在する『全てを破壊したい』という欲望を媒体に産み出しました。だからこそ、私はあなたを彼女から分離させ、全てを破壊できる力を与えたのです。力を得たなら壊せばいい：壊してしまいなさい全てを。あなたの愛す

る彼女すらね…」

その時、

「違うッ！！」

終が異議を唱えた。

「…何が違うのですか？」

「…榎は確かに、全てを破壊したいと望んでいた。だがそれは、楓を守るためだ！間違ってるとはいえ、二度と楓を傷付けさせないよう、榎が考えた方法なんだ！」

そう。全てを破壊したいというのは、かつて楓を傷付けてしまった世界を憎み、二度と傷付けさせないように滅ぼすという、榎の歪んだ愛情の生み出した結論だ。

「許さねえ…榎の気持ちを、よくもこんなことに利用しやがったな
！！」

怒る終は自分の力、漆黒の牙を目覚めさせる。

「起きろ！ブラックファンゲ！！」

終もまた、ISの使い手なのだ。しかし、メイカーの中に疑問が生まれる。

「おや？おかしいですね。ISは女性にしか使えないはず…」

「そんなことはどうだっていい！」

終はブラックファンゲの剣と銃、ハデスとケルベロスを抜いた。

「そうですか。ですがこのまま戦えば…」

メイカーの言う通り、このまま戦えば、間違いなく榎は死ぬ。だが、

抜き取られた人格を取り戻す方法などあるのだろうか。

「…あの人を助ける方法はないの？」

かなではレスティーに尋ねた。答えは……、

「あるわ。」

らしい。

「ただし、かなり危険な方法よ。それでもやる？」

「やります！」

一番最初に答えたのは、いつの間にかエターナルムーンを展開していた楓。

「椛さんはもう一人の私。だったら私が助けないと！」

「協力するぜ。ここまでやられて、黙ってられるか！」

終は当然協力態勢だ。

「俺もやる！このままにはしておけない！」

「あたしもやるわ。」

「あたしも手を貸すわよ！」

ビーツ、かなで、ゆりも加勢する。そんな中、

「くだらん…余は貴様らの事情に付き合うつもりはない。」

非協力的な態度の皇魔。自分に害がなければ、他人がどうなること関係ないのだ。

そう、自分に害がなければ。

「だが、貴様の思い通りにだけは絶対にさせん。」

皇魔はメイカーを睨みながら言い放つ。今回の事件はデザイアが関与しているので、放っておけば皇魔にも害が出る。

「レスティー。何をどうすれば良いのだ？」

「とにかく楓ちゃんと椛ちゃんを接触させて。接触さえさせれば、

私が二人を元に戻す。」

レスティーは方法を教えながら、皇魔にベルトとメダルを渡した。

「よしわかった。変身！」

殺戮者が開催したゲームに勝利するための戦いが。

第十五話 月と牙と皇帝の邂逅（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

椋「楓…楓…」

皇魔「貴様は何をしているのだ！！」

楓「これが…私達の力です！！」

第十六話

楓と椋と向き合うこと

ビーツソード

ビーツの剣。鍔の部分にメダル投入口があり、ヒツサツコアメダルを投入することで、どんなものでも破壊できる斬撃、ビーティングスラッシュを発動できる。

ビーツブレイザー

ビーツの大型銃。ベルトのヘンシンコアメダルから常にエネルギーを供給されており、そのエネルギーを利用して光弾を放つ。

撃鉄部分にヒツサツコアメダルを装填することで、島を一つ消し飛

ばせる破壊光線、デストラクションボイスを撃てる。

スカイハイジェット

ビーツオルゴールの飛行形態。時速1000kmで飛行できるようになる。

必殺技は、バリアを纏って最高速度で突撃する、ジェットスーパーストライク。

第十六話 楓と椋と向き合うこと（前書き）

後編です。それから、エンズの超能力コンボが登場します。

第十六話 楓と椛と向き合うこと

「椛さん！」

椛へと手を伸ばす楓。しかし、

「うあああああああ！！！」

椛はルシファーを振り回してそれを振り払い、

「楓えええええ！！！」

さらにゼウスを発砲して楓を追い払う。今の椛は、楓から分離させられてしまったため楓と同じく不安定になっており、さらにシードになったことで感情が暴走。自分でも止められなくなっているのだ。

「楓！楓！楓！楓！楓えええええ！！！」

「くっ！！！」

なぜか楓に的を絞ってルシファーを振るう椛に対し、同じくルシファーでさばく楓。だが、レスティーは言う。

「武器同士の接触じゃ駄目！直に触れないと元に戻せないわ！」

「なら、動きを止めないと……！」

真つ先に動いたのはビーツ。しかし、その前に、突然アプリシイが現れた。

「お前には俺の相手をしてもらおう。」

「ぐっ……どけえっ！！！」

ビーツソードで斬りかかるビーツ。アプリシイは両手を氷の刃に変え、ビーツソードをさばいていく。

「音無くん！」

「結弦！」

ゆりとかなではビーツの加勢に行った。

両腕に大口径のガトリングを生成して、終を銃撃するメイカー。終もケルベロスで反撃してはいるが、相手の手数が多すぎて、まさしく豆鉄砲同然。

「どうしました？私を許さないのではなかったのですか？」

「クソツ！調子に乗んな！」

悪態をつきながらも、終にはひたすらメイカーの攻撃から逃げ回ることしかできなかつた。弾幕に隙ができる瞬間まで。

「うおおっ！！」

メダジャベリンを振り下ろすエンズと、それをルシファーで受け止める椀。

「余は加減などせん。痛めつけて行動を封じてやる！」

エンズはメダジャベリンによる華麗な槍術で、椀を追い詰めていく。途中でゼウスによる反撃も受けるが、エンズの装甲は非常に厚いので、メイカーの重火器に比べれば無視できるレベルだ。

「あの人のスーツ、ISより頑丈なんじゃ……」

楓がそんなことを言っていたが、それも無視して左手の衝撃波で椀を吹き飛ばす。

皇魔と椀の腕は、長年の経験、元の強さもあって、皇魔の方が若干上。エンズの性能も非常に高い。だが、今の椀はシードの肉体と力を得ており、さらに『破壊衝動』という欲望を満たし続けたことでセルメダルを稼ぎ、パワーアップも遂げていた。今もエンズと戦うことによって欲望を満たし、パワーアップを続けている。しかし、暴走状態にある椀は戦っても戦っても欲望に渴き、一向に満たされない。そのことが、さらに椀の暴走を加速させていた。それに伴って、パワーアップも加速する。今や椀は、エンズにも匹敵するほどの力を得ていた。いや、現在進行形でエンズを超えつつある。

「加減をして勝てる相手でもなさそうだからな！」

そう、加減などしている場合ではない。椀の力がエンズを超える前に、椀を楓に戻さなければならぬのだ。

「楓…楓…」

何事か呟き始める椛。エンズが椛の顔を見た時、彼は目にした。

椛が、大粒の涙を流して泣いているのを。

「どうして…こうなるの…？」

シードの身となったにも関わらず、涙する椛。

「私は…楓を守りたいだけなのに…！」

べそをかいて心中の想いを吐露する姿は、異形といえど、まるで子供だ。

「椛さん…」

楓は椛の想いに気付いているので、その姿が痛々しくて仕方がない。目を背けてしまう。

「…貴様は…」

一方エンズは、

「貴様は何をしているのだツツツ！！！！！」

彼女の涙を見た瞬間からこみ上げてきた不快感に耐えかね、激怒していた。

少し前の自分なら、何も感じなかったはず。むしろ、喜んでいたはずのこの光景。しかし、どういうわけか今のエンズの心中には、不快感しか湧いてこない。

「貴様には、本当に守る気があるのか！？ならばなぜ泣く！？嘆いている暇があったら行動を起こせ！！それすらできんかこの愚か者めッ！！！」

一刻も早くこの不快感を取り除こうと苛立つエンズは、とりあえず今、自分が思っていることをぶちまけてみる。だが、それでも不快感は消えなかった。どうしたものかと考えていると、

「皇魔！」

レスティーがコアメダルを渡してきた。そのメダルの種類を見て、エンズは感じる。

「やはり、直接発散するしかないか。」

クレアボヤンス！サイコキネシス！ホノオ！

そのままクレサイホコンボにコンボチェンジ。念動力を発揮し、杖の動きを封じてその場に固定する。

「今だ！さっさとしろ！」

「は、はい！！！」

エンズに促され、慌てて行動に移す楓。楓が杖に接触できれば、あとはレスティーが二人を元に戻す。

「！！！」

それを見たメイカーの攻撃が、一瞬止まる。

「もらったああああああ！！！！！」

この気を逃さず、一気に接近する終。だが、それに気付いたメイカーは自分の左手を巨大な榴弾砲に変化させ、

「邪魔です！！！」

零距离から終を吹っ飛ばした。

「ぐわあっ！！！」

近くにあった建物に突っ込む終。

「させませんよ！！！」

メイカーは右手をかざし、杖に向けて大量のセルメダルを飛ばす。

セルメダルは杖に吸収され、

「ああああああああああああ！！！」

それによってパワーアップした杖は全身から衝撃波を解放し、念動力を突破。一緒に楓も吹き飛ばす。

「もういい…何も…いらナイ…全部…壊してヤル…ハカイダ…

…ハカイダアアアアアアアアアア！！！」

とうとう杖の理性が消え去り、完全な暴走を引き起こした。もはや、彼女の目に楓の姿は映っていない。全てを破壊し尽くすまで、杖は

戦いを続けるだろう。全てを…愛してやまなかったもう一人の自分さえも…。

「今ので私もかなりのセルメダルを消費しましたが、ゲームはリスクが大きければ大きいほど面白くなります。さあ、もっともつと殺し合って下さい。」

メイカーは喜んでいる。彼は生まれて最初にゲームというものを知り、そして五百年経った今、それがより面白くなっているということを知った。ゆえに彼は求める。楽しみながら世界を滅ぼせる、彼にとっての至高のゲームを。

「俺はメイカーと違って人間の良さなどわからん。見ていたところで不快なだけだ」

あまり興味がなさそうなアプリシイ。ビーツはアプリシイに尋ねた。「お前：いくら人間嫌いだからって、こんなものを見ても何も感じないのかよ!？」

「知らんな。人間など、苦しんで苦しんで、苦しみ抜いてから死ねばいい。面倒だから俺はすぐに終わらせるがな」

「…最低ね。」

アプリシイの思考に対して嫌悪感をもよおすゆりだが、

「だから何だ？滅亡すれば全て同じ。お前達もな!」

アプリシイは右手から大量のツララを飛ばした。

「ガードスキル・デイストーション」

そこでかなでが二人の前に飛び出し、ガードスキルを発動する。しかしアプリシイのツララ攻撃は銃弾よりも遥かに強力なため、これだけでは防げない。というわけで、かなではさらなるガードスキルを発動する。

「ガードスキル・メトロノーム」

かなでが発動したガードスキルは、ガードスキルを強化する技だ。防御力を増したデイストーションで、ツララを防ぐ。

「小癩な…!」

「かなで!下がれ!」

ビーツはビーツソードで、アプリシィの氷剣を受け止めた。

椀はあまりにも強大な存在になってしまった。もはや、楓にも、終にも、レスティーにも、ビーツにも、ゆりにも、かなでにも、止められない。

しかし、一人だけ、彼女を止める方法を持つ存在が、この場にいた。

その名はエンズ。

「…レスティー。貴様のコアメダルをもう一枚よこせ」

「っ!!」

当然レスティーはその言葉の意味を知っている。それは、彼女のコンボを使うということ。

「駄目よ！危険すぎるわ！せめてもう少し」

「その少しが待てんから言っておるのだ!! つべこべ言わずによこせ!!」

異論を許さぬエンズ。

「死ぬかもしれないわ!」

「余は死なん。成すべきことを、成し遂げるまではな。」

エンズの覚悟は本気だった。別に人助けをしようなどと考えているわけではないが、目の前の相手は命を懸けて挑むべき存在。そのために、自分の全力を使う。限界など、いくらでも超える。彼からすれば、当然のことだった。

「…くっ!!」

レスティーは断腸の思いでメダルを渡す。

「それで良い。」

エンズは渡されたメダル、テレポートコアメダルをベルトに装填し、エンスキャナーでスキャン。

クレアボヤンス！サイコキネシス！テレポート！クゥレゥイトゥ

超能力コンボへとコンボチェンジした。チェンジの瞬間に全身から溢れ出る漆黒のオーラ。姿がよりエンペラ星人に近くなったこのコンボの名は、クレイトコンボ。

「すぐに終わる。」

エンズは両手を杖に向け、コンボによって何倍にも強化された念動力を使い、再び杖の動きを封じる。

「ウツ！グウツ！ハナセツ！！ハナセエエツ！！！！」

わめきながらもがく杖だが、今のエンズの念動力は惑星すら握り潰せる。つまり、レスティーを上回るパワーなため、逃げられるわけがない。

「女！早くしろ！」

再び楓に呼び掛けるエンズ。

「今度こそ！」

楓は瞬間加速を使って、一気に杖に接近した。

遂に触れ合う楓と杖の手。

「レスティー！条件は満たしたぞ！」

「もうやってるわ。」

二人が接触したと同時に、二人の身体に触れるレスティー。その時、

「ガアアアアアアアアアア！！！！！！」

「あああああああああ！！！！」

突然痙攣を起こす二人。数秒痙攣したあと、二人は糸が切れた人形のようにうなだれ、レスティ―は楓の方だけを瞬間移動で回収した。「レスティ―！何をしたのですか！？」

驚くメイカー。レスティ―は、今自分が何をやったのか教える。

「私の超能力で、二人の精神をダイレクトに繋げたの。」

楓と椛は元々一つの存在であるため、元に戻ろうと常に強く惹き合っている。ならば、互いの精神を繋げて道を作ってやればいい。あとは惹き合う力で勝手に元の器、楓の肉体に戻る。これは至って単純だが、あらゆる超能力を自在に扱えるレスティ―だからこそできる方法だ。そして、今のダークムーンシードはただのシードであり、椛は入っていない。

「おのれ…ようやく面白くなってきたのに…！」

「残念だが、ゲームは終わりだ。」

「！」

メイカーは声が聞こえた方を見る。そこにいたのは、建物から出てきた終。しかし、ブラックファンクは強化形態、ブレイブファンクに変わっていた。

「俺達が終わらせる！」

終は再びメイカーに挑む。

「せつかくだ。このまま倒す」

エンズはいずれ、このコンボを使いこなせるようにならなければならぬ。ならば、感覚は掴んでおくべきだ。ダークムーンシードにかけている念動力を解き、わざと攻撃させる。

「ウアアアアッ！！！」

ルシファーを手に襲いかかってくるダークムーンシード。しかし、エンズは左腕に円盤を精製することによって防いだ。一見タジャスピナーのように見えるこの円盤の名は、クレイジス。予想外な防御方法を取ったためあっけにとられていたダークムーンシードだっ

だが、エンズがその隙を逃すはずもなく、殴り飛ばす。

「ウウツー!!」

ダークムーンシードはゼウスで反撃してきた。エンズはこれを、瞬間移動でかわす。クレイトは超能力全般が使えるようになるコンボで、念動力や瞬間移動はもちろんのこと。未来予知やテレパシーなども使え、様々な状況に対応が可能だ。今回も、未来予知と瞬間移動を併用して、ゼウスによる銃撃をかわしている。

「これは便利だな。」

エンズはダークムーンシードの背後に瞬間移動。

「!!!」

慌てて振り向くダークムーンシードだったが、もう遅い。

「ぬん!!」

ダークムーンシードはエンズが左手から放った衝撃波によって、吹き飛ばされていた。念動力で威力を増幅した念動衝撃波なので、ダメージも大きい。

「次だ。」

スキヤニングチャージ!!

エンズはベルトをスキャンし、それから片手をダークムーンシードに向ける。直後、エンズの手から念動力が発され、ダークムーンシードは動きを封じられた。

漆黒のオーラを纏いながら、ゆっくりと浮かび上がるエンズ。その優雅な姿は、相手にとっての最終通達。やがて空中で一回転したエンズは、

「でえやっ!!」

背後のオーラを爆発させて推進力を得、右足蹴りを放つ。エンズはそんな状態でも念動力を操り、ダークムーンシードを引き寄せる。動けないままなので、避けることも防ぐこともできない。相手の動きを封じて引き寄せながら放つ飛び蹴り、PSYキック^{サイ}を食らった

ダークムーンシードは、大きく吹き飛んだ。エンズが飛んでくるスピードと、自分が引き寄せられるスピード。二つの要因によって威力が増した飛び蹴りは、ダークムーンシードに大ダメージを与えた。

モニターを介してそれを見ていた光生は、ケーキを作りながらエリカに訊く。

「里中君。進化とは何だと思うかね？」

「こうなりたいと願ひ、自分を高めることだと思います。」

「そう！進化とはすなわち、こうなりたい、こう在りたいと願う欲望の結晶なのだ！超能力もまた然り！！」

ハイテンションで熱弁する光生は、しかしケーキ作りの手を止めず、さらにテンションを上げる。

「超能力とは一つの進化の可能性！！さらなる進化を望む者が生み出した、まさしく欲望の奇跡！！！」

完成させ、光生はモニターを見て叫ぶ。

「素晴らしいッ！！！！」

楓の精神空間。

そこには二人の少女がいた。片方は楓で、もう片方は椋。

「ごめんなさい」

先に言葉を発したのは、楓。彼女は今、申し訳ない気持ちでいつぱいだった。自分が弱かったがために椀を危険に晒してしまい、苦しませてしまったと思っっているからだ。

「楓のせいじゃないわ。元はといえば、私が勝手に飛び出したのが原因だし、少し反省ね。」

そのまま、二人は黙ってしまふ。そして、再び口を開いたのも楓だった。

「椀さんまだやれますか？」

その言葉から、椀は全てを察する。二人は同じ人物なのだから、当然だが。

「ええ。そろそろ、やり返してやりたいと思っただところよ。」

「今度は二人で行きましょう。一人では無理でも、私達二人なら……」
椀は、今度も楓の意図を把握する。

「でも、あれを使ったら……」

「今使わないで、いつ使うんですか？」

「……そうね。やりましょう！私達二人の力で！」

「はい！」

覚醒する楓。しかし、エターナルムーンは楓と椀の力の集大成、デュアルムーンへと変わっていた。楓はエンズの隣に立つ。

「私も、いえ、私達も混ぜてください。」

「活躍の場など与えん。欲しければ、自分で奪え。」
それはつまり、好きにしろ、ということ。

「はい！」

楓は三ツ又槍、ポセイドンを出して構える。エンズは念動力を使ってクレイジーズを開き、三枚のコアメダルと四枚のセルメダルの装填、スキャンも念動力で行う。

クレアボヤンス！サイコキネシス！テレポート！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキヤン！！

「ぬんっ！！」

左腕を広げるエンズ。するとクレイジーズが発光して、エネルギーの刃が伸びた。そしてそのまま、

「ええええりゃっ！！！！」

一閃、ダークムーンシードを斬りつける。無限に伸びるエネルギー剣で相手を斬る技、パニッシュブレードだ。

「これが…私達のカです！！」

動きを止めたダークムーンシードに飛び掛かり、全エネルギーを収束したポセイドンで斬りつける楓。

「グアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

とうとう、強敵ダークムーンシードは爆散した。

「音無くん。あたしとかなでちゃんです止めるから、その際に！
行くわよかなでちゃん！！」

「うん！！」

「ゆり！かなで！」

ゆりとかなではビーツが止めるのも聞かず、アプリシィに挑んだ。

「はああああああああああ！！！！」

「くっ！人間がつ！！」

二人がかりの攻撃すら、苦戦しつつもさばっていくアプリシィ。ビーツは自分を守ろうとしてくれている二人の想いに応えるため、ビーツソードにヒツサツコアメダルを装填。

CORE BURST！！

「下がれ！！」

「！！！！」

ビーツは二人を下がらせて突撃。

「ビーティングスラッシュ！！」

必殺の斬撃を放つ。

「図に乗るな！！」

アプリシィも氷剣と化した右腕を振るが、ビーティングスラッシュは全てを斬り裂く一撃。当然、

「がああつ！！！！」

右腕を斬り落とされた。

「に、人間！！！！」

しかし、アプリシィはデザイアであるため、セルメダルさえあればどんなダメージも修復できる。すぐに右腕を修復し、ビーツを睨み付けた。

「決めたぞ…お前だけは、俺がこの手で殺す！！必ずだ！！」

アプリシィは吹雪を発生させ、撤退した。

「アプリシィ！！！！」

「よそ見すんなー!!」
メイカーに斬りかかる終。メイカーはビームシールドを生成するが、
「ファンングクラッシュャー!!!」
終がハデスを使って放つ必殺技には、バリア無効化能力が付加され
ている。終の攻撃はバリアを破り、
「ぐわあああつ!!!」
メイカーに届いた。
「くうっ…撤退します…!!」
メイカーも逃げていった。

変身を解除する一同。だが、楓と皇魔は解除した瞬間に倒れてしま
った。

「皇魔!!!」

「楓!!!」

慌て駆け寄るレスティと音無。そして、終。しかし、皇魔はとっ
さにリフレクターマントを出して、中から何かの薬品が詰まったボ
トルを出し、中身を飲み干す。ボトルに入っていた薬品は、ポーシ
ヨンという即効性の回復薬だ。疲労にも効果がある。

「もしもの時の手段は用意してあるのだ。」

「…何だよ…心配して損した…」

「私の力じゃ疲労までは回復できないから、安心したわ。」

薬が効きやすい体質らしく、一瞬で復活した皇魔に安堵する音無と

レスティー。一方楓もまた一瞬で立ち上がり、

「気安く触らないでよ。」

終を突き飛ばした。

「お前、椛か!？」

「ええ。デュアルムーンは楓の方に負担がかかるから」

デュアルムーンを使うと楓に負担がかかり、楓が回復するまで椛が肉体の主導権を握るのである。椛は皇魔とレスティーに言った。

「一応感謝するべきでしょうね。」

レスティーは椛を救い、消極的ながら皇魔もその手伝いをしてくれた。椛はまだ世界の滅亡を考えているが、二人、いや、音無達も含めた五人だけは特別扱いするつもりである。皇魔はすぐに返す。

「礼などいらん。余の望みは、一刻も早くこの世界から出ていってもらうことだ。もう二度と余を面倒に巻き込むな」

「努力するわ。またあんなのに目をつけられたらやだし」

椛が言った瞬間、灰色のオーロラが現れる。

「じゃあね。」

「縁があつたらまた会おうぜ。」

椛と終はオーロラをくぐり、この世界から消えた。

「全く、迷惑な連中だ。」

「そうでもないわよ。」

レスティーは皇魔に、一枚のコアメダルを見せる。それは、メイカールのコアだ。終の攻撃によって飛び散ったものである。

「皇魔!」

音無は皇魔に、アプリシイのコアメダルを投げ渡す。こちらも、アプリシイを攻撃した際に入手したものだ。

「要るんだろ?それ。」

「…帰るぞ。」

「お礼くらい言ったら?」

「黙れ。」

レスティーを黙らせ、皇魔は帰っていく。

「じゃ、デートの続きをしましょ」

「早く早く。」

「ちよっ！お前ら！」

音無、ゆり、かなでも、デートを再開する。

それは、日常の中で起きた密かな邂逅。

異なる世界の存在との触れ合いを経験した彼らは、再び日常へと戻って行くのだった。

第十六話 楓と椛と向き合うこと（後書き）

コートピアさん、ありがとうございます！というわけで…。

次回、

仮面ライダーエンス！！

ウォント「熱くなれよおおおおおおお！！！！！！」

修造「熱くなれよおおおおおおお！！！！！！」

皇魔「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

第十七話

熱血と軽音部と応援合戦

クレイトコンボ

クレアボヤンスコアメダル、サイキネシスコアメダル、テレポーターコアメダルの三枚によって完成する、エンスの超能力コンボ。チエンジの際全身から漆黒のオーラが吹き出す、これは闇ではなく漆黒の光。

透視、念動力、瞬間移動、テレパシーを含めた超能力全般を使用できるため、非常に強力なコンボだが、レスティ어의コアメダルはコレク達の十倍以上のパワーを持っているため、彼らのコンボよりも強い負担がかかる。

必殺技は念動力で相手の動きを封じ、さらに高速で引き寄せながら飛び蹴りを放つ回避不能な技、PSYキック^{サイ}。

パンチ力 400 t

キック力 650 t

ジャンプ力 ひと飛び420 m

走力 100 mを2.5秒

PSYキック 1400 t

クレージス

タジャスピナーと同型のツールで、エンズがクレイトコンボにチェンジした時のみ、エンズの左腕に出現する。運用法はタジャスピナーと同じだが、こちらの方が攻防共に上。

クレアボヤンスコアメダル、サイコキネシスコアメダル、テレポーターコアメダルを装填してギガスキャンを行うことにより、無限に伸びるエネルギー剣で斬りつける技、パニッシュブレードを発動できる。

テレポーターコアメダル

レスティーのコアメダルで、エンズの下半身をテレポーターレッグに変化させる。

瞬間移動が可能になる。

ガードスキル・メトロノーム

ガードスキルを強化するためのガードスキル。発動中のガードスキルを、五段階まで強化できる。

かなでがこのガードスキルを開発した理由は、いかに自衛用とはいえ、効かなければ意味がない、と判断したから。

第十七話 熱血と軽音部と応援合戦（前書き）

ギャグ回です。

第十七話 熱血と軽音部と応援合戦

「なあ音無。」

日向は音無に声をかけた。

「どうした日向？」

「今から軽音部の部室に行くんだけどよ、一緒に行かねえか？」

このロストグラウンド学園には、軽音楽部が存在する。その軽音楽部に、日向にとって親しい人物が入部しており、彼はこれからその人物に冷やかशीという名の応援をしに行くつもりだ。

「ああ、いいよ。」

快く了承する音無。と、

「あたしも行くわ。」

かなでが割り込んできた。

「かなでも？」

音無が尋ねると、かなでは行く理由を答える。

「もうすぐ体育祭でしょ？ちよつと打ち合わせしなきゃいけないから。」

ロストグラウンド学園はもうすぐ体育祭。生徒会は軽音部から、体育祭の応援合戦に参加するという申請を受けており、かなでは生徒会長として、どのチームの応援合戦に参加するか、打ち合わせをしなければならぬのだ。

「ならあたしも行くわ！」

今度はゆりが来た。日向が訊く。

「なんだよ。ゆりっぺも用があるのか？」

「ないわ。暇だから行くだけよ。」

「音無さんが行くなら僕も！」

直井も来る。

「いやお前は完全に関係ねえだろ！」

日向はツツコミを入れるが、

「貴様の耳は節穴か？僕は音無さんが行くならと言ったんだ。でもなければ、誰があんな品の欠片もない連中に会いに行くものか。」

「お前なあ……」

直井はいつもの調子であり、日向は肩を落とす。ともあれ、一行は軽音部の部室へ向かった。

「その時じゃった…男の首筋に白い指が…」

「やーだーやめてーっ!!」

「聞こえない聞こえない聞こえない!!」

軽音部部室。

関根しおりは入江みゆきと秋山澪を玩具に、二人の大嫌いな怖い話をしていた。

彼女達は軽音部の部員。関根と澪はベースで、入江はドラム。入江と澪は怖い話や痛い話が最大の苦手で、関根はいつもそれを面白がって遊んでいる。

「お前らまたか！」

「まあまあいいじゃんひさ子」

止めに入ろうとしたひさ子という少女を妨害したのは、田井中律。この二人も部員で、律も入江と澪の反応を楽しんでいる。と、

「静かにして。いいフレーズが浮かばない」

軽音部部長の岩沢まさみが、騒ぐ少女達を叱った。

「岩沢先輩素敵です」

何気に声がクールでカッコいい岩沢。そんな彼女を、ユイが慕う。

「それなら、お茶を飲みながら考えましよう。」

そこへ通称ムギこと、琴吹紬が紅茶と茶菓子を持ってきた。

「待ってたよムギちゃん。」

紬が持つてくる紅茶や茶菓子はとても美味しいので、喜ぶ平沢唯。

「しっかりと練習もしなきゃダメですよ？」

中野梓が釘を刺しておく。この十人が、軽音部の全部員だ。

「おっすユイ！」

「あつ、ひなつち先輩！」

到着する日向一行と、日向の登場に喜ぶユイ。

「しっかりと練習してたか？サボってねえだろうな？」

「失礼ですね。っていうかあんたはあたしの親か！」

日向はユイの頭を撫でてやり、ユイは少し膨れながらも、やはり喜んでた。

「あの二人、相変わらずだな。」

「もう結婚しちゃえばいいのに。」

「ああ。って何言ってたんだ!？」

上から漣、律、ひさ子。

「岩沢さん。」

かなでは岩沢に話しかける。

「何だい生徒会長？」

「早速、応援合戦の打ち合わせをしたいのだけど……」

軽音部は部こそ一つだが、主に二つのバンドグループに別れて活動している。岩沢、ひさ子、関根、入江、ユイの五人をメンバーとする『Girls Dead Monster』、通称ガルデモと、唯、律、漣、紬、梓の五人が勤める『放課後ティータイム』だ。口ストグラウンド学園の体育祭は赤組と白組に別れて行われるので、ちやうど片方ずつで応援合戦に参加できる形になる。

「ガルデモは赤組にするよ。」

「放課後ティータイムは白組で！」

岩沢と律は答えた。どうやら既にどっちのポジションか決めていたようだが、ゆりは少し驚く。

「あら意外ね。岩沢さんはともかく、田井中さんは目立ちたがり屋だから赤組にすると思ってたのに。」

「いや、あたしも本当ならそうしたかったんだけど…」
律は岩沢を見た。

「赤組の応援には、必ず松岡先生が参加するから。」
岩沢が説明する。

赤組の応援には、体育担当教師にしてテニス部顧問、松岡修造が必ず参加する。それで去年に修造の応援と放課後ティータイムの応援を合わせてみたところ、見事にミスマッチすることが発覚したのだ。
「だから今回は、私らがやった方がいいと思ってるね。」

「…ああ…」
ゆりは納得した。

「あの教師はとにかく暑苦しい。僕とは相容れないタイプだ」

「…今回ばかりは同意するぜ…」

「同じく。」

直井にとって修造はどうしても苦手で、日向も、音無までもが、彼を苦手としている。

「案外、あのウォントっていうデザインとはわかり合えそうだけど。」

「出会った瞬間に無言で握手したりしてな。」

ゆりと音無がありそうな冗談を言っていると、

「ここか？」

「そうよ。」

皇魔とレスティーが入ってきた。

「皇魔！それにレスティー！」

日向は心底驚く。レスティーは、まあわかるが、まさか皇魔がこの

ような場所に興味があるとは思わなかったからだ。

「お前も部活とかに興味あるんだな。」

皇魔は部活などに入部していないので、音無は皇魔が部活に興味がないと思っていた。しかし、

「何を勘違いしている？レスティーが余にとって有益な場所があると聞いたから来たのだ。」

どうやらやはり部活自体には興味がないらしい。

「言っとくけど、ここがお前にとっていい場所とは思えないぜ？」

日向から見て皇魔と軽音部はどう考えても釣り合わないし、他の者から見てもそうだ。

その時、

「唯ちゃん」

「レスティーちゃん」

レスティーと唯が抱き合った。

「も〜可愛いんだからあ」

「えへへ〜」

瞬間、皇魔は全てを察し、レスティーに尋ねる。

「レスティー。」

「ん〜？何〜？」

「…貴様、余を嵌めたな？」

はつきり言おう。レスティーがここに来たのは、自己満足のためだ。皇魔をうまく騙して、自分がここに来れるよう、誘導したのである。

「嵌めてなんかないわよ。私が欲望を満たせば、それだけセルメダルが増殖できて、皇魔はそれを得られる。一石二鳥じゃない？」

「それが…」

皇魔はレスティーを抱き抱え、

「嵌めたと言っているのだッ！！！」

ジャーマンスープレックスを食らわせた。

「ひでぶー！！」

女性らしからぬ声をあげて気絶するレスティー。皇魔はレスティー

を引きずりながら、部室から出ていった。

「…皇魔くんって、あんなに感情表現が豊かな人だったっけ？」

「さあ？私あんまり面識ないし。」

問答をする入江と関根。そこへ、

「あら？立華さんにみんな？どうしたの？」

軽音部の顧問、山中さわ子が来た。ちなみに、よく『さわちゃん』と呼ばれている。

「体育祭のことで打ち合わせをしに来ました。」

「俺達は付き添いです。」

「ああ、そうだったの。」

かなでと音無から説明を受け、納得するさわ子。と、

「かなで。」

セフィロスが来た。

「お父さ…セフィロス先生。どうしたんですか？」

「ヨーダ校長が、体育祭関連でお前に渡したい資料があるそうだ。」

セフィロスはちょうど部室の近くを通りがかり、偶然かなでがいるのに気付いたため、こうして直接伝えに来たのだ。

「せつ、せせせセフィロス先生っ！！」

大慌てのさわ子。

「どうした山中先生？」

「いっ、いえっ！なんでもありませんっ！！」

セフィロスから声をかけられて、さわ子はさらに慌てる。ひさ子がこっそり音無達に耳打ちした。

「実は山中先生、セフィロス先生にホの字なんだよ。」

確かに、あり得る話ではある。セフィロスはいわゆるイケメンであり、ファンクラブもあるほど人気なのだ。

「俺は仕事に戻る。山中先生も、しっかり顧問をやってくれ。」

「はいっ！もちろんですっ！！」

セフィロスは出ていった。さわ子は顔を赤くし、恍惚とした表情でセフィロスの後ろ姿を見送っている。

「それじゃあ行かなきゃ。結弦、ゆり、みんな、また明日。かなでは次の仕事に取りかかるべく、部室から出ていく。」

「ああ、頑張れよ。」

「また明日ね。」

音無とゆりはかなでにエールを送った。

「僕も行きます。一応副会長ですから」

直井もかなでを追っていった。

「じゃ、俺帰るわ。一通りからかったし」

「んだとコリア！」

「じゃな。」

「二度と来んなや！」

帰る日向。ユイは怒りをぶちまけるが、実はまた来て欲しいという意思表示で、日向もそれには気付いている。

「俺達も帰るか。」

「そうね。」

「じゃ、みんな頑張れよ。」

音無とゆりも帰った。

「さわちゃん。さわちゃん！」

「はっ！な、何!?!」

さわ子の意識を覚醒させる唯。

「何!?!じゃないよ。なんか用があったんでしょ？」

岩沢が尋ね、さわ子は思い出す。

「そうそう。体育祭の時の衣装なんだけど……」

岩沢はため息を吐いた。これはさわ子の趣味であり、別に着なくてもいいのだが、

「いいじゃん岩沢。こういうのは応援合戦のモチベーションに関わるし」

ひさは結構ノリ気である。しかし、音楽以外に興味のない、いわゆる音楽キチな岩沢は、

「そっちに任せるよ。」

と頼んでおいた。

「なあウォント。」

人間形態のアプリシイは、同じく人間形態のウォントに話し掛けた。「俺はお前のことを誰よりも信頼しているし、尊敬もしている。だが……」

彼にとってはウォントこそ信頼できる、まさしくベストパートナー。なのだが……

「お前の暑苦しい性格はどうにかならないのか？」

ウォントは熱血漢で、アプリシイは冷血漢。アプリシイにとって、ウォントは性格的に馬が合わないのだ。

「んなこと言っただって、俺はこうなるよう造られたんだ。どうしようもねえよ」

文句を言うウォント。それはアプリシイもわかっているのに、無理に矯正したりはしない。ただ、時々こんな風に言うだけだ。

「熱くなれよおおおおおおお！……！」

アプリシイがそれを聞いたのは、本当に突然だった。

「いつも言っているだろう？俺はお前と違って熱くなどなれない。」

「いや、俺は何も言ってるねえぞ？」

「…え？」

なんと、今叫んだのはウォントではないらしい。では一体誰が…と
思っていると、

「人間熱くなつた時が、本当の自分に出会えるんだぜ！」

半袖短パン姿の男性が、何か暑苦しいことを言いながら現れた。

「こいつか…」

呟くアプリシイ。彼は人間嫌いなので人間に興味などないが、それでもウォントと同じくらい暑苦しい性格の持ち主がいることには少し驚いた。すると、ウォントが無言で男性、松岡修造に近付いて行く。そして、

ガシッ！

二人は無言で握手した。ゆりと音無の冗談が、現実になった。

「どうしたのだウォント？」

「ずいぶん機嫌がよさそうですね。」

アジトに戻ったウォントとアプリシイ。ウォントの様子を指摘するコレクとメイカーだが、それもそのはず。修造と出会ったウォント

は、案の定彼と意気投合し、熱血談義を繰り広げていたのだ。アプリシイにとつては苦痛でしかなかったが。

「まあな そうそう、面白い情報を手に入れたぜ。」

ウォントは修造から、ロストグラウンド学園で体育祭が開かれるという情報を聞いた。祭といえば、多くの欲望が集まる場所。セルメダルを稼ぐチャンスである。

「またあいつに会いてえし、今回は俺が行くぜ！」

「私も同行しましょう。面白いゲームができそうですから」

こうして、ウォントとメイカー二人が、体育祭に訪れることになった。

体育祭当日。

各クラスの色決めはくじ引きで行われ、皇魔達三年A組は白組になったのだが……それはもう、とんでもないことになっていた。

まず二人三脚。

「劉鳳！てめえもつとタイミング合わせろよ！」

「お前こそ、もっと呼吸を合わせろ！」

カズマと劉鳳が参加し、ペアになったのだが、性格的な理由で、うまくタイミングが合わない。遂には…

「もうやめだ！」

カズマが二人三脚の帯を引きちぎり、シェルブリットの最終形態を発現させる。

「やっぱ俺はこつちだぜ。」

「同感だな。俺もそう思っていたところだ！」

劉鳳も絶影の最終形態を発現し、

「りゅうふうふうほうほうおおおおおおおお！！！！」

「カズマアアアアアアアアアアアア！！！！」

そして始まるマジバトル。もはや二人三脚どころではない。

「ガイアフォース！！！」

とりあえずブラックがガイアフォースを投げつけたことで、喧騒は
終結した。ちなみに、当然白組は敗北である。

次に玉入れ。

「クロムウエル解放！」

いきなりクロムウエルを解放したアーカードが全身から大量の腕を
出し、玉を独占。しかし、審判側の判断により、反則負けしてしま
った。

中等部の騎馬戦では、

「ウェイ！」

研の親友である星が、まさしく一騎当千の活躍を見せていたのだが、
研は白組で星は赤組。それにブチキレた研は、

「チャージングGO！！！」

して、

「アルファガン！！！」

で撃ってしまった。

「エ、エ、エエーイー！！！！」

倒れる星。当たり前だが、白組の反則負けだ。ちなみに、

「星くんしっかりー！」

と研そっちのけで応援していた研の妹キャロンが、

「お兄ちゃんのバカーー！」

と怒っていたのは、まあ関係ない。

「なかなか熱いねえ……」

観客に紛れて体育祭を見守っていたウォント。

「見とれてる場合ではありませんよ。我々も行動しなければ」

「わかってるって！」

メイカーから指摘を受け、うんざりしたように答えるウォント。彼は性格上メイカーのように規則正しく、また規律に厳しい存在は苦手なのだ。メイカーの性格を疎ましく思いながらも、これ以上のんびりしてたらまたなんか言われる、と思い直し、ウォントは雑踏の中へ消えた。メイカーも追いかけていく。

ロストグラウンド学園体育祭の応援合戦は、軽音部が奏でる曲をバツクに、様々なパフォーマンスをするという形式を取っている。デザアの二人が目をつけたのは、白組の応援団長。団長に接触した二人はすぐ怪人態に変身し、

「燃やせよ。その欲望」

「我々が叶えます。」
団長にセルメダルを二枚投入。誕生したシードは団長から欲望を抜き取ると、すぐ成長。火炎放射機を装備した、カエンホウシャシードになった。

「アツクナレヨオオオオオオ！！！」
叫んだカエンホウシャシードは、突然走り出した。

(正気か…)

赤組の応援を見ながら、一人考えている皇魔。実は白組のパフォーマンスは、エンズとビーツに変身した皇魔と音無が、怪人に扮したクラスメイト達と戦うという内容になっているのだ。どうやら彼と音無がエンズとビーツであるということは、既にクラス中に広まっているらしい。

(…)

皇魔が見る先には、ガルデモの持ち歌『Crow Song』をバツクにパフォーマンスをする赤組と、

「もっと！熱くなれよおおおおお！！！」
ひたすら熱い修造の姿がある。現在の戦績は(いろんな理由で)赤組が優勢であり、応援合戦でも得点が入るため、白組はなんとしてもここで遅れ(自業自得)を取り戻しておきたい。

そして、いよいよ白組の番が来た。

「じゃ、行くか！」

「…」

意気込む音無と、消極的な皇魔。だが、いつまで経っても、ステージに怪人役の生徒が上がらない。音無は日向に尋ねる。

「日向。一体どうしたんだ？」

「いや、団長がいないんだとよ。どうしたのかねえ。団長がいないと応援始められねえってのに…」

その時、

「モット！アツクナレヨオオオオ！！」

カエンハウシャシードがステージに上がり、火炎放射機を自分の真上に向けてぶっ飛ばした。

「！？」

「なっ！？」

「シード！？」

三者三様の驚き方をする皇魔、音無、日向。だが、混乱には陥らなかった。それどころか、客も生徒もますます盛り上がっている。みんな応援の一環だと思っているからだ。

「張り切ってんなあ！」

「何て派手な演出だ…。」

「見てるこっちまで楽しくなってきたわ」

「すごいすごい！」

律、漣、紬、唯も気付いていない。ただ、

「…あんな怪人いたっけ？」

梓だけは薄々感じていた。

「なんか…これ…」

「…チャンスじゃね？」

音無も日向も、この状況の良さをのみ込み始めている。このまま応援合戦を始めてカエンハウシャシードを倒せば、誰にも気付かれることなく解決できるのだ。

「そう、またとない好機だ。」

そして、それは皇魔が一番最初に理解した。

「変身！」

クレアボヤンス！ヤリ！ホノオ！ク・ヤ・ホ　クヤホク・ヤ・ホ

エンズはメダジャベリンを携え、リフレクターマントを翻して、ステージ上に踊り出た。

「アツクナレヨオオオオ！！！」

「暑苦しいやつだ。」

火炎放射機を構えるカエンホウシャシードと、メダジャベリンを携えるエンズ。

「おい！始めるぞ！」

思った以上に展開が急だったため、慌てて合図する律。そして放課後ティータイムは、持ち歌の『Cagayake! GIRLS』の演奏を始めた。

「音無！」

「っ！変身！」

Music Start!

音無もやや遅れる形で、エンズの隣に立つ。そこから、応援合戦兼本当の戦いが始まった。

「アツクナレヨオオオオ！！！」

火炎放射機を撃ちまくるカエンホウシャシード。エンズとビーツはメダジャベリンとビーツソードで炎を切り払いながら、カエンホウシャシードに攻撃を仕掛ける。あまりにもリアルで大迫力な戦いなので、周囲も大絶賛。

と、

「もつと！熱くなれよおおおおお！！！！」

修造が乱入してきた。

「私らも行くよ！」

さらには、先ほど応援を終えたばかりのガルデモまで演奏に参加し
てくる始末。

「ふふっ 皇魔！」

「！」

やがてこの状況を楽しんでいたレスティーが、エンズにメダルを渡
す。エンズは反射的にコンボチェンジし、

マグマ！コウセン！ホノオ！マホマホ！ マグコーホー

なんとマグコーホーコンボになった。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！」

一気に興奮状態になったエンズは、周囲に高熱を振り撒きながらメ
ダジャベリンでカエンハウシャシードを攻撃。

トリプル！スキヤニングチャージ！！

C O R E B U R S T ！！

「オアアアアアアアアアア！！！！！！」

「でやああああああああ！！！！！！」

最後にエンズアルカイドと、ビーツのビートイングスラッシュでカ
エンハウシャシードを倒した。

「やったな皇魔！」

「ふん……」

変身を解除するビーツとエンズ。しかし、

「……あれ！？」

音無は、周囲の人間が全員倒れていることに気付く。理由は、エン
ズが振り撒いた高熱が原因だ。あまりの熱気に、それを浴びた者達

が熱中症になつてしまつたのである。

「お前ら…やりすぎ…ガクッ」

「日向あああああ！！」

気絶した日向に絶叫する音無。もちろん倒れているのは彼だけでなく、ガルデモや放課後ティータイムのメンバー、

「燃え尽きたわ…」

「…我が人生に…一片の悔いなし…」

ゆりやかなでもだ。

「かなで！死亡フラグを立てるな！生きろ！かなでええええ！！」
必死にかなでを介抱するセフィロス。

「おいどうすんだよ！？」

皇魔を見る音無だったが、当の皇魔はポーションを飲んでいる。

「何のんきにポーション飲んでんだ！」

「やかましいぞ音無。これが今の余にとって必需品だということは、
貴様も知っているだろう？」

「そういうこと言つてんじゃねえんだよ！大体、レスティーも何であのコンボ使わせたんだ！？」

「面白そうだったから。」

「やっぱりかよ！！」

レスティーから返つてきたのは、予想通りの答え。ちなみに彼ら意外に周囲の人間で倒れていないのは、

「もつと！熱くなれよおおおおお！！」

修造だけだ。あとあの二人も。

「もつと！熱くなれよおおおおお！！」

「いやあなたのシード倒されましたから！もう十分熱くなりましたから！というよりなりすぎですから！」

「熱くなれよおおおおお！！」

「ああもつ！帰りますよ！」

メイカーはウォントを引っ張つて帰つていった。

結局、この戦いが原因で観客側にも熱中症患者が出てしまい、そのまま体育祭は終了。それでも応援合戦の分の得点は獲得したのだが、やはり届かず、白組は負けてしまった。

「わざわざコンボまで使った余の苦勞は何だったのだ？」

熱中症患者が次々と保健室や病院に運ばれていく中、皇魔は呟いた。

第十七話 熱血と軽音部と応援合戦（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

音無「初詣、か…」

セフィロス「新しいガードスキル？」

皇魔「余は一生、神には祈らん。」

第十八話

新春と気分と初詣騒動

長編予告（前書き）

近々執筆する長編の予告です。

長編予告

「最近、何か大切なことを忘れてる気がするんだ。」

テメンニグル学園の卒業式を間近に控える白宮光輝とフェイト・テスタロッサ・ハラウン。最近になって大切なことを忘れているような気がすると言う光輝は、フェイトが拾ったリターンメモリによって、己の過去、そして彼の両親、隼人と優子の秘密を知ることになる。

「私達は、あの子の未来を守らなければいけない。」

「そのためなら、どんな禁忌だろうと手を出す！それが親だ！！」

今明かされる、ファザーとマザーの誕生秘話。

「「さあ、暗黒に沈め！！」」

劇場版仮面ライダーファザー&マザー メッセージ for クロス

「捜しましたぞ、皇帝。」

「このマイナスエネルギー…貴様…」

突如として復活した暗黒四天王の一人、ヤプール。本来なら復活しないはずの彼は皇魔の前に現れ、再びエンペラ星人として君臨するよう囁く。だが、ヤプールにはもう一つの思惑があった。

「余は…一体何を信じれば良いのだ…？」

信じるべきもの全てを失った彼に、レスティーは先代のエンズの話をする。それを聞いて皇魔は？

自分自身の闇と向き合い、光へと向かう物語は加速する！

「少しだけ、信じてみたくなった。」

劇場版仮面ライダーエンズ ヤプールの欲望

「時は、来た！」

最強最悪の敵、創世の使徒復活！！究極という言葉すら生ぬるいデータライダーが、全次元世界を揺るがす！！

超クロスオーバー大戦GENESIS、近日公開決定！！

新たな^{クロス}交差の^{ジェネシス}創世が始まる…。

長編予告(後書き)

お楽しみに！

第十八話 新春と気分と初詣騒動（前書き）

今回は超クロスオーバー大戦の伏線を張るための回なので、あまり面白くないかもしれませんが、ですが、読んでいただけたら幸いです。

第十八話 新春と気分と初詣騒動

皇魔の家。

「明けましておめでとうございます。」

着物を着たレスティーが、正座をして皇魔に挨拶をした。

「…気でも狂ったか？」

レスティーが突拍子もない行動に出るのはいつものことだが、今回はそれ以上に突然のことだったので、皇魔は思わず尋ねた。

「だって、今日は元旦だもの。新年の挨拶はこうするものじゃないの？」

「…」

それを聞いて皇魔は、ああ、そうだったな、と納得する。

現在ロストグラウンド学園は冬休みを迎え、今日は元旦。デザイア
の能力を使って日本の正月における風習を学習したレスティーは、
早速それを実行したのだ。

「で、新年の挨拶をしたから、今度は初詣に行きたい。」

「なぜだ。」

「だって私、お正月の過ごし方なんてしたことなかったんだもの。
せつかく復活したんだし、やれることは全部やってみたいの。初詣
に行つて神様をお願いしたら、もっと早く力を取り戻せるかもしれ
ないわよ？」

「断る。」

聞く耳を持たない皇魔。そして、レスティーは今自分が言ったこと
が禁句だったことを知る。

「貴様、余がどうして今このような目に遭つておるか忘れたのか？」

「…あ…」

このような目とは、エンズに変身してセルメダル集めに四苦八苦し
ていることだ。そもそも彼がわざわざこんなことをしなければなら

なくなつたのは、クロスとの戦いに負けたからである。クロスは神と同等か、それ以上の力を持つ存在。実際、神でなければあり得ないような力を行使していた。あの戦い以来、皇魔は神、もしくは神と名の付くものが大嫌いになつてしまつたのだ。そんな大嫌いなものに頭を下げるに行く気になど、なれるはずがない。

「余は一生、神には祈らん。」

「…ごめん。」

もはや皇魔にとってそれらの存在は一種のトラウマと化しており、レスティーは自分がどれだけ軽はずみな発言をしたかを恥じた。

「…でも、私は戦い以外のことで、あなたとお出掛けしたいの。それに、あんまり没頭すると、かえって効率が落ちるし。」

「…」

それは確かに言えることだ。よくよく考えたら、行く先々で戦いに巻き込まれているため、休む暇などない。ここらで気分転換するのもいい。

「…神には祈らんが、それくらいはするか。」

「やった！じゃあ早速行きましょ！」

「…ふん」

こうして二人は、初詣に繰り出すことになった。

「音無くん…」

音無の家に、ゆりが訪ねてきた。着物姿で。

「うええっ！？な、何でもないわよ！？」

「？そうか？」

「そうよ！行きましょー！」

ゆりは音無の手を引き、外へ連れ出す。

「引っ張るなっつて！」

「さっさとするー！」

抗議する音無を黙らせ、ゆりは猛進する。着物姿の女性に引っ張られるジャケット姿の男性という構図は、周囲の人間から視線を集めた。

少し落ち着いてから、音無はゆりに訊く。

「そういえばかなでは？一緒じゃないのか？」

「かなでちゃんなら、今日は用事があるから行けないうって言ったわよ。生徒会の仕事じゃないかしら？」

「正月なのに大変だな……」

そんな話をしていると、

「む？」

「あら、音無くんにゆりちゃんじゃない。」

皇魔とレスティーに出くわした。

「皇魔。もしかしてお前も初詣に行くのか？お前もゆりと同じで、神とか嫌いじゃなかったっけ？」

「レスティーが行きたいとうるさくてな。祈るつもりはないが、余も気分転換に外出しただけだ。」

「へえ……」

音無は、少し意外だと思った。以前の皇魔なら、いくらうるさく言われたところで、絶対に聞かなかったはずだからである。ゆりはレスティーに尋ねた。

「レスティーさんっつて、初詣とかに興味あるの？」

「それもそうなんだけど、実はそれだけじゃなくて、お正月に行われる行事そのものに興味があるの。私、やったことなかったから。」

レスティーはコレク達と同様、今から500年前に産み出されたデザイア。年齢的にはゆり達よりも上だが、産み出されてから封印されるまでの時間。つまり、活動時間は数年程度のものなので、実際の年齢はゆり達より幼かったりもする。まあそれはどうでもいいのだが、とにかく数年くらいしか活動していなかったもので、快樂を求める彼女の性分としては、できたことなど微々たるもの。復活し自由になった今は、500年前にできなかったいろいろなことをやってみてみたいのだ。

「ところで、目的は同じみたいだし、一緒に初詣に行かない？」

「いいわね！行きましょ！」

ゆりの提案を呑んだレスティーは、二人して初詣に行く。音無は皇魔に耳打ちした。

「…大変だなお前も。」

「哀れむな。腹が立つ」

とはいえ、二人だけに行かせるわけにもいかないので、音無と皇魔はゆりとレスティーを追った。

やがて神社に到着した四人。すると、

「音無さん！」

直井が音無に抱きついてきた。

「直井！お前も来てたのか！」

「はい！」

「…っつか離せ。」

「す、すいません！つい…」
慌てて離れる直井。そこへ、

「よう音無！」

日向とユイが来た。

「日向！ユイ！」

「音無先輩ご無沙汰です。」

「お前も来たんだな。」

「ああ。ゆりにせがまれて」

「またかよゆりっぺ？」

「うるさいわね。」

日向はゆりのベタバタっぷりに呆れ、ゆりは腰に手を当ててそっぽを向きながら膨れる。

「ちなみにあたしだけじゃなくて、他のガルデモメンバーもいますよ。」

ユイは指を差し、初詣に来ている岩沢、ひさ子、入江、関根の存在を教えた。ついでに、唯、律、漣、紬、梓の放課後ティータイムのメンバーもいる。

「今年こそ、岩沢先輩みたいな素敵なおギタリストになるってお願いするんです！」

目を輝かせるユイ。

「お前は相変わらずだな。」

唐突に現れたのは、しおん。

「貴様も来たか。」

「ああ。今年こそお前から闇を払いたくてな」

「余計な世話を…」

しおんは、一刻も早く皇魔から悪の心を消し去りたいと思っている。かつての自分と同じような末路をたどらせたくないのだ。

「しかし、こうしてみるとウチの生徒って結構いるなあ…」

日向は周りを見て言う。

その時、

「くだらん。」

と声が聞こえた。一同がその声がした方を見ると、杖をついた老人が。

「神頼み神頼み…自分にとって手に負えないことになるはずぐこれだ。自分の実力で解決しようとは思わんのか…」

「ちよつとあんた。何ムードぶち壊なこと言っただよ？」

「今のは聞き捨てならないな。神である僕を侮辱していることになる」

日向と直井は老人に苦情を言うが、老人は全く気にせず、ある人物に視線を移す。

「そしてここは、貴様のような強者が来るべき場所ではない。そうだろうか？」

その人物とは皇魔。彼とこの老人は初対面であるが、それは『老人の姿をしている』からこそ初対面に見えるのであって、実際、この二人はもう何度も対面している。皇魔には既に、老人の正体がわかっていた。

次の瞬間、老人は武器を装備した西洋騎士の姿、コレクの怪人態になる。当然逃げ出す一般人達。

「デザイア!？」

しかし、音無は冷静にビーツドライバーを装着。ヘンシンコアメダルを構える。しおんはココロパフォームを出し、日向と直井も銃を抜き、ゆりはサイレントアサシンを発現させようとするが、皇魔は片手を振ることで、彼らの動作全てを中断させた。

「下がっている。貴様らが敵う相手ではない」

「だが！」

「これは余の戦いだ。手を出すことは許さん」

なおも進み出ようとするしおんを無理矢理押し留め、皇魔はレスティーに命じる。

「レスティー。わかっているな？」

「このコンボでしょ？」

レスティーは、もはやどのメダルを渡せばいいかわかりきっていた。渡されたメダルを見て、満足そうにニヤリと笑った皇魔は、同時に渡されたエンズドライバーを装着。メダルを装填して、

「変身！」

ケン！ヤリ！ハンマー！ケヤーハ！！ケヤーハ！！！！

エンズ ケヤーハコンボに変身する。

「次に会った時には、貴様が持つメダルを全て返してもらおう。この言葉を覚えているな？」

「忘れるわけがない。だが、そう簡単に返してやると思っていないまい？」

メダジャベリンを構えるエンズ。

「ふっ、そこなくてはな。素直に返してきたらどうしようかと思っ
つていたぞ！」

コレクも双剣を抜いて構え、

「ぬおおおお！！！！」

「えやああああ！！！！」

両者は同時にぶつかり合った。

「わぁー！すごいすごい！！」

唯は目を輝かせて喜んでいる。

「喜んでる場合じゃありませんよ！！」

「早く逃げようぜ！！」

梓と律はさすがに危険と判断したのか、唯に逃げるよう促す。

「でも楽しそう…あら?」

エンズとコレクの戦いぶりを見ている紬は、溲の様子がおかしいことに気付く。

「どうしたの?」

話しかけても無反応。というわけでつついてみたところ、

「立ったまま気絶してる…」

ことがわかった。

「私も早く逃げるよ!」

「は、はい!」

「岩沢さん!早く!」

ひさ子、入江、関根も、岩沢に逃げるよう言っが、岩沢は一步もその場を動かない。

「何やってんだよ岩沢!」

「…ひさ子。入江達を連れて、先に逃げな。」

「は!?!」

ひさ子に向かって信じられないことを言う岩沢。

「実はエンズをイメージした歌を考えててね。でもやっぱり、実際にエンズが戦ってるところを見ないと完成しない。」

「まさかそのために!?!」

「考え直してくださいよ!」

入江と関根は岩沢に言っが、やはり聞かない。すると、

「はあ…仕方ない。岩沢が残るならあたしも残るよ」

ひさ子までがとんでもないことを言い出した。

「ひさ子さん!?!」

入江は驚くが、

「心配ないよ。あくまでも岩沢の見張りだし、ヤバくなったら引きずってでも逃げる。」

ひさ子は笑っている。それを聞いて、

「…なら、あたしも残ります。」

関根も残る決意をした。

「しおりん!？」

「おいおい、別にあんたまで残る必要はないんだよ?」

「岩沢さんはこれって決めたらテコでも動きませんから、ひさ子さんだけじゃ大変でしょ?」

「まあそうなんだけど…」

「なら私も残る!」

「みゆきちは逃げなよ。二人いれば十分だって」

「一人だけ仲間外れはやだもん!」

「入江…」

「みゆきち…」

普段は気が弱く、こういうことは真つ先に回避したがる入江だが、どうやらひさ子と関根の決意に感化されたらしい。

「…わかった。じゃあ二人とも、覚悟はいいね?」

「…はい!」

ひさ子の問いかけに返事をし、三人でエンズvsコレクの戦いを観戦しつつ、入江と関根も岩沢を見守ることになった。

エンズとコレクの戦いは、ただ互いの武器をぶつけ合っているという単純なもの。しかし、どちらも凄まじいパワーの持ち主であるため、ぶつかるだけで衝撃波が発生し、周囲にある石灯笼やらなんやらを破壊している。単純明解な戦いが、観戦側からはスーパードバトルに見えていた。

「どんな戦いだよ!? カズマと劉鳳並みに激しいぜ!」

日向にはそう見えたようだ。一方ユイは、

「いけー!そこだー!やつちまいなコラア〜!!」

とエンズを応援していた。

「呑気に観戦してる場合じゃないわ。早くみんなを避難させましょ

「！」

「ああ。」

「よし！」

「わかったわ。」

ゆりの提案にしおん、音無、かなでは素直に従い、

「なぜ僕がそんなことを…」

「いいから急ぐぜ！」

直井は日向に引っ張られていった。

「ふむ…」

神社の屋根の上から観戦していたメイカー。彼は戦況を分析する。

「互いの力の差はほぼゼロ。ともなれば、相討ちになる可能性が高い、ですか…」

エンズはコレクと同じ条件で戦うためにケヤーハコンボを使っているが、特性上エンズの方がコレクより強くなる。対するコレクは、今まで目立った行動をせず、セルメダルを蓄え続けていたため、エンズと互角に戦っている。恐らくエンズとの戦いに備えていたのだろうが。

メイカーは考える。エンズが倒れてくれるのならこれ以上嬉しいことはないが、そのためにコレクを失うのはさすがにまずい。だが、コレクの性格的に、退けと言ったところで聞かない可能性はあるし、最悪の場合、本当に相討ちになるまで戦うことも考えられる。

「…なら取るべき道は一つですね。」

メイカーは屋根から飛び降り、セルメダルを五枚取り出すと、それ

を一枚一枚二つに割って放り投げた。投げ捨てられたセルメダルは、目の代わりに赤いオーブがある不完全なシード、屑シードに変化する。

「申し訳ありませんコレク。我々はまだあなたを失うわけにはいかないのです」

「はあ…はあ…」

「くっ…」

エンズもコレクも、疲労困憊だった。

「さらに力を増したらしいな…面白いぞ…！」
息を荒らげながらも嬉しそうなコレク。

「余は貴様を倒さねばならん。貴様ほどの漢を将に迎えることができたと思うと、これほど惜しいことはないぞ。」

メダジャベリンで自分を支えるエンズ。二人は互いを好敵手と認め合っていた。だが、討たねば何も終わらない。そんな運命にあったからこそ、名残惜しかった。決着をつけるべく、メダジャベリンと双剣をそれぞれ構える二人。

その時、屑シード達が現れてエンズに襲いかかった。

「何だ貴様らは…！」

迎え討つエンズ。

「屑シードだと…？」

驚くコレク。そこへ、メイカーが現れた。

「コレク。ここは退いてください」

「貴様の仕業かメイカー！邪魔をするな…！」

コレクはメイカーを払いのけ、無理にでも戦おうとする。メイカーは全力で押さえにかかった。

「落ち着いてくださいコレク！まだあなたを失うわけにはいかないのです！」

「離せメイカー！わしは皇魔を倒すのだ！」

頑として取り合わないコレク。メイカーはそんな融通の利かない武人を止めるため、最終手段としてある存在を引き合いに出す。

「あなたが欠けたら、王は悲しみますよ！」

「……！」

それを聞いて、コレクはようやく落ち着いた。

「……奴を倒すことは重要だが、王に迷惑をかけてもならぬ。」

「では……」

「……退くぞ。」

「はっ。」

コレクとメイカーは退いた。

「ぬん！はっ！」

メダジャベリンの二振りで屑シードを全滅させたエンズは、コレクが去ったのを確認し、変身を解いた。その際に少しふらついたが、今までセルメダルのエネルギーを吸収し続けたおかげで、気絶することは避けられた。

「大丈夫？」

駆け寄るレスティー。

「大事ない。それより、今の連中は何だ？」

「屑シードよ。屑ヤミーのシード版ってところかしら」

「……メイカーが現れたのが見えた。奴の差し金か……余計な真似を……」

「……そうでもないわ。」

「何？」

実は、レスティーにも皇魔とコレクの戦いは互角に見えており、メイカーと同じく、あのまま続けていたら皇魔はコレクと相討ちになると見ていたのだ。

「メイカーの邪魔が入ったことは、行幸だったと言えるわ。」

「…くだらん。帰るぞレスティー」

「皇魔！」

背を向けて帰っていく皇魔と、それを追うレスティー。

「…やはり余は戦いにしか生きられぬか…」

気分転換のつもりが予期せぬ戦いに巻き込まれてしまい、皇魔はますます不機嫌になるのだった。

「…できた。」

岩沢は告げる。それを聞いて、ひさ子達はようやく安堵した。

「どうにかなったね。」

「それで、どんな歌ができたんですか？」

緊張が解けたひさ子と、尋ねる入江。

「まだ書いてないから、早く帰って書かないと！」

しかし、それら一切を無視して、岩沢は家に向かって全力疾走。

(この時、あたし達は思った。岩沢さんって…)

関根を筆頭に、彼女達は思う。

(…)(音楽キチだ…)

はい、お疲れ様でした。

パソコンのキーボードを操作するかなで。セフィロスはかなでに尋ねた。

「何をしている？」

「新しいガードスキルの作成。」

今パソコンにはガードスキル開発用のソフト、エンジェルプレイヤーを読み込ませており、かなでは新しいガードスキルを開発していたのだ。今日の予定とはこのことである。

「新しいガードスキル？」

「うん。そろそろ必要かなって」

そうこうしている間に完成する、新しいガードスキル。あとはこれを設定するだけだ。キーを押すと、パソコンが設定を開始する。あとは待つだけ。セフィロスは再び訊く。

「どんなガードスキルを作ったんだ？」

「ジョイントっていうガードスキル。あたしがピアノを弾いて、それに合わせて演奏したり歌ったりすると、力が生まれて、それを相手に届けることができるの。」

「……ずいぶんと複雑なガードスキルだな。」

「誰かと協力して発動するガードスキルも面白いと思って。」

「……まあいい。休憩したらどうだ？」

「そうね。少し疲れたから、休むわ。」

席を立つたかなでは、休憩に入った。

この時開発したガードスキルが、のちに起こる戦いの重要な鍵になることを、彼女達はまだ知らない。

第十八話 新春と気分と初詣騒動（後書き）

今回は、超クロスオーバー大戦 GENESIS のクロス編です。

屑シード

屑ヤミーのシード版。目の代わりに赤いオーブがあること以外は全てが屑ヤミーと同じだが、成長体のヤミーを上回る戦闘力を持つ。

まずはクロス編ですが、変身は次回になりますので、ご了承ください。

ちなみに、MOVIE大戦CORE終了後という設定です。

テモンニグル学園。

白宮光輝は、自分の机の上に頬杖をついていた。今は卒業シーズン真っ盛りであり、彼は高等部三年生。そして、もうすぐ卒業式だ。

「この学園とももうすぐお別れかあ……」

光輝はこの学園で、それから風都で今まで起こった出来事を思い出す。異世界での戦いに巻き込まれたり、古代帝国の末裔と戦ったり、テロリストが襲撃してきたり、両親の仇を討ったり、挙げ句の果てにはつい先日現れた仮面ライダーを名乗る巨大な怪物を倒したり、本当にいろんなことがあった。

「何センチメンタルに浸ってんだよお前は。」

「…ダンテ。」

光輝はツッコミを入れてきた親友の名を呼ぶ。

「お前に辛気臭いのは似合わねえから、明るくしろっていつも言ってるだろ？」

「このシーズンに明るくはなれないよ。ダンテじゃあるまいし」

「そりゃどういう意味だ？」

「能天気という意味だろう。」

そこへ、バージルが現れる。

「バージル。お前まで……」

「はつきり言っておくが、光輝は至って正常だぞ？お前が異常なだけだ。」

「何だと！？お前だってその異常な俺の兄弟のくせに！」

「だが俺はまともだ。双子でもここまで違いが出るんだな？」

「てめえ……！！」

ついにエボニーとアイボリーを抜くダンテ。兄弟喧嘩が始まるかと思いきや、

「はいはいストップストップ！」

レディが止めに入った。

「ダンテはどうしてそう血の気が多いのよ？バージルも煽らない。」
「ちっ！」

ダンテはエボニーとアイボリーをしまう。とりあえず騒動が治まったところで、トリツシユと照山が光輝に言う。

「気持ちはわかるけど、あんまり沈むのもよくないわ。明るくね」

「まあ気楽にやれよ。つつても、やることなんてないけどな。」

照山の言う通り、式関係は他の者がやるため、光輝がやることは何もない。あるとすれば、式の予行練習か、学園内の掃除くらいのものだ。

「うん、そうするよ。」

光輝は頷いた。

卒業式が近いため、高等部の三年生は午前中で授業が終わる。下校した光輝は、帰宅前にこの街の象徴、風都タワーへ行くことにした。このどうにも晴れない気分を晴らすためだ。

風都タワーの屋上に着いた光輝は、少し冷たい風都の風を全身に浴びる。

(気持ちいい…)

ここは光輝にとってお気に入りの場所の一つだ。光輝は風を浴びながら、目を閉じてそう思った。

「光輝。」

そんな彼に声をかけたのは、長い金髪の、まさしく絶世の美女という言葉がふさわしい女性。

「フェイト。」

光輝は彼女の名を呼んだ。

女性の名はフェイト・テストロツサ・ハラオウン。光輝にとって誰よりも大切な人であり、まあ早い話が光輝の彼女だ。二人は通り魔事件をきっかけに触れ合うことが多くなり、様々な事件や戦いを通して、両想いとなった。両親を殺され、家を焼かれ、全てを失った光輝は多くの人々に支えられてきたが、フェイトの存在はその中でも特に大きいと言える。そんな彼女に、光輝は尋ねた。

「どうしたの？」

「光輝がここに来るのを見たから。」

「…そっか…」

短い会話をして、沈黙する二人。やがて、静寂はフェイトの方から破られる。

「光輝、最近元気がないよね。」

「…まあこんなシーズンだし、きつとみんなとも、もう会えなくなるんだなって思うと…ね…」

「…その気持ち、わかる気がする。」

「でしょ？いつかまた会えるってことはわかってるんだけど、結局はお別れだから…」

仕方のないことだ。人にはそれぞれ自分の選んだ道があり、その道

を進まなければならない。その過程で、別れなければならないこともある。

「光輝は進路、どうするんだっけ？」

「僕は大学に進学するよ。風都大学」

「光輝も？私もなんだ。」

「じゃあ、また一緒だね。」

「うん。」

光輝にとって唯一の救いは、一番大切な人であるフェイトと進路が同じなことだ。これでまた、長い間一緒にいることができる。

そして二人はまた黙り、またフェイトの方から光輝に話しかけた。

「…本当は、それだけじゃないんでしょ？元気がない理由。」

「…」

黙りながら、さすがフェイト、と思う光輝。彼の気分が晴れない理由は、卒業して仲間達と別れてしまうことだけではないのだ。フェイトは自分が思い当たる要因を挙げてみる。

「無限の使徒関係のこととか？」

光輝は全ての世界を構成し、ありとあらゆる奇跡を起こす無限にして万能の力、アンリミテッドフォースの使用権限を与えられた究極の存在、無限の使徒だ。しかし彼の存在はそれだけにとどまらず、当初彼が変身する仮面ライダー、クロスの強化形態であるクロスアンリミテッドでなければ完全な運用が不可能だったアンリミテッドフォースを、クロスへの変身自体を行わずに使えるようになったり、無限の使徒のさらなる覚醒体である神々の帝王、神帝に覚醒したりと、進化を続けた。しかし、神帝になってしまえばこの世界で生きる権限を失い、神の国で永遠に世界を観測し続けなければならない。実際光輝はその影響で、一度この世界から消えた。だが、彼の親友ドナルドの活躍により、帰還することができたのである。ゆえに光輝は、人間のまま神帝と同じ性質の力を得た。といっても今までとの相違点は、どんな手段によってもアンリミテッドフォースが無効されなくなる、ということだけであり、あとは生身の人間と同じよ

うに歳を取り、普通の生活を送れる。神帝は不老不死の存在だが、それは覚醒後、神の国での数年に渡る生活を経て肉体が変質した結果であり、光輝は数日程度しか生活していないため、肉体が変質することはなかった。

帰還してからは、これまでと同じように街の平和を守るべく戦い、つい数カ月前は仮面ライダーを名乗る巨大な怪物、仮面ライダーコアを一撃で葬ったばかりだ。まあ状況としては、

『我が名は、仮面ライダーコア！！』

『エンドレスレジエンド！！！！』

『ぐわああああああ！！！！！！』

といった具合だ。

話が反れたが、とにかく、今のところ光輝の身体に問題は起こっていない。だがフェイトは、自分が知らないだけで、光輝の身に何か起こっているのではないかと思っている。なので光輝は、

「大丈夫。なんともなっていないよ」

と安心させた。光輝が悩んでいるのは、別の問題である。

「ただ…」

「ただ？」

「…最近、何か大切なことを忘れているような気がするんだ。」

光輝とフェイトは両想いとなり、その後も交流を深めていったが、光輝の方はフェイトのことを好きになれば好きになるほど、自身の記憶の中に違和感を覚えていった。何か、自分達に関わるような大切なことを忘れていないかと。

だが、

「光輝も？」

「えっ、『も』ってことは、フェイトも？」

なんと、フェイトも同じ悩みを抱えていたのだ。さすがに、光輝のように露骨に表に出るほどではなかったが。

「アンリミテッドフォースを使えば？」

フェイトは解決法を言う。確かに、アンリミテッドフォースを使えば、思い出すことができるだろう。光輝も最初はそれを考えたのだが、

「…怖いんだ。」

彼は、思い出すことを怖がっていた。自分が何を忘れていいのか興味はあるが、もし思い出しではいけないことだったら？そう思うと、怖くて仕方がなかったのだ。

「大丈夫だよ。私が一緒にいるから」

怖がる光輝を勇気づけるフェイト。フェイトの言葉を聞いて、光輝はようやく勇氣が出た。彼女と一緒になら、恐れるものなど何もない。「わかった。じゃあ、どっちから思い出す？」

「私は後でいいよ。きっと、光輝が忘れてることの方が大切だから

…」

「…うん。」

一瞬迷った光輝だったが、すぐ思い直す。僕も男なんだから、決まったのならやらなければと。

アンリミテッドフォースを発動しようとする光輝と、それを見守るフェイト。

と、

「？」

何かの気配を感じて、フェイトは辺りを見回す。しかし、何もなし。光輝に視線を戻そうとするフェイト。その瞬間、彼女の視界の端に、何かが入った。

「待つて。」
フェイトは光輝にアンリミテッドフォースの発動を中断させ、自分が見つけたものが何なのか、確かめに行く。そして、それを拾い上げた。

「これ：ガイアメモリ？」

ガイアメモリとは、かつて光輝がこの街を守るライダー、Wやアクセル、ソウガとともに壊滅させた組織、ミュージアムが開発していたアイテムだ。様々な地球の記憶を組み込まれたそれは、起動して生体コネクタに挿すことで発動し、使用者を怪人、ドーパントへと変化させる。光輝が使っているクロスメモリもその一つなのだが、こちらはライダー専用に変更を加えられた純正型。生体コネクタに挿しても発動せず、ドライバーというベルトを介した場合のみ、効果が発現する。ガイアメモリは表面に表記されたアルファベットのイニシャルによって種類や効果がわかるのだが、それ以外にもライダー専用の純正型、ミュージアムの市販用は、区別ができるようどちらも見えた目が違う。また光輝達が知っている純正型メモリは数えられる程度しかなく、知らないのは市販用メモリのみなのだが、フェイトが拾ったRと書かれているこのメモリは、奇妙なことに純正型だ。二人が知るメモリの中には、T2メモリというまた違う種類のガイアメモリも存在するのだが、それとも一致しない。全く未知のガイアメモリだった。フェイトはメモリの正体を知るべく、起動してみる。

RETURN!

響き渡るメモリの起動音、ガイアウィスパー。

すると、突然メモリが発光を始めた。光はどんどん大きくなっていく。

「な、何これ!？」

フェイトはメモリを捨てようとするが、なぜか手が離れない。その間にも、フェイトは光に包まれていく。

「フェイト!!!」

恋人の窮地を救うべく、飛び出した光輝。二人はメモリの光に包まれ、

消えた。

「あれ？はやてちゃん？」

高町なのはは、八神はやたと出会っていた。

「なのはちゃん。こんなところでどうしたん？」

「風都タワーの屋上から変な光が見えて…」

「私も見えた。あれは絶対ただ事じゃあらへん」

「はやてちゃんもそう思う？」

二人は風都タワーから発された奇妙な閃光に、胸騒ぎを覚える。

「行こうなのはちゃん。真相を確かめるんや！」

「うん！」

二人は風都タワーへ向かった。

「……うっ」

いつの間にか気絶していたらしい光輝は、隣に倒れているフェイトに気付き、その身体を揺さぶる。

「フェイト！起きて！フェイト！」

「……うん……」

フェイトは目を覚ます。

「……ここは？」

「わからない。そのメモリの光に包まれたと思ったら……」

フェイトは辺りを見渡し、光輝はフェイトの手に握られているメモリを見ながら言う。今二人は、街中のどこかにいた。風都タワーの屋上にいたはずなのだ。

その時、光輝はすぐ近くにあった家に気付く。

「これ、僕の家だ。」

「えっ……」

あまりに唐突な発言に面食らってしまったが、フェイトも反射的に建物を見る。なるほど、確かに光輝の家だ。

「本当だ……」

「どうして？僕達は風都タワーの屋上にいたはずなのに……」

困惑する光輝。

すると、彼の困惑をさらに駆り立てるかのように、二人の人物が光輝の家から出てきた。

光輝はその二人を見て、呆然と咳く。

「父さん…？それに母さんまで…？」

光輝は目の前で起きていることが信じられなかった。彼の父、白宮隼人と母、白宮優子は、二年前に死んだはずなのだ。

「じゃあ行ってくる。」

「行ってらっしゃい。」

優子に告げて出かける隼人。優子はそれを見送ってから、家に戻った。

「父さん！」

隼人に駆け寄って叫ぶ光輝。しかし、なぜか隼人は知らんぷりで、歩みを止める気配もない。

「父さん!!!」

隼人の手を掴んで無理矢理にでも止めようとする光輝だが、その手は隼人の身体をすり抜けてしまった。

「どういうことだ?」

再び困惑する光輝。と、

「?」

頭がついていかず硬直していたフェイトの足元に、何かが転がってきた。それは、新聞だった。新聞はちょうどいい具合に、日付を見せる。フェイトは日付の、年号の部分を見て驚いた。

「この年号…十年前!?!」

「えっ!?!」

反応する光輝。

死んだはずなのに生きている両親。十年前の年号。これらの要因から、光輝は推測する。

「ここは…十年前の風都!?!」

そうとしか考えられない。

「でも、どうして私達が?」

「きっと、さっきのメモリのせいだ。」

フェイトが起動したメモリのガイアウィスパーは、リターンと発音していた。メモリの名前は、リターンメモリで間違いないだろう。効果は恐らく、使用者を任意の過去に飛ばすことができるというもの。

「でも私には生体コネクタなんてないし、ドライバーにも挿してないよ?」

「ガイアメモリの中には、生体コネクタやドライバーがなくても、起動するだけで効果が発動する特殊タイプがあるってドナルドが言ってた。きつと、リターンメモリは特殊タイプのメモリなんだ。」
「そんなメモリが…」
フェイトは自分が知らなかったメモリに驚く。

その時、今度は優子が出てきた。

「あれって光輝のお母さんだよな？さっきお父さんが出ていったのに何で…」

「あの頃、父さんと母さんは研究で忙しかったからね。本当は二人でかからなきゃいけないから一緒に行くはずなんだけど、僕の世話を最低限やってからってという理由で、母さんはいつもあとから行ってたんだ。」

隼人と優子は高校時代に知り合い、若気の至りから学生結婚をした。それから互いに元々得意であった科学部門の進路を進み、その名はわずか数年で業界に知れ渡る。やがて優子が身籠った頃、二人はミュージアムに引き抜かれ、ガイアメモリの研究をさせられることに。二人の研究はミュージアムを誇り、より強力なガイアメモリの開発に貢献した。しかし、とある事件をきっかけに二人はミュージアムを退社する。

今光輝とフェイトが見ているのは、ちょうど隼人と優子がミュージアムを退社する前の時代だ。ちなみに、光輝は二人がミュージアムを辞めた理由を知らない。

優子が出かけてしばらく経つと、家から少年が出てきた。ドアに鍵をかけ、どこかつらそうな面持ちで歩いていく。

「あれ、僕だ。」

光輝は呟いた。

「あれが…十年前の光輝…」

少年光輝はどこかへ歩いていく。フェイトは光輝に訊いた。

「光輝。この頃の光輝はどこに行こうとしてたの？」

「確かこの頃、僕はよく公園で遊んでた。多分今日も…」

「追いかけてよう！」

「うん！」

二人は少年光輝を追いかけた。

『あーあ…退屈だなあ…』

少年光輝は呟いた。隼人と優子が忙しいのだから、構ってもらえないのは仕方ない。しかし、この頃の光輝はダンテ達とも知り合っておらず、また少し内気だったため、そして人があまり寄り付かない公園であるゆえに、友人が一人もいない。今日もどうせ一人だ。少年光輝はそう思って公園にたどり着く。

だが、公園には先客がいた。

金髪ツインテールで瞳の赤い少女が、ブランコに乗って遊んでいる。

『…』

少年光輝は少女から目が離せなくなり、少女をじっと見つめていた。やがて少女は少年光輝の視線に気づき、少年光輝を見る。

見つめ合う二人。数秒の沈黙の後、先に口を動かしたのは、少年光輝だった。

「君、一人？」

「うん。」

「そっか…僕も一人なんだ。父さんと母さんが遊んでくれないで…」

「私も、母さんが構ってくれないんだ。忙しいって」

「隣、いい？」

「いいよ。」

少年光輝は少女の隣のブランコに座った。少年光輝は訊く。

「僕、光輝。白宮光輝。君、名前は？」

少年光輝に訊かれ、少女は少し遠慮がちに名乗った。

「…フェイト。フェイト・テストロッサ」

「あれって…小さい頃の…私…？」

フェイトとはある世界で、少女時代の自分に会っている。しかし、それは別の世界のフェイトであり、今日の前にいるのは紛れもなくこの世界の彼女。

その時、

「うっ！！」

光輝は頭を抱えて苦しみだした。

「光輝！？あつ！！」

フェイトも自分の頭を押さえる。少しの間、頭痛に苦しむ二人。頭痛が治まった頃、光輝はとある言葉を口にした。

「…思い出した。僕はこの頃、もうフェイトに会ってたんだ。」

この頃はまだ、フェイトの産みの親、プレシア・テストロッサが引き起こしたプレシア・テストロッサ事件は起きていない。フェイトはまだ八歳であり、なのはとも出会っていないのだ。しかし、光輝とは出会っていた。二人はこの頃から知り合いだったのである。

「私も思い出した。」

フェイトも忘れていた記憶を思い出す。この日を境に二人は友人関係となり、毎日一緒に遊ぶようになったのだ。

「でも、どうしてこんな大切なこと、忘れてたんだろう？」

フェイトが疑問に思った時、場面が切り替わった。どうやら、リターンメモリがフェイトの心情を察して、時間を進めたようである。

二人の前にいたのは、プレシアと隼人。光輝とフェイトの交流を皮切りにして、互いの親も親交を始めたらしい。だが、隼人の顔はかなり焦っている。対するプレシアは、無表情のまま。二人はこんな会話をしていた。

「あなた：自分の娘に何やらせてるかわかってるのか！？」

「もちろんわかってるわ。でもね、もう立ち止まれないの。」

プレシアはフェイトに、ジュエルシード集めをさせ始めていたのだ。正史ではジュエルシードは異世界の遺物だが、このクロスの世界では、魔界の遺物ということになっている。

「ロストロギアの違法収集は犯罪だ。あんたは自分の娘に、犯罪の片棒を担がせてるんだぞ！！例えあの子がクローンでも、あんたの娘に変わりはないだろうが！！」

「それが何？フェイトはアリシアじゃない。人形をどう使おうが私の勝手でしょう？」

「クローンの製造…ロストロギアの違法収集…挙げ句は自分の娘の人形扱い…どれだけの禁忌を犯せば気が済むんだ！！」

数々の禁忌を犯したプレシア。しかし、隼人にとって一番許せないのは、自分の娘を人形呼ばわりしたことだ。一児の父親として、当然の反応ではある。だが、プレシアはそれを何とも思っていない。

「私の娘はアリシアだよ。それに、親は娘に対してなんでもできるものなの。どんな禁忌だろうとね」

プレシアもまた、娘への愛情を持っている。しかし、それはアリシアに対してだけであり、フェイトへの愛情は持ち合わせていない。

「…あんたとは縁を切る。二度と俺達に関わるな！」
隼人はプレシアに背を向けて帰っていった。

「ふん…」

プレシアも転移魔法を使って帰っていく。

その後帰宅した隼人は、少年光輝をある装置に座らせた。これは記憶消去装置。隼人と優子はガイアメモリだけでなく、様々な部門に引っ張りだこであり、同じ科学者の山城博士と知り合った結果、二人は記憶消去装置を造ることができた。隼人が少年光輝から消し去るのは、フェイトの記憶。

「嫌だよ父さん！僕、フェイトちゃんのこと忘れたくない！！」
装置に拘束され、抵抗する少年光輝。

「…許せ、光輝…！」

隼人は断腸の思いで装置を起動した。

「うわあああああああああああ…！」

少年光輝は激痛に絶叫する。徐々に消えていくフェイトとの思い出。

「フェイト…！」

やがて、少年光輝は気絶した。

プレシアはバインド魔法で空中に拘束した少女フェイトを、鞭で拷問する。

「何で…何で光輝のこと…忘れなきゃ…いけないの…？」

既に傷だらけの少女フェイト。

「あなたは私の言う通りにすればいいの。お母さんのこと、嫌いかしら？」

プレシアは全く表情を変えず、フェイトを鞭で打つ。

「うあつ！くつ！…嫌いになるわけないよ…でも…光輝のことだけ

は…忘れたくない…初めての…友達だから…！」

「お黙り…！」

「あああつ…！」

反抗するフェイトを鞭で打ち付けるプレシア。その後も拷問は続き、

(光輝……助けて……)

友達に助けを求めながら、フェイトは心を閉ざした。

こうして二人は、互いのことを忘れたのだ。

隼人は自室に籠ってうなだれていた。そこへ、優子が入ってくる。

「あなた……」

声をかける優子。返ってきたのは、

「……俺は最低の親だ。」

自分への罵倒だった。

「他人の親には禁忌を犯すなど言っておいて、自分は平然と禁忌を犯す……俺はなんてことを……！！！」

ひたすら自分を責め続ける隼人。

「俺にはあいつの父親を名乗る資格がない。」

「そう自分を責めないで。あなたはあの子につらい思いをして欲しくなくて、あんなことしたんでしょ？」

フェイトが犯罪者だと知ったら、光輝は間違いなくショックを受け

る。隼人は自分の息子のそんな姿を見たくなかったからこそ、光輝からフェイトの記憶を消したのだ。優子はそれがよくわかっている。「守りましょう。二人であの子の未来を……」

我が子の未来を守るのは、親にしかできない。自分達が親だからこそ、息子を守るべき。優子はそう言った。

「……ああ。」

まだ立ち直ることはできなかったが、隼人はそれに同意する。

そこでメモリの効果が切れ、光輝とフェイトは現代に戻ってきた。

「……思い出せないわけだ。」

光輝は呟く。あんな風に忘れてしまったら、簡単に思い出せるはずがない。

フェイトと再会したのは、光輝がテメンニグル学園に入学してから。今思えば、光輝は初対面であるにも関わらず、前からフェイトを知っているような感じがしていた。忘れていたとはいえ、十年前前に会っていたのだ。記憶を失っても、心が覚えていた、という感じなのだろう。

「さて、どうする？ 僕が忘れていたことは全部思い出したけど……」

「うーん……私も思い出したし……」

これが、二人がずっと思い出せなかったこと。それを思い出した今、もうリターンメモリに用はないのだが…。

「…そういえば、光輝のお父さんとお母さんは、どうして仮面ライダーになるうと思ったのかな？」

フェイトは尋ねた。よく考えてみると、光輝は二人がライダーであることは知っていたが、ライダーになったきっかけは知らない。

「何だか気になってきたな…」

「じゃあ…」

「…うん。」

今度は光輝がリターンメモリを持ち、

RETURN!

起動させた。

ささやかな欲望に背中を押されて、過去へ飛んだ二人。

そして二人は、隼人と優子が仮面ライダーになった理由を知ることになる。

リターンメモリ

『回帰の記憶』を宿したガイアメモリ。使用者を任意の過去へ飛ばすことができる。しかし、過去の世界の住人には姿が見えず、触れることもできない。
周囲の人間と一緒に行くことも可能。

劇場版仮面ライダーファザー&マザー メッセージ for クロス 後編(前書き

後編です。

プレシア・テスタロッサ事件は、スパイダや風都署、魔界警察などの活躍もあって、迅速に解決した。

しかし、事件の真相をいち早く知ってしまった隼人は悩んでいた。彼はプレシアに禁忌を犯すなど言っている。だが、自分は息子から大切な友達の記憶を消去するという禁忌を犯した。これ以上禁忌を犯せば、光輝にとって良くないのは確実。だが、このままではまた禁忌を犯してしまう。

というのも、最近自分の造っているガイアメモリが、禁忌となり得る品かもしれないと思い始めてきたからだ。当初、ミュージアムのトップである園咲琉兵衛からは、ガイアメモリは人類の進化に関わる重要な研究だから、是非とも君達の力を貸して欲しい。と言われ、隼人は優子とともに何の疑いもなく入会した。

だが、開発したガイアメモリは一般市民に販売され、市民達はドーパントとなつて様々な事件を起こしている。自分は科学者であるため、メモリの研究が人類の進化への貢献に直結するのはすぐわかったのだが、あまりにも周囲への被害が大きすぎた。そのことを琉兵衛に申し立てても、必要な犠牲だと言うばかりで、まともに取り合ってもらえない。人類の進化には貢献すべきだが、ミュージアム側からの被害者への考慮、そして無差別な実験を目にして、隼人は自分の研究に対して疑問を持ちつつあった。

「よう隼人。」

そんな彼に、同じ科学者にして友人の芝浦阿西しばしゅあせいが声をかけてきた。

「芝浦…」

「だから、阿西でいいって！どうしたんだ？元気なさそうだな？」

「…」

隼人は考えた。芝浦は自分にとってもかなり信用を置ける人物であるし、彼になら、話してもいいかもしれない、と。

「俺は…ミュージアムを辞めようと思う。」

「…は？」

芝浦は信じられなかった。互いに人類の進化やガイアメモリについて

て語り合い、ミュージアムに貢献してきた隼人が、ミュージアムを辞めると言い出したのだ。

「か、考え直せよ！お前が辞めなきゃいけない理由なんてどこにある！？」

友人を引き止めようとする芝浦。隼人は、自身の心中の思いを吐露する。

「わかったんだ。地球の記憶になんて、手を出すべきじゃなかった。」

「隼人…？」

「あれは間違いだったんだ。お前もわかるだろう？ミュージアムのやり方が、明らかに間違っている…」

「それは…」

確かに最近のミュージアムの行動は、芝浦から見ても過激だった。

「それに、俺は怖いんだ。」

「何が？」

「…俺が間違い続けることで、光輝も間違いを犯すかもしれない。

俺は…あいつに俺と同じ人生を送って欲しくないんだ。俺と同じ…

間違いだらけの人生を…」

「隼人…」

そこまで聞いて、芝浦は隼人の意志を理解する。

「わかった。けど、どうやってミュージアムを辞めるつもりだ？」

ミュージアムは秘密組織。機密保持のため、退社は御法度なのだ。

辞める方法があるとすれば、恐らく死ぬしかない。だが、隼人には

方法があった。

「方法はある。俺の話聞いた以上、そのためにはお前に一芝居打

ってもらわなければならないが…」

「言ってみるよ。」

「！」

隼人は芝浦の予想外の反応に驚いた。そんなことをすれば、処罰を与えられてしまうかもしれないのに。

「いいのか？」

「構わねえよ。俺とお前の仲だろ？」

「…すまない。では…」

説明を始めようとする隼人。

しかし、

「その必要はない。」

最悪の人物が現れた。

ミュージアムのトップ、園咲琉兵衛である。二人の背筋は凍りついたが、琉兵衛は構わず隼人に訊いた。

「隼人君。君は、ミュージアムを辞めたいらしいね？」

「…それは…」

「…条件次第では、退社を許さないこともない。」

「…!!」

隼人も芝浦も、琉兵衛の発言には驚愕するしかなかった。隼人は思わず尋ねる。

「条件とは!？」

「ミュージアムの一切を、他者に公開しないことだ。」

「…それだけ、ですか？」

再び尋ねる隼人。琉兵衛は頷いて言った。

「君も優子君も、私にとつては十分信用に足る存在だからね。ただし…」

琉兵衛は威圧しながら、隼人に言う。

「もし一言でも口を滑らせたなら、その時は覚悟しておきたまえ。」

「…はい。」

隼人の返答を聞いた琉兵衛は、笑顔で去っていった。

「やったなオイ!これでミュージアムを辞められるぞ!」

「あ、ああ…」

条件があまりに軽すぎるが、隼人と優子にはミュージアムを退社する権利が与えられた。と、隼人は芝浦に言う。

「お前も来ないか？」

「えっ？」

「ミュージアムのやり口がわかっていいるなら、お前も辞めるべきだ。」

お前まで禁忌を重ねる必要はない

「…悪いけど、俺はもう少しここで研究するよ。やりたいことだっているいるあるし、俺はお前ほど有能じゃないから、言っただけと辞めさせてもらえない。」

「あ…」

隼人は今さらながら気付いた。琉兵衛は自分と優子に信頼を寄せられているから、許可を出したのだ。それ以外の人物に許可を出すわけがない。

「心配すんなって!俺は気楽にうまくやるよ。」

「芝浦…」

こうして、隼人と優子はミュージアムを退社することができた。名が知られていることもあつて幸いにも職に困ることはなかったが、隼人は芝浦のことがずっと気になっている。社内での扱いについてももちろん不安だが、何より不安なのは、芝浦が言っていた『やりたいこと』。禁忌を犯している組織に残ってまで、一体何をやりたかということなのか。それが不安だった……。

そして、その日は訪れた。

ミュージアム退社から約二ヶ月。

隼人は新しく就いた会社からの帰宅途中、女性の悲鳴を聞いた。

「!?!」
驚いて駆けつける隼人。たどり着いた先にあつたのは女性の死体と、頭に三本の角を持った怪物。隼人は直感した。この怪物はドーパントだと。

その時、

「久しぶりだなあ、隼人お。」

ドーパントはメモリを抜いて変身を解除し、自分の本来の姿を見せた。

ドーパントの正体は、芝浦だった。

「芝浦!?!」

「息子さんの様子はどうだい?ちゃんといい子に育ってるか?」

「お前…一体どうして…!」

芝浦は説明する。隼人達がミュージアムを退社した後、彼はメモリの研究にのめり込み、ひたすらメモリの開発を続けた。そして、ただの実験に飽きた芝浦は、遂に自分自身をメモリの実験台にしてしまったのである。ガイアメモリは使用者に強大な力を与えるが、反面強力な毒素も含んでおり、精神を狂わせてしまうのだ。使い続けるには、強靱な精神力を以て毒素に打ち勝つか、ガイアドライバーというベルト型のフィルターを使って毒素を遮断するしかない。だが、芝浦がやっているのは自身に生体コネクタを移植してメモリを使う方法、いわゆる直挿しだ。芝浦は強靱な精神力を持ち合わせているわけでもないの、そんなことをすれば一気に狂ってしまう。
「見るよ隼人。こいつが俺の最高傑作：ベルセルクメモリだ!」

自分が造ったメモリを、まるで新しい玩具をもらった子供のように見せびらかす芝浦。しかし、モノがモノなので、隼人は全く笑えない。

「これが…これがお前のやりたかったことなのか!？」

「ああそつだよ。俺の頭脳で考えられる最強のガイアメモリを産み出すこと…それが俺の夢だ!そして、このベルセルクメモリこそが、まさにそれなんだよ!だが、こいつにはまだいくつか欠点がある。もつと実験を繰り返して、改良を重ねれば…!」

狂気とも取れる夢を熱く語る芝浦。隼人にはそんな彼の姿が、痛々しくてたまらなかった。

「もうやめる芝浦!!こんなことを続けてたら、いつかお前は…!」

「死なねえよ。俺の夢を…ベルセルクメモリを完全なものにするまではな。」

夢という名の狂気に取り憑かれた芝浦には、もはやどんな言葉も届かなかった。

「お前は俺の親友だからなあ。殺すのはベルセルクメモリを完成させてからにしてやるよ」

BERSERK!

「やめる!!」

ベルセルクメモリを起動させた芝浦は隼人が止めるのも聞かず、ベルセルク・ドーパントに変身し、

「じゃあな!!」

逃げていってしまう。

隼人は呆然と立ち尽くしていた。やがて、隼人の帰りが遅いのを心配して捜しに来た優子が、隼人を発見する。

「あなた!こんな所でどうしたの!??」

「…やっぱり間違いだった…地球の記憶になんて…手を出すべきじゃなかったんだよ…」

「…何かあったのね？」

優子は隼人から事情を聞いた。

「…そんなことが…」

「あいつはもう…完全にメモリの力に呑まれている。救う方法は…」
メモリの研究者でもあり、開発者でもある隼人と優子は、メモリによって精神を狂わされた者を救う方法を、当然知っている。

メモリブレイク。そのまま、メモリを壊すということだ。

しかしメモリブレイクを行うには、ドーパントに大ダメージを与えるか、体内のメモリの位置を正確に把握して攻撃するしかない。そして、二人はそのどちらを行う術も、持ち合わせていないのだ。

「どうすれば芝浦の体内のメモリを…」

「…あなたに伝える時が来たわ。」

「…何…？」

優子は真剣な表情で言い、それから二人は帰宅した。

光輝が寝静まった頃、優子は隼人を連れて家の地下室に行った。ここは、二人が様々な研究を行うために作られた場所。ちなみに、二人はこの地下室のことをまだ光輝に教えていない。光輝はまだ子供だ。下手に入られて、大事な道具を壊されたりしたら、一大事だから。

らである。

やがて、優子は一つの金庫の前にたどり着き、金庫を開けて、中に入っていたものを取り出した。

「それは…！」

隼人は驚く。入っていたのは、Fと書かれたガイアメモリと、Mと書かれたガイアメモリ。

「ファザーメモリとマザーメモリ…まさか…回収したのか。」

かつて隼人が戯れに造った、自分と優子専用のメモリ。実戦に使うにはあまりに非効率なメモリだったので、隼人はそれを廃棄した。はずだったのだが、優子は密かにこの二つを回収していたのだ。

「あれからずっと改良を加え続けて、実戦で使えるレベルにまで強化したわ。これを使って、芝浦さんを止めるの。」

「何だと!？」

隼人は再び驚いた。

「正気か!？メモリを使えば俺達も…」

「これがあるから大丈夫。」

次に優子が出したのは、ガイアドライバーの改良型、ロストドライバー。これがあれば、メモリの毒素に精神を狂わされることはない。これなら、芝浦を止めることができる。何も問題はないのだ。

しかし、隼人はそれを躊躇していた。自分でメモリを使うこと。それだけは絶対にやってはいけないと思っていたからだ。そしてそれは、優子も同じ。

「メモリの力に手を出すのは間違いだ。わかっただけでやれっただけでいいから、お前は。」

「でも、ここであの人を止めなきゃ、大勢の人が死んでしまうわ！光輝だって狙われる！」

「！」

優子の言う通りだ。芝浦はこうしている間にも、自分のメモリを完成させるために見境なく殺人や破壊を続けている。光輝だっていつその標的にされるか、わからないのだ。

「あの子の未来を守るためにも、必要なことなのよ！！」

「…未来を…守る…」

隼人の脳裏に、ある人物の言葉がよぎる。

『親は娘に対してなんでもできるものなの。どんな禁忌だろうとね』

翌日。

芝浦、いや、ベルセルクの精神はさらに暴走を続け、殺戮を繰り返していた。

「まだだ…もつと…もつとデータを…！！」

ベルセルクメモリの完成を目指し、データ収集という名の破壊を続けるベルセルク。

隼人と優子は、そんな彼の前に立ちはだかった。

「隼人お…言つたよな？お前らはベルセルクメモリを完成させてから殺すつて。優子まで連れて来て、何でそんなに死に急ぐんだよ？ベルセルクの問いかけに、二人は自分のメモリを出すことで答えた。」

「！お前ら…自分にメモリを使うことだけは絶対にしないんじゃないやなかったのか？自分から禁忌を破るつもりなのか？息子さんが悲しむぞ？」

再び問いかけるベルセルク。対する二人は、それぞれの誓いを口にした。

「私達は、あの子の未来を守らなければいけない。」

「そのためなら、どんな禁忌だろうと手を出す！それが親だ！！」
プレシアはフェイトに対してではなくアリシアに対してだが、確かに愛情を持っていた。だからこそ、あのような暴挙に出たのだ。そして、自分達も同じく、息子の光輝を愛している。それを守るためなら、どんな禁忌だろうと恐れはしない。守る方法がそれしかないのなら、迷うことなくそれを選ぶ。禁忌を犯したのだから、いずれ罰を受けるだろう。だが、それでも二人の決意は固かった。

そして、その決意のもと、二人は力を、記憶を呼び覚ます。

最後に、ベルセルクは角から周囲へ電撃を放ち、ファザーとマザーを吹き飛ばす。ベルセルクメモリが最高傑作と言われるだけあって、パワーはファザーとマザーを上回っていた。バラバラに挑んでは勝ち目がない。

「優子！」

「ええ！」

二人は一言で互いの意思を伝え合い、今度は同時にベルセルクを攻撃する。手数が多くなり、反撃もできぬままベルセルクは追い詰められていく。ファザーとマザーは同時にベルセルクを殴り飛ばし、決着を着けるべくメモリを右腰のマキシマムスロットに装填した。

FATHER・MAXIMUM DRIVE!
MOTHER・MAXIMUM DRIVE!

二人は跳躍し、

「だあっ!!！」

ファザーは飛び蹴り、ファザーキックを、

「やあっ!!！」

マザーも同じく飛び蹴り、マザーキックを、ベルセルクに向けて同時に叩き込んだ。

「グアアアアアアアアア!!!」

ベルセルクはメモリブレイクされ、芝浦に戻った。ブレイクされたメモリを見ながら、

「俺の…夢が…」

芝浦は気絶する。

「…お前の夢は、夢と呼ぶ価値すらない。」

「力の使い方さえ間違えなければ、こんなことには、ならなかったのに…」

夢破れたかつての友人を見て、ファザーとマザーは変身を解きながら悲しげに呟いた。

その時、

「父さん！母さん！」

光輝が現れ、二人に駆け寄ってきた。

「光輝！」

「どうして!?!」

二人は驚く。光輝は二人が出かける姿を偶然目撃し、興味本位でついてきたのだ。

「凄かった！父さんと母さんはヒーローなんだ！」

「えっ……」

「ヒーロー……?」

息子からかけられた言葉に戸惑う二人。二人から見ればガイアメモリの力は間違った力。しかし、光輝にはその力を使って戦う二人の姿が、正義のヒーローに見えた。

「二人とも、ヒーローになってこの街を守ってたんだね! 凄い! 力ツコいいよ!」

まさしく子供のようにはしゃぐ光輝を見て、二人は決意した。

どうせなら光輝だけでなく、この街に生きる全ての人々を守る、本当のヒーローになろう、と。

「はっはっはっ……」

部下を使って白宮親子を監視していた琉兵衛は、嬉しそうに笑う。

「やはり私の狙い通りに動いてくれたね。」

琉兵衛が隼人と優子の退社を許したのは、わざとだった。優子がフアザーメモリとマザーメモリを回収している姿を、見てしまったからである。二人に変身して戦ってもらい、そのデータを元にしてより強力なガイアメモリを開発することが、琉兵衛の狙いだっただ。実験として無理強いすることもできたのだが、それでは自害される可能性がある。しかし退社してもらえば、自分の計画に気付かれることもない。

「ではまず、芝浦君の夢を叶えてあげるとするか。」

ベルセルクメモリのデータのバックアップは既に取っており、あとはそれを再現するだけ。今回の戦闘データを使えば、さらに強力に改良することもできる。

そして今から数年後、改良と研究が成功したベルセルクメモリは、自身の運命を狂わされたとある男性の手によって、奪われることになるのだった。

見るべき過去を全て見た光輝とフェイトは、現代に戻ってきた。が、戻って早々に、光輝は泣き崩れる。

「父さんと母さんが…あんなにつらい覚悟をしてたなんて…!!」
光輝がクロスになった理由は、琉兵衛に殺された二人の復讐だ。しかし、隼人と優子は、もっと重い決意で変身していたのである。光輝は自分の浅はかさを恥じた。だが、フェイトは光輝を慰める。

「でも、復讐はもう終わったじゃない。それに、お母さんが言っていたでしょ？力の使い方さえ間違えなければ、って。光輝は間違っていない。もし間違ったとしても、私が元の道に連れ戻す。だから、大丈夫。」

「フェイト…ありがとう…。」
光輝は涙をぬぐった。フェイトだけではない。今の光輝には、信頼できる仲間がたくさんいる。もし彼が道を誤ったとしても、必ず仲間達が救ってくれるだろう。

と、

「光輝くん！フェイトちゃん！」

なのはとはやてがやってきた。

「なのはさん！はやてさん！」

「二人とも、どうしたの？」

「急に変な光が見えたから…。」

「…それ、ガイアメモリ？」

はやては光輝が持っているリターンメモリに気付いた。

「うん。これはリターンメモリっていうメモリで、過去に行けるんだ。」

「そんなメモリがあるんやなあ…。」

はやては少し驚いていた。光輝もこんな特殊タイプのメモリを見るのは初めてである。

その時、

「光輝君！！」

突然光輝の親友、ドナルドが現れた。

「ドナルド？」

普段は軽めでどこかふざけた感じのドナルドだが、今回のドナルド

はそういった感じが全くなく、切羽詰まった表情をしていた。

「どうしたの？」

「そのメモリを壊すんだ！！」

「えっ？」

突然現れてわけのわからないことを言うドナルドに対して首を傾げる光輝。

次の瞬間、リターンメモリが何の前触れもなく発光を始めた。

「うわっ！！」

思わずリターンメモリを投げ捨てる光輝。リターンメモリはそのまま空中へと浮かんで停止し、さらに光を強めていく。

一体何が起ころうとしているのか。

それを語る前に、もう一つ物語を話すとしよう。

エインズの世界の物語を。

白宮隼人 イメージCV石田彰

光輝の父。優れた頭脳と身体能力を持つ天才で、世界中の科学者からその名を知られるほどの功績を上げた結果、ミュージアムに引き抜かれた。人類の進化に関する研究の一環として、ガイアメモリに興味を持っている。

白宮優子 イメージCV生天目仁美

光輝の母。隼人と同じく天才だが、隼人以上に芯の強い、理想のママ。隼人とは学生結婚し、隼人同時にミュージアムに引き抜かれた。隼人と光輝を何よりも大切に思っており、守るためなら死ぬことさえいとわない。

芝浦阿酉^{しほし} イメージCV岩田光男

ミュージアムの科学者。隼人達とは友人関係であり、自分の頭脳で産み出せる最強のガイアメモリを開発するのが夢。

仮面ライダーファザー

隼人がファザーメモリとロストドライバーを使って変身したライダー。格闘能力と剣撃戦闘力が高く、接近戦を得意としている。

必殺技は、ファザーキック。

パンチ力 10 t

キック力 16 t

ジャンプ力 ひと飛び90 m

走力 100 mを3.5秒

ファザーキック 70 t

仮面ライダーマザー

優子がマザーメモリとロストドライバーを使って変身したライダー。
基本的には銃撃戦が得意だが、接近戦の能力も高い。

必殺技は、マザーキック。

パンチ力 9 t

キック力 15 t

ジャンプ力 ひと飛び85 m

走力 100 mを3.7秒

マザーキック 68 t

ベルセルク・ドーパント

芝浦がベルセルクメモリを使って変身したドーパント。芝浦が作っ

たベルセルクメモリは試作品であり、影斗が使っていたのは改良型。本来所持していた炎、風、雷を操る能力はベルセルクの基本パワーに変換され、それをバーニングメモリ、ライトニングメモリ、ストームメモリで互換するという形を取るようになった。

ファザーメモリ

『父親の記憶』を宿したガイアメモリ。格闘能力と剣撃戦闘力を高める効果がある。

マザーメモリ

『母親の記憶』を宿したガイアメモリ。銃撃戦能力を高める効果がある。

次回はエンズ編です。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 前編（前書き）

エンス編です。お楽しみください。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 前編

河原。

いつもの鍛練に来ていた皇魔は、ゆっくり目を閉じて力を解放する。

周囲に満ち溢れる闇の力。これでも本来の力には遠く及ばないが、セルメダルを集める前に比べたら大違いだ。

(これだけ回復していれば、いけるかもしれんな…)
とある実験を行うべく、さらに力を解放していく皇魔。

その時、

「皇魔！」

レスティーが現れた。

「何の用だ。」

力の解放を続けながら、皇魔は尋ねる。

「何の用だ、じゃないわよ。もう登校の時間なんだけど？」

「…ちっ」

舌打ちしてから力の解放を中止した皇魔は、レスティーとともに帰っていく。

ロストグラウンド学園では三年生の卒業が近付き、二年生は卒業式の準備をする手筈となっている。

「だからなぜ余がこのような真似を…」

A組の生徒達も例外ではなく、今は体育館の掃除中。掃除を手伝わされている皇魔は、自分があまりにも皇帝らしくないことをしているのに落胆していた。

「とかなんとか言いながら、結局手伝ってくれるんだよな。」

「やっぱり根は真面目なんだね。」

同じく体育館掃除を手伝う日向とスザクは、皇魔を賞賛した。

「屈辱だ。」

しかし、皇魔はそう感じてしまう。以前にも記述したと思うが、彼は基本的に自分以外の存在全てを格下と見ている。皇魔にとって格上の存在である自分が格下の連中に認められるなどというのは、屈辱でしかないのだ。

「そんな顔をするな。ボランティアだと思って取り組めばいい」

今皇魔に話しかけてきたのは、皇魔と同じ、悪から転生した転生者の月影しおん。しかし彼女の場合、悪の心が完全に煮沸されてはいるが、皇魔の場合はそうではない。何せ、死ぬ時の心情が全く違うのだ。しおんは父に認めてもらいたいという悲願が達成されてから死亡したが、皇魔は光への恨みを残したまま死んでしまった。しおんは全てが変わったが、皇魔は全く変わっていないのである。

「そうそう。それに、誰かから頼られるのって楽しいわよ？」

よって、超能力を使って飾り付けなどを手伝っているレスティーを見て、

「余は貴様らほど能天気にはなれん。」
という有り様なのだ。

皇魔は考える。

エインズが全てを終わらせるものだというのがなら、こんなくたらない
日常を終わらせることもできるのだろうか？ だっ たら今すぐにでも
終わらせて欲しい。

こんな世界で生きるのは、もうまっぴらごめんだ。と

卒業式まで偶然土日の休みが重なった。これを機に研究を進めよう
と決意した海馬は、インテグラやウォルター、さらに科学者達の手
を借りて、対デザイアの研究を新たなる段階へと昇華させようとし
ていた。インテグラは研究のテーマを言う。

「メダルを利用したヒューマノイドを作成し、エンズとブーツのサポートをさせる。この実験が成功すれば、大きな戦力アップが計れます。」

今回の実験は、メダルを使ってヒューマノイド、すなわち疑似デザイアを産み出し、エンズとブーツのサポートに当たらせるといふもの。まずはセルメダルでヒューマノイドの基本となる肉体を構成し、次に新たに作成したコアメダルを注入して思考を作成する。

「では、始めてください。」

ウォルターが科学者達に命じ、装置の中に必要な量のセルメダルを投入させる。数分後、肉体の構成が終了した。あとはコアメダルを投入し、思考を作成するだけだ。投入するコアメダルは、今回の実験専用に製造されたニクタイコアメダル、セイシンコアメダル、エネルギーコアメダルの三枚。ニクタイコアで肉体を安定させ、セイシンコアで思考を構成し、エネルギーコアで活動と戦闘に必要なエネルギーを生み出す。

そして、科学者の一人が今、装置に三枚のコアメダルを投入した。

「支障はないな？」

「はい。セルメダル、コアメダル、ともに安定しています。」

「よし。実験は成功だ」

科学者の一人に確認を取り、満足そうに頷く海馬。完成したヒューマノイドは、しばらく装置に入れたまま調整を行う。装置の構造上中のヒューマノイドの容姿を見ることはできないが、コンピュータの方で全身の状態をしっかりと把握できているので、何の問題もない。これが完成すれば、エンズとブーツの大幅な戦力増強ができる。

そう思っていた時だった。

何も無い空間が突然ひび割れ、中から黒いエネルギーが飛び出してきたのは。

「何!?!」

全く予想できなかった事態に驚く海馬。エネルギーはそのままヒューマノイドを収容してある装置をすり抜けて、ヒューマノイドに宿った。

「社長! ヒューマノイドに異常が発生しました! これは…コアメダルの一枚が変化していきます!」
コンピューターでヒューマノイドの状態を監視していた科学者の一

人が、異常を告げる。変化を始めたのは、エネルギーコア。やがてコアの性質は完全に変わり、コンピュータ上におけるコアの表示が、マイナスエネルギーコアへと変化する。と、ヒューマノイドが装置を破壊して飛び出してきた。その姿は何かの昆虫を彷彿とさせ、さらに右手が鎌になっているという、当初とは全く異なるものに変化している。

「ふははははは！！！！」

ヒューマノイドは笑いながら、研究室から逃げていく。

「何をしている！捕縛しろ！ウォルターはアーカードに連絡を！」

「はっ！」

状況にいち早く対応したインテグラは、周囲の人間に命令する。一方海馬は、ヒューマノイドの憑依したと思われる謎のエネルギーが現れた空間を見ていた。今はもう空間は修復されているが、こんなことは初めてだ。

「一体…何が起ころうとしている…！？」

皇魔はレスティーと一緒に街を歩いていた。目的は、無論デザインの捜索である。そこへ、

「皇魔！」

音無、日向、直井、ゆりの四人が来た。

「デザイン、捜してるんだろ？」

「俺達も手伝うぜ。」

「僕に手伝ってもらえるんだ。感謝したまえ」

「かなでちゃんはいないけどね。」

デザイア搜索に協力を申し出る四人。ちなみにかなでがいないのは、生徒会の仕事があるからだ。しかし、

「帰れ。」

皇魔は四人を門前払いする。

「何でだよ！大人数でやった方が効率いいだろ！？」

日向は異議を申し立てるが、

「貴様らのような何の力もない雑魚の力をいくら借りたところで無駄だ。状況によっては邪魔にしかならん」

皇魔は考えを変えない。それを聞いてレスティーは、

「日向ちゃんと直井くんはともかく、音無くんはビーツになれるし、ゆりちゃんはアルター能力が使えるわ。この二人だけはあなたと対等なんじゃない？」

あまりフォローになっっていないフォローを入れる。

「あの程度の力で余と対等だと？笑い話にもならんわ！」

どうやら皇魔にとっては音無とゆりは対等ではないらしい。

「とにかく、余は貴様らと馴れ合うつもりはない。余の暗黒四天王ならまだしもな」

「暗黒四天王？何だそれは？」

聞き慣れない単語が飛び出し、直井が反応した。

「まだ貴様らには話していなかったな。」

皇魔は、暗黒四天王について説明する。

暗黒四天王とは、皇魔が転生する前に従っていた、四人の宇宙人のことだ。

冷凍星人グローザム、策謀宇宙人デスレム、悪質宇宙人メフィラス星人、そして異次元人ヤプール。いずれもが強大な力を持ち、皇魔の絶対支配を支えていた。

「少なくとも、あやつらほどの実力を身に付けねば、今の余と対等にはならん。」

「いや無理だろ!!」

「無理だから!!」

音無とゆりは否定した。

「情けない話だな。この程度にも合わせられんとは…」

「星間戦争レベルに話を広げるなよ。」

皇魔の発言にツッコミを入れる日向。と、直井はあることに気付く。「待て。貴様は弱体化しているのだろう?」ということは、今の貴様はその四天王にも劣るのではないか?」

「…そっぴやそうだな。」

力を取り戻しつつあるとはいえ、今の皇魔の力は本来の数万分の一。これでは確かに、暗黒四天王より下だろう。日向は納得した。

「貴様らの目にはそうとしか映らんか…ならば見せてやろう。」

言われて、皇魔は力を解放する。と、皇魔の目が一瞬青く輝き、全身が赤黒い炎に包まれた。

「皇魔!」

レスティーは突然の事態に驚く。

しかし、皇魔は何かの気配を感じて力の解放をやめ、全身の炎を消した。そして、自分に向かってくる何者かに向き直る。

やがて現れたのは、黒衣に身を包んだ男性だ。男性は皇魔に言う。

「この力…間違いないませぬ。捜しましたぞ、皇帝。」

言うてから、男性は皇魔の前にひざまずいた。

「…誰？皇魔くんの知り合い？」

いきなり現れたわけのわからない男性と皇魔を交互に見ながら、ゆりは皇魔に尋ねる。皇魔はそれを無視して、男性に言った。

「このマイナスエネルギー…貴様…ヤプールだな？」

その発言には全員が驚きを禁じ得なかった。何せ今目の前にいるこの男性の正体は、暗黒四天王の一人だというのだから。

「お久し振りでございます。私、突如として行方不明となられた皇帝を捜索し、お連れするべく参りました。」

「おお、そうか！」

さらに頭を下げるヤプール。皇魔もまさかヤプールが捜しに来るとは思っていなかったが、ヤプールは様々な異次元科学に精通している。その気になれば、いかに平行世界であるこの世界であっても、来ることができるだろう。

だが、皇魔にはわからないことがあった。

「貴様、どうやって復活したのだ？」
ヤプールは幾度となく行われたウルトラマンとの戦いに数回敗れ、滅ぼされた。しかし、ヤプールはウルトラマンへの怨念によって蘇ることができ、その怨念がある限りは何度でも復活できるのだ。

そう、怨念があれば復活できる。

だが、皇魔が元々いた世界は、ウルトラマンが滅んだ世界。ウルトラマンがいなければ、ウルトラマンへの怨念が生まれにくい。恨む対象がいなければ、恨めないのだ。ウルトラマンが滅んだ時はちょうどヤプールがまだ復活していなかったこともあり、怨念がなくなってしまったヤプールは復活できず、そのまま完全に滅んでしまった。

しかし、ヤプールは確かに、皇魔の眼前に存在している。ヤプールはそのことについて説明した。

「それは、私が別の感情によって蘇ったからでございます。そしてその感情とは、あなたへの忠誠心。もう一度あなたに遣えたいと心から願った時、私は復活することができたのです。」

「…そうか…よくぞ戻ってきた。貴様こそ、まことの臣下よ。」
「ありがたき幸せ。」

あまりの忠誠心に感服する皇魔。

「さあ皇帝。今こそ、我々の世界へお戻りください。再び、あなた様の栄華を築き上げる時が来たのです！」

「うむ！」
ヤプールが手をかざすと空間がひび割れ、その奥には真っ赤な異次元空間が広がっていた。ここへ入れば帰れるのだろう。

「ちょっと待てよ！」

しかし、今まさに元の世界に帰還しようとする二人を、ひき止める者がいた。音無だ。

「本当に帰るのか！？お前…まだ力だつて完全に取り戻してないだろ！？」

「何！？お力が弱まっているのですか！？」

音無の言葉を聞いて、ヤプールは皇魔に訊いた。

「…うむ。かなりな」

「やはり…ですがご安心を。私の異次元科学の全てを使えば、皇帝のお力を回復できるだけでなく、さらなる強化もできましょう。」

「…苦勞をかけるな…」

「もったいなきお言葉でございます。」

「…やっぱり…帰るのか…？」

音無は信じられなかった。まさか皇魔との別れがこうも早く、また突然訪れるとは思ってもみなかったからだ。

「音無くん。」

ゆりは音無の目を見る。音無はそれだけで、ゆりが伝えようとしていることがわかった。ゆりは音無に、これは仕方ないことだと言おうとしているのだ。確かに皇魔は転生者であり、元々この世界の住人ではない。ならば、本来いた世界に帰るのは当然のこと。

「…そうだよな…引き止めちゃ…いけないよな…」

「去る者は追わず。神としてそれは当然のことだ」

日向と直井も理解する。レスティーは皇魔に言った。

「あなたが決めたことなら、私は止めない。元の世界に帰るのは、あなたが前々から望んでいたことだもの。だから………元気でね」

「…ふん。」

レスティーからの別れの言葉に、鼻を鳴らして返す皇魔。

「では、参りましょう。こちらです」
「うむ。」

ヤプールを先頭に、皇魔は次元の裂け目へ歩いていく。

しかし次の瞬間、皇魔はヤプールに向けてレゾリウム光線を放った。

「ぐわあああああああ!!!!」

ヤプールは次元の裂け目へ押し込まれ、裂け目は消える。

「皇魔!?!」

皇魔の行動が理解できない音無。対する皇魔は、無言。新たな裂け目はすぐに現れ、ヤプールが飛び出してくる。

「皇帝!何をなさるのです!?!」

「余が気付かんと思っておったか?貴様は余に忠誠を誓ってなどお

らん。」

「は!?!」

「貴様、別の感情によって蘇ったと言ったな? 貴様がいずれ余を倒し、宇宙を我が物にしようと考えておつたのは既に承知済み! ならば貴様の復活に手を貸したのは余への忠誠心ではなく、貴様の欲望だ!」

「…さすがにそこまで馬鹿ではない、か…」

皇魔の言ったことは、真実だった。ヤプールは皇魔に忠誠を違つてなどいない。どころか、隙あらば皇魔を倒し、代わりに自分が宇宙を支配しようと考えていた。ならヤプールが復活に利用した感情は、宇宙を手に入れようと願う欲望だと推測するのが妥当だ。

「その通り! 私は欲望によって復活した! 全ては貴様を倒すためだ!」

「やはりな…レスティー!」

「は、はい!」

ようやく事態を理解したレスティーは、ベルトとメダルを渡す。

「変身!」

クレアボヤンス! ヤリ! ホノオ! ク・ヤ・ホ クヤホク・ヤ・ホ

皇魔はエンズに変身し、メダジャベリンを構える。

「宇宙は私がもらう!」

ヤプールは一瞬自身を大量のセルメダルに分解し、昆虫のような本来の姿へと変身。右手の鎌を振りかざして、エンズに襲いかかったエンズはそれを巧みにいなして、メダジャベリンで迎撃する。

「皇魔!」

我に返つた音無もビーツドライバーを装着し、ヘンシンコアメダルを装填。

「変身!」

破壊光線を撃った。音無とゆりはダメージで身体が動かず、よけられない。

しかし、

二人に光線は当たらなかった。

なぜなら、

エンズが二人を庇ったからだ。

「ぐあっ!!」

自分の背中をヤプールに向け、二人を守ったエンズは崩れ落ちる。

「皇魔！」

「皇魔くん！」

エンズを支える二人。

「皇魔…どうして俺達を…」

音無にとつて、それはあまりにも衝撃的な光景だった。あの皇魔が、誰かを守るといふ行為から誰よりも遠い性格の皇魔が、身を挺して自分達を守ったのだ。

「黙れ…!!」

エンズは自分を支える二人の手を振り払い、ヤプールに突撃してメダジャベリンを振り下ろす。しかし、いかにかの皇帝とはいえ手負いの相手の攻撃など、ヤプールは容易く止められる。今のエンズの状態は、エンペラ星人を倒して新たな宇宙皇帝になるという欲望を

持つヤプールにとって、またとないチャンス。そしてその勝機を確実なものとするため、ヤプールは次の一手を打つことにした。

「今お前は何をした？」

「!？」

ヤプールはエンズに語りかける。

「他人を庇って仲間気取りか？そんなことをして何になる？お前を信じてくれる者など、誰もいないというのに…」

「黙れッ!!!」

エンズはメダジャベリンを振るが、ヤプールはそれをかわす。今の攻撃はかなり大振りだったので反撃もできたのだが、ヤプールは現在回避に重点を置いて戦っているため、下手な反撃はしない。いや、する必要がない。なぜならヤプールは、ずっと攻撃をしているからだ。

「そつだ。お前を信じる者など、誰もいない。それは、お前が誰も信じようとしなからだ。しかし、私はそれを責めているわけではない。お前が常に周囲を疑っていたからこそ、私の企みに気付くことができたのだから…」

読者の方はもう気付いておられるだろう。

「だが、お前が疑い続ける限り、誰もお前を信じはしない。それでもお前は疑うのだろうか？」

ヤプールの攻撃とは、

「仕方ないさ。いつか必ず、お前を裏切る者が現れる。」

勝機を確実なものにするための一手とは、

「お前は気丈に振る舞いながらも、ずっと怯えていたな？ 今度もきつと裏切られる。次はいつ裏切られるのか、と。お前の姿は何よりも滑稽だったぞ！」

「くっ…！」

エンズは仮面の下で苦い顔をした。ヤプールは手口が陰湿なことで知られていたが、まさかそれが自分にとってここまで効果のあるものだとは思っていなかったからだ。以前の自分ならこの程度の言葉攻め、笑い飛ばすことができていたはず。しかし、

（なぜだ…なぜ余は奴の言葉に、こうも心を揺さぶられる！？）

今の彼は、激しく動揺していた。

「なぜ自分がここまで動揺しているのか、と思っているだろう？」

「…！」

まるで心を読むかのようなヤプールの発言。

「それはお前が無意識のうち、この世界の住人達を信じていたからだ。そこへ私が、お前がかつて味わっていた苦痛を思い出させた。今のお前は疑念に駆られ始めている。また裏切られるのではないかと。」

「う…！」

エンズは言葉に詰まる。確かに、そうかもしれない。音無やゆり達と様々な事件に巻き込まれ、それを解決し、戦い抜いていく中で、いつの間にかよくわからない感情が生まれていた。思えば、それは恐らく彼らとの絆。団結して立ち向かうという、仲間意識。しかし、もしそれを裏切られるとしたら？ 今ある絆が、偽りのものだとしたら？ 裏切られる可能性は、ないとは言えない。今の自分の肉体が地球人のものとはいえ、心はエンペラ星人のまま。どちらもの性質を持つ自分は、一体どっちの存在なのか。それは自分でもわからないが、とにかく異質な存在だというのは確実だ。前にセフィロスに向かって、お前はお前と言ったが、皇魔の場合は自分で自分がわからなくなっている。自分という存在が信じられないのだ。そんな存在を、一体誰が信じてくれるだろう？ かつてと同じように、彼は何も

信じられなくなっていた。いや、自分すら信じられないのだ。前よりもっと悪い。

「皇魔！そんなやつ言葉に耳を貸しちゃ駄目！！」
「ヤプールの意図に気付いたレスティーが叫ぶが、

「無駄だ、お前は裏切られる。必ずな」

ヤプールの言葉を聞いて、エンズはかつて倒した敵の言っていた言葉を思い出してしまう。レスティーは自分が快楽を得るために、多くの国を滅ぼしてきた。彼女の口車に乗った者の運命は、破滅だということとは、自分は利用されているだけで、いつか裏切られるということ。

（余は…余は…）

もはや協力者も信じられなくなり、完全に疑念に駆られてしまったエンズ。

（…頃合いだな）

そんな彼の隙を、ヤプールは見逃さなかった。素早く接近し、
「っ！！しまっ」

「ハアッ！！」

反応が遅れたエンズを斬る。

「ぐわっ！！」

「お前は誰も信じられないまま、永遠に他者に怯え続ける！！」
そのまま連続斬りで畳み掛け、

「孤独の中で！！」

蹴り飛ばし、

「死に絶えるのだ！！」

破壊光線を放つ。

「ぬああああああああああああ！！！！」
遂にエンズは変身を解除され、倒れた。

「「皇魔！！」」

「皇魔くん！！」

「「！！！！」」

倒れた彼の名を呼ぶレスティー、音無、ゆり、日向、直井。

「さあ、死ね！」

ヤプールは皇魔にとどめを刺すべく、近寄っていく。

その時、

「ドラモンキラー!!!」

デジモン形態のブラックが現れ、ドラモンキラーでヤプールの弾き飛ばした。

「ぐっ！邪魔を……」

「衝撃のおおお……!!!」

「!!!」

「ファーストブリットオオオ!!!」

さらにカズマが割り込み、シエルブリットでヤプールの殴り飛ばす。

「絶影!!!」

その先にいた劉鳳が、絶影の烈迅でさらにヤプールの弾く。

「おのれ……」

立ち上がるうとするヤプールだが、アーカードまでが現れて、ヤプールの銃撃する。

「無事かお前達!!!」

次に来たのは、ダークプリキュアとブルーアイズを召喚した海馬。それからクラウドとザックス。

「大変なんだ！皇魔が!!!」

「よし、運ぶぞ!!!」

「ああ！」

音無に言われ、クラウドとザックスは皇魔に肩を貸す。

「逃がさんぞ！」

アーカードの弾幕を抜けようとするヤプール。しかし、

「プリキュア！ダークフォルテウェーブ！」

「滅びのバーストストリーム！」

「がああああ！！！」

ダークプリキュアのエネルギー弾とブルーアイズの光線を喰らい、吹き飛ばされる。音無達はその隙に離脱した。

遅れて連絡を受けたかなでが合流し、海馬は自分とアーカードがヒューマノイドを追ってきたことと途中でカズマ達に会ったことを、音無達はヤプールのことを互いに話しながら、レスティーが持っていたポーシヨンで皇魔を回復させていた。

「触れるな！！！」

回復して早々、音無達を遠ざける皇魔。

「貴様らもいずれ、余を裏切るのだろう！？ならば近付くな！余は貴様らと馴れ合うつもりはない！！！」

皇魔は完全に人間不信に陥っていた。

「…あれだけのこと言われたんだから、当然だよな…」

日向は悲しそうにうつむく。すると、

「海馬。お前、ヤプールの居場所がわかるんだよな？」

音無が海馬に訊いた。

「ああ。ヒューマノイドに組み込んだコアメダルは、他のコアメダルにはない特殊な波長を出すようにしてある。それをこれで辿れば……」
海馬はヤプールのコアが発している波長をキャッチするためのレーダーを出す。

「それ、貸してくれないか？あいつを見つけるにはいいりそうだから。」
「……」
「待つてください音無さん！まさかヤプールを倒すつもりですか！？」

直井は音無の正気を疑った。今負けたばかりなのに、音無は再びヤプールに挑もうとしているのである。

「倒せるかどうかはわからない。だが……」

音無は皇魔を見た。

「皇魔をあそこまで馬鹿にしたあいつを、俺は許せない。」

音無にとって皇魔は憧れの的。皇魔の傲慢なプライドさえ、彼は認めている。それをズタズタに傷付け、あまつさえ肉体までもボロボロにしたヤプールを、音無は許すことができなかった。

「なら、あたしも行くわ。」

進み出たのは、かなで。

「二人で挑めば、勝率も上がるはず。」

「二人より三人よ。借りは返さなくちゃね」

ゆりまでもが拳手をする。

「二人とも、すまない。みんなはここにいてくれ」

音無は残ったメンバーに皇魔の面倒を見るように言うと、海馬からリーダーを受け取り、ゆりとかなでを連れてヤプールを倒しに行った。アーカードは皇魔に尋ねる。

「お前は行かないのか？」

「……余計な世話だ。」

「……こりゃ相当な重症だな……」

ザックスは苦い顔をして頭を掻いていた。

「…どうやら、話すなら今みたいね。」

唐突に言葉を発したレスティー。

「何をだ？」

「先代のエンズのことよ。」

クラウドの問いに返されたのは、思いがけない答えだった。

「確かに気になる話ではあるが、それは今すべき話か？」

変身を解除して元に戻っているしおんは、今の状況と全く関係ない話をしようとしているレスティーに自重するよう言っが、

「今すべきだから話すのよ。」

「どうやら必要な話らしい。」

「実はね皇魔。先代のエンズもあなたと同じで、転生者だったの。」

多分、あなたも知っている人よ。」

「…？」

わずかに反応する皇魔。そしてレスティーは、先代のエンズの正体を言う。

「変身者の名前は、ケン。彼の本名にして、転生前の名前は、ウルトラマンケン。」

「…!」

これには皇魔も驚愕を禁じ得なかった。

ウルトラマンケン。それは皇魔の心に最も強く残っているウルトラマンであり、正史におけるウルトラの父である。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 前編（後書き）

後編に続きます。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 後編（前書き）

後編です。ちなみに、今回は近いうちにまたやろうと思っている長編の伏線も張っております。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 後編

「…良くないフォースを感じる。この苦痛と嘆きのフォースは、あの皇魔という生徒のものじゃ。」

ロストグラウンド学園校長室で、緑色の小さな生命体が言った。この生き物こそがヨードであり、ロストグラウンド学園の校長だ。

「あれは一度闇に落ちた魂です。ガラスのように脆く、また壊れやすい。きっかけ次第では、すぐ闇に戻ってしまいますよ。」

側で言葉を継いだ黒いスーツの男性は、ルシフェル。こちらはロストグラウンド学園の教頭である。

その二人のもとへ、白い服を着て眼鏡をかけた老人が訪ねてきた。この老人こそ、理事長のカーネル・サンダースである。

「神であるあなたなら、どうすればいいかわかると思いますが…」
ルシフェルはカーネルを神と呼んだ。それもそのはず。カーネルとは仮の姿であり、真の姿は混沌を司る神、カオスなのだから。カーネルは笑みを浮かべながら言う。

「我々が手を下す必要はない。既に、彼を光へ戻そうとする意思が動いている。」

「ならば良いがの。」

「あなたがそう言うなら、私はそれに従う。神は絶対ですからね」
カーネルの言葉を聞いて、ヨードとルシフェルは従った。

皇魔を取り逃がしたヤプールは、己の力を強化すべく、人間を襲って欲望を吸い取り、セルメダルを増やしていた。建物などを欲望のエネルギーに変換して、それを吸収することでもセルメダルを増やす。

「今度こそ…始末する…」

もうヤプールの体内のセルメダルは、かなりのものになっている。

「そうはさせない！」

音無達は、そんなヤプールの前に立ちはだかった。

「またお前達か。わざわざ殺されに来るとは」

かなでは音無とゆりに訊く。

「結弦、ゆり。あれがヤプール？」

「ああ、そうだ。」

「皇魔くんを散々馬鹿にして傷付けた最低なやつよ。」

「…」

説明を受けて、かなでは皇魔のことを考える。

皇魔から自分が転生者であると聞いた彼女は、以前の自分と同じだと思った。彼女は研究所からセフィロスに助け出され、それから彼の娘になったわけだが、その間、誰を頼ったらいいか、誰を信じたらいいかわからず、とても不安だったのを覚えている。皇魔も転生によって突然わけのわからない世界に放り込まれ、きっと不安だったに違いない。かなではセフィロスに自分が味わった不安を話してみたところ、それは恥じるべきことではないと言われた。つまり、当然のことなのだ。にも関わらず、ヤプールはそれを滑稽だったと馬鹿にした。といっても音無達から聞いただけなのだが、それでもヤプールがやったことに対し、かなでは珍しく憤りを感じている。

「ガードスキル・ハンドソニック」

ハンドソニックを出現させ、構えるかなで。

「あなたがやったことは、許されることじゃないわ。」

「許す必要なんてないわよかなでちゃん。」

「こいつは、倒さなくちゃいけない。」

同じようにサイレントアサシンを発現させるゆりと、ベルトを装着する音無。

「面白い。返り討ちにしてやる！」

ヤプールはゆつくりと自分の鎌を撫で上げ、

「変身！」

M u s i c S t a r t !

音無はそれを合図に変身。ビーツブレイザーを発砲しながら突撃していき、ゆりとかなでもそれに続く。

エンペラ星人は、始めからあのような姿をしていたわけではない。最初はウルトラマン達と同様に、地球人と全く変わらない姿だった。それが太陽の輝きを失い、光への憎悪と闇の力を持ったがゆえに、あの姿となったのだ。ウルトラマンが光を得て進化した超人なら、エンペラ星人は闇を得て進化した超人なのである。

エンペラ星人皇魔は、光への復讐と全宇宙征服の足掛かりとして、

かつて数万年もの間宇宙を支配していた全知全能の存在、レイブラッド星人に目をつけた。ありとあらゆる怪獣や宇宙人を操れるレイブラッド星人は、今でこそ肉体を失って精神体となっているが、それでも凄まじい力を持つ。皇魔はそのレイブラッド星人を吸収し、強制融合しようと考えたのだ。通常怪獣達を操れるのはレイブラッド星人と、その遺伝子を受け継いだレイオニクスと呼ばれる存在だけだが、レイブラッド星人自体を吸収すれば、レイオニクスではない皇魔でも、怪獣達を操れるようになる。また、基本的な戦闘力も数倍以上に強化されるのだ。

予定通りレイブラッド星人を吸収した皇魔は、自分の目的を果たす上で最大の障害となる、光の国の壊滅を計画した。光の国はウルトラマン達の故郷であり、彼らが開発した人工太陽、プラズマスパークエネルギーコアが安置されている惑星でもある。ウルトラマンの中でも特に危険で強力なウルトラマンキングと、ウルトラマンノアを計略によって撃破した皇魔は、破竹の勢いで進撃を続け、遂にウルトラマンを殲滅。プラズマスパークエネルギーコアの破壊にも成功した。

その光の国へ進撃した際、皇魔に一騎打ちを挑んできたウルトラマ

ンがいる。それが、ウルトラマンケンだ。

正史においてウルトラ大戦争と呼ばれるこの戦いは、本来なら超闘士として覚醒したケンが、エンペラ星人を撃退することによって終結するのだが、先に記したエンペラ星人とレイブラッド星人の融合は正史に存在せぬこの世界だけの出来事であり、またケンが超闘士に覚醒する直前、その力の強大さを察知した皇魔が、覚醒直前の段階でケンを倒してしまったため、ウルトラマン達は士気と勢いを増した皇魔軍に敗れたのだ。

この二つさえ起きなければ、ウルトラマンが負けることはなかっただろう。

しかし、どういうわけかケンは500年前のオースの世界に転生し、エンスとして戦い、ここをエンスの世界にした。

「不完全な覚醒をした無限の使徒っていう存在に転生させてもらっただって。無限の使徒の方は、転生させた影響で死んじゃったらしいけど」

これが、レスティーから語られた、ケンの転生理由だ。

「まるで正義感の塊みたいなやつだったわ。デザイアを完全に悪だつて割りきって…私も殺されかけた。」

ケンは皇魔ほど弱体化してはならず、生身でもデザイアと渡り合える強さを持っていた。油断していたレスティーは危うく倒されかけたが、必死に命乞いをした結果助けられ、それ以来ケンの旅に同行することに。

他のデザイアとの戦いを続ける間、レスティーはセルメダルでケンの力を回復できることを発見した。皇魔に会った時回復法をすぐ教えられたのも、この前例があったからである。

「…それで、貴様は何が言いたい？」

この手の昔話を長々と聞くのが嫌いな皇魔は、レスティーが伝えたいことを訊く。

「…デザイアを信仰している人間もいてね。旅をしている間、そう

いった連中からも命を狙われ続けたわ。でもね、それでもケンは二度目の死を迎える瞬間まで、戦い抜くことができたの。何でかわかる？」

ウルトラマンは基本的に地球人に協力的であり、そして地球人を愛している。そんな愛すべき存在から命を狙われれば、自分の道を疑問視し、投げ出したくもなるだろう。

だが、ケンは全てのデザイアを封印し、再び死ぬ時まで戦い続けることができた。その理由は…

「人の心の光を、そして、自分自身の光を信じ続けていたからよ。」

それを聞いた時、皇魔は電撃に打たれたような思いがした。信じていたものに裏切られてなお、ケンは信じた。だが、自分はもうどうだろ

うか？そこまで信じたことができたのか？いや、疑心暗鬼に陥り、信じることをやめてしまった。しかし、ケン^ケンは信じたのだ。

それを聞いて、日向は皇魔に尋ねる。

「どうして音無が、お前のためにあそこまで怒ったと思う？お前を信じてるからだよ。」

「…余を…信じている？奴は…余を信じているのか…？」

「…あいつから聞いた話なんだが、お前はあいつを不良から守ったらしいじゃねえか。その時から信じているんだとよ」

皇魔は思い出す。そういえば、以前自分の通行を邪魔していた不良^コを片付けたような気がする。

(その時近くに音無がいたような…)

どうやら、皇魔にとってはさほど重要な行為ではなかったらしい。

「それにな、音無だけじゃなくて、俺もお前を信じてる。ゆりっぺやかなでちゃんもな」

「音無さんほどじゃないが、貴様も十分信頼には値する。」

「俺達も信じてるんだぜ？な、クラウド！」

「ああ。」

「ククク…まあそういうことだ。」

「信じてるに決まってるだろ？」

「お前なら、な。」

音無や日向、ゆりやかなでだけではない。直井も、ザックスも、クラウドも、アーカードも、カズマも、劉鳳も、しおんも、海馬も、ブラックも、それからレスティーも。この場にいる全員が、皇魔を信じている。しおんは皇魔に言った。

「お前の中には、孤独という闇が存在する。」

「…」

皇魔は頷き、肯定する。しおんは続けた。

「その闇を否定しろ。お前はもう、一人じゃない。」

「それから、次はお前が俺達を信じる番だ。」

「……」
皇魔は思う。確かに、彼らは自分を信じているからこそ、こうして語りかけてくるのだろう。ならば、こちらも信じるべきだ。けれど、今までの後ろめたさから素直になれず、

「……少しだけ、信じてみたくなった。」

と答えておいた。だが、彼らにはその答え方で十分である。

「次に何をすべきか、今の貴様ならわかるな？」

海馬から訊かれ、今度は力強く頷く皇魔。

次に何をすべきか。孤独という闇を振り切った皇魔には、あまりにもわかりきった問答であった。

「ぐあつ!!」

ヤプールに殴り飛ばされるビーツ。ゆりとかなでも満身創痍だ。

「もう終わりか？」

「まだだ！」

「まだよ！」

「まだ…あたし達は…！」

ビーツ、ゆり、かなでは、ボロボロながらも勇ましく言い返す。

「ならば、これで終わりにしてやろう。」

鎌にエネルギーを集中し、

「死ね！」

突き出すヤプール。

しかし、光線を放つ前に衝撃波がヤプールを吹き飛ばした。

「ぐわあつ!!」

完全に油断していたヤプールは、本来なら耐えきれぬ一撃に耐えられず、地を転がる。ビーツ達には、その一撃を放ったのが誰か、わかっていた。

「そこまでにしておけ、ヤプール。」

その本人、皇魔は、心強い味方を何人も連れてやってきた。

「皇魔！」

「あんた達まで！」

「みんな…来てくれたのね…」

ようやく安堵する三人。

「ぐっ…まだくだらない友情ごっこをするつもりか！そんなことをしても、いずれ裏切られるだけだ！無駄だということがまだわからないらしいな！」

ヤプールは起き上がって再び言葉攻めを始める。だが、

「残念だったな。もはや貴様の言葉には惑わされんぞ」

「何！？」

今の皇魔に、ヤプールの邪悪な囁きは通用しなかった。

「今の余には、余を信じて戦ってくれる者達がいる。ならば、余はそれに応えなければならん！」

「利用されているだけだ！！」

「何とでも言え！それでも余は信じる！例え裏切られようと、信じ抜く！最期まで！！」

「うぐう！？」

皇魔の固い覚悟を崩すことなど、もはやヤプールには不可能だ。

「レスティー！貴様のコンボを使う！」

「了解！」

レスティーはベルトと自分のメダルを渡す。

「そのケンカ、俺にも手伝わせるよ！」

「加勢するぞ皇魔！」

シエルブリットと絶影の第二形態を発動するカズマと劉鳳。

「俺も行くぜ！」

「手を貸す。」

バスターソードと合体剣を抜くザックスとクラウド。

「異論はないな？」

ココロパフォームを出すしおん。

「いらんとは言わせないぞ？」

「たまには暴れさせる。」

ドラモンキラーを構え、カスールとジャツカルを抜くアーカード。

「援護くらいはするぜ？」

「感謝するんだな。」

互いに銃を取る日向と直井。それらの光景を見て皇魔は、

「…好きにしろ。」

と、どこか嬉しそうに呟いてから、

「変身！」

！
クレアボヤンス！サイコキネシス！テレポート！ク〜レ〜イト〜

エンズ クレイトコンボに変身した。

「プリキュア！オーブンマイハート！」

しおんもダークプリキュアに変身し、これで完全に臨戦態勢が整う。

「舐めるなよ貴様ら！いくら数を揃えたところで、この私に勝てるはずゴバアツ！！」

ヤプールは、それ以上言葉を紡げなかった。ヤプールの目の前に瞬間移動したエンズが、ヤプールのみぞおちに拳を叩き込んだからだ。凄まじい速度で空中に打ち上げられるヤプール。15mほど飛んだあたりで、再び瞬間移動してきたエンズから踵落としを背中に喰らい、地面に激突。小さなクレーターができた。

「こ、こんなもので…ハッ!？」

今までセルメダルを貯めることで力と耐久力を上げたヤプールは、

あまりダメージを受けずに済んだ。しかし、起き上がった直後に気配を感じ、見てみるとそこにはダークプリキュアが。

「はあっ!!!」

「ごあっ!!!」

鞭のようにしなるキツクを顔面に受けて、吹っ飛ばされるヤプール。

「ドラモンファイヤーストーム!!!」

待ち受けていたブラックは、自分の周囲に巨大な炎の竜巻を発生させ、ヤプールの巻き込む。

「ぐわああああああ!!!」

全身を業火に焼かれて苦しむヤプールだが、

「まだ終わらねえぞおっ!!!」

カズマの予告通り、まだ終わりではない。

「シエルブリットバーストオオオッ!!!」

「ごがはあっ!!!」

ヤプールは全身に光を纏って突撃してきたカズマのシエルブリットバーストで、ドラモンファイヤーストームもろとも吹き飛ばされる。

CORE BURST!!

「チャクラムダンシングカット!!!」

「剛なる拳・伏龍!!!臥龍!!!」

「ぐぎゃああああああ!!!」

エネルギーを纏ったチャクラムと刃付きミサイルで、空中のヤプールの滅多切りにするビーツと劉鳳。クラウドはその間に跳躍し、合体剣に闘気を纏わせつつ、ヤプールに向かって振ると同時に合体剣を分離。分離させた複数の剣を、未だ空中にいるヤプールの周囲に配置する。クラウドは配置した剣を伝いながらヤプールの斬りつけ、「超究武神霸斬!!!ver.5!!!」

最後に落下しながら剣を振り降ろし、着地した。クラウドの周囲の地面に、分離した剣が落ちて突き刺さる。ヤプールも落ちてくるが、

「まだまだ!!」

今度は代わりにザックスが空中へ跳び、

「メテオショット!!」

バスターソードから大量の火炎弾を放つ。

「ぐがあああ!!」

この連続攻撃を防げず、ダメージを受けるヤプール。動きが鈍ったところへ、アーカードが接近。

「対デザイン用の特殊弾頭だ。零距离から味わってみるといい」
ジャッカルをぶっぱなした。

「ぎゃばっ!!」

今アーカードが撃った弾には、放つと同時にセルメダルの結合を不安定にさせ、さらにセルメダル自体を爆破するエネルギーが込められており、ヤプールは仰向けに転がる。

「行くわよかなでちゃん!」

「わかったわ。」

日向と直井の援護を受けながら駆け抜けるゆりとかかなでは、通り抜けざまにヤプールを斬る。これによって生まれたヤプールの隙に、

「滅びのバーストトリム!!!」

ブルーアイズを召喚して攻撃する海馬。

「ぬがああああああ!!!」

まさにフルボッコにされてしまったヤプール。だが、

「クッククッククツ」

彼には余裕があった。

「忘れたのか? 私は復活できるのだぞ? ここで貴様らに倒されようと、貴様らへの憎悪を糧に、何度でも蘇ってやるわ!!!」

ヤプールは復活ができるのだ。ここで倒しても、皇魔達への憎悪や宇宙支配への欲望から復活し、どこまでも食らいついてくるだろう。

「それはいい話を聞いた。」

しかし、ある者にならヤプールの復活を永遠に封じることができない。いつの間にかこの場に来ていたその存在に驚き、ヤプールは反射的に見た。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。貴様は、二度と蘇るな
! !」

いたのは、ギアスを発動したルルーシュ。ギアスの瞳を見てしまったヤプールには、『復活してはならない』という命令をくだされる。

これまで様々な方法で復活を封じられてきたヤプールは、そのいずれもを打ち破り、復活してきた。だが、ギアスによる命令は絶対。もうヤプールは復活できないのだ。

「でかしたぞルルーシュ!」

「今だ! 一気に倒せ!」

「うむ!」

ルルーシュからこの上ないサポートを受けたエンズは、ベルトをスキャン。

スキャンニングチャージ!!

「ぬん!!」

念動力でヤプールの動きを止め、

「でやああああああああ!!」

PSYキックを放つ。

「ぐわああああああああ!!」

不可避の一撃を食らったヤプールは爆炎を散らしながら地に落ちるが、それでもヤプールの討つには至っていない。どうやら、相当なパワーアップをしていたようだ。

「…復活を封じられたか…だが!!」

フラフラしながら立ち上がるヤプール。

「なら倒されなければいい！！簡単なことだ！！」

確かにそうなのだが、これだけの面子に揃われては絶望的である。

だが、今のヤプールの肉体は疑似デザイアのもの。セルメダルの自己増殖機能を備えている。

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

ヤプールはここに来て自分の欲望を増大させ、結果、セルメダルが爆発的な速度で増殖。今の肉体の大きさでは、その量のセルメダルを抱えきれず、抱えきるため、

「今の余なら二時間はもつか…」

謎の一言を発した。同時に、力を解放する皇魔。やがて彼の目が青く光り、皇魔は赤黒い炎を纏って駆け出す。

そして、

「でやあっ!!」
勢いよく跳躍し、皇魔の全身がさらに巨大な赤黒い炎に包まれ、炎が消えた時、

皇魔は、エンペラ星人となって着地していた。

皇魔は今まで力を回復し続けていたおかげで、二時間程度なら本来の姿に戻るようになっていたのだ。まあ力の回復が完全ではないため、本来の半分程度の力しか発揮できないが、

「何!？」

それでもヤプールを驚かせるには十分だった。

「あれが…皇魔の本来の姿…」

音無は、その規格外さに圧倒されている。これが、自分の目指す領域だと思い知った。皇魔は、ヤプールに言い放つ。

「終わりだヤプール。復活を封じられた以上、貴様に勝ち目はない。」

「ふん！私が何の準備もしていないと思っっているのか？」

ヤプールは一度片手を上げ、

「いでよ!！」

振り下ろす。すると、皇魔の周囲にある空間がひび割れ、中から異形の怪物達が現れた。

ヤプールは怪獣と様々なものを合成させることによって誕生する怪獣を超えた怪獣、超獣を生み出すことができる。皇魔を取り囲むように現れたものもそれだ。

一角超獣バキシム。蛾超獣ドラゴリー。ミサイル超獣ベロクロン。

満月超獣ルナチクス。四体もの超獣軍団である。

「私の異次元科学をもってすれば容易いこと。終わるのは貴様の方だ！」

勝ち誇るヤプール。しかし、

「…それがどうした？」

皇魔は余裕だ。それが気に食わないヤプールは、

「殺せッ！！！」

攻撃命令を下す。

超獣軍団はミサイルで、火炎弾で、光線で、皇魔を周囲から攻め立てた。ヤプール自身も、鎌から出る破壊光線で応戦する。

ドガガガガッ！！ズドーンズドーンズドーン！！ジュババババッ！！！！

皇魔は全身に攻撃を受け、起こった爆発に包まれて見えなくなった。

「皇魔ああああ！！！」

「何よこれ…一方的すぎるじゃない！！！」

音無は叫び、ゆりはついさっきまでヤプールをフルボッコにしていたとはいえ、改めて見た状況に嫌悪する。逃げられないように包囲され、一斉攻撃を食らっているのだ。

「すぐスパイダーマンに連絡を！」

「ああ！」

海馬は日向に、スパイダーマンを呼ぶよう命じる。スパイダーマンのレオパルドンが加われば、間違いなくこの状況を打開できるだろう。日向も急いで連絡を取ろうとするが、

「その必要はない。」

アーカードが止めた。

「どういってもりだアーカード！」

「皇魔くんを殺すつもり？」

劉鳳とかなでは、アーカードを非難する。だが、

「大丈夫だろ。」

「俺も同意見だ。」

カズマとブラツクは違った。

「正気が貴様ら？」

「明らかに大丈夫じゃないだろ！」

「さすがにまずいと思うが……」

直井、ザックス、クラウドは、アーカード達の感性を疑う。だが、

「いや、私も平気だと思う。」

「俺もだ。」

なんとダークプリキュアとルルーシュまでが、アーカード達と同じ考えだった。

「しおんさんまで……ルルーシュくんも……！」

呆れるゆりだったが、

「大丈夫よ。皇魔は大丈夫」

レスティーが落ち着ける。仕方ないので、アーカードが結論を言うことに。

「お前達は、あの男がこの程度の攻撃で死ぬと思うのか？」

煙の中から雄々しき姿を現した皇魔は、アーカードが言った通り、無事だった。どころか、無傷である。いかに弱体化したとはいえ、この程度の相手をねじ伏せるなど、皇魔には造作もないのだ。

「ば、馬鹿な！」

「今度はこちらの番だ。」

皇魔はまずベロクロンに向けてレゾリウム光線を発射し、消滅させる。その後向かってきたルナチクスは衝撃波で爆砕し、皇魔の両

ザックスが自分のポーションを出し、皇魔の口元に近付けた。

「飲めるか！？なんとか飲んでくれ！」

「う……」

皇魔はどうかかポーションを飲むが、まだ回復しない。

「俺のだけじゃ足りない！」

「俺のも使え。」

クラウドも自分のポーションを差し出し、皇魔はようやく意識を覚醒させた。

「…なぜだ？なぜ、余のために…？」

目覚めてすぐ、皇魔はザックスとクラウドに訊く。

「…お前が俺達の仲間だからだよ。」

「お前は俺達を信じてくれたからこそ、音無達を助けるために来た。そうだろう？なら、お前は俺達の仲間だ。」

「…仲間…そうか…余は仲間か…」

仲間。それは他者を信じられなかった皇魔にとって、転生前からずっと求めていた言葉。それを、彼はようやく自分に向けてもらうことができた。皇魔はそのことに喜びを感じながらも、しかし表には現さず、あくまで平静を装って立ち上がる。

「さて、もらうとするか。」

皇魔の目の前には、ヤプールを倒すことで残ったセルメダルの山があった。

「今回の件はこちらの不手際にも原因がある。謝罪の意味を込めて、このセルメダルは全て渡そう。」

「感謝するぞ海馬。」

皇魔はセルメダルの山を全てエネルギーに変換し、吸収する。

「これで五時間は本来の姿に戻るようになったな。」

予想以上に力を回復できた皇魔は、満足げに頷く。

だが、まだ終わってはいなかった。

すぐ近くから、三枚のコアメダルが発光しながら浮かび上がってきたからである。破壊されたと思われるいたヤプールのコアメダルは、皇魔の攻撃を受けた瞬間に本体から弾き出されていたため、破壊を免れたのだ。

「あれはヤプールのコアメダルか!？」

驚く皇魔の目の前で、コアメダルはどこかに飛んでいく。

「待て！」

「！」

追いかける皇魔とレスティー。音無達も追いかける。メダルは突如として現れた灰色のオーロラをくぐった。そして、オーロラは皇魔とレスティーがくぐると消えてしまい、音無達は二人を追いかけるれなくなってしまう。

「皇魔：レスティー……」

二人の身を案じる音無。

しかし、再会はすぐに訪れる。

その再会は、新たなる戦いの幕開けとなっていた……。

劇場版仮面ライダーエンス ヤプールの欲望 後編（後書き）

次回はいよいよ、超クロスオーバー大戦GENESISです。たぶんどてつもなく長くなるので、前後編に分けると思います。

では次回もお楽しみに。

超クロスオーバー大戦GENESIS 前編(前書き)

今回は前編です。

超クロスオーバー大戦GENESIS 前編

発光を続けるリターンメモリ。そのリターンメモリに向かって、どこからともなく出現した三枚のコアメダルが飛んでいく。

「あのメダルは!？」

驚く光輝の目の前で、コアメダルがリターンメモリの光の中に入った時、

メモリとメダルが消えて、青年が現れた。

青年は両肩が蛇の頭部となっている鎧を着ており、髪はショートカットの端正な顔立ちをしている。青年は光輝を見て言った。

「お前からアンリミテッドフォースを感じる。何で人間がその力を

使つてやがるんだ？」

「えっ…？」

「喋った…」

光輝は青年の言葉に息を呑み、フェイトは青年が言葉を発したことに驚く。

「まあいい。それよりも…」

青年は、ある人物を見た。その人物とは、なんとドナルド。

「俺がお前に封印されてどれくらい経つたのか知らないが、まさかまだ生きてたとはな。ドナルド」

「久しぶりだね、ウロボロス。本当なら二度と会いたくなかったけど」

「その名は捨てた。今の俺の名は、創世の使徒だ。」

創世の使徒と名乗った青年。その瞳には、明らかな憎しみの光が宿っている。

「俺が復活した。その意味はわかるな？」

ドナルドは答えない。創世の使徒が言っていることの意味がわかっており、またそれがどれだけ重大なことかわかっているからだ。

「そうだ。時は、来た！」

創世の使徒は高らかに宣言する。

「今こそ全ての次元世界を滅ぼし、この俺が支配するにふさわしい新世界を作り上げる！！」

「何だと！？」

突然現れてとんでもないことを言う創世の使徒。そのとんでもないことを今すぐやるといふ事実には、光輝は驚いた。

「まずは見せしめといくか…」

創世の使徒はフェイトの睨み付け、右手の人差し指から光線を撃つ。「！」

フェイトはそれに反応できない。だが、横から飛び出してきた皇魔に突き飛ばされたおかげで、光線を喰らわずに済んだ。

「ちっ、邪魔を…」

舌打ちする創世の使徒。

「怪我はないか？」

「は、はい……」

皇魔はフェイトに尋ね、フェイトは戸惑いながら答える。

「皇魔さん！？」

「貴様：その声はクロスか。」

AtoZ事件以来の再会を果たした光輝と皇魔。遅れてレスティーが来る。

「何？知り合い？」

「この男が余を転生させたクロスだ。」

「この子が……」

「……あの……どちら様で……？」

おずおずと訊く光輝。

「私はレスティー。皇魔のパートナーよ」

「レスティー。」

「本当のことでしょ？」

「……ふん。」

「僕は白宮光輝。クロスの変身者です」

二人は互いに名乗る。フェイト達は前から皇魔について聞かされていた。と、

「おい。お前らずいぶんと余裕だな？」

ずっと無視されていた創世の使徒は、額に青筋を浮かべている。怒りを隠そうともしない。

「別にいいけどさ、状況わかってんのか？俺が全次元世界を滅ぼす。

お前らは全員死ぬんだよ！」

創世の使徒の全身が発光を始める。一同は思わず身構えた。

「お前らと殺り合うつもりはないが、止めたかったら俺を追ってこいよ。」

創世の使徒は、いつの間にか空に現れていた黒い月に向かって飛んでいく。

「何だっただらう？」

「創世の使徒？また無限の使徒繋がり？」

なのはとはやては首を傾げる。と、光輝のクロスフォンに照山から電話が掛かってきた。

「照山？どうしたの？」

「光輝か！？すぐテメンニグル学園に来てくれ！いきなり学園の隣にもう一つの学園が現れて、ウチの生徒がその学園の生徒と一触即発状態でかなりヤバイことになってんだ！」

「もう一つの学園？わかった。すぐ行く」

光輝は電話を切る。フェイトは尋ねた。

「どうしたの？」

「テメンニグル学園の隣にもう一つ学園が現れて、大変なことになってるって……」

「……もう一つの学園？」

その言葉に何かを感じる皇魔。

「だから行かなきゃ。」

「……余も同行しよう。」

「皇魔さん？」

光輝は皇魔を見た。

「嫌な予感がする。もしかと思ってな」

「……わかりました。みんな、じっとしててね！飛ぶよ！」

一同は光輝の瞬間移動によって、テメンニグル学園へ。

「これは!？」

光輝は我が目を疑う。テメンニグル学園の隣には、照山から連絡があった通り、もう一つ学園が現れていた。

「やはり…」

しかし、そのもう一つの学園が何なのか、皇魔とレスティーは知っている。いや、知らないはずはない。

「どう見ても、ロストグラウンド学園…よね…？」

レスティーが呟いた通り、学園の正体はロストグラウンド学園だった。だが、ロストグラウンド学園がここにあるはずはない。その理由を、ドナルドだけは知っていた。

「創世の使徒が復活した影響で、二つの世界が融合したんだ。」
「どうやら、創世の使徒の仕業らしい。」

「そういえば、創世の使徒って何者なの？」

なのはは、結局聞く暇がなかった疑問を訊いてみる。

「…昔、ウロボロスっていう神がいた。死と新生を司る神で、神帝と同じく無限の象徴たる存在。でも…」

ドナルドはつらつらに語り始めた。

ウロボロスは同じ無限を象徴する存在でありながら、いつも注目されもてはやされている神帝に嫉妬していた。そこでウロボロスは、光を司る神と闇を司る神を倒してその力を吸収し、融合、新生させた。それがアンリミテッドフォースを超える力、ジェネシスフォースである。ウロボロスはそれを使って神帝に勝利したが、結局自分より神帝が優遇されるという状況に絶望し、創世の使徒を名乗って今ある次元世界全てを破壊しようとした。だが、創世の使徒は初代神帝の命を懸けた戦いに敗れて、封印されたという。

「それがあいつなのか…」

「だから、今回はドナルドのせいでもあるんだよ。ウロボロスを創世の使徒にしちゃったのも、復活を許したのも……」
創世の使徒は、万が一自分が封印された時を見越して、復活のための布石を打っておいた。それが、リターンメモリ。二回起動すると創世の使徒が復活する仕組みになっていたのだ。ドナルドはすぐそれに気付いて破壊しようとしたのだが、もう彼に力は残されておらず、そのまま死んでしまい、今の時代、今の姿に転生した。もちろん転生したあとすぐにリターンメモリを搜索したが、どこにあるかなどわかるはずもなく、現在に至るといっわけなのである。

と、

「おーいお前ら！」

照山が来た。

「こいつらを止めるの手伝ってくれ！バージルやアークライト会長だけじゃ、抑えきれねえんだ！」

血相を変えて焦っている照山。ちなみに彼らの眼前では……、

「おう何だてめえは！？」

「やんのかオラァ！」

「今日こそ覚悟しろダンテ！！」

「やめろって言うてんだろベオウルフ！！」

「貴様らいい加減にしろ！！」

「兄さん。今夜は外食にしないかい？」

「私も同席させてもらおう。そうだ、イーノック。お前も誘いたいが、今夜の予定は大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。一番いい店を頼む」

「いいですとも！」

とまあこんな具合に、メンチ切り合つてたりどさくさ紛れに気に入らないやつに喧嘩挑んだり全然関係ない話してたりで、恐ろしく力オスな光景が展開されていた。

「…大変だね。」

「だから手伝つてくれって！」

照山は再び人混みに飛び込んでいくが、光輝でさえ、もうどうしたらいいかわからない。困惑する光輝に、皇魔は言った。

「それより、創世の使徒を倒す方が先ではないか？」

確かに、創世の使徒は全次元世界を破壊しようとしている。放っておけば、どんな行為に出るか見当が付かない。

だが、

「どつやら始めたみたいだよ。」

ドナルドが告げた通り、少し遅かったようだ。

周囲に灰色のオーロラが出現し、中から様々な怪人達が溢れ出してきた。創世の使徒の仕業だ。

「もはや一刻の猶予もない。レスティー！もう一度貴様のコンボを使うぞ！」

「オツケー！」

「変身！」

クレアボヤンス！サイコキネシス！テレポート！クゥレゥイトゥ

皇魔は素早くエンズ クレイトコンボに変身。

「よし、じゃあ僕も…！」

CROSS！

「変身」

CROSS！

光輝もクロスに変身し、

ETERNAL！

INFINITY！

CROSS/ETERNAL/INFINITY！

UNLIMITED！

そのままクロスアンリミテッドに強化変身する。互いに変身を終え、創世の使徒がいる黒い月に向かって瞬間移動しようとする二人だが、

「光輝！私も行く！」

フェイトが同行を申し出てきた。

「フェイトはここでみんなを守りながら、僕達の帰りを待ってて。」

「でも！」

「大丈夫。ちゃんと戻ってくるから」

「…わかった。」

クロスのことを心配しながらも、その指示に従うフェイト。

一方エンズのもとへは、別れたはずの音無達が来ていた。

「皇魔！レスティー！」

「音無！なぜここに？」

「気が付いたらいたんだ。それより……」

音無は空を、そして黒い月を見る。

「…行くんだな？戦いに。」

「うむ。」

「だったら、お前の留守中は俺達に任せとけよ！」

「この僕がいるんだ。大船に乗ったつもりでいるといい」

「絶対に帰ってきなさいよね！」

「皇魔くんが帰る場所は、あたし達が命を懸けて守るから。」

「だから気にせず、派手なケンカをしてきな！」

「全力を出せ。」

「お前の力を見せてやるといい。」

「負けたら承知しないぞ？」

「やっと光への道を歩き始めたんだ。お前はまだ死ぬべきじゃない」

「…勝て。俺が言えるのはそれだけだ」

「頑張れ！」

「お前ならやれる。」

「生きて帰ってこい。」

日向、直井、ゆり、かなで、カズマ、劉鳳、アーカード、ブラック、しおん、クラウド、ザックス、ルルーシュ、海馬は、エンズを激励する。

「…余は必ず戻ってくる。」

エンズは帰還を約束したあと、

「レスティー。それまでの間、頼むぞ。」

「…ええ。」

レスティーに命じて、一足先に瞬間移動した。

「…やっぱり、あの人少し変わった。」
「えっ？」

「何でもない。じゃ、行ってくるね」
クロスも瞬間移動で追いかける。

「…私も…私にできることをやらなくちゃ。」
フェイトはロストドライバーを装着し、

FATE!

フェイトメモリを起動して、

「変身！」

FATE!

仮面ライダーフェイトに変身。さらにバルディッシュを起動させ、
ガイアモードに変形させる。

「私達も！」

「うん！」

なのはとはやても互いのデバイスを起動し、怪人軍団の迎撃に当たる。

「オイオイ…」

ダンテは呆れていた。今さっきまで争っていた両学園の生徒が、突然団結して怪人の撃破を始めたからだ。

「要するに似た者同士ってことかよ。」

「ダンテ。俺達も行くぞ！」

「あいよ。」

SLASH!

BLAST!

バージルとダンテはソウガドライバーを装着し、バージルはスラッシュメモリを、ダンテはブラストメモリを起動させて、
「変身」

互いのベルトに装填。さらに二人の腕を空中で重なるように交差させ、

SLASH/BLAST!

風都を守るもう一人のライダー、ソウガに変身する。

「俺も！」

音無もビーツドライバーを装着して、ヘンシンコアメダルを装填し、
「変身！」

Music Start!!

ビーツに変身した。

クスクシエと呼ばれる店の近く。映司は押し寄せる怪人を、単身で退けていた。

「くっ…何なんだこいつら!?!」

苦戦する映司。一瞬の隙を突かれ、背後を取られてしまう。

その時、

「ハッ！」

翔太郎が現れ、怪人を蹴り飛ばした。

「あなたは！」

「また世話になっちまうな、オーズ！」

翔太郎はWドライバーを装着し、

JOKER！

「行くぜ、相棒。」

ジョーカーメモリを起動して、フィリップに呼び掛ける。

風都署。

琉兵衛との面会に来ていたフィリップの腰に、Wドライバーが現れる。

「行くのかね？来人。」

「…ええ。相棒が待ってるから」

「…頑張れ。我が自慢の息子よ」

「…はい！」

父親の応援を受けたフィリップは、

CYCLONE!

サイクロンメモリを起動。そして、

「「変身!」」

二人はそれぞれのメモリをベルトに装填し、

CYCLONE/JOKER!

仮面ライダーW サイクロンジョーカーに変身した。

「映司!」

アंकもようやくやく到着し、映司にメダルを渡す。

「よし!」

映司はオーズドライバーを装着して、三枚のコアメダルを装填。
「変身!」

オーズキャナーでベルトをスキャンし、

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバタ・ト・バ

仮面ライダーオース タトパソコンボに変身。反撃に転じる。

ここは創世の使徒が全次元世界を滅ぼし、新たな世界を生み出すための空間。この黒い月の正式名称は、創世領域。創世の使徒はここから各次元世界を操作し、怪人軍団を様々な世界に送り込んでいた。……「……いない。」

創世の使徒は思い出す。

「こんな世界はいらない。」

死力を尽くして得たジェネシスフォースを。それを使って勝ちを取ったドナルドとの戦いを。

「世界も…ここに生きてるやつらも…」

勝つてもなお、自分の強さと力に見向きもしない者達を。

「俺を認めないものは必要ない！！全て消し去ってやる！！」

ドナルドへの激しい嫉妬。そして世界と住民達への恨みは、今まさに、全てを滅ぼそうとしていた。

「…」

だが、創世の使徒は口を閉ざす。

「まさか本当に追って来るとはな。」

背後に出現した者達の気配を感じ取ったからだ。

「しかもドナルドじゃなくてお前らが。」

それは、クロスとエンズ。クロスは創世の使徒に向かって叫ぶ。

「創世の使徒！もうこんなことはやめるんだ！」

「こんなことだと？お前らに何がわかる！誰にも認めてもらえない者の気持ちだ！」

創世の使徒は、自分がやろうとしていることを『こんなこと』呼ばわりされるのが許せなかった。

「だから全部消してやるんだ。消して俺だけを崇める世界を作り上げる…ゆえに俺は創世の使徒！」

「…貴様を崇める者が、一人もいないと思っているのか？」

「…何？」

エンズは質問する。

「貴様が元々神だというのなら一人くらいはいたはずだ！その者どもの想いをないがしろにして消し去るというのか！？それでは貴様を慕う者を裏切ることになるぞ！！」

「黙れ！！もう決めたことなんだよ！！」

頑として聞き入れない創世の使徒。

「これ以上の問答は無意味だ。」

そんな彼は両手を左右に広げ、自分の胸の中心に紫の光を出す。

「これがジェネシスフォース。そして…」

創世の使徒の右手にリターンメモリが。左手にセイシンコア、ニクタイコア、マイナスエネルギーコアが現れる。

「リターンメモリ！」

「ヤプールのメダル…！！」

「こっちのメモリは俺の復活材料。で、こっちのメダルは俺の肉体精神、それからジェネシスフォースを安定させるために必要なもの。」

「

創世の使徒が封印されたのは、もう数千億年とか数千兆年とか、そういう数では表せないほど前の話。そんな気の遠くなるような時間を封印されたまま過ごした彼の肉体、精神、ジエネシスフォースは、非常に不安定となっていた。だからこそ、偶然見つけたヤプールのメダルを手に入れることで、それらを安定させたのだ。

「見るがいい。」

今はもう役目を果たしたアイテム。それらをジエネシスフォースの中に入れた創世の使徒は、その特殊な状態となったジエネシスフォースを自らの肉体に取り込む。

「変身！」

次の瞬間、発光した創世の使徒は蛇をモチーフとした鎧を纏う戦士へと変わっていた。それだけならまだわかるのだが、この戦士、どうにも妙だ。クロスとエンズは思う。この戦士の姿は、まるで…、

「仮面ライダー…？」

クロスが呟いた通り、戦士の姿は仮面ライダーに酷似していた。戦士は名乗る。

「さしずめ、仮面ライダージェネシスといったところだな。どうした？せつかくお前らに合わせてやったんだから、もつと喜べよ。」

創世の使徒は、仮面ライダーとなったのだ。目の前の二人のライダーに合わせるために。

「ふざけるな！」

怒声を張り上げたのは、クロス。

「今お前がやったのは、仮面ライダーを冒瀆する行為だ！」

「目的を果たすための手段としてライダーの力を使う…お前らと俺の何が違うんだ？むしろ感謝して欲しいな。本来お前らに自由なんか与えず消滅させてやるところだが、俺はお前らに戦わせてやるという自由を与えてやったんだぞ？」

クロスに質問し、さらに優越感に浸るジェネシス。それに対して反

論したのは、エンズだった。

「違うな。貴様のそれはただ自分の欲望を満たすための力であり、信念や誇りが伴っていない。そして何より、守るために使っていない！それでライダーなどと…片腹痛いわ！！」

かつては創世の使徒と同じように、力を取り戻して世界を支配するために戦っていたエンズ。しかし友という名の、信頼という名の光を手にしたことで、彼は真のライダーへと成長していた。

「…ごたくはいいんだよ。それに、問答は無意味だと言った！」
ジェネシスは自身の力、ジェネシスフォースを解放する。

「ここからは言葉ではなく、力と行動で俺に意見しやがれ！！」
「望むところだ。貴様に戦士の…仮面ライダーの何たるかを教えてくれる。」

「負けるわけにはいかないんだ。世界のためにも、僕達を信じて戦っている、みんなのためにも！！」

跳躍し、飛び掛かってくるジェネシスと、それを迎え討つクロスとエンズ。

こうして三人のライダーは戦いを始めた。

守るべき者達のために。

己の信念のために……。

創世の使徒から世界を守るため、それぞれが戦う。だが、怪人達は倒す度に現れ、一向に数が減らない。怪人達は創世の使徒が出現させているので、創世の使徒さえ倒せば終わるのだが、現れ続けているということ、まだ創世の使徒が倒されていないということだ。

「これじゃキリがないね……」

なのはは呟いた。ちなみに、創世の使徒のことについてはドナルドが全員に説明済みだ。

「せめて向こうの様子がわかればいいんだが……」

こちらの世界と創世領域は別の次元に存在しているので、ビーツが言ったように向こうの様子は全くわからない。それを聞いて名乗りを上げたのは、

「俺とイーリヤンで何とかする！」

なんと、瓜核とイーリヤン。

「レスティー！今すぐ俺と一緒に、俺の家に瞬間移動してくれ！」

「えっ？いいけど何するつもり？」

「スイカがいるんだ！」

「……わかったわ。」

インペライドスロッターを起動させて一緒に戦っていたレスティー

は了承し、瓜核とともに瓜核の家へ。まもなくして、二人は山ほどのスイカごと瞬間移動で戻ってくる。なぜかテレビと延長コードも一緒に。

以前にも説明したように、瓜核のアルター能力はスイカを媒体にしなければ発動できない。大規模な技を使おうと思えば、それだけ大量のスイカが必要なのだ。そのため、瓜核の家にはビニールハウスがあり、中で一年中収穫可能なスイカを育てている。

「準備はいいかイーリヤン!？」

「いつでもいいよ!」

「よおし…瓜核ドライブ!」

テレビを接続後、瓜核が叫ぶと、全てのスイカが蔓になってほどけ、再びより集まってイーリヤンを空に押し上げていく。これは情報を集めるための技であり、イーリヤンの絶対知覚と組み合わせることで、より広範囲の知覚を行うことができ、またテレビなどのモニターに知覚した場所を映し出すことまでできる。

「絶対知覚」

自身のアルターを発動し、知覚を開始するイーリヤン。

「うまく見つけられればいいけど…」

祈るような気持ちで知覚領域を広げていく。と、

「っ!見つけた!」

どうやら知覚できたらしい。

「映像、来るよ!」

イーリヤンはテレビに知覚した場所を映す。

テレビに映ったのは、ボロボロになっているクロスとエンズ。そし

て悠然と立っているジエネシスだった。

「光輝！！」

「皇魔！！」

映像を見ていたフェイト、照山、なのは、ビーツ、かなで、劉鳳は思わず叫ぶ。

「はあ…はあ…」

クロスは荒い息を整えながら、アンリミテッドフォースで強化した拳をジエネシスに放つ。ジエネシスはそれを易々と受け止め、お返しとばかりにクロスを殴り返した。入れ違いでメダジャベリンを持ったエンズが切り込むが、柄を押さえつけられてから顔面を蹴り飛ばされる。それでもメダジャベリンを放さなかったエンズは、そのままメダジャベリンを杖にして自分を支えた。

「どうした？お前らの力はそんなもんか？」

ジエネシスは全くの余裕。さっきからずっとこんな感じである。

「おのれ！」

トリプル！スキヤニングチャージ！！

エンズは素早くメダジャベリンにセルメダルを三枚投入してスキヤン。エンズアルカイドを発動した。

「はああああああああ！！！」

「絶対破壊の槍か…旧世界の力だな。」

しかし、ジエネシスはその一撃を、あるうことが受け止めてしまう。横から柄を掴むのではなく、真正面から刃を掴んで。

「な、何！？」

「ほらよ！」

「ぐあっ！！！」

エンズはジエネシスの衝撃波に吹き飛ばされる。

信じられなかった。エンズアルカイドは、触れたもの全てを破壊してしまう一撃。仮に無効化しようとしても、無効化するという法則そのものまで破壊できる。にも関わらず、ジエネシスはそれを無効化した。クロスのアンリミテッドフォースで強化した攻撃だって、耐えられるはずはない。だが、神帝として覚醒したクロスのアンリミテッドフォースは、どんな方法を使っても無効化できないはずだ。しかし、ジエネシスにはどう見ても効いていない。

そこで、クロスは恐ろしい結論にたどり着いた。

「無効化されてるんじゃない。効いてないんだ！」

「ジェネシスフォース以外の力が効かない!?」
フェイト達はドナルドから、創世の使徒が持つ特性について聞いていた。

創世の使徒は自身の力の新生を行った際、どのような常識、理論、法則、存在にも当てはまらない、全く新しい存在に進化してしまった。ゆえに、彼を進化させた要因であるジェネシスフォース以外の力、能力、特性は、効かないのだ。

「それじゃあ勝ち目なんてないじゃない!」

エンズアルカイドも、アンリミテッドフォースも通じない以上、ゆりが言った通り、創世の使徒を倒す方法はない。

「単純に創世の使徒を力で倒すというのはどうだ?」

劉鳳はドナルドに訊く。

「ジェネシスフォースは無限を超えた力だからね。単純に力で打ち負かすなんていうのは不可能なんだ」

「ドナルドくんがあれだけ警戒しとったからただ者やないとは思ってたけど…そこまで厄介な相手やったとは…」

はやては、改めて創世の使徒の力を思い知る。

「っていつか、ドナルドくんはよくそんな相手に勝てたよね?どうやって勝ったの?」

なのはは疑問に思った。こんなどう考えても倒せない相手を、ドナルドは封印したのだ。何か方法があるに違いない。ドナルドは、自分が創世の使徒を封印した方法を話す。

「マイソロジーフォースだよ。」

マイソロジーフォースとは、無限の力と無限の可能性が融合することによって生まれた、無限を超えた無限の力だ。創世の使徒との決

戦時、偶然この力を発現させることができたドナルドは、創世の使徒を封印することができたのである。

「けど、無限を超えた同士じゃ条件が同じになるだけで、決着つかなくねえか？それに、ジエネシスフォース以外の力は効かねえんだろ？」

照山の疑問ももつともだが、

「これも偶然だけど、マイソロジーフォースはジエネシスフォースと同じ性質を持っているんだ。だから通用するし、それにジエネシスフォースよりマイソロジーフォースの方が強いんだよ。融合させてる力の大きさが違うからね」

ドナルドの言い分だと、マイソロジーフォースはジエネシスフォースと全く同じ性質を持つらしく、それなら通用することのこと。しかも発現には他者から力を分けてもらうことが絶対条件で、ドナルドの時は人の想いの力。神の力よりも、人の想いの力の方が強いらしい。

フェイト達は思い出す。かつてクロスが風都の住人達の想いで発現させ、Wとともに仮面ライダーエターナルを破り、アンセスター・ドーパントをも打ち倒したその力を…。

「でもね、マイソロジーフォースって、本当はもつともつと力が出るんだよ？」

「えっ？それって、エターナルやアンセスターとの戦いで光輝が見せた以上ってこと？」

フェイトは尋ねる。

「うん。ただそのためには、運命の巫女の歌声が必要になるけどね。」

ここでまた新しいワードが飛び出した。ドナルド曰く、運命の巫女とは生まれつき神帝の伴侶となることが約束されている女性のことであり、その歌声には神帝を強化する力があるという。とはいえ、実際に運命の巫女の歌声が神帝を強化した前例はなく、それが現れたのはドナルドが創世の使徒を封印する時のみ。そう、マイソロジ

「フォースは運命の巫女の歌声によって発現したのだ。これはドナルドも完全に予想外だったらしい。」

と、なのはは運命の巫女の特徴について気付く。

「神帝と結婚する……」

「歌声……ということとは……」

はやても気付いて、二人である女性を見た。

「「フェイトちゃん!?!」」

「うん そういうことだね」

ドナルドは頷く。

「あーっ!!そっか!!それに関係あるかわかんねえけど、フェイトの名前って、運命って意味じゃねえか!?!」

「え、ええっ!?!」

照山からも指摘を受けて、フェイトはたじろいだ。

「決まりだな。」

「じゃあ早く歌って、二人を助けて。」

ビーツとかなではフェイトに頼む。

しかし、

「多分無理だね。」

ドナルドが待ったをかけた。

「何でだよ！あのバケモンを倒す方法は見つかったじゃねえか！！」
猛抗議する照山。ドナルドは理由を言う。

「ここからじゃ歌声が届かないんだよ。ドナルドの時はすぐ近くで歌ってもらえたからよかったけど、今はまた状況が違う。歌声を届けるだけのパワーがいる」

「そんな…」

「せっかく光輝くん達を助ける方法がわかったのに…」
なのはとはやては絶望する。

そこで、レスティーがあることを思い出した。

「かなでちゃん。最近歌関連のガードスキルを作ったって言ってなかった？」

「それってジョイントのこと？」

かなでが最近作成したガードスキル・ジョイントは、自分が弾くピアノと歌、他に演奏に使われる楽器や歌い手の数に応じて力を生み出し、それを他者に与えるというものだ。

「それよ！」

レスティーは瞬間移動し、軽音部の部員達を連れてくる。

「ど、どうしたんだ一体…？」

「できることなら、早く安全な場所に避難したいんだけど、な…？」
澗と入江は怯えながら訊く。

「どこへ逃げても同じよ。このままだと、みんな確実に死ぬわ。」

レスティーはありのままの事実を伝える。創世の使徒を倒さない限り、死ぬしかない。

「フェイトちゃん。確か、持ち歌があるんだっただわよね？」

「う、うん…」

「なら、やるべきことは簡単よ。」

フェイトに確認を取ったレスティーは、超能力を使って自分が考え

た作戦を、その場にいる者全員の脳に叩き込んだ。
「わかったわね？わかったなら、行動開始よ！」

「どうだ？これでお前らがどれだけ絶望的な戦いをしているか、わかっただろ？」

ジェネシスは勝ち誇る。

「どんな相手だろうと、僕達は仮面ライダーだ！」

「命尽きるまで、諦めるわけにはいかん！」

食い下がるクロスとエンズ。

「はいはい、わかりましたよ。だったら……」

二人の決意に呆れで返したジェネシスは、片手を二人に向け、

「死ねば諦めもつくな。」

光線を放った。

「うわあああああああああ！！！！」
「ぐあああああああああ！！！！」

圧倒的不利な状況で、背水の陣を強いられるクロスとエンズ。

着々と打たれていく逆転の秘策は、果たして間に合うのか？

急げ。希望が潰えるその前に！

超クロスオーバー大戦 GENESIS 前編（後書き）

創世の使徒 イメージC V千葉繁

全次元世界の消滅を願う究極の存在。正体は死と新生を司る神、ウロボロス。

光を司る神と闇を司る神を倒して力を吸収、融合、新生させた結果生み出された、無限を超えた無限の力、ジェネシスフォースを操る。また、ジェネシスフォースを生み出した際、どのような存在、常識、法則にも当てはまらない全く新しい存在に進化したため、自分を進化させた力、ジェネシスフォース以外の力、能力、特性が効かない。だが、同じ性質を持つマイソロジーフォースなら効く。

初代神帝である دونالدドに嫉妬し、ジェネシスフォースを生み出して戦いに勝利したが、結局どう転んでも全てが Donaldドしか認めないという状況に絶望し、全次元世界を破壊、自分だけを認める新しい世界を創造しようと画策。しかし、マイソロジーフォースを発現させた Donaldドに封印される。その時自分を復活させるための布石としてリターンメモリを生み出しており、二回起動すると復活するよう仕込んでいた。

新世界の創造は諦めておらず、それを阻もうとするクロスとエンズを苦しめる。

仮面ライダー ジェネシス

創世の使徒がリターンメモリとヤプールのメダルを使って変身した

ダークライダー。創世の使徒曰く、『お前らに合わせてやった』。

ジェネシスフォースと己の特性を利用した戦いにより、クロスアンリミテッドやドナルドをも凌駕する戦闘力を発揮する。

必殺技は、ジェネシスフォースを収束した、全次元世界を一撃で滅ぼすキック、ジェネシスジェネレーション。

パンチ力 測定不能

キック力 測定不能

ジャンプ力 測定不能

走力 測定不能

ジェネシスジェネレーション 測定不能

ジェネシスフォース

創世の使徒が光を司る神と闇を司る神を倒して力を吸収、融合、新生させることで生み出した、無限を超えた無限の力。マイソロジーフォースと同じ性質を持つという長所を持つが、その長所自体が弱点に繋がっている。

超クロスオーバー大戦GENESIS 後編(前書き)

お待たせしました！でもうまく書いてねえ！！くそおお！！！！

あ、それから、ライオットさんのキャラ達が助っ人に来てくれました。

超クロスオーバー大戦GENESIS 後編

増殖する怪人軍団。その圧倒的な物量に、Wとオーズの二大ライダーもまた、苦戦を強いられていた。

「どうする！？このままじゃキリがねえぞ！」

危機感を抱く翔太郎。

「チツ！映司！！」

そんな状況を目の当たりにしたアंकは、オーズに向けて三枚のコアメダルを渡す。

「よし！」

オーズはそのメダルをセットし、スキャナーでスキャン。

タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜

タジャドルコンボへコンボチェンジした。

『翔太郎！こつちもだ！』

「お〜しわかった！」

翔太郎もフィリップに促され、エクストリームメモリを呼び出し、

EXTREAM！

サイクロンジョーカーエクストリームに強化変身する。一気に戦力を増した両者は、反撃を始めるのであった。

ドレッドマグナムで遠距離の敵を狙撃していくソウガ。

「ダンテ。まだ行けるか？」

「当たり前だろ？つーかノツてきた！」

「その意気だ！」

バージルからの問いかけに、ダンテはいつも通りの軽口で返す。
そこへ、

「大丈夫か！？」

照井が駆けつけてきた。

「おっ、刑事！」

「今加勢する！」

ACCEL！

「変・身！」

ACCEL！

照井は仮面ライダーアクセルに変身し、

TRIAL！

トライアルメモリを起動。

TRIAL！

アクセルトライアルに強化変身する。

「よし、じゃあこっちも！」

PANDEMONIUM!

ソウガもそれを見習い、パンデモニウムメモリを起動してソウガパ
ンデモニウムに強化変身した。

怪人ひしめく戦場に参上した伊達。

「変身！」

早速仮面ライダーバースに変身。

「後藤ちゃんサポートよろしく！」

「はい！」

後藤はバースバスターを撃ちながら、バースに近付く怪人を足止め
に徹する。その間に、バースはバースドライバーに競るメダルを六
枚連続で枚投入し、レバーを回す。

C R A N E A R M ・ D R I L L A R M ・ S H O V E L A R
M ・ B L E A S T C A N N O N ・ C U T T E R W I N G ・ C A
T E R P I L L A R L E G

すると、クレーンアーム、ドリルアーム、シヨベルアーム、プレス
トキャノン、カッターウイング、キャタピラレッグの六つの装備が、
バースに装着された。これこそ、バースCLOWs全てを装着した

バースの強化形態、バース・デイである。

「じゃあっ！行くぜ！」

バースは装備をフル活用し、怪人軍団に挑んでいった。

レスティの作戦。それは、軽音部とかなでのガードスキル・ジョイントの力を借りて、フェイトの歌声をクロスとエンズに届けるというものだった。

必死に機材を準備する軽音部だが、その間も怪人は襲ってくる。彼女達に妨害をかけてきたのは、ダークローチとアルビローチの群れ。
「くっ！」

応戦するフェイト。その時、

「らあっ！！」

灰色のオーロラが現れ、中から飛び出してきた青年がダークローチを蹴り飛ばした。

「大丈夫!？」

それはフェイトにとって、非常に見覚えのある顔だった。

「か、一真!？」

そう、剣崎一真である。

「久しぶり!！」

T U R N U P

O P E N U P

C H A N G E

一真は仮面ライダーブレイドに、橘は仮面ライダーギャレンに、睦月は仮面ライダーレンゲルに、始は仮面ライダーカリスに変身する。しかし、まだ終わりではない。

E V O L U T I O N K I N G

ギャレンとレンゲルはキングフォームに。

E V O L U T I O N

カリスはワイルドカリスに。

P E R F E C T J O K E R

ブレイドはジョーカーフォームに強化変身した。四人のライダーは怪人を片っ端から潰していく。

「くそっ！ヤバいぜこいつは……」

レスティーから命じられ、創世領域からの中継を続けているイーリヤンと瓜核。そのポジション上、クロスとエンズの状況を常に見ていられるわけだが、ジェネシスの力は圧倒的で、いつ二人が負けてもおかしくない。そんな状況をずっと見続けているのだ。全く落ち着かない。

「こつちも、もう少し人手があつたら嬉しいんだけど……」

ささやかな願望を口にするイーリヤン。だが、それは無理だ。怪人はジェネシスの手によって、全次元世界に送り込まれている。人手不足はどこも同じなのである。

その時、何の前触れもなく謎の学園が現れた。

「な、何だ何だあ!？」

おもいつきり警戒する瓜核。テメンニグル学園とロストグラウンド学園が一つの世界に現れただけでも、かなりカオスなことになったのだから、この上さらにわけのわからない学園が来たら、もっと大変なことになってしまう。彼にもそれくらいの予想は付いたからだ。

だが、その予想は裏切られる。

「テメンニグル学園とロストグラウンド学園を援護しろ! 怪人どもを一匹残らずぶち殺せ!」

「ヒヤッハー!」

「祭の始まりだぜー!」

「サーチ&デストロイ!!」

とまあこんな具合に、飛び出してきた生徒達がこちらの援護を始めたからだ。

「これってどういうこと？」

困惑するイーリヤン。そこへ、

「ずっと見てたんだよ。こっちの世界を」

一人の青年が登場。

「な、何だお前!？」

全く警戒心を緩めず、瓜核は青年に尋ねる。

「俺はレオン。お前らを援護しに来た」

彼は、かつてNEVERからクロスの世界を守るためにやってきたレオンだった。今回彼は、自分が通う武蔵学院ごと助けに来てくれたのだ。

「味方だと思ってくれていい!」

レオンはアポカリプスを抜いて、怪人を迎え討つクラスメイト達に混ざる。

「…なんか悪い奴じゃなさそうだな。」

「うん…」

(なぜだ…)

エンズは焦っていた。今彼がチェンジしているクレイトコンボは、あらゆる超能力を使えるコンボ。テレパシーやテレポート、未来予知なども使えるので、完璧な回避力を持つのだが、なぜかジエネシスの心が読めず、未来予知を使っても自分が負ける未来しか見えない。テレポートでさえ、先読みされて攻撃される。クロスからアンリミテッドフォースによる援護を受けて戦っても、ジエネシスはそれ以上の強化をして反撃してくる。全く敵わない。そして、それはクロスも同義。

「大体さあ。人間が神の領域に手を出してんじゃねえよ！」

「ぐわっ!!！」

ジエネシスはクロスを殴り飛ばす。

「てめえみたいなやつは、俺が粛清してやる！」

ジエネシスは元々神だったので、人間でありながら神の力を使うクロスが許せないのだ。

「……確かに、僕はいつか罰を受けなきゃいけない……」

しかし、クロスとしてもそれは重々承知済み。

「けど、それは今じゃないんだ!!せめて、お前を倒すまでは!!」

「いいや、今だよ。罰を受けるのは……」

その決意を目にしてなお、ジエネシスはクロスを許さない。

「今だ!!」

クロスの足元を爆破する。

「うわああああああああああ!!！」

「白宮!!」

クロスではなく白宮と呼んだエンズは、

「おのれえええええええ!!！」

メダジャベリンを高速で回転させ、

「ハアアアアアアアア!!！」

ギガレゾリウム光線を放つ。だが、ジエネシスはそれを片手で止

めてしまう。

「一番わかんねえのはお前だ。無限の使徒でも神帝でもない、ただの弱っちい雑魚が、何でこの俺に楯突く？」

「くっ……！」

すかさず念動衝撃波で攻撃するエンズだが、ジェネシスは全くダメージを受けることなく、高速で接近してエンズをアッパーカットで吹っ飛ばす。

「がはっ！」

「非力だなあ。何でそんなに弱いんだよ？弱いくせに吠えやがって、雑魚の負け犬がよあ。」

エンズが完全に虫の息なのをいいことに、ジェネシスは罵倒の言葉を浴びせ続ける。エンズには既に言い返すだけの気力もない。

「違う……！」

だが、

「皇魔さんは弱くなんかない……！」

クロスが代わりに言い返した。

「何だと？」

「皇魔さんは、どんな相手にも屈しない心を持つてる……！お前にはない、強い心だ……！皇魔さんを馬鹿にするやつは、僕が絶対に許さない……！」

クロスがエンズに対して感じたのは、正義の心。その正義を否定されるのが、彼としては絶対に許せなかった。

「うつせえ……！」

「ぐあああ……！」

しかしジェネシスは容赦なくクロスに攻撃を加える。

ライブ場は、テモンニグル学園のものとロストグラウンド学園のものなぜか融合し、異常なまでの広さとなっている体育館。セッティングも完了し、あとはライブを始めるだけ。

「あうう…」

入江は緊張していた。ひさ子が訊く。

「どうしたのさ入江？ライブなんていつものことじゃないか。」

「だって、失敗したら私達みんな死んじゃうんですよ！？怖くないんですか!?!」

入江は怖かった。何せ、死の危機が目の前まで迫っているのだ。ただでさえ怖がりな彼女が逃げ出さずにこの場にいるのは、奇跡としか言えなかった。しかし、

「だからこそじゃない。」

岩沢は全く臆していない。

「ミュージシャンっていうのは、一つのライブにも命を懸けるものなんだよ？あたしは今が本当のライブだって、そう思ってる。」

「ま、ここまで来たら退くに退けないし、せつかくだから、楽しんでやればいいよ。」

「そうそう！死ぬ時だって、みんな一緒なら怖くないし！」

「頑張りましょ！」

岩沢、ひさ子、関根、ユイは入江を励ます。

「みんな…」

「…だつてさ！澪！」

「うええ！？何で私に振るんだ!?!」

律は澪の肩を強く叩き、澪は飛び上がる。

「バレバレだもん。澪が怖がってるの」

「律…」

律は澪がこの中で一番怖がっているのを見抜いていた。

「大丈夫だよ澪ちゃん。絶対うまくいくよ」

「ずっと練習してきたじゃない。それに、私達こういふ本番に強いし。」

「何より、このままじゃ一番頑張ってる皇魔先輩に申し訳が立ちません！」

「唯、ムギ、梓……」

澪は三人の名前を呼ぶ。

かなでもまた、ピアノの準備を終えていた。そこへ、

「かなで。」

セフィロスが来る。

「お父さん。」

「事情は聞いている。作戦が成功するまでの間、俺が全力でお前達を守ろう。」

「……ありがとう。」

礼を言うかなで。それを聞いたセフィロスは、無言で怪人の迎撃に向かった。

「準備完了、か…よし…！」

早速ステージに立とうとするフェイト。しかし、

「待って！」

それを止める者がいた。さわ子である。

「あなたは確か、ロストグラウンド学園の…」

「山中さわ子よ。それより、そんな格好で歌うつもり？」

「えっ？」

今のフェイトは、ライダーに変身したままだ。

「ほら、着替えて着替えて！」

「ええっ!？」

フェイトは無理矢理変身を解除させられ、さわ子に手を引かれていった。

「わあ…！」

さわ子に着替えさせられたフェイトは、美しいドレスを身に纏っている。ドレスのあまりのできればえに、フェイトは思わず感嘆した。

「うんうん。やっぱり土台がいいと映えるわね」

さわ子は頷く。

「あの、これ…」

「歌姫なんだから、そういう服着て歌わなきゃ駄目でしょ？さあ、

行つて！」

「あ、ありがとうございます！」

フェイトはさわ子にお辞儀をして、ステージに立つ。

「あれ、フェイトちゃん？」

体育館に避難に来ていた市民の中で、亜樹子だけがフェイトの存在に気付いた。

フェイトがわざわざ体育館で歌うのにはわけがある。

「皆さん、聞いてください！」

ドナルドから聞かされたのだ。

「今、私達を守るために、死力を尽くして戦っている人達がいいます。」

運命の巫女の歌声が、なぜ神帝を強化するのか。

「相手の力はあまりに強く、私達では敵いません。」
想いを届けるからだ。

「ですが、戦っている人達に、想いを届けることはできます。」
かつて創世の使徒によって世界が滅びようとした時、世界中の人々が神帝の勝利を願った。運命の巫女の歌声が、その想いを伝えたからこそ、神帝はさらなる力を、マイソロジーフォースを発現させることができたのである。

「願ってください。その思いが必要なんです！私が歌に載せて、想いを届けます！」

避難者達に訴えかけるフェイト。同時にレスティーが超能力を使い、市民達に現状を理解させる。やがて、

…パチパチ…

小さな拍手が聞こえてきた。その音は、亜樹子の手から。それに触発されるように、拍手の数が増えていく。

そして、全ての人々が拍手を始めた。

準備は完全に整った。フェイトはまず、放課後ティータイムのメンバーに目配せをする。

「……」

五人は無言で頷いた。続いて、ガルデモのメンバーにも目配せをするフェイト。

「……」

こちらと同じ反応をする。最後にフェイトは、かなでを見た。

「……ガードスキル・ジョイント」

かなでも頷き、それから一拍置いて、ガードスキルを発動。エンジンズウィングのような純白の双翼がかなでの背後に出現し、また一拍置いて、かなではピアノを弾く。

人々の願いを、想いを、祈りを載せたフェイトの歌声が、美しく響き始めた。

「！！！」

アンリミテッドフォースを操る気力も失い、諦めかけていたクロス。しかし、頭の中に響いてきた歌声を聴き、勝利を確信する。

(Pray、か…確かに、この状況にはピッタリな曲だな…！！！)
闘志をたぎらせるクロスを見て、ジェネシスは再び嘲笑う。

「まだ諦めてないのか？俺の前には無限すらも意味をなさない。もうわかってるはずだろ？」

「わかってるさ。」

そう、わかっている。

「だが無限を超えた力ならどうだ！！！」

だからこそ、使う。ジェネシスを、創世の使徒を倒せる唯一の力を。

「はああああっツ！！！」

一瞬でマイソロジーフォースを発現させたクロスは、走りながらクロスマイソロジーアンリミテッドに強化変身。金色の閃光となって

ジエネシスに拳を放つ。

「くっ!!」

ジエネシスもそれに己の拳をぶつけ、互いの力は拮抗する。

「まさか…マイソロジーフォースだと!？」

「そうだ!!」

クロスはすぐにもう片方の拳で、ジエネシスの顔面を殴り飛ばした。

「ぐがっ!!」

「人々の願いが、願いが、祈りが込められた希望そのものだ!!」

「な、何が希望だ!!そんなもの…」

ジエネシスは持ち直し、ジエネシスフォースを解放。

「今度こそ消してやる!!」

クロスに殴りかかる。

「この希望は消させない!!」

「ぐぼおっ!？」

しかし、クロスはそれを上回る速度でジエネシスの懐に飛び込み、みぞおちに拳を叩き込んだ。

「そうだ。消させるもんか!!」

「がっ!!」

続けて、ジエネシスの左肩に蹴りを。

「人々の願いを…」

「ぐっ!？」

勢いを殺さず、両足でジエネシスの頭を挟み込み、

「想いを!!」

「ごがっ!!」

空中で身体をひねりながら、地面に叩きつける。

「祈りの力を!!!!」

「ぐううう…!!!!」

対するジエネシスはそのから瞬間移動で脱出し、

「舐めるなあああああああアアアアツ!!!!!!」

「おおおおおおおおお!!!!!!」

クロスと壮絶な格闘戦を始めた。だが決着はつかず、互いに蹴りをぶつけ合って距離を取る。

「ははははっ！！いくらマイソロジーフォースがジエネシスフォースを上回ろうと、使い手が人間ではその程度が限界だ！！俺を倒すことはできない！！！」

「くっ……」

ジエネシスが元々神であるのと対照的に、クロスは元々人間。この差は非常に大きく、マイソロジーフォースを使っても互角に持ち込むのが精一杯だった。

（このままじゃ……）

クロスは懸命に打開策を考える。と、

すぐ側にエンズがいるのに気付いた。

「はあ……はあ……」

エンズはクロスに向かって手を伸ばしている。今のクロスはマイソロジーフォースの輝きに包まれており、エンズはその眩く、そして温かい光に手を伸ばさずにはいられなかったのだ。

「はあ……ハア……ッ……」

「……」

それを見て、クロスはエンズの手を取る。その瞬間に、マイソロジーフォースはエンズの中に流れ込んだ。

（……ああ……）

傷付いたエンズを癒していくマイソロジーフォース。

（余は……この輝きを求めていたのだ……）

光によってダメージを回復させ、立ち上がったエンズはクロスに訊く。

「余は……戻れるのかな？」

「…はい。」

「…戻つても…良いのだな…?」

「…はい…!」

不運から闇に堕ちた男、エンペラ星人皇魔。闇の中で苦しみ続けた彼は、今、光へと戻ることを許された。

そして、エンズの身に変化が現れる。

スーツは金色の光を纏い、胸の中央にはクロスのもと同じ、ゴッドエンブレムが。

エンズ マイソロジーバージョン。無限を超えた希望の力は、エンズにも味方した。

589

「行くぞ白宮!」

「はい!」

互い呼び合い、二人のライダーはジェネシスに反撃する。

「ぐおおっ!」

マイソロジーフォースを得たとはいえ、クロスとエンズ一人一人では、ジェネシスと互角程度。しかし、二人がかりとなれば話は別だ。力も手数も増え、ジェネシスは防戦一方になる。

「はあっ!」

「おおっ!」

零距离から光線を喰らい、ジェネシスは吹き飛ばされた。

(どういうことだ!? たかが二人、俺なら簡単に……)
焦るジェネシス。次の瞬間、

「うつ！！？」

ジエネシスは見た。クロスとエンズに、想いを届ける人々の姿を。その想いは、全次元世界から集まってきていた。

「うつ…うわああああああアアアアアア！…！！」

ジエネシスは絶叫しながら跳躍。

「なぜだ…なぜ誰も俺を認めようとしらない！！」

さらにジエネシスフォースを解放する。

「消えてしまえ！！！俺を認めないやつは全て！！！！」

解放したジエネシスフォースは、ジエネシスの全身に集中していく。

「エピソード」

MYTHOLOGY・MAXIMUM DRIVE！

ジエネシスが決着をつけるつもりだと判断したクロスは、クロスドライバ―に音声入力。

スキヤニングチャージ！！

エンズもまたそれを感じ取り、エンズドライバ―をスキヤン。

「ジエネシスツ！！ジエネレエエエエションツ！！！！！！」

ジエネシスは必殺の蹴りを放つ。

「クロス！！」

「オーバ―！！」

クロスとエンズはそれに合わせて跳躍し、

クロスとエンズの合体技、クロスオーバーマイソロジーは、

ジェネシスジェネレーションを破った。

着地するクロスとエンズ。

（そんな馬鹿な…）

ジェネシスは空中を舞いながら、結果を信じられないでいた。

（創世の使徒たるこの俺が…）

己の全てを出しきって戦い、そして負けたのだ。新世界創造を目前にして。

「旧世界の戦士なんかにいよいよいよいよいよいよ！！！！！！！」

ジエネシスは爆発し、リターンメモリとヤプールのコアメダルも、巻き込まれて碎け散った。

「よっしやあああああああ……！！！」

モニターを監視していた瓜核は、クロスとエンズの勝利に喜ぶ。

「みんな！皇魔君達が勝ったよ……！！！」

イーリヤンはすぐトランシーバーで、仲間達に報告する。

主を失って崩壊する創世領域から脱出するクロスとエンズ。

しかし、クロスは突然、エンズの気配を見失った。見てみると、実際にエンズがいなくなっている。

「皇魔さん…？」

クロスはすぐにエンズを捜そうとするが、

「光輝！」

突然、懐かしい声が聞こえた。振り向いてみるクロス。

そこにいたのは、隼人と優子だった。

「父さん…母さん…」

クロスは変身を解いた。

「光輝。よく頑張ったな」

「ずっと見てたのよ。さすが、私達の子供ね」

隼人と優子は、笑顔で光輝を労う。

「…僕一人の力じゃないよ。フェイトが、皇魔さんが、みんなが力を貸してくれたから、勝てたんだ。」

「その気持ちを忘れるな。ライダーとはいえ、一人では戦えない。」

「行動で、想いで、支えてくれる人がいるからこそ、戦えるのよ。」

両親として、自分達が最後に教えられることを言う二人。彼らは既に、死んでいる。もう二度と、家族で同じ道を歩むことはできない。創世の使徒が倒れ、各世界の境界が不安定になっている今だからこそ、現れることができたのだ。そして、光輝もそれを理解している。「うん。」

光輝は、少し悲しい思いをしながらも、素直に頷いた。

「さあ、もう行け。」

「あなたを待っている人達がいるわ。」

「…ありがとう。父さん、母さん。」

光輝は両親と別れの挨拶を交わし、光の差す方へ向かう。

皇魔は、エンペラ星人の姿で、ある人物と対峙していた。

赤と銀のコントラストの巨人だ。皇魔は、それが誰かわかっている。

「…ケンか。」

「久しいな、エンペラ星人。いや、こちらでは皇魔と呼ぶべきか…」
「好きに呼べば良い。」

ウルトラマンケンに向かって、素っ気なく返す皇魔。

「それで、何の用だ？出てきたからには何かあるのだろう？」

「…私は、ずっと見ていた。どうやら、本当の戦士になれたようだな。」

「…だがそれ以前に、余は貴様らウルトラ戦士に取り返しのつかないことをしてしまった。それは、謝らねばならんだろう。すまなかった…」

ようやく自分の犯した罪を思い出した皇魔は、目を反らす。だが、

「…それも含めて、私はお前に助言を与えに来たのだ。」

「…助言だと？」

ケンのまさかの発言に、反らした視線を戻した。

「お前は光になるうとしているが、このままでは光になれない。」

「！？」

「真の光は、追い求めて手に入るような、目先の輝きではないからだ。」

「…」
それを聞いて、皇魔は思う。なんとなくわかる気がする。母星が太陽を失い、彼はすぐ光を求めた。しかし、いくら求めても、光は手に入らなかったのだ。

「光とは、自らの手で生み出すもの。それができるようになった時、お前はウルトラ戦士になれるだろう。」

「どうすれば、余は光を生み出せる!？」

「…その方法もまた、お前自身で見つけねばならない。」

「……そうだな。余が間違っていた」

「間違っこと自体は罪ではない。間違ったあと、どうするかが問題なのだ。」

間違わなければ、直せない問題もある。間違いを犯さない者など、いないのだ。間違って、それを直すかどうか。どう直すかは、自己次第。

「余は、余が光になることで罪を償おう。」

「私もそれを望んでいる。」

ケンは手のある方向に向け、道を示した。

「行け。お前のために、お前の帰るべき場所を守る者達のもとへ…」

…

「…つむ。」

皇魔は頷き、自分が帰るべき世界への道を進んでいく。

「光輝!光輝!!!」

「光輝!しっかりして!!」

「…う…」

フェイトと一真に揺さぶられて、光輝は目を覚ました。

「フェイト?それに…一真?来てくれたんだ…?」

「よかった…」

「君の世界がピンチだつて聞いたから、飛んで来たんだ。」

「…二人とも、ありがとう。フェイトの歌、ちゃんと聴こえたよ。」

「光輝…」

光輝は礼を言った。その頃、同じく帰還していた皇魔は…。

『皇魔！皇魔！皇魔！皇魔！』

駆けつけたクラスメイト達に胴上げされていた。

「…フツ」

戦いの勝利を見届けたレオンは、武蔵学院とともに元の世界へ帰っていった。

全次元世界を攻撃していた怪人達は、実は創世の使徒が造り上げた存在であり、創世の使徒消滅と同時に、怪人達も消滅した。ドナルドの話によると、世界の融合が完全に解除されるには丸三日かかるらしく、それまでの間、テメンニグル学園とロストグラウンド学園合同の親睦会を開催。ガルデモや放課後ティータイムのライブを始めとした馬鹿騒ぎに、一真、橘、睦月、始も参加した。もちろん、翔太郎達も呼んで。

そして、別れの日。

「今回はやはり貴様に礼を言わねばなるまい。」

皇魔はロストグラウンド学園の代表として、光輝に言った。

「いえ…僕も転生だなんて出過ぎた真似を…」

「だが貴様がいなければ、余はあのまま、光を思い出すこともなかつたろう。やはり感謝すべきだ」

手を差し出す皇魔。光輝も手を出し、二人で握手をする。

「縁があれば、また会うこともあるだろう。」

「その時は、よろしくお願いします。」

二人は手を離し、

「…さらばだ、白宮。」

「お元気で、皇魔さん！」

世界の融合は解除された。

「光輝、本当にありがとう。」

光輝に礼を言う始。

「い、いえそんな！僕は一真の友人として当然のことをしたまでです。」

「俺も剣崎の友人として礼を言う。よく剣崎を救ってくれた」

始は一真にあのような結末を強いてしまったことをずっと悔やんでいた。しかし、それは光輝のおかげで解決されたのだ。彼にとつてこれほど嬉しいことはない。すると、突然灰色のオーロラが現れた。「天音ちゃんが待っているから、俺はもう行く。」

「俺も帰る。睦月、行くぞ」

「はい！」

始、橘、睦月は、自分達の世界へと帰って行く。一真は始からブレイドの世界への帰還を持ちかけられていたが、旅の途中だからと既に断っていた。

「じゃ、俺もそろそろ次の世界に行こうかな？助けなきゃいけない人はたくさんいるし。」

「…一真。もう少しで卒業式だから、一緒に参加しない？」

光輝は一真に、テメンニグル学園卒業式への出席を提案する。一真も一時とはいえ、この学園の生徒だったのだ。光輝としては、ぜひとも参加してもらいたい。

「うーん…」

考える一真。と、

「出席してくんねーか？」

銀八が来た。

「銀八先生…」

一真は銀八の名を言う。

「いや、理事長がお前の分の卒業証書も作っちゃまってよ。捨てるの面倒だし、もらってくれや。」

「え…」

テメンニグル学園理事長、スパイダが一真の帰還を聞き、大至急で一真の分の卒業証書を作ったのだ。

「一真！」

光輝が促す。

「…はい！喜んで！」

一真は卒業式出席の遺志を示した。

その後卒業式は滞りなく終了し、自分の卒業証書を受け取った一真は、再び次の世界へと旅立っていった。

「光輝。」

テメンニグル学園の屋上から、自分が育った校舎の姿を見ていた光輝。フェイトはそんな彼に声をかける。

「…終わっちゃったね。」

「…うん。僕はまだ、あの戦いが夢みたいに思えてならない。」
よくよく考えてみれば、確かにあり得ない戦いだっただ。あんな戦いは、もう奇跡を通り越しておかしいとしか言えない。まさしく、夢だ。

「でも夢じゃない。」

だが、フェイトが言った通り、あれは夢ではない。現実の戦いだ。

「フェイト。もしまたあんな戦いがあったとしても、僕は必ず君を守る。」

「じゃあ私も、私の歌で光輝を守る。」

二人は真面目な顔で見つめ合い、そして互いの真顔が真剣すぎて、つい笑ってしまった。

「はい光輝くん！フェイトちゃん！」

そこへ、カメラを持ったはやてが登場する。

「二人だけの卒業記念写真や！寄って寄って！」

はやてに言われるまま、光輝はフェイトの肩に腕を回して抱き寄せ、フェイトもまた光輝の身体に寄り添う。

「はい、チーズ！」

はやてはカメラのシャッターを切った。

「ケンはね、私の初恋の人だったの。」

ロストグラウンド学園。屋上で、レスティーは皇魔に、自分がケン

に対して抱いていた想いを伝えていた。

「でも私はデザイナーで、ケンは人間。結ばれるはずなんてない…だから、私は他のデザイナーと一緒に封印される道を選んだ。ケンといるのが辛かったから」

「…」

皇魔はそれを黙って聞いている。

「…どうして、あんなにもケンのことが好きになったのかしら？ やっぱり、ケンの光に惹かれたからかな？」

「恐らくそうだろう。光とは、無意識に惹かれるものだ。」

皇魔は口を開いた。返ってきた言葉に、レスティーはいたずらっぽく笑う。

「皇魔、ちょっと素直になった。」

「…そうならねばならん時もある。」

この戦いを経て、皇魔は間違いなく変わった。純粹に光を求め始めたのだ。

と、

「おい皇魔！レスティー！」

音無が校庭から手を振り、二人を読んでいた。しかし、いるのは音無だけではない。二人を慕う仲間達が、全員で二人を待っている。

「ふっ…」

皇魔はリフレクターマントを出してから飛び降り、音無達のもとへ歩いていった。レスティーもそれに続く。

全次元世界の命運を懸けた激闘を制した二人のライダー、クロスと
エンス。

彼らはこれからも戦い続ける。

人々を、光を守る象徴、

仮面ライダーとして……。

超クロスオーバー大戦GENESIS 後編（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

しおん「おい！大丈夫か！？」

ウオント「何だあいつ？」

？「さあ、地獄の駆け引きを楽しみな！」

第十九話

カードと駆け引きと三号ライダー

エンズ マイソロジーバージョン

エンズがマイソロジーフォースによってパワーアップした姿。マイソロジーフォースの運用が可能で、クロスマイソロジーアンリミテッドにも匹敵する戦闘力を発揮する。

クロスオーバーマイソロジー

クロスマイソロジーアンリミテッドと、エンズ マイソロジーバージョンの同時キック攻撃。相手が何者であろうと確実に粉碎、消滅させられる。

座談会（前書き）

エングズでもやります座談会！ではどうぞ！

座談会

ロムスカ王「くっそおおおおおおお!!!」

皇魔「どうした作者。」

日向「頭おかしくなったんじゃないか?」

ロムスカ王「今回の長編：テムンニグル学園とロストグラウンド学園が一つになったらどれくらいカオスになるか見てもらいたかったのに…書けなかったああああああ!!!」

かなで「それはあなたの技量の問題よ。」

ゆり「自分の技術もわきまえないで多クロスものなんてやるうとするから、こついうことになるのよ。」

ロムスカ王「うぐぐ…!!」

音無「それくらいにしてやれよ。」

直井「さすが音無さん!なんとお優しい!」

音無「いや、話が進まないからさ。」

レスティー「というわけで、今回の座談会は私と皇魔。音無くん、ゆりちゃん、かなでちゃん、日向くん、直井くんのメンバーでお送りするわ。」

ロムスカ王「それから、特別ゲストをお呼びしています。どうぞ！」

光輝「（立ち直り早！）どうも、白宮光輝です。」

フェイト「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。」

ロムスカ王「今回は二人の過去についても書いたわけだけど、正直な話……」

皇魔「ひどかったな。」

ロムスカ王「……うっ……」

光輝「気を落とさないでください。」

フェイト「大丈夫だから……」

日向「しかし、今回皇魔がデレたよな。」

直井「まあ、貴様がいくら素直になったところで喜ぶ者などいない。というより、喜ぶ者は感性がどうかしていると思えないな。」

音無「そんなこと言うなよ！中にはそういうのが好きな人だっているんだから！」

ゆり「ま、いろいろ丸く収まってよかったんじゃない？」

かなで「あたしもそう思うわ。」

光輝「今回の長編で、皇魔さんはエンペラ星人に戻れるようになりましたよね。」

ロムスカ王「あれは近いうちにまたやる長編、ベリアル銀河帝国編のための布石です。では、予告をどうぞ」

「全ての宇宙は俺のものだ！」
「と思っていたのか？」

最凶の敵、カイザーベリアル襲来！

「俺が行く！」
「仕方あるまい……」
「出航！！」

皇魔！ウルトラマンゼロ達とともに、宇宙を救え！

「俺は君を守る。」
「サイヤ人の王子ベジータおお！」

立ち塞がるベリアル帝国軍。

「大変です！ベリアル軍です！」
「ええっ！？」
「我が軍に逆らうとは、愚かな者達です。」

今、光と闇の最終決戦が始まる！

「絶対に許さねえ！ベリアル！！」
「オラおめえを許さねえ！！」

仲間とともに立ち向かえ！

「シルバークロス！！」
「ジャンナツクル！！」

「魔閃光！！」

「仲間つてのは、いいもんだよな。」

「何をするつもりだ！！」

「ファイアアアアアアアアアアア！！！！！！」

光を信じる。

「絶対負けない！！」

「これが！」

「我らの！」

「光だツツ！！！！」

超決戦！ベリアル銀河帝国

近日公開決定！

光輝「…今ブロリーさん達がいたような…」

ロムスカ王「はい、ブロリー達を出します。」

皇魔「…意図は？」

ロムスカ王「…『全ての宇宙は俺のものだ!』』とっていたのか?』っていう掛け合いがしたかっただけです。」

日向「…そんなことだろうと思ったよ…。」

ロムスカ王「だって!せっかく小説書くんだから、やりたいことは全部やってみたいんだもん!！」

直井「やれやれ…。」

かなで「そういえば、この作品の怪人のことだけど…」

ゆり「デザイアとシードね。名前の由来は?」

ロムスカ王「デザイアはグリードの改良型ということで、同じく欲望の名を与えました。シードは、欲望から産み落とされた災いの種。そういう意味でつけた名前なんです。」

音無「…そのままだな。」

ロムスカ王「ひねりがなくてすみません。」

レスティー「オーズやグリード勢の扱いが不遇だから、なんとかしてほしいって要望もあるわよ?」

ロムスカ王「オーズにはオーズの倒すべき相手があり、それはデザイアではありません。オーズの相手は、あくまでもグリードです。扱いにおいては善処しますが、あまり期待されるのは…」

音無「なんつー作者だ…」

ロムスカ王「お許してください！」

ボルガ「ウオ〜!!！」

ドガアアアアアン!!!!

音無「うわああああああ!!!!」

レスティー「じゃ、あんまり長くなるのもあれだし、終わりにしましょつか！」

皇魔（飽きたなこいつ…）

光輝「それじゃあ皇魔さん。これで僕も本当にお役御免みたいですし、あとのことはお願いしますね。」

皇魔「ふん。任せておけ」

ロムスカ王「今回はラージさんから許可をいただいた、この作品の三号ライダーが登場します。」

レスティー「それじゃあ、エンズを読んでくれるみんな！」

一同「また次回！！」

ロムスカ王「ちなみに裏設定ですが、皇魔が滅ぼしたウルトラマン達は、実は滅んでいません。皇魔が倒したウルトラマンは、全てウルトラマンキングが生み出したダミーのウルトラマンです。」

皇魔「何だと!？」

ロムスカ王「キングは既に皇魔達が自分を襲ってくることを察して

おり、前もって自分やノアのダミーを作り、倒させることで、自分達が死んだと見せかけてたんです。あと、プラズマスパークエネルギーコアもダミーでした。」

皇魔「ということは…。」

ロムス力王「今頃はウルトラマン達が皇魔のいた宇宙の平和を取り戻しているんじゃないかな？まあ、ケンだけはダミーを作るのが間に合わなかったから、他のみんなを逃がすためのしんがりとして、皇魔に挑んだんだけどね。それでもどうにか逃げ延びて、死にかけてたところを無限の使徒に転生させてもらったっていう設定です。さらに補足させてもらいますと、ケンはもうキングの力で生き返ってます。皇魔の前に再び出てこれたのも、キングのおかげです。いや、キングさまさまですよね！ではまた次回！！」

皇魔「まっ、待て！もっと詳しく聞かせろ！！貴様！！！！」

座談会（後書き）

というわけで、最初から皇魔に勝ち目なんかなかったんですね。大体、あんなチートウルトラマン、略してチートラマンに勝てるわけがないし。

次回はしおんがムフフなことに！お楽しみに！

ドナルド「っていうか、ドナルドの扱いも不遇だったよね？これはどういうことなのかなぁ？」

いや、あの、これは、その…

ドナルド「ランランルー！！！！」

ぎゃああああああああ！！！！！！

スパイダーマン「座談会でもハブられた男!!! スパイダーマン!!!
」

テンテテーンテテレッツ テレツテレイン

第十九話 カードと駆け引きと三号ライダー（前書き）

遅くなつてすいません！三号ライダーの登場です！

ちなみにこのライダー自体はラージさんの作品に出っていますが、僕が名前や能力にかなりのアレンジを加えています。ですが、ラージさんには許可をもらっていますので、ご安心を。

第十九話 カードと駆け引きと三号ライダー

月影しおんは、友人と別れて一人で帰り道に行く。

「帰ったらずまず今日の夕食の買い出しだな…」

誰も聞いていないのに、しおんは呟いた。

彼女がこの世界に転生してから、かなりの年月が経っている。本当なら、彼女はしおんという名も、月影の姓も、変えることができた。しかし、作り物の存在ではあるが、自分は月影博士の娘であるということ。それから、キュアムーンライトこと、月影ゆりの妹であるということをお忘れのために、あえて月影の姓を名乗っている。そして、彼女の名前となっている紫苑の花。その花言葉は、『君を忘れず』。自分にとって最も大切な家族の繋がりを忘れないよう、しおんはこの二つを使っているのだ。

「？」

と、しおんは何か気付いて、そちらを見る。すぐ近くにある森の上空に灰色のオーロラが現れ、光を落として消えたのだ。

「あれは…」

光は森に向かって落ちていく。しおんは光の正体を確かめるべく、走りだした。

やがて、光の墜落点にたどり着いたしおん。光は、未だに強い輝きを放っている。

その眩いばかりの輝きが消えた時、姿を現したのは男性だった。

「う……」

男性は僅かに呻く。よく見ると、男性は傷だらけだ。

「おい！大丈夫か!？」

慌てて駆け寄ったしおんは、男性を揺さぶる。

「……………」

男性は目を開け、二、三秒しおんの顔を見つめたあと、気絶した。

「まずい……ひとまず家に……!!」

幸い、ここから自分の家までは近い。しおんは男性を抱えると、急いで自分の家まで運んでいった。

「何とか目を覚ましてくれ…!!」

男性に手をかざすしおん。すると、しおんの手から光が放射され、男性の傷が回復していく。彼女は真のプリキュアとして覚醒したことで、こんな具合に他者の傷を癒すことができるようになったのだ。

「…」

ゆっくりと目を開ける男性。

「よかった。気が付いたか!」

しおんはようやく一息つき、胸を撫でおろす。男性は起き上がり、しおんに尋ねた。

「…ここはどこだ?」

「ここは私の家だ。倒れていたから、運んできた。」

「そうか。悪かった」

「私は月影しおん。お前は?」

男性は名乗る。

「…大道克己。」

「…では大道「克己」でいい。…「克己」。一体何が起きたのか、話せるか?」

しおんは克己と名乗った男性に訊く。

「…俺にもわからない。気が付いたらここにいた」

「…そうか」

理由は克己にもわからないらしい。

「とにかく、もうしばらく休んでいるといい。今何か作ろう」

「…」

しおんは席を立ち、克己は黙って見送る。それから、部屋を見渡ししてみた。しおんの部屋は年頃の女の子らしく、綺麗に片付けられ、またぬいぐるみなどのインテリアもされている。

「すまない克己。」

ほどなくして戻ってくるしおん。

「今日買い出しに行くのを忘れていた。今から行ってくるから、待っていてくれ。」

しおんは克己を救出することに夢中で、今日買い出しに行くことをすっかり忘れていた。冷蔵庫の中には何も無い。なので、今から行くと言明する。

しかし、

「俺も行こう。」

なんと、克己が同行を申し出てきた。

「そんな…お前は怪我人だぞ！？まだ起きたばかりなのに…」

「怪我なんかしてない。」

それはしおんが治したから当然だ。

「それに、恩を受けたままじゃ気持ち悪いからな。」

「だが…」

しおんは渋る。だが、

「行かせろ。」

直後に克己が見せた威圧的な視線から断れなくなり、

「…わかった。」

仕方なく了承することに。

こうして二人は買い出しに行った。

「おいアプリシイ！」

単独行動をしていたアプリシイを、ウォントが発見した。

「：ウォント」

「どうしたんだよ、俺に黙ってエンズ狩りなんてさ？」

アプリシイは皇魔を倒すため、一人で行動していたのだ。一応仲間に心配をかけないよう、コレクとメイカーには言っておいた。

「お前は出掛けていたろうが。」

ちなみに、ウォントは修造に会いに行っていた。何でも妙に気が合っただけ、ちよくちよく交流しているらしい。ウォント曰く、彼だけは一番最後に殺すとのこと。

「そうだったな。悪い悪い」

カラカラと笑うウォント。しかし、その顔は突然真剣なものになる。

「じゃ、とつとと始めるか。」

「ああ。」

互いに相づちを打ち、怪人形態に変身したウォントとアプリシイは、そこらにいる一般人から適当に選んで、シード二体を生み出す。逃げ惑う人々を襲い、欲望を貯めていくシード達。ウォントはアプリシイに訊いた。

「んで、作戦は？」

「そんなものは必要ない。シードに騒動を起こさせて誘き寄せ、倒す。四人がかりなら勝てる」

「結局いつものパターンか……」

「勘違いするな。人間を一人でも多く殺し、なおかつエンズを始末するには、この方が効率がいいだけだ。」

「……まあ俺達デザリアの使命を果たすにはこれくらい派手な方がいいし、何より、俺はあんまりチマチマした作戦は苦手だからな。」
ウォントは以前アプリシイのメダルを取り戻すために作戦を計画したことがあったが、代わりに自分のメダルを奪われてしまったため、それ以来作戦を考えるのは控えている。単細胞な自分がいくら作戦

やら計画やらを考えたところで、うまくいくはずがないということがわかってしまったからだ。

「奴らが騒動に気付いて駆けつけてくる頃には、シードも成長してやるだろ。とりあえず、それまでこっちも……」

ウォントは片手に炎を宿し、

「俺達の仕事をしようぜ！」

それを投げつけて近くのビルを破壊する。

「賛成だ。」

アプリシイも片手からツララを発射し、周囲の建物を人間ごと串刺しにしていった。

街を歩くしおんと克己。しばらくして、黙っていた克己は口を開いた。

「お前、一人暮らしか？」

「ああ。最初は苦労したが、慣れてみると結構楽しいぞ？いろいろと気楽だしな。」

「……そうか」

確かに、何でも一人でこなさなくてはならないため、大変ではある。だが、うるさく言う者が誰もいないため、その分気楽だ。

そう、親がない分。

「私の父がないというのは、確かに寂しいがな。」

「…何？」

「言っても信じてもらえないかもしれないが、私は転生者なんだ。転生前の世界で、私は父に認めてもらうためだけに戦い続けていた。」

そして敗れたしおんは、今わの際に父、月影博士から聞いた。お前は私の娘だ、と。

作り物の存在でしかなかった彼女が、ようやく報われた瞬間だった。

ちなみに彼女は知らないことだが、月影博士は、しおん亡き後に起きた砂漠王デューンとの戦いに敗北し、死んでいる。しかし、このエンスの世界に転生できていないので、どのみち知っていたところで意味はないが。

と、しおんは克己から、驚くべき答えを聞いた。

「お前もなのか？」

「…えっ？」

「俺も転生者だ。」

なんと、克己も転生者だったのだ。

「それはどういう…」

詳しい話を聞こうとするしおん。

その時、悲鳴が聞こえてきた。

見ると、大勢の人間が逃げてきており、騒動の元と思える場所からは火の手が。

「話は後でゆっくり聞く。克己は先に帰っていてくれ！」

しおんは駆け出した。

「…」

その姿を見送る克己。しかし、数秒してから、克己もまたしおんを追った。

「お？」

ウオントはしおんの存在に気付き、攻撃の手を止める。

「お前達の仕業か！」

しおんはウオント達を睨み付けた。

「何だお前は？」

アプリシイはしおんと初対面なので、誰だかわからない。

「これ以上はやらせない！！」

しおんはココロパフォームを出し、

「プリキュア！オーブン・マイ・ハート！！」

コスチュームを身に纏って、

「生まれ変わりし一輪の花！！ダークプリキュア！！」

ダークプリキュアに変身した。

「お前：あのダークプリキュアとかいうやつか。」

ウオントはしおんの正体がダークプリキュアだということに気付く。

「何者か知らないが、俺達の使命を邪魔するなら殺す。」

アプリシイの言葉を皮切りに、シード達もツララを模したツララシ

ード。鬼火を模したオニビシードへ成長する。

しかし、ダークプリキュアは一步も退かない。

「その野望は砕かせてもらう。私の心で！！」

プリキュアとして悪を倒すため、デザイアに立ち向かう。

プリキュアの力は、はっきり言ってライダーよりも遥かに上だ。す

なわち、ライダーの次元程度しか力を持たない怪人などに、負けるはずがない。

だが、そのライダーの力がプリキュアに匹敵するものであった場合、ライダーが戦う怪人もまた、同等の強さとなる。

エンズとビーツ。そしてデザイアが、まさにそれなのだ。特にデザイアは幹部怪人。しかも今回は二体がかりで、配下の怪人までがいる。対照的にこちらは一人。いかにプリキュアとはいえ、あまりにも分が悪い。

「ぐあつ!!」

数は力なりという言葉がある通り、それは早くも現れ始めてきた。相手の能力は、炎や氷を操るなど単純明解なものだが、それも常軌を逸したレベルの威力となれば、馬鹿にはできない。加えて通常の戦闘力さえ、デザイアやシードには凄まじいものがあるのだ。全くもって、強大な敵である。

「わかったか?いくら完全復活してねえつつつても、俺達を舐めたらそういうことになるんだよ。」

「くっ…」

ウォントの発言に顔を歪めるダークプリキュア。舐めていたわけではないのだが、彼女もデザイアがここまで強いとは思っていなかった。

「とどめは俺が刺す。」

ウォントの前に進み出たアプリシイは、右手を氷の槍に変え、

「死ね」

ダークプリキュアに向かって突撃する。

だが、

「ぐわっ!!」

アプリシイは横から体当たりしてきた克己によって、地を転がる。

「克己！」

驚くダークプリキュア。

「また人間か！俺の邪魔を！！」

人間嫌いなアプリシイは、怒りを隠そうともしない。

「克己、逃げろ！」

今のでアプリシイは間違いなく本気になった。このまま戦えば、克己を守りきることはできない。そう思ったダークプリキュアは克己に逃げるよう促すが、

「氷は俺がやる。お前は炎をやれ」

なんと、克己は戦うつもりだ。

「馬鹿なことを言うな！お前は何の力もないだろう！」

ダークプリキュアは焦る。克己に戦う力などないと思っていたからだ。

しかし、

「いや、力ならある。」

克己はダークプリキュアの言葉を否定した。

「えっ？」

そして克己は、

「俺は…」

バックルを取り出す。

「仮面ライダーだ。」

出したバックルを腰に装着し、あるカードを装填。

そして…！

「変身！」

OPEN UP

純白のエネルギーシルエツト、ソウルエレメントが出現。それを通
過した克己は、額に角を持ち、両肩と両膝にスペード、ハート、ダ
イヤ、クローバーのレリーフが刻まれた純白の戦士に変身していた。
「克己…？」
ダークプリキユアは思わず声をかける。

「今の俺は仮面ライダーポーカーだ。」
名前を訂正させ、ポーカーと名乗った戦士。ポーカーは剣、ポーカー
ラウザーを抜く。

「さあ、地獄の駆け引きを楽しみな…！」

「何だあいつ？」

ウォントは首を傾げた。今現れたライダーは、エンズでもブーツで
もない。オーズやバースですらない。全く未知のライダーだったの
だ。

「駆け引きだと…ふざけるな…！」

ポーカーの台詞に激怒したアプリシィは、ポーカーにツララシード

を向かわせる。

「ふん。」

ポーカークラウザーをソードモードからガンモードに切り替えた。それをツララシードに向けて引き金を引くと、刀身から光線が放たれ、ツララシードにダメージを与える。

「氷には炎だ。」

ポーカークラウザーが言うのと、ダイヤのレリーフから二枚のカードが飛び出し、それを掴み取ってスラッシュリーダーにラウズする。

BULLET / FIRE

すると、カードの力がクラウザーに宿り、ポーカークラウザーは再びツララシードを狙撃した。今度は炎を纏ったより大きな光線、バーニングショットが放たれ、ツララシードはかなりの傷を負う。

「おおっ!!」

間髪入れずにクラウザーをソードモードに切り替え、接近戦を仕掛けるポーカークラウザー。ポーカークラウザーのパワーはエンズやビーツと比べると見劣りしてしまいが、弱点属性を利用した攻撃やチャンスを生かした戦闘を行うことで、それを補っていた。

「……!!」

アプリシイはポーカークラウザーの戦いに目を奪われる。カードを使って戦う戦士がいるとは夢にも思わなかったからだ。そして、クラウザーもまたポーカークラウザーの戦いぶりに、意識を向けていた。

（っ！今！！）

ダークプリキュアはその隙を見逃さず、クラウザーに飛び掛かる。

「おおっ!?!」

しかし、オニビシードがクラウザーを突き飛ばし、代わりに攻撃を受けることで、クラウザーは難を逃れた。オニビシードはダークプリキュアと戦いながら言う。

「クラウザー様！アプリシイ様！お逃げください！ここは我らに！」

「だが！」

「プリキュアは強い！それにあの戦士の實力は未知数です！」

「我々シードはいくらでも代わりがあります。ですが、あなた方デザイアに代わりはない！我らの使命を、ここで終わらせてはなりません！」

渋るウオントに、オニビシードはツララシードと並んで退却を進言する。

「…ちっ！行くぞアプリシィ！」

「…くっ！」

二人の忠誠心に折れたウオントとアプリシィは、引き上げていった。なるほど、自分の主を思いやれる連中ってことか。見直したぜ！
ポーカーはラウザーを肩に担ぐ。

「だったらこっちも…ん？」

最強の姿でとどめを刺してやる、と言おうと思い、自分の左腕を見たのだが、

(アブゾーバーが壊れている…)

彼にさらなる力を与える籠手が、致命的なまでの損傷を受けていた。

「…まあいい。おい月影！」

「！」

「…決めるぞ。」

「…ああ。」

次の一撃で決めることを、ポーカーはダークプリキュアに伝える。と、今度はポーカーの四つのレリーフ全てからカードが飛び出し、同じスート同士で融合。四枚のカードとなって、ポーカーの手に収まった。ポーカーはその四枚をラウズする。

L I G H T N I N G S O N I C B U R N I N G D I V I D
E S P I N I N G D A N C E B L I Z Z A R D C R A S H
W I L D R A V E

カードの力を身に纏ったポーカーは、四人に分身。それぞれが、雷撃を纏ったキック、ライトニングソニックを。さらに二人に分身しての炎を纏ったキック、バーニングデバイドを。風を纏ったきりもみキック、スピニングダンスを。吹雪を放ちながら食らわせる飛び蹴り、ブリザードクラッシュをツララシードに命中させた。これぞポーカー ノーマルフォーム最強の必殺技、ワイルドレイヴだ。

「アプリシイ様…ぐあああああ…!!」

ツララシードは爆発した。

「プリキュア！ダークパワー・フォルティシモ…!!」

「ぐおあつ…!!」

ダークプリキュアはエネルギーを纏って突撃し、オニビシードを貫通。

「ハートキャッチ…!!」

黒いクリスタルドームでオニビシードを包み、

「あああああああああ…!!」

撃破する。

互いに変身を解除する克己としおん。先に口火を切ったのは、克己だった。

「どうやら、ここは俺のいた世界とは違う世界らしい。」

克己はようやく、その事実に気付く。そうだった話は、心当たりがないわけでもない。かつて自分の世界にディロードというライダーが立ち寄ったことから、自分以外にもライダーがいる世界があるということにはわかっていたからだ。それに彼自身、違う世界から転生した存在でもある。

「では、お前が元いた世界に戻る方法を探す必要があるということか…」

しおんは言う。確かに、ここは克己の世界ではない。ならば、自分

のいるべき場所へ帰る必要がある。

しかし、

「その必要はありません。」

謎の音が響き、二人は突如として現れた灰色のオーロラに呑み込まれてしまった。

たどり着いた場所は、いくつもの地球が浮かぶ、宇宙空間。待っていたのは、一人の青年。

「僕の名前は紅渡。あなたに伝えなければならないことがあって来ました」

渡と名乗った青年は、克己を見て言った。

「何だ。」

「…あなたの世界は、もうありません。」

「!?!」

渡は語る。先日起きた創世の使徒、仮面ライダージェネシスとの戦いの余波で、克己がいたポーカーの世界は消滅してしまったのだと。

どうやら克己だけは、世界消滅の際に現れる世界の歪みに巻き込まれたおかげで、消滅を免れたらしい。

「…受け入れ難いかもしれませんが…」

「…わかっているよ。なくすことにはもう慣れてるからな」

克己は、自分で自分の母を殺している。一番大切なものを自分で消したのだ。

もう慣れていた。だから、今さら自分のいた世界が消えたくらいでは、悲しまない。

「その代わりと言っては悪いですが」

「？」

だが、渡の話にはまだ続きがあった。

「あなたにはこの世界で生きてもらいたいのです。この世界のライダーは、まだ危うさが見え隠れしています。あなたの力が必要なのです」

消えてしまった世界の代わりに、このエンズの世界で生きて欲しい。それが渡の頼みだ。当然、彼には自分の要求がどれだけ酷なことかわかっていた。しかし、消えた世界を蘇らせることはできない。聞いてもらっしかないのだ。

克己の返答は

「わかった。なら俺はこの世界で生きる」

OKだった。しおんは驚く。

「いいのかそんな簡単に？お前の世界が消えたんだぞ？」

「ないものをいくらねだつたって仕方ないだろ？」

それは確かにそうだ。

「それに…」

「？」

だが、克己はそれ以上に、負い目を感じている。

「俺が今まで奪ってきた命に比べたら、安いもんだ。」

彼は元々テロリストであり、数えきれない数の命を奪ってきた。奪うということとは、奪われる覚悟も必要になるということ。そして、遂に自分も奪われた。それだけのことだった。

「あなたがこの世界で暮らせるよう、根回しはしておきます。」

「ああ、頼む。」

「…本当にごめんなさい。あれは僕にとっても予想外だったんです」「何でお前が謝る必要がある？俺は気にしてない。だからお前も気にするな」

「…はい。」

克己に言われ、渡は二人をエインズの世界に戻した。

克己はW、そしてクロスとの戦いに敗れ、死んだ。だが、死ぬ直前に彼はこう願ったのだ。

『もう一度生まれ変われたら、今度は正真正銘、正義のライダーとして戦いたい』、と。

それが通じたのかは定かではないが、結果として克己はポーカーの世界に転生し、正義のライダー、ポーカーになれた。そして、平和な世界を勝ち取れたのだ。

「そうか、お前も元々悪だったのか。」

「ああ。」

己の身の上をしおんに話す克己。それを知った上で、しおんは克己に提案する。

「行く所がないなら、私の家に住まないか？」

「…は？」

早い話が同居だ。

「いくら気楽な一人暮らしとはいえ、やっぱり不具合がある。お前がいてくれると助かるが…」

それだけではなく、しおんは克己を放っておけなかった。いくら根回しがあつたとしても、克己一人では不自由がある。なら、同じく一人である自分と足せば、少しは負担も軽減できるし、何より寂しくない。

「…いいだろう。恩返しもしたいしな」

克己は了承した。

渡の根回し。それは、転入生という形で克己をロストグラウンド学園の生徒にするというものだった。時期的にもちょうどいい。届けられた制服を着た克己を見て、

「なかなか様になってるぞ。」

しおんはこう褒めた。

「ふん。」

克己は照れ隠しに鼻を鳴らし、二人は学園へ行く。

しおんはまだ知らなかった。

克己と皇魔には繋がりがあ、そのせいで転入早々に大騒動になる
という事だ。

第十九話 カードと駆け引きと三号ライダー（後書き）

次回、

仮面ライダーエンズ！！

レスティー「わぁー！綺麗！！」

？「美しいものなど壊れる！！割れる！！消えてしまえ！！」

ルシフェル「そんな装備で大丈夫か？」

イーノック「大丈夫だ。問題ない」

第二十話

そんな装備と桜吹雪と銃火器コンボ

大道克己

クロス、Wとの戦いに敗れ死亡した大道克己は、死ぬ直前に正義のライダーになりたいと願ったことにより、ポーカーの世界に転生した。性格はいくらか丸くなっており、今では正義のライダーとして戦っている。

仮面ライダーポーカー

克己が邪神フォートインが封印されたカードを使って変身するラ

イダー。フォーティーンの強大すぎる力を制御するために、スペックを高めに設定してあるので、ブレイド、ギャレン、カリス、レンゲルが束になってかかってきても軽々と撃退できるほど強い。飛行能力も備えている。

両肩、両膝にスピード、ハート、ダイヤ、クローバーのレリーフがあり、戦闘時はそこからカードを召喚して使う。また、召喚したカードを融合させ、一枚のカードとして使うことも可能（仮面ライダークレストの戦闘を参照）。

必殺技は、四人に分身してライティングソニック、バーニングデイドレイヴ、スピニングダンス、ブリザードクラッシュを放つ、ワイルドレイヴ。

パンチ力 1800AP

キック力 3000AP

ジャンプ力 ひと飛び120m

走力 100mを3.5秒

ワイルドレイヴ 26000AP

醒銃剣ポーカーラウザー

ブレイラウザーとギャレンラウザーが一つになったような、ポーカーの武器（GNソード？を思い浮かべていただけるとわかりやすい）。ソードモードとガンモードを備えており、ガンモード時は光線を撃つ。

初期AP 18000AP

ポーカーバツクル

克己がポーカーに変身するためのベルト。これにチェンジフォーティーンのカードを装填し、オープンアップすることで、純白のシルエット、ソウルエレメントが出現し、これを通り抜けて、変身を完了する。ちなみに、ポーカーの世界は戦争によって様々な技術が発展した世界で、これによって克己がアンデッドになることはなく、克己は戦争のない世界にするために戦っていた。

チェンジフォーティーン

フォーティーンが封印されたカード。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1040r/>

仮面ライダーエンズ

2011年10月26日12時01分発行